

# 平安京左京三条四坊十町跡

2004 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1区工房第1床面全景（北東から）



1 2区工房第1床面全景（東から）



2 1区工房部東壁断面（西から）



1 1区炉 74 断面 (南東から)



2 1区炉 291 断面 (北から)



3 1区炉 843 断面 (北から)



4 1区西部小型方形遺構群 (東から)



鑄造關係遺物



鑄造關係遺物





# 平安京左京三条四坊十町跡

2004 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は、今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび校舎および複合施設新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気付きのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

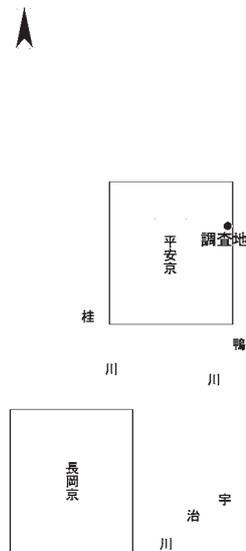
平成 16 年 12 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- |                              |  |
|------------------------------|--|
| 1 遺 跡 名                      | 平安京左京三条四坊十町跡・烏丸御池遺跡  |
| 2 調査所在地                      | 京都市中京区御池通富小路西入東八幡町 579   |
| 3 委 託 者                      | 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼  |
| 4 調査期間                       | 2003年8月6日～2004年9月24日   |
| 5 調査面積                       | 約 2,700 m <sup>2</sup>   |
| 6 調査担当者                      | 上村和直・小檜山一良・大立目 一・尾藤德行・藤村敏之・東 洋一                                |
| 7 使用地図                       | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「三条大橋」を参考にし、作成した。                     |
| 8 使用測地系                      | 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）                            |
| 9 使用標高                       | T.P.：東京湾平均海面高度   |
| 10 使用基準点                     | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。                              |
| 11 使用土色名                     | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。                              |
| 12 遺構番号                      | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。  |
| 13 遺物番号                      | 土器類・瓦類・土製品・木製品・金属製品・骨角製品・石製品の順に通し番号を付した。番号は、本文・挿図・写真・図版に共通である。 |
| 14 掲載写真                      | 村井伸也・幸明綾子  |
| 15 遺物復元                      | 村上 勉・出水みゆき   |
| 16 基準点測量                     | 宮原健吾   |
| 17 整理担当                      | 上村和直・小檜山一良   |
| 18 本書作成                      | 上村和直：1～3、5（1・2・4）<br>小檜山一良：4、5（2・3）                            |
| 19 編集・調整                     | 児玉光世・近藤章子  |
| 20 調査にあたって、下記の方にご教示を得た（敬称略）。 |  |

久保智康（京都国立博物館）、原 祐一（東京大学埋蔵文化財調査室）、小泉武寛、伊藤幸司・鳥居信子（大阪市文化財協会）、續 伸一郎・柿沼菜穂（堺市立埋蔵文化財センター）、西山良平（京都大学）、宮越哲雄（明治大学）、有坂美智子（京都橘大学）、東幸代（滋賀県立大学）



（調査地点図）

0 2 4km

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	6
(1) 層 序	6
(2) 検出遺構の概要	7
(3) 第1面の検出遺構	9
(4) 第2面の検出遺構	27
(5) 第3面の検出遺構	32
(6) 第4面の検出遺構	35
(7) 第5面の検出遺構	37
4. 遺 物	38
(1) 遺物の概要	38
(2) 土壙 328 出土土器・陶磁器類	39
(3) 瓦 類	43
(4) 土製品	43
(5) 木製品	45
(6) 金属製品	47
(7) 骨角製品	50
(8) ガラス製品	50
(9) 石製品	51
5. ま と め	52
(1) 遺構の変遷	52
(2) 金属関連工房について	70
(3) 土壙 328 出土土器・陶磁器類について	80
(4) 金属関係遺物の分析について	83

# 図 版 目 次

- 巻頭図版 1 遺構 1 区工房第 1 床面全景（北東から）
- 巻頭図版 2 遺構 1 2 区工房第 1 床面全景（東から）  
2 1 区工房部東壁断面（西から）
- 巻頭図版 3 遺構 1 1 区炉 74 断面（南東から）  
2 1 区炉 291 断面（北から）  
3 1 区炉 843 断面（北から）  
4 1 区西部小型方形遺構群（東から）
- 巻頭図版 4 遺物 鑄造関係遺物
- 図版 1 遺構 第 1 面北部遺構平面図（1：250）
- 図版 2 遺構 第 1 面南部遺構平面図（1：250）
- 図版 3 遺構 第 2 面北部遺構平面図（1：250）
- 図版 4 遺構 第 2 面南部遺構平面図（1：250）
- 図版 5 遺構 第 3 面北部遺構平面図（1：250）
- 図版 6 遺構 第 3 面南部遺構平面図（1：250）
- 図版 7 遺構 第 4 面北部遺構平面図（1：250）
- 図版 8 遺構 第 4 面南部遺構平面図（1：250）
- 図版 9 遺構 第 5 面北部遺構平面図（1：250）
- 図版 10 遺構 第 5 面南部遺構平面図（1：250）
- 図版 11 遺構 1 区建物 63・竪穴 276 実測図（1：50）
- 図版 12 遺構 1 区竪穴 92・竪穴 42・竪穴 33・竪穴 307、2 区竪穴 2307 実測図（1：50）
- 図版 13 遺構 1 区井戸 38・井戸 112・井戸 529、2 区竪穴 2137・竪穴 2167 実測図（1：  
50）  
1 区埋甕 49、2 区竪穴 2166 実測図（1：20）
- 図版 14 遺構 2 区石垣 2093A・B・C 北部実測図（1：50）
- 図版 15 遺構 2 区石垣 2093A・B・C 南部、2 区埧塙石垣 2119 B 実測図（1：50）
- 図版 16 遺構 1 区石垣 149 実測図（1：50）
- 図版 17 遺構 工房整地底面遺構実測図（1：120）
- 図版 18 遺構 工房第 1 床面西部、工房第 2 床面西部実測図（1：120）
- 図版 19 遺構 工房第 1 床面東部、工房第 2 床面東部実測図（1：120）
- 図版 20 遺構 工房第 3 床面実測図（1：120）
- 図版 21 遺構 工房第 4 床面実測図（1：120）
- 図版 22 遺構 瓦組遺構 2250、土囊列 2426 実測図（1：30）

- 土壙 2308、竪穴 2267、竪穴 2321、竪穴 2329、井戸 2348 実測図 (1 : 50)
- 図版 23 遺構 炉 843、炉 291、炉 74、炉 869、炉 841、炉 105・106、炉 560、炉 2080、  
小型円形遺構 104 実測図 (1 : 30)
- 図版 24 遺構 小型方形遺構 70、小型方形遺構 71、小型方形遺構 296、小型方形遺構 576、小型  
方形遺構 577、小型方形遺構 2227、小型方形遺構 2228、小型方形遺構 67 実測図 (1 :  
20)
- 工房地区断面図 (1 : 50)
- 図版 25 遺構 1区井戸 615・井戸 661・井戸 1117・井戸 1300・井戸 1865 実測図 (1 :  
50)
- 図版 26 遺構 1区竪穴 1126 実測図 (1 : 50) 1区竪穴 542 実測図 (1 : 100)
- 図版 27 遺構 1区柵列 1321 実測図 (1 : 60)
- 図版 28 遺構 1区柵列 1209 実測図 (1 : 60) 1区柵列 1479 実測図 (1 : 30)  
1区井戸 1415・井戸 1507・井戸 1482・井戸 1783 実測図 (1 : 50)
- 図版 29 遺構 1区井戸 1445・竪穴 1548・竪穴 1546、2区井戸 2498 実測図 (1 : 50)
- 図版 30 遺物 土壙 328 出土土器実測図 1 (1 : 4)
- 図版 31 遺物 土壙 328 出土土器実測図 2 (1 : 4)
- 図版 32 遺物 土壙 328 出土土器実測図 3 (1 : 4)
- 図版 33 遺物 土壙 328 出土土器実測図 4 (1 : 4)
- 図版 34 遺物 土壙 328 出土土器実測図 5 (1 : 4)
- 図版 35 遺物 土壙 328 出土土器実測図 6 (1 : 4)
- 図版 36 遺物 土壙 328 出土土器実測図 7 (1 : 4)
- 図版 37 遺物 土壙 328 出土土器実測図 8 (1 : 4)
- 図版 38 遺物 土壙 328 出土土器実測図 9 (1 : 4)
- 図版 39 遺物 土壙 328 出土土器実測図 10 (1 : 4)
- 図版 40 遺物 土壙 328 出土土器実測図 11 (256・257 は 1 : 4、258・259 は 1 : 6)
- 図版 41 遺物 土壙 328 出土土器実測図 12 (1 : 4)
- 図版 42 遺物 出土軒瓦拓影・実測図 1 (1 : 4)
- 図版 43 遺物 出土軒瓦拓影・実測図 2 (1 : 4)
- 図版 44 遺物 出土土製品実測図 1 (299 ~ 313 は 1 : 3、314 ~ 322 は 1 : 2)
- 図版 45 遺物 出土土製品実測図 2 (1 : 6)
- 図版 46 遺物 出土土製品実測図 3 (1 : 6)
- 図版 47 遺物 出土土製品実測図 4 (342 ~ 348 は 1 : 6、349 ~ 370 は 1 : 4)
- 図版 48 遺物 出土土製品実測図 5 (371 ~ 379 は 1 : 4、380・381 は 1 : 6)
- 図版 49 遺物 出土土製品実測図 6 (1 : 6)
- 図版 50 遺物 出土木製品実測図 1 (1 : 4)

- 図版 51 遺物 出土木製品実測図 2 (1 : 4)
- 図版 52 遺物 出土木製品実測図 3 (1 : 4)
- 図版 53 遺物 出土木製品実測図 4 (1 : 4)
- 図版 54 遺物 出土木製品実測図 5 (1 : 4)
- 図版 55 遺物 出土木製品実測図 6 (1 : 4)
- 図版 56 遺物 出土金属製品実測図 1 (1 : 2)
- 図版 57 遺物 出土金属製品実測図 2 (1 : 2)
- 図版 58 遺物 出土金属製品実測図 3 (1 : 2)
- 図版 59 遺物 出土金属製品実測図 4 (548 ~ 563 は 1 : 2、564 ~ 569 は 1 : 4)
- 図版 60 遺物 出土金属製品実測図 5 (570 ~ 576 は 1 : 4、577 ~ 582 は 1 : 2)
- 図版 61 遺物 出土骨角製品実測図 1 (1 : 1)
- 図版 62 遺物 出土骨角製品 2・ガラス製品実測図 (1 : 2)
- 図版 63 遺物 出土石製品実測図 1 (625 ~ 635・639 ~ 642・645・646 は 1 : 4、637 ~ 638・643・644 は 1 : 2)
- 図版 64 遺物 出土石製品実測図 2 (647 ~ 650・652 は 1 : 6、651 は 1 : 18)
- 図版 65 遺構 1 1区南壁断面(北東から)  
2 1区第1面全景(北東から)
- 図版 66 遺構 1 1区第2面全景(北東から)  
2 1区第3面全景(北東から)
- 図版 67 遺構 1 1区第4面全景(北東から)  
2 1区第5面全景(北東から)
- 図版 68 遺構 1 2区第1面全景(北東から)  
2 2区第2面全景(北東から)
- 図版 69 遺構 1 2区第3面全景(北東から)  
2 1区竪穴 42(西から)
- 図版 70 遺構 1 2区竪穴 2166(南から)  
2 1区埋甕 49(東から)  
3 1区井戸 38(西から)  
4 1区井戸 112(西から)  
5 1区竪穴 276(西から)
- 図版 71 遺構 1 2区石垣 2093 A・B・C(北東から)  
2 1区石垣 149(北東から)
- 図版 72 遺構 1 2区坩堝石垣 2119 B(南東から)  
2 1区工房第2床面全景(東から)
- 図版 73 遺構 1 1区工房第3床面全景(東から)

- 2 2区工房第2床面全景（北東から）
- 図版 74 遺構 1 2区工房第2床面全景（東から）  
2 2区工房第3床面全景（東から）
- 図版 75 遺構 1 2区工房第4床面全景（東から）  
2 2区工房整地底面全景（東から）
- 図版 76 遺構 1 1区炉 55 平面（南から）  
2 1区炉 55 断面（北東から）  
3 1区炉 74 平面（北東から）  
4 1区炉 74 断面（南東から）  
5 1区炉 105・106 平面（東から）  
6 1区炉 105・106 断面（南東から）
- 図版 77 遺構 1 1区炉 291 平面（東から）  
2 1区炉 291 断面（北から）  
3 1区炉 843 平面（東から）  
4 1区炉 843 断面（北から）  
5 1区炉 109 断面（東から）  
6 1区炉 560 平面（北から）
- 図版 78 遺構 1 1区小型円形遺構 104（西から）  
2 1区小型方形遺構 67（北から）  
3 2区小型方形遺構 2215（南から）  
4 2区小型方形遺構 2221～2223（東から）  
5 2区小型方形遺構 2226（東から）  
6 2区小型方形遺構 2227・2228（北から）  
7 2区小型方形遺構 2233（北東から）
- 図版 79 遺構 1 2区井戸 2348A・B（東から）  
2 2区土嚢列 2426（北東から）  
3 2区竪穴 2321（北東から）  
4 2区竪穴 2329（東から）
- 図版 80 遺構 1 1区竪穴 33（南西から）  
2 1区井戸 1300（東から）  
3 1区井戸 615（北から）  
4 1区竪穴 1126（東から）
- 図版 81 遺構 1 1区竪穴 542（北西から）  
2 1区柵列 1321B（東から）  
3 1区柵列 1209（北から）

- 図版 82 遺構 1 1区溝 745 (東から)  
2 1区井戸 1415 (東から)  
3 1区井戸 1482 (北東から)  
4 1区井戸 1507 (北東から)
- 図版 83 遺構 1 1区竪穴 1546 (南から)  
2 1区竪穴 1548 (西から)  
3 1区井戸 1783 (西から)  
4 2区井戸 2498 (北西から)
- 図版 84 遺物 1 土壙 328 出土土器 1 (肥前系磁器)  
2 土壙 328 出土土器 2 (輸入磁器)
- 図版 85 遺物 1 土壙 328 出土土器 3 (肥前系陶器)  
2 土壙 328 出土土器 4 (瀬戸美濃系陶器)
- 図版 86 遺物 1 土壙 328 出土土器 5 (軟質施釉陶器、未製品)  
2 土壙 328 出土土器 6 (焼締陶器)
- 図版 87 遺物 1 土壙 328 出土土器 7 (輸入陶器)  
2 土壙 328 出土土器 8 (輸入陶器)
- 図版 88 遺物 軒瓦 1
- 図版 89 遺物 軒瓦 2
- 図版 90 遺物 土製品 1
- 図版 91 遺物 土製品 2
- 図版 92 遺物 土製品 3
- 図版 93 遺物 土製品 4
- 図版 94 遺物 土製品 5
- 図版 95 遺物 土製品 6
- 図版 96 遺物 木製品 1
- 図版 97 遺物 木製品 2
- 図版 98 遺物 木製品 3
- 図版 99 遺物 木製品 4
- 図版 100 遺物 金属製品 1
- 図版 101 遺物 金属製品 2
- 図版 102 遺物 1 金属製品 3  
2 ガラス製品
- 図版 103 遺物 骨角製品
- 図版 104 遺物 石製品

# 挿 図 目 次

図 1	調査区配置図（1：2,000）	1
図 2	調査前全景（南西から）	2
図 3	調査状況	2
図 4	周辺調査地位置図（1：5,000）	5
図 5	調査地基本土層図（1区南壁、1：80）	6
図 6	陶器未製品実測図（1：4）	42
図 7	平安時代以前（弥生時代から古墳時代）の遺構概要図（1：600）	56
図 8	平安時代前期（Ⅰ期・Ⅱ期）の遺構概要図（1：600）	57
図 9	平安時代前期～中期（Ⅲ期）の遺構概要図（1：600）	58
図 10	平安時代中期（Ⅳ期）の遺構概要図（1：600）	59
図 11	平安時代中期～後期（Ⅴ期）の遺構概要図（1：600）	60
図 12	平安時代後期～鎌倉時代前期（Ⅵ期）の遺構概要図（1：600）	61
図 13	鎌倉時代中期～室町時代前期（Ⅶ期）の遺構概要図（1：600）	62
図 14	室町時代中期（Ⅷ期）の遺構概要図（1：600）	63
図 15	室町時代後期（Ⅸ期）の遺構概要図（1：600）	64
図 16	室町時代後期～桃山時代（Ⅹ期）の遺構概要図（1：600）	65
図 17	江戸時代初頭（Ⅺ期古・中段階）の遺構概要図（1：600）	66
図 18	江戸時代前期（Ⅺ期新段階）の遺構概要図（1：600）	67
図 19	江戸時代中期（Ⅻ期）の遺構概要図（1：600）	68
図 20	江戸時代後期以降（期以降）の遺構概要図（1：600）	69
図 21	工房地区遺構変遷図 1（1：200）	76
図 22	工房地区遺構変遷図 2（1：200）	77
図 23	軟質施釉陶器・陶器未製品出土分布図（1：500）	82
図 24	工房出土鋳滓分析資料	86
図 25	金属関係土製品分析資料	86

## 表 目 次

表1	主要遺構一覽表	8
表2	炉一覽表	20
表3	小型方形遺構(型)一覽表	24
表4	小型円形竪穴一覽表	26
表5	遺物概要表	38
表6	出土錢貨一覽表	49
表7	土壙 328 出土總破片数分類	81
表8	工房出土鋳滓分析表	84
表9	金属関係土製品分析表	85

## 付 表 目 次

附表1	土壙 328 出土土器・陶磁器類觀察表	90
附表2	出土軒瓦觀察表	106
附表3	出土土製品觀察表	108
附表4	出土木製品觀察表	112
附表5	出土金属製品觀察表	117
附表6	出土骨角製品觀察表	121
附表7	出土ガラス製品觀察表	123
附表8	出土石製品觀察表	123

# 平安京左京三条四坊十町跡

## 1. 調査経過

**調査に至る経過** 京都市は、京都市中京区御池通富小路西入東八幡町 579 に所在する京都市立柳池中学校内で、校舎および複合施設の新築整備事業工事を計画した。当地は平安京跡・烏丸御池遺跡に含まれ、1979年の1次調査の結果から遺構が良好に残っていることが明らかのため、京都市埋蔵文化財調査センターは、京都市に対して発掘調査の指導を行った。京都市はこの指導を受けて、財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下、市埋文と略す）に発掘調査の委託を行った。

**調査目的** 今回の調査は、三条坊門小路・万里小路に面した宅地・町屋の状況を知ること、および、

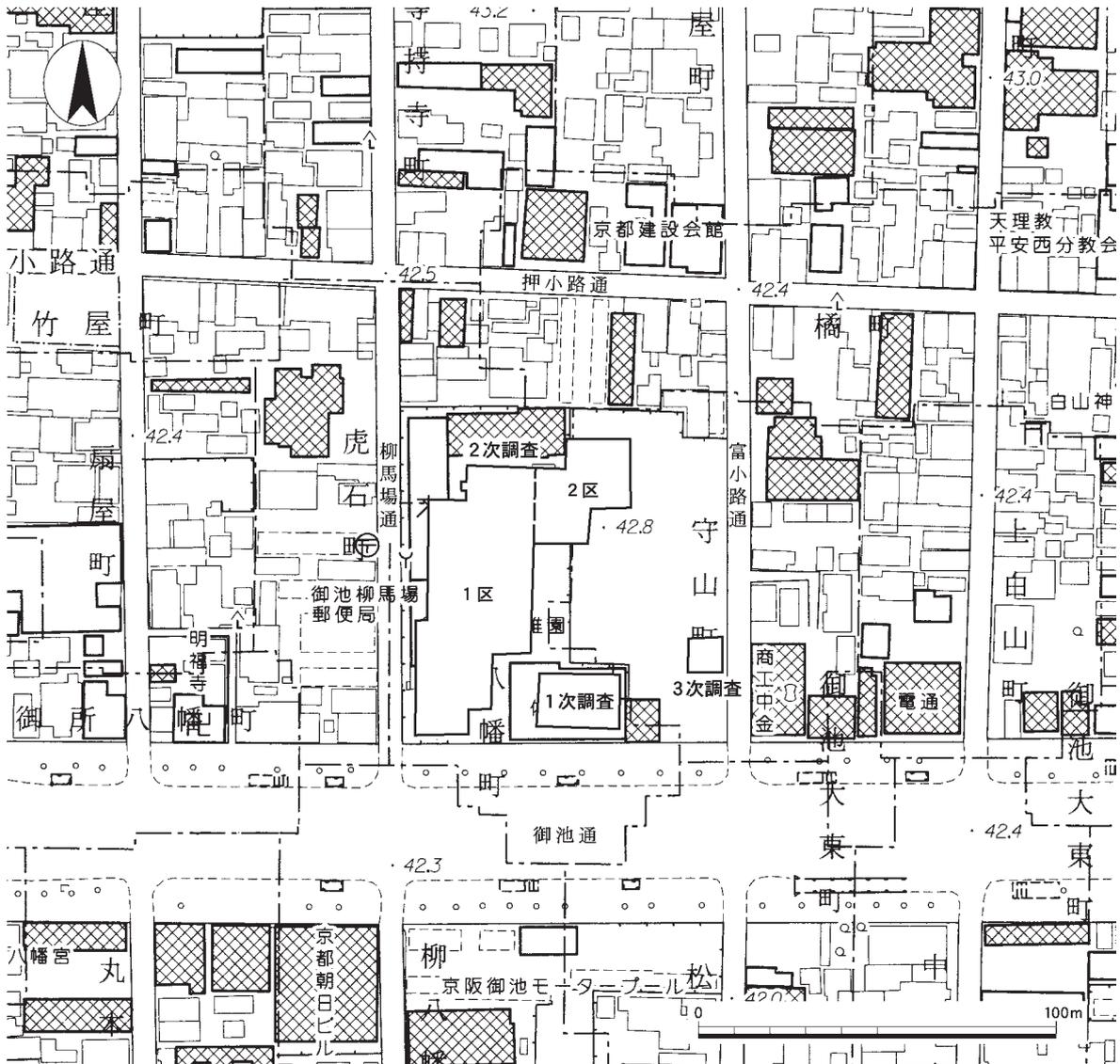


図1 調査区配置図 (1 : 2,000)



図2 調査前全景（南西から）



図3 調査状況

周辺の調査と合わせて当地の変遷を明らかにすることを目的とした。また、下層では弥生時代から古墳時代の集落などが存在する可能性があるため、この確認も目的とした。

**調査経過** 本調査は、柳池中学校内で実施した2次調査である。調査は、2003年8月11日～21日まで機械掘削を行い、8月25日から遺構調査を開始した。調査は対象地を1区と2区に分けて実施した。1区は、旧校舎基礎・地下室・水槽などを考慮して、南北に長い不整形の調査区となった。

1区の調査では、江戸時代の遺構面（第1面、現地表下約1.5m）まで機械掘削し、その後、手掘りで第1面から第5面まで、5段階に分けて順次掘り下げ、調査を実施した。各遺構面の調査では、遺構検出を実施すると共に、実測図と写真によって記録を行った。最後に断割調査により下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測図作成などを行い、2004年5月14日に調査を終了した。

1区が終了した後、1区の北東側に2区を連続して設定した。2区も1区と同様の作業を行い、第1面から第3面まで3段階に分けて調査を実施し、2004年9月24日に全ての調査を終了した。

なお、調査中の2003年11月22日に現地説明会（参加者約200名）を開催した。また、近隣の中学校生徒の体験学習を随時実施し、調査成果の公表に努めた。

## 2. 遺 跡

### (1) 位置と環境

調査地は、鴨川が形成した北から南に緩やかに傾斜した微高地上に立地し、烏丸御池遺跡に含まれる。当遺跡は縄文時代から飛鳥時代の集落遺跡で、竪穴住居・流路などの遺構や、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などが出土した。

また、平安京の条坊では左京三条四坊十町にあたり、北を押小路（現押小路通）、西を万里小路（現柳馬場通）、南を三条坊門小路（現御池通）、東を富小路（現富小路通と麩屋町通の間）に囲まれ、調査地はその南西部に位置する。平安時代前期の段階は、文献史料では確認できないが、中期には右大臣藤原定方の「中西殿」（山井西殿）が存在した〔『拾芥抄』〕。中西殿は定方から永頼、能通へ伝領され、長和四年（1015）に焼失した〔『小右記』長和四年（1015）四月廿三日条〕。

鎌倉時代には善法院があったことが知られるが、詳細は不明である。ただ、周辺の調査では、鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物が多く検出され、当地域が活発に利用されたことがうかがえる。なお、南北朝から室町時代には、当町の南西側に御所八幡や、足利直義・義詮・義持の邸宅（三条坊門第）が置かれていた。また、この頃京都の町は大きく上京・下京の二つに分かれ、当地域は、下京外の北東部にあたる。

桃山時代には、豊臣秀吉によって、天正年間以降京都改造が行われ、富小路が現在の位置に造り替えられ、当地域は大きく変貌する。江戸時代には中京の町屋に含まれ、寛永十四年（1637）の『洛中絵図』には「八幡東横丁」、元禄末期の『洛中絵図』には「東八幡横丁」と記される。慶長五年（1600）には、当地域に多くの町屋があったことが知られ、繁栄した様子がうかがえる〔『柳八幡町文書』〕。江戸時代後半には法泉寺があったとされる。

明治六年（1873）には、第廿七番組校が守山町から当地に移転し、柳池校と名付けられる。その後、京都市立京都柳池中学校となり、現在に至る<sup>1)</sup>。

### (2) 周辺の調査

調査地周辺で実施された、左京三条四坊内のこれまでの主要な発掘調査の概要を、平安京の条坊を準用して述べる（図4）。

二町 南側中央の発掘調査（図4-1、東邦生命ビル、1972年、平安博物館、未報告）で、江戸時代の井戸などを検出した<sup>2)</sup>。

三町 北部の発掘調査（図4-2～4、地下鉄東西線No.12・No.13・F-3、1989年、平安京調査会）では、東側の3（No.13）で弥生時代末の竪穴住居、東端側の4（F-3）で弥生時代から古墳時代の流路・平安時代の遣水・鎌倉時代の土壌を検出した<sup>3)</sup>。

四町 北西部の発掘調査（図4-5、旧初音中学校、2003年、市埋文）で、平安時代中期から後期の井戸、室町時代の土壌・井戸・柱穴・東洞院通沿いの堀、江戸時代の土壌・井戸を検出し

た。<sup>4)</sup>

西部中央の発掘調査（図4-6、中京郵便局、（四町1次）、1975年、古代学協会）で、平安時代の井戸、鎌倉時代から室町時代の東洞院大路東側溝・土壇・井戸、江戸時代の東洞院大路東側溝・土壇・井戸・建物・石垣・集石遺構を検出した。<sup>5)</sup>

南側中央の発掘調査（図4-7、白川三条ビル、（四町5次）、1987年、京都文化財団）で、縄文時代の土壇・包含層、平安時代の三条大路北築地・溝・土壇・井戸、鎌倉時代の柱穴、室町時代の三条大路北側溝および築地・溝・土壇・竪穴・柱穴、江戸時代の土壇・井戸・竪穴・建物・石垣を検出した。<sup>6)</sup>

南側中央の発掘調査（図4-8、高倉アーバンライフ、（四町3次）、1981年、古代学協会）で、平安時代後期から鎌倉時代の土壇・井戸、室町時代の土壇・井戸・溝、江戸時代の溝・土壇・井戸・石垣・石敷を検出した。<sup>7)</sup>

北東部の発掘調査（図4-9、文化博物館1次、（四町2次）、1977年、古代学協会）で、平安時代後期から鎌倉時代の高倉小路西側溝・井戸、室町時代の土壇、江戸時代の土壇・建物・石垣を検出した。<sup>8)</sup>

東側中央の発掘調査（図4-10、文化博物館2次、（四町4次）、1986年、古代学協会）で、平安時代の高倉小路路面および側溝・土壇・井戸、鎌倉時代から室町時代の土壇・井戸・建物・柱列、江戸時代の溝・土壇を検出した。<sup>9)</sup>

五町 中央部の発掘調査（図4-11、メロディーハイム堺町、2000年、古代文化調査会）で、古墳時代の溝、平安時代から鎌倉時代前期の井戸・溝・土壇・柱穴、鎌倉時代後期から室町時代の溝・土壇・井戸・柱穴、江戸時代の溝・土壇・井戸・柱穴を検出した。<sup>10)</sup>

六町 北部の発掘調査（図4-12～15、地下鉄東西線No.14・No.15・F-1・F-4、1989年、平安京調査会）では、中央の13（F-1）で平安時代の柱穴、室町時代の堀、桃山時代の路面および溝・土壇・柱穴、東端の15（F-4）で弥生時代の流路・土壇、平安時代後期の井戸、鎌倉時代から室町時代の土壇・柱穴を検出した。<sup>3)</sup>

十町 南中央部の1次発掘調査（図4-16、柳池中学校旧体育館、1979年、市埋文、未報告）で、古墳時代の流路、平安時代後期の溝・土壇・柱穴、鎌倉時代から室町時代の溝・土壇・井戸・柱穴、江戸時代の土壇・井戸・竪穴などを検出した。<sup>11)</sup>

南東部の3次発掘調査（図4-17、校内防火水槽、2004年、市埋文）で、平安時代後期から鎌倉時代の土壇・柱穴、鎌倉時代から室町時代の溝・土壇・井戸・柱穴、江戸時代の土壇・井戸・竪穴などを検出した。<sup>12)</sup>

十一町 北部の発掘調査（図4-18～20、地下鉄東西線No.16・No.17・F-6）では、西部の18（No.16）で平安時代の土壇、江戸時代の金属工房、東部の19（F-6）で近世の井戸、東部の20（No.17）で平安時代の富小路路面および両側溝を検出した。<sup>3)</sup>

中央部の発掘調査（図4-21、コスモシティ御池富小路、2001年、古代文化調査会）で、弥生時代から古墳時代の落ち込み、平安時代後期の池、鎌倉時代の溝・土壇・井戸・柱穴、室町時

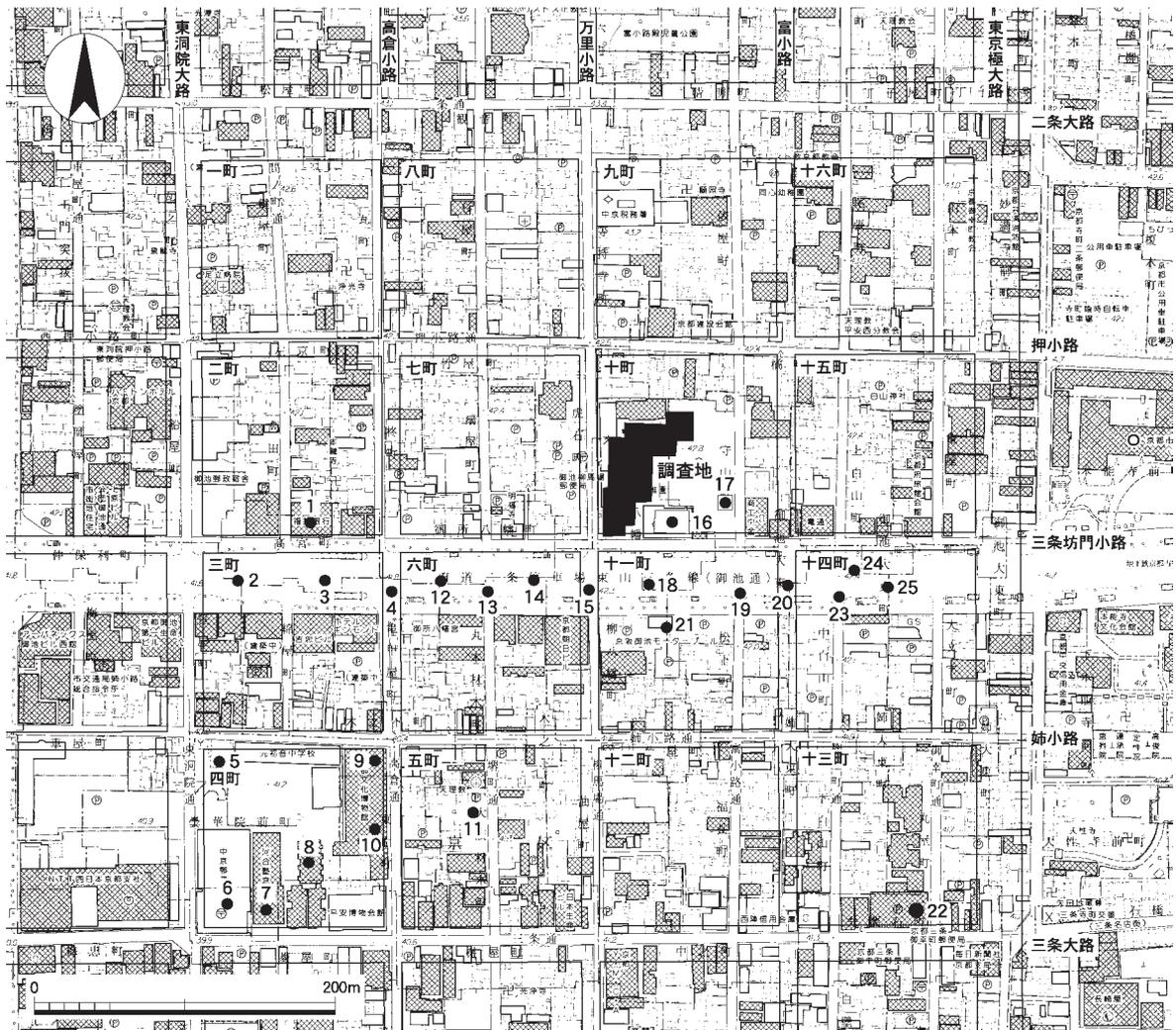


図4 周辺調査地位置図(1:5,000)

代の土壌、江戸時代の井戸などを検出した。<sup>13)</sup>

十三町 南部中央の発掘調査(図4-22、有本ビル、1987年、市埋文)で、平安時代の三条大路路面門築地内溝・土壌、鎌倉時代から室町時代の三条大路路面および北築地内溝・土壌・礎石列・柱穴・埋甕、桃山時代から江戸時代の土壌・井戸・竪穴などを検出した。<sup>14)</sup>

十四町 北部の発掘調査(図4-23~25、地下鉄東西線No.18・F-7-1・F-7-2、1989年、平安京調査会)で、西側の23・24(F-7-1・2)で鎌倉時代から室町時代の土壌、中央の25(No.18)で室町時代の落ち込みを検出した。<sup>3)</sup>

### 3. 遺 構

#### (1) 層 序 (図5、図版65)

層序 調査地は、場所によって堆積状況が異なるが、基本層序は、地表面から0.6～1mまでがグラウンド整地層・旧校舎建設整地層(第1層)で、第2層は暗褐色砂泥を中心とする層(厚さ0.4～1.2m)である。第3層以下は、1区南部と、1区北部から2区付近で様相が異なる。

1区南部では、第3層は褐色砂泥を中心とする層(厚さ0.5m)、第4層は暗褐色砂泥を中心とする層(厚さ0.6m)、第5層は黒褐色砂泥を中心とする層(厚さ0.4m)、第6層はオリーブ褐色砂泥(うぐいす色砂泥)を中心とする層(厚さ0.3m)である。その下は、第7層オリーブ褐色泥砂層(礫含む、厚さ0.4m)・第8層暗灰黄色泥砂層(礫多く含む、厚さ0.2m)・第9層灰オリーブ砂礫層で、いずれも無遺物層の地山である。

1区北部から2区付近では、第3層は黒褐色砂泥を中心とする層(厚さ0.5m)、第4層は灰黄褐色砂泥を中心とする層(厚さ0.1～0.3m)、第5層は褐色砂礫層で無遺物層の地山である。

調査では、1区では5段階、2区では3段階に分けて実施した。1区では、第3層の上面を第1面、第4層の上面を第2面、第5層の上面を第3面、第6層の上面を第4面、第7層の上面を第5面とした。2区では、第3層の上面を第1面、第4層の上面を第2面、第5層の上面を第3面とした。

1区では、第1面は江戸時代、第2面は鎌倉時代から江戸時代前半、第3面は平安時代後期から室町時代、第4面は平安時代、第5面は平安時代以前の遺構が主体をなす。2区では、第1面は江戸時代、第2面は鎌倉時代から江戸時代前半、第3面は平安時代から室町時代の遺構が主体

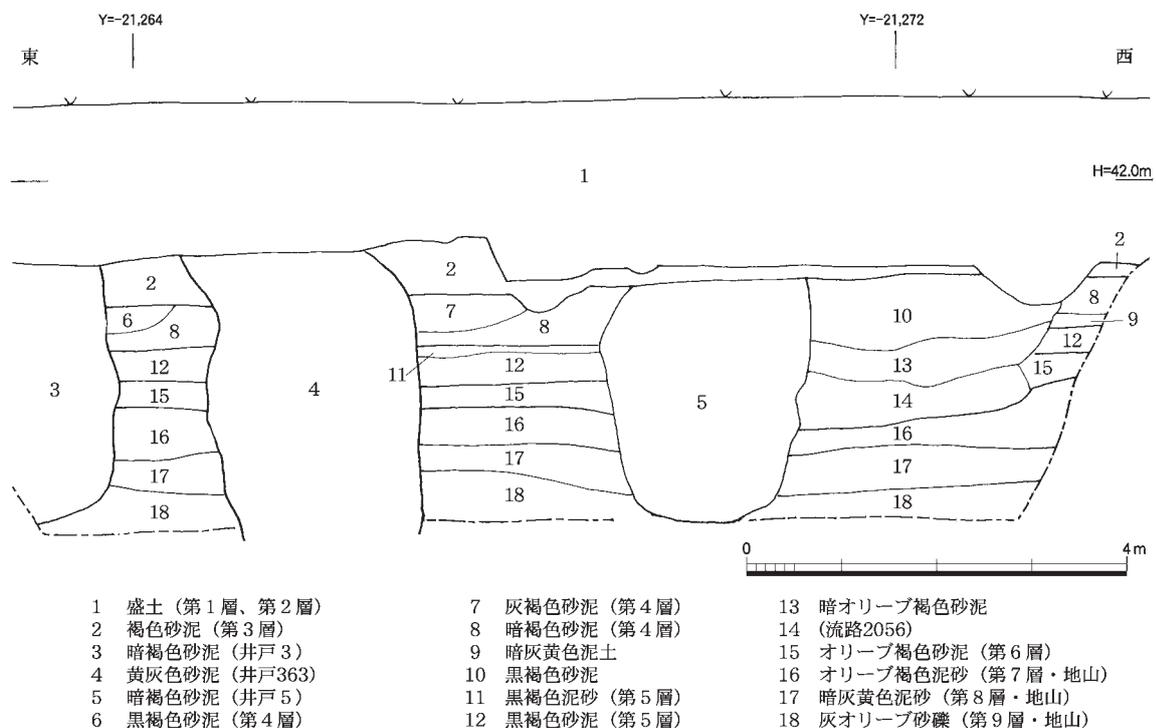


図5 調査地基本土層図 (1区南壁、1:80)

をなす。

地山面の標高は、北端で 40.3 m・南端で 39.6 mで、北の方が 0.7 m高く、北から南に緩やかに傾斜した地形である。他の遺構面もそれと同様に傾斜する。第 4 面上面の標高は、調査区中央で 40.5 mである。

## (2) 検出遺構の概要

調査で検出した遺構は、第 1 面 863 基、第 2 面 651 基、第 3 面 707 基、第 4 面 213 基、第 5 面 15 基、総計 2449 基である。時期は、弥生時代から古墳時代・平安時代・鎌倉時代から室町時代・桃山時代・江戸時代に分かれ、江戸時代以降の遺構が大半を占め、他の時期の遺構は少ない。

第 1 面では、全面で江戸時代の遺構を検出した。遺構には、石垣・建物・井戸・竪穴（石室など）・土壇・柱穴などがあり、1 区・2 区共に多数検出し、かなり重複する。土壇は調査区全域で検出し、多くはゴミ処理用の穴と推定できる。柱穴は全面で検出したが、まともらず建物の復元には至っていない。また、調査区南部では部分的に黄色粘土の堅く締まった叩きの面を確認した。

第 2 面では、鎌倉時代から江戸時代前半の遺構を検出した。遺構には、石垣・建物・井戸・竪穴・土壇・柵列などがあり、1 区・2 区共に多数検出した。土壇・井戸などが多い。

第 3 面では、平安時代後期から室町時代の井戸・竪穴・土壇・溝などを検出した。遺構は全体に散在し、第 1 面・2 面からの遺構が大規模かつ多数なため、残存状況が悪い。特に 2 区では、わずかししか残存していない。柱穴は、1 区北西部・北部中央・中央西側・中央東側・南部中央・南端部などで、やや多く検出したが、まともらず建物の復元には至っていない。

第 4 面では、さらに攪乱が多く、遺構面が島状に散在し、平安時代の遺構の検出数は少ない。井戸・土壇・柱穴などの遺構がある。柱穴はまともらない。

また、部分的にオリーブ褐色砂泥の整地層が残存する。厚さは場所によって異なり、1 区南端部から 1 区中央東部にかけては厚く、0.6 m に達する所もあるが、北側につれて薄く、平均的には 0.2 m 程度である。層中には、土師器片などを少量含む。この層の分布は、図 11 に網掛けして示した。

第 5 面では、1 区のみで平安時代以前の遺構を検出したが、2 区では後世の攪乱のため、遺構を検出することはできなかった。検出した遺構は、平安時代以前の流路だけである。上部が削平されたため、いずれも底部が残存する。これに関連した遺構や生活面は検出できなかった。

以下、各遺構面に分けて主要な遺構を報告する。なお、各遺構および出土遺物の時期判定は、平安京・京都 I 期～期編年案<sup>15)</sup>に準拠する。

表1 主要遺構一覽表

時代	1 区					2 区		
	第1面	第2面	第3面	第4面	第5面	第1面	第2面	第3・4面
弥生時代 ～古墳時代					流路2053 ～2056			
平安時代	I期			土壙2038				
	II期			溝1914				
	III期			土壙1815 井戸2033				
	IV期		井戸598 井戸1316 土壙1677 土壙1799	井戸1888				井戸2498
	V期		井戸597 土壙1336 溝1550 井戸1798	土壙1549 溝1500 溝1825 溝1859 溝1860 井戸2005 井戸2052				
鎌倉時代	VI期		井戸615 竪穴804 溝810 柵1210 井戸1269 土壙1297 井戸1300 土壙1387	井戸368 溝1047 井戸1418 井戸1482 柵1487 柵1562 井戸1783 柵1787 井戸1803			溝2391 土壙2394	土壙2462
	VII期		溝907 柵1321B 井戸1865	柵1479 井戸1507 竪穴1548 井戸1801				
室町時代	VIII期		土壙1048 井戸1379 柵1321B	竪穴1546 土壙1692 土壙1817				
	IX期		溝745 土壙746 土壙538 井戸661 柵1321A	土壙886 土壙1441 井戸1445			土壙2479	土壙2481
	X期		井戸529 井戸1195	土壙1571 土壙1806			土壙2465 土壙2479	土壙2485
江戸時代	XI期	古・中段階	柵731 土壙1377 土壙1378 井戸1811				土壙2520 土壙2300 土壙2354	
		新段階	石垣149・竪穴276 竪穴307 工房関係遺構および 土壙328	竪穴542 柵711 井戸1117 竪穴1126	井戸1415		石垣2093B・石垣2131 石垣2115B・石垣2158 竪穴2167・石垣2244 工房関係遺構および 土壙328	
	XII期	竪穴33・井戸37 竪穴42・埋甕49 建物63・井戸78 土壙79・竪穴92 井戸94・井戸112 石垣149・竪穴192 溝196・土壙225B 井戸310B・石垣337				石垣2093A 石垣2115A 埧塙石垣2119B 石垣2120B 石垣2134B 竪穴2137・建物2153 石垣2158・竪穴2166		
	XIII期～	井戸38・石垣149 竪穴310A				井戸2086・井戸2113 石垣2119A 石垣2120A・ 石垣2134A・井戸2143		

### (3) 第1面の検出遺構(図版1・2・65・68)

第1面の遺構は、石垣2093を境にして大きく東部と西部に分かれる。西部の遺構は、石垣149を境にしてさらに北西部と南西部とに分かれ、全体としては三つの部分に分かれる。各遺構は部分ごとに説明し、西北部内に位置する工房地区は別に取り扱う。

#### 1) 北西部

竪穴33(図版12・80) 北西側で検出した埴埴組竪穴である。掘形は、南北1.7m・東西2mの楕円形で、深さは検出面から0.8mである。内部施設の内法は南北0.85m・東西1.25mの胴張りの長方形である。直径0.2mの埴埴の上部を欠いて長さ約0.2mにし、底面を内側に向け目違いに積む。埴埴は3段残存した。底部中央が0.1m凹む。埋土は暗オリーブ褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・瓦類・埴埴・土製品が出土した。遺物の時期はⅡ期である。竪穴42・2166・2321・2329は、33と同一構造の埴埴組竪穴である。

井戸37 北西側で検出した石組井戸である。掘形は、直径1.5mの円形で、深さは検出面から2.3mである。井筒は最下部が残存するが、残りはよくない。内法一辺0.55mで、縦板の枚数は不明である。横棧木は最下段が残存した。埋土は黒褐色泥砂で、土師器・陶器・輸入陶磁器・砥石・金属製品が出土した。遺物の時期はⅠ期～Ⅱ期である。

井戸38(図版13・70) 北西側で検出した石組井戸である。掘形は、直径1.8mの円形で、深さは検出面から2.5mである。井戸枠は内径約1mで、大きさ0.1～0.3m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部中央に、一辺0.9mの方形の横棧木が1段残存した。横棧木は、両端に凹凸柄を作り、組み合わせる目違い柄組みで、長さ約0.9m・幅0.06m・厚さ0.03mである。枠内埋土は暗灰黄色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・埴埴・瓦類・スラグが出土した。遺物の時期はⅠ期である。

竪穴42(図版12・69) 北東側で検出した埴埴組竪穴である。掘形は、一辺3.2mの方形で、深さは検出面から1.9mである。内部施設の内法は、当初南北2.1m・東西2.2mの長方形であるが、北辺の内側に埴埴を1列積み、南北1.8mに縮小する。直径0.2mの埴埴の底面を内側に向け、目違いに積む。埴埴は10段残存した。埴埴の目地には漆喰を貼る。底部には厚さ約0.2mの地業を行い、その上から埴埴を積み、床面には、黄色粘土を薄く貼る。埋土は暗褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・埴埴・瓦類・金属製品・銅滓・石製品が出土した。遺物の時期はⅡ期新段階である。

埋甕49(図版13・70) 北東側で検出した土壇で、上部は削平を受ける。掘形は、直径0.7mの円形で、深さは検出面から0.4mで、底部は平坦である。掘形にほぼ接して陶器甕を据える。甕内土は黄灰褐色砂泥で小礫を含み、土師器・陶器・磁器・炭などが出土した。遺物の時期はⅡ期である。

建物 63 (図版 11) 中央で検出した建物の布掘り基礎で、南東部が井戸 78・竪穴 293 によって攪乱を受ける。掘形は、南北 4.9 m・東西約 5 mの「口字形」で、溝幅 0.7～0.9 m、深さは検出面から約 0.3 mである。溝の底面から大きさ約 0.1 mの河原石を含む暗灰黄色砂土と暗灰黄色土を 0.1 mの厚さで交互に埋める。類例から土蔵の基礎と判断した。埋土中から、土師器・陶器・磁器・埴埴・瓦類が出土した。遺物の時期はXI期中段階～XII期である。

井戸 78 中央で検出した石組井戸である。掘形は、南北 2.4 m・東西 2.2 mの楕円形で、深さは検出面から 3.5 mである。井戸枠は内径約 1 mで、大きさ 0.2～0.4 m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部に長さ 0.8 mの桁木を六角形に組み合わせる。底部中央に、井筒として直径 0.7 m・高さ 0.9 mの桶を据える。枠内埋土はオリーブ褐色泥砂で、土師器・陶器・磁器・埴埴・瓦類・スラグが出土した。遺物の時期はXI期新段階～XII期古段階である。

土壇 79 中央で検出した石組遺構である。掘形は、直径 1.5 mの円形で、深さは検出面から 1.9 mで、底部は平坦である。側枠は内径 0.8 mで、大きさ 0.1～0.3 m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部に長さ 0.5～1.1 mの自然木を並べて敷く。枠内埋土は黒褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・埴埴・瓦類・スラグが出土した。遺物の時期はXII期新である。

竪穴 92 (図版 12) 西側で検出した竪穴である。掘形は上面が削平を受け、南北 2.9 m・東西 3.4 mの南辺が張り出した長方形で、深さは検出面から 0.3 mである。内部施設の内法は、南北 2.3 m・東西 3 mの南辺が張った長方形である。北辺は大きさ 0.2～0.3 m大の自然石を、小口面を内側に向けて積み、他の 3 辺は直径 0.2 mの埴埴の底面を内側に向け積む。埴埴は 1 段残存した。床面には、石を入れた直径約 0.4 mの柱穴が数ヶ所あり、西側の列は間隔 0.7 mで揃うが、他の穴は不揃いである。埋土は黄褐色砂礫で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はXII期である。竪穴 84・竪穴 244 と規模がほぼ揃い、北辺が石組で他辺が埴埴組である構造も同様である。また、1 次調査で検出した土壇 (SK35) も同様の構造である。

井戸 94 西側で検出した石組井戸である。掘形は、南北 1.7 m・東西 1.6 mの楕円形で、深さは検出面から 3.3 mである。井戸枠は内径約 0.9 mで、大きさ 0.2～0.3 m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部中央には六角形の井筒を据える。井筒の部材は、長さ 0.5 m・高さ約 0.3 m・厚さ約 0.3 mの板材両端に上下から切れ込みを入れ、六角形に組み合わせ、3 段積む。枠内埋土はオリーブ黒色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・石製品が出土した。遺物の時期はXI期中段階～XII期古段階である。

井戸 112 (図版 13・70) 東側で検出した埴埴組井戸である。掘形は、直径 1.8 mの円形で、深さは検出面から 2.2 mで、底部は平坦である。井戸枠内径は、上端 1.05 m・下端 0.85 mで、上部が広がる。直径 0.2 mの埴埴の底面を内側に向け、目違いに積む。壁面には部分的に石を入れる。埴埴は 13 段残存した。枠内埋土は黒褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・スラグが出土した。遺物の時期はXI期新段階～XII期である。井戸 85・125・154・254・2077・2078・2084・2150 は、112 と同構造の埴埴組井戸である。井戸 226・248 は、埴埴と石を併

用した井戸である。

土壙 225B 中央で検出した土壙で、上部は土壙 225 に削平を受ける。掘形は、直径約 1.5 m の円形で、深さは検出面から約 1 m である。中央に直径約 0.8 m ・高さ 0.4 m の円形曲物を据える。底部中央が若干凹む。類例から水溜遺構と判断した。枠内埋土は黒褐色砂泥で、土師器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・砥石が出土した。遺物の時期はⅫ期である。

竪穴 276 (図版 11・70) 南側で検出した竪穴で、上部は後世の遺構に攪乱される。掘形は、南北 2.6 m ・東西 4.4 m の長方形で、深さは検出面から 2.5 m である。

内部施設は、東側に石積みが 2 段残り、他は残存しない。内法は、一辺 1.3 m の方形に復元でき、東側に同一幅の階段が取り付くが、階段の石は残存しない。東壁は、大きさ 0.2 ～ 0.3 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて積む。枠内埋土は灰褐色砂泥で炭焼土を含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・金属製品・砥石が出土した。遺物の時期はⅪ期中～新段階である。

竪穴 310A 北東側で検出した竪穴で、西側は後世の遺構に、南東部は井戸 2143 に攪乱される。掘形は、南北 3 m ・東西 4.7 m の長方形で、深さは検出面から 1.5 m である。内部施設の内法は、南北 1.55 m ・東西 1.1 m 以上の長方形と推定できる。大きさ 0.2 ～ 0.3 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて積む。西壁の石組の下には一辺約 0.1 m の角材を据える。床面に、小石を敷き詰めて固める。暗褐色泥砂で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・土製品・硯が出土した。遺物の時期はⅫ期～期である。

310A の底面中央で石組井戸 310B を検出した。掘形は、南北 0.9 m ・東西 1.2 m の長方形で、深さは検出面から 0.95 m である。井戸枠は一辺約 1.1 m で、大きさ 0.2 ～ 0.3 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて積む。底部中央には井筒を据える。井筒は、南北 0.7 m ・東西 0.85 m の長方形で、高さ約 0.21 m で 2 段積む。筒内埋土はオリーブ褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・金属製鉢が出土した。遺物の時期はⅫ期である。

土壙 328 北側で検出した土壙で、井戸・土壙など後世の遺構に部分的に攪乱を受ける。掘形は、南北 10 m 以上 ・東西 26.5 m で、南と東側は直線的、西と北側は不定形で、北東側は調査区外に延びる。深さは検出面から約 1 m で、底部は凹凸がある。埋土は黒褐色砂泥で灰炭を多量に含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・炉壁・埴埴・スラグ・砥石・硯・骨製棹・骨角製品・金属製品が出土した。遺物の時期はⅪ期中～新段階である。

石垣 337 北側で検出した北面する東西方向の石垣で、東西は竪穴 310A ・井戸 3233 などに攪乱される。上部が後世の遺構に削平され、部分的にしか残存していない。検出した長さは 12.5 m である。石垣残存高は底面から約 0.3 m で、大きさ 0.1 ～ 0.5 m 大の自然石を、小口面を北側に向けて 2 段以上積む。掘形は不明である。土壙 328 の上に造られ、Ⅻ期以降の遺構と考えられる。

石垣 2093A ・B ・C (図版 14・15・71) 北側で検出した東面する南北方向の石垣で、上部が後世遺構に削平される。検出した長さは約 28 m で、南北両側は調査区外へ延びる。石垣は A ・B ・C の 3 時期に分かれ、A の下で B を検出した。断面から、2093B が埋まった後に、0.1 m 程度ずれた位置に 2093A を積んでいることがわかる。石垣の方向は、北で約 1.9 度東に振れる。

2093A は、上部が後世の遺構に削平されたため、X=-109,965 付近以南は残存しない。残存高は最も残りの良好な北端で 2093B 上面から 1.2 m である。石垣は、大きさ 0.4 ～ 0.8 m 大の切石を主体に小口面を東側に向けて最下段に積み、その上に 0.2 ～ 0.4 m 大の自然石を小口面を北側に向けて 3 段以上積む。石垣南端部は 2093B 上部を一部除いて入れる。石材は、花崗岩の切石が多く、チャートの自然石を使用する。掘形は、幅 0.3 m 以上、深さは検出面から 1.25 m である。掘形埋土は灰黄褐色砂泥で、土師器・陶器・磁器・瓦類・埴埴・炉壁・スラグ・金属製品が出土した。遺物の時期はⅫ期～期である。

2093B の高さは底面から 0.75 m で、大きさ 0.1 ～ 0.4 m 大の自然石を、小口面を東側に向けて 4 段程度積む。掘形は、幅 0.2 m、深さは検出面から 0.8 m である。工房部東辺では、工房東壁(2093C) をそのまま利用し、頬を揃えて南北両側に積む。掘形埋土は黒褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・スラグが出土した。遺物の時期はⅪ期中～新段階である。

石垣は、柳馬場通から約 47 m 東に位置し、柳馬場通と新富小路通のほぼ中央にあたり、街区を東西に 2 分する背割り石垣である。

建物 2153 北側で検出した建物の布掘り基礎で、南西部が後世の攪乱を受け、北側は調査区外へ延びる。掘形は、南北 5 m 以上・東西約 5.5 m で、「口字形」に復元できる。溝幅約 1.5 m、深さは検出面から 1 m である。溝の底部に大きさ 0.05 ～ 0.1 m の河原石を詰め、黄褐色砂泥層と灰色砂礫を 0.03 ～ 0.05 m の厚さで交互に十数段埋める。類例から土蔵の基礎と判断した。埋土中から、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・銅製品・スラグが出土した。遺物の時期はⅫ期である。

竪穴 2166 (図版 13・70) 北側で検出した埴埴組竪穴である。掘形は、直径 0.7 m の円形で、深さは検出面から 0.3 m である。内部施設の内法は、南北 0.3 m・東西 0.35 m の楕円形である。直径 0.2 m の埴埴の上部を欠いて長さ約 0.1 m にし、底面を内側に向けて並べる。中央が 0.1 m 凹む。埋土は黄灰色粘質土で、土師器・陶器・磁器・輸入陶磁器・埴埴が出土した。遺物の時期はⅪ期新段階～Ⅻ期である。

石垣 2244 北側で検出した南面する東西方向の石垣で、上部が後世の遺構に削平される。検出した長さは 0.6 m で、東西両側共に後世の遺構に攪乱される。石垣残存高は底面から約 0.2 m で、大きさ 0.3 m 大の自然石を、小口面を南側に向けて 1 段以上積む。土壙 328 北側がここで止まることから、土壙に関連した遺構と推定できる。時期は不明である。

竪穴 2307 (図版 12) 北東側で検出した竪穴で、南側は後世の遺構に攪乱される。掘形は、南北 2.2 m・東西 2.5 m の長方形で、深さは検出面から 1.5 m である。内部施設の内法は、南北 1 m・東西 1.5 m 以上の長方形である。大きさ 0.2 ～ 0.4 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて積む。石組の下には一辺約 0.1 m の角材を井桁に組む。埋土は黒褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・金属製品・木製箸が出土した。遺物の時期はⅫ期である。

## 2) 南西部

石垣 149 (図版 16・71) 北側で検出した北面する東西方向の石垣で、上部が後世の遺構に削平され、西側が土壇 148 などに攪乱される。検出した長さは約 15 m で、東側は調査区外へ延びる。石垣残存高は、最も残りの良好な東端で底面から 1.4 m である。大きさ 0.3～0.7 m 大の切石・自然石を小口面を北側に向けて 2～3 段以上積む。Y=-21,252 以西は底面が 1 段上がる。石材は、花崗岩の切石が多く、矢跡が認められるものもある。また、花崗岩の自然石も使用する。掘形は、幅 0.7 m、深さは検出面から 1.6 m で、裏込めに大きさ 0.1 m 大の河原石を詰める。掘形埋土はにぶい黄褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・砥石・金属製品が出土した。遺物の時期は XI 期新段階～XII 期である。

石垣の位置は、御池通から北約 35 m に位置し、十町西側を細分する石垣である。西で約 3.0 度北へ振れる。

豎穴 192 中央で検出した石組豎穴で、南側が後世の遺構に攪乱される。掘形は、南北 0.9 m・東西 1 m の楕円形で、深さは検出面から 0.55 m である。石組は内径約 0.35 m の円形で、大きさ 0.1～0.2 m 大の河原石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部中央は若干凹む。類例から便所と判断した。枠内埋土は、オリーブ褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・土製品が出土した。遺物の時期は XI 期～XII 期である。

溝 196 南側で検出した素掘り南北溝で、部分的に後世の遺構に攪乱される。検出した長さは約 16 m である。掘形は、断面 U 字形で、幅 0.2 m、深さは検出面から 0.6 m である。埋土は黄褐色泥砂で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類・砥石が出土した。時期は XI 期中段階～XII 期である。

豎穴 307 (図版 12) 北側で検出した豎穴で、南側が後世の遺構に攪乱される。掘形は、南北 0.9 m 以上・東西 1.9 m の楕円形に復元でき、深さは検出面から 0.75 m である。内部施設の内法は、南北 0.4 m 以上で、東西上部が 0.9 m・下部が 0.75 m の長方形で、上部が広がる。大きさ 0.1～0.15 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて積み、裏込めに約 0.1 m 大の河原石を入れる。底部中央に、南北 0.3 m 以上・東西 0.65 m・深さ 0.05 m の方形の凹みがある。埋土は灰褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期は XI 期中～新段階である。

## 3) 東部

石垣 2115A・B 南側で検出した東西方向の石垣で、上部が後世の遺構に削平される。石垣は A・B の 2 時期に分かれ、A の下で B を検出した。2115A は、北面する石垣で、検出した長さは 3.4 m である。西側は石垣 2093 に取り付き、東側は調査区外へ延びる。石垣残存高は底面から 0.2 m で、大きさ 0.2～0.4 m 大の切石・自然石を、小口面を北側に向けて 1 段以上積む。掘形埋土は鈍い黄褐色で、土師器・陶器・磁器・瓦類が出土した。遺物の時期は XI 期新段階～XII 期である。

2115B は、南面する石垣で、上部が 2115A によって削平される。検出した長さは 3.8 m で、

西側は石垣 2093B に取り付き、東側は調査区外へ延びる。石垣残存高は底面から 0.3 m で、大きさ 0.2 ～ 0.4 m 大の自然石を、小口面を南側に向けて 1 段積む。掘形埋土は黒褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類・砥石が出土した。遺物の時期は XI 期新段階である。

石垣 2119A・B (図版 15・72) 北側で検出した東西方向の石垣で、上部が後世の遺構に削平される。石垣は A・B の 2 時期に分かれ、A の下で B を検出した。2119A は北面する石垣で、検出した長さは 9.3 m で、西側は石垣 2093 に取り付き、東側は攪乱される。石垣残存高は底面から約 0.4 m で、大きさ 0.2 ～ 0.5 m 大の自然石を、小口面を北側に向けて 2 段以上積む。石垣北側に漆喰の溝があり、これと関係する。掘形埋土はオリーブ褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類が出土した。遺物の時期は XII 期～ 期である。

2119B は、南面する垣石で、上部が 2119A によって削平される。検出した長さは 7.4 m で、西側は竪穴 2137 に取り付き、東側は攪乱される。残存高は最も残りの良好な西部で底面から 0.65 m である。西側は大きさ 0.1 ～ 0.35 m 大の自然石を、小口面を南側に向けて 3 段程度積むが、東側は直径 0.2 m の垣石の底面を南側に向け目違いに 2 段積み、その上に石を積んだと推定できる。掘形埋土は黒褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類・垣石・炉壁が出土した。遺物の時期は XI 期新段階～ XII 期である。

石垣 2120A・B 北側で検出した東西方向の石垣で、上部が後世の遺構に削平される。石垣は A・B の 2 時期に分かれ、A の下で B を検出した。2120A は北面する石垣で、検出した長さは 1.1 m である。西側は石垣 2093 に取り付き、東側は攪乱される。石垣残存高は底面から約 0.2 m で、大きさ 0.1 ～ 0.3 m 大の自然石を、小口面を北側に向けて 1 段以上積む。掘形は不明である。時期は 期以降である。

2120B は、南面する石垣で、上部が石垣 2120A によって削平される。検出した長さは 1.9 m で、西側は石垣 2093 に取り付き、東側は攪乱される。残存高は底面から約 0.2 m である。大きさ 0.15 ～ 0.4 m 大の自然石を、小口面を南側に向けて 1 段積む。掘形埋土は黒褐色泥砂で、土器類が出土した。遺物の時期は XI 期～ XII 期である。

石垣 2131 西側で検出した西面する南北方向の石垣で、上部が後世の遺構に削平される。検出した長さは 3.2 m で、東西両側は攪乱される。石垣残存高は底面から約 0.2 m で、大きさ 0.3 ～ 0.4 m 大の自然石を、小口面を西側に向けて 1 段以上積む。掘形埋土は暗褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・砥石が出土した。遺物の時期は XI 期新段階である。石垣 2093 と対応すると、その間が幅 0.5 m の南北溝になる。

石垣 2134A・B 南側で検出した東西方向の石垣で、上部が後世の遺構に削平される。石垣は A・B の 2 時期に分かれ、A の下で B を検出した。2134A は、南面する石垣で、検出した長さは 1.4 m で、西側は石垣 2093 に取り付き、東側は攪乱される。石垣残存高は底面から約 0.4 m で、大きさ 0.4 ～ 0.55 m 大の自然石を、小口面を南側に向けて 1 段以上積む。掘形は不明である。時期は 期である。

2134B は、北面する石垣で、上部が石垣 2134A によって削平される。検出した長さは 2.2 m で、西側は石垣 2093B に取り付き、東側は調査区外へ延びる。残存高は底面から 0.35 m である。大

きさ0.1～0.3 m大の自然石を、小口面を北側に向けて2段積む。掘形埋土は暗褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・鋳型・砥石が出土した。遺物の時期はⅫ期である。

竪穴2137(図版13) 北側で検出した石組竪穴で、西側は上部が石垣2093に削平される。掘形は、一辺1.1 mの方形で、深さは検出面から1 mである。内部施設の内法は、一辺約0.6 mで、大きさ0.1～0.3 m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部中央に径0.45 m・深さ0.25 mの曲物を据える。枠内埋土は、黒褐色砂泥で、土師器・陶器・磁器・埴埴・土製人形・金属製品・貝類が出土した。遺物の時期はⅫ期である。

石垣2158 東側と西側で検出した北面する東西方向の石垣で、上部が後世の遺構に削平される。検出した長さは3.2 m・1.2 mで、中央部は攪乱されるが、東側は調査区外へ延び、西側は石垣2093に取り付く。石垣残存高は底面から約0.2 mで、大きさ0.1～0.3 m大の自然石を、小口面を北側に向けて2段以上積む。掘形埋土は黒褐色泥砂で礫が混じり、土師器・陶器・磁器・瓦類・砥石が出土した。遺物の時期はⅫ期である。

竪穴2167(図版13) 東側で検出した石組竪穴で、上部が後世の遺構に削平される。掘形は、南北1.5 m・東西1.4 mの楕円形で、深さは検出面から0.95 mである。内部施設の内法は、南北0.5 m・東西0.6 mの楕円形で、大きさ0.1～0.15 m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。南東部石組面から南東側に木樋が取り付く。検出した長さは0.8 mで、東側は攪乱される。掘形は、断面逆台形で、幅0.15 m、深さは検出面から約0.1 mである。掘形内両側に横板を据えた痕跡が見られる。枠内埋土は黒褐色泥砂で、土師器・陶器・磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅪ期中～新段階である。

#### 4) 工房地区(巻頭図版1～3、図版17～21)

北西部で検出した工房跡で、後述する石垣336・2093・2245に囲まれた東西約29 m、南北約6 mの範囲である。上部が後世の遺構に削平され、西側は建物63、井戸205、南側が井戸78・293・2111・2075や土壇79、竪穴2307などによって攪乱される。

工房地区の調査は、第1床面から第4床面まで、4段階に分けて実施した。以下、各床面毎に検出した遺構を述べる。炉・小型方形遺構・小型円形遺構の詳細については、一覧表(表2～4)にまとめた。

##### i) 第1床面検出遺構(巻頭図版1・2、図版18・19)

石垣336A・B 北辺で検出した北面する東西方向の石垣で、A・Bの2時期に分かれ、Aの下でBを検出した。336Aは、西端は後世の遺構に攪乱され、東側は後世の遺構によって欠失するが、東端は石垣2093Cへ接続する。検出した長さは26.1 mである。石垣の方向は、西で約2.7度北に振れる。残存高は最も残りの良好な中央で検出面(第1面)から約1 mである。石垣は、大きさ0.2～0.5 m大の自然石を、小口面を東側に向けて3～5段以上積む。掘形は無く、床面を造成する

毎に石を積んだと推定できる。埋土は黒褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・鞆羽口・炉壁・スラグが出土した。遺物の時期はXI期中～新段階である。

石垣 2093C 東辺で検出した東面する南北方向の石垣である。検出した長さは 5.9 m で北端は石垣 336、南端は石垣 2245 に接続する。石垣の方向は、北で約 1.9 度東に振れる。残存高は最も残りの良好な南側で検出面（第 1 面）から 0.9 m である。石垣は、大きさ 0.2 ～ 0.4 m 大の自然石を、小口面を東側に向けて 6 段程度積む。掘形は無く、床面を造成する毎に石を積んだと推定できる。

石列 2094 北辺で検出した東西方向の石列で、部分的に後世の遺構に攪乱される。検出した長さは 11.7 m で、西側は継続するかどうか不明である。大きさは 0.3 ～ 0.5 m 大の自然石を、平坦面を上に向けて据える。石の間隔は心々で約 1 m である。掘形は無く、床面の造成と同時に石を据えたと推定できる。掘形埋土は黒褐色泥砂で、土師器・陶器・磁器・炉壁が出土した。遺物の時期はXI期新段階である。

石垣 2245 南辺で検出した南面する東西方向の石垣で、上面は削平を受け、西側は後世の遺構に攪乱される。検出した長さは 22.8 m で、東端は石垣 2093C に接続する。石垣の方向は、西で約 1.9 度北に振れる。残存高は最も残りの良好な南側で検出面（第 1 面）から 0.75 m である。石垣は、大きさ 0.2 ～ 0.4 m 大の自然石を、小口面を東側に向けて 4 段以上積む。掘形は無く、床面を造成する毎に石を積んだと推定できる。埋土は黒褐色泥砂で、土師器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・スラグが出土した。遺物の時期はXI期中～新段階である。

土壇 2229 東部中央で検出した土壇である。掘形は、直径 0.3 m の円形で、深さは検出面から 0.2 m である。埋土は、黄色粘土が多く含まれ、粘土溜まりと推定できる。土壇 2238 も同様な遺構である。

瓦組遺構 2250（図版 22）西部南側に位置し、第 1 床面の下層で検出した瓦組遺構である。検出した長さは約 2.4 m で、西側は後世の遺構によって攪乱を受け、東側は削平される。形状は S 字形に曲がる。丸瓦の凹面を上にして玉縁を掛けて並べ、丸瓦の下には、平瓦片を両側から差し込み安定させる。丸瓦凹面の標高は東西でほとんど差はない。丸瓦上部の蓋の痕跡は検出できないが、丸瓦上部が床面より約 0.1 m 低いことから、暗渠と推定できる。掘形は無く、床面を造成する際に構築したと推定できる。

炉 55・57・74・99・100・101A・101B・102・105・106・2255・2256・2080（巻頭図版 3、図版 23・76）炉を 12 ヶ所検出し、西部に集中する。炉はいずれも上部が削平を受け、操業床面そのものは残存していない。炉 74・57・55・2255 は北辺から約 1 m 南側で東西方向に並ぶ。これに対して、炉 100・99・102・101A・106・105 は北辺から約 4.5 m 南側で東西に並ぶ。北側列と南側列は約 3 m 離れて 2 列に配置され、中央は空闲地となる。さらに、各炉は 1.5 ～ 2 m の間隔で配置される。南列の炉はいずれも重複し、炉 100 → 炉 99、炉 102 → 炉 101B、炉 106 → 炉 105 と、若干東に位置を移して新たに構築されたと推定できる。

小型方形遺構 2212 ～ 2217・2219 ～ 2223・2226 ～ 2228・2230・2232 ～ 2235・2263（図版

24・78) 東部で20ヶ所検出し、西部では確認できない。周辺では操業床面が残存し、黄色粘土の面が残存した。遺構は工房地区の東側に集中し、配置は明確に区分できない。

ii) 第2床面検出遺構(図版18・19・72～74)

石垣2093C・石垣2245・石垣336A 第1床面で検出した石垣2093C・石垣2245・石垣336Aの下側3段分が、当面での石垣にあたる。

土壙58 中部で検出した土壙である。掘形は、直径0.5mの円形で、深さは検出面から0.2mである。埋土は、黄色粘土が多く含まれ、粘土溜まりと推定できる。土師器・陶器・磁器・輸入陶磁器・埴輪が出土した。遺物の時期はXI期中段階である。

石列2260 東部で検出した西面する南北方向の石列で、中央は石が抜き取られる。検出した長さは2mで北側は後世の遺構で攪乱される。0.3～0.5mの自然石の平坦面を上に向け、小口面を西側に向けて並べる。掘形は無く、床面の造成の際に同時に構築したと推定できる。

埴輪列2261 中央部と東部の境で検出した南北方向の埴輪列である。長さは0.95mである。直径0.2mの埴輪の上部を欠いて、底面を上に向けて並べる。掘形は無く、床面の造成の際に同時に構築したと推定できる。

埴輪石敷2262 中部と東部の境で検出した埴輪および石を敷いた遺構である。範囲は南北2.8m・東西1.7mで、西側・東側は後世の遺構で攪乱される。北側は直径0.2mの埴輪の上部を欠いて底面を上に向けて敷き、南半は0.1～0.25mの自然石の平坦面を上に向けて敷く。掘形は無く、床面の造成の際に同時に構築したと推定できる。

土壙2265・2266・2268 東部で検出した土壙で、南北に並ぶ。掘形は、直径一辺0.5～0.7mの不定形で、深さは検出面から約0.2mである。埋土はオリーブ黒色泥砂で礫を多く含み、土師器・陶器・瓦類・埴輪・炉壁・スラグが出土した。遺物の時期はXI期中～新段階である。

石列2306 東部で検出した東西方向の石列である。検出した長さは0.95mである。約0.1mの自然石の平坦面を上に向けて並べる。掘形は無く、床面の造成の際に同時に構築したと推定できる。

竪穴2308(図版22) 東部で検出した横板組の竪穴である。掘形は、約1mの方形で、深さは検出面から0.46mである。木枠は、内法一辺0.9m、残存長は下端から0.3mである。4隅に丸太杭を打ち込み横板を止める。枠内埋土は黒褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類・埴輪・スラグが出土した。遺物の時期はXI期中～新段階である。

炉65・68・69・103・109A・109B・291・295・303・329・408・410・560・569・570・587・588・634・728・2310・2317(巻頭図版3、図版23・77) 20ヶ所検出し、西部に集中するが、東部でも2ヶ所確認した。炉は上部が削平を受けたものが多いが、中部では操業面そのものが残存した。炉570・587・303・329・560・634・65・69・68・295・291・588・728・2310・2317は北辺から約1m南側で東西方向に並ぶ。これに対して、炉410・408・103・109は北辺から約4.5m南側で東西に並ぶ。北側列と南側列は約3m離れる。各炉は、東側の炉2317を除き、2～3mの間隔で配置される。

各炉は重複したものが多く、炉 588 → 炉 728 → 炉 291、炉 408 → 炉 410、第 1 面の炉 101B → 炉 109 と、若干位置を移して順次構築されたと推定できる。

小型方形遺構 62・64・66・67・70・71・296・302・411・554・555・559・576・577・649・2271・2272・2304・2319（図版 24・78）19ヶ所検出し、西部へ集中するが、東部西側でも 4ヶ所みられる。では確認できない。411・559・302・64・67・66・71・70・577・576・296・62・2304・2319 は北辺から約 1 m 南側で東西方向に並ぶ。これに対して、649・554・555・2271・2272 は北辺から約 4.5 m 南で東西方向に並ぶ。いずれも炉の近くに配置される。

小型円形遺構 104・568・581・2514（図版 23・78）中部で 4ヶ所検出した。これらは、炉の北列と南列の間に配置され、炉に近接して位置する。北側東端の遺構は重複し、2514 → 568 と、若干位置を移して造り替えられる。

上部が削平を受け底部しか残存していないものが多い。104 は、直径 0.54 m の円形で、深さは検出面から 0.35 m である。側面は直に立ち上がり、底部は平坦である。側面南西部と北東部の下位 2ヶ所に木樋が取り付く。南西部木樋は、検出した長さ 1.5 m で、西側は炉 103 掘形に達する。掘形は、断面 U 字形で、幅 0.15 m・深さは検出面から約 0.25 m で、底は西にゆるやかに上る（0.15 m）。穴は直径 0.07 m で木質の痕跡が残存したことから、節を抜いた竹を据えたと推定できる。北東部木樋は、検出した長さ 1.7 m で、東側は攪乱される。掘形は、断面 U 字形で、幅 0.15 m・深さは検出面から約 0.15 m で、底は平坦である。穴は直径 0.07 m で部分的に竹が残存したことから、節を抜いた竹を据えたと推定できる。中央部分には丸瓦を伏せて置き、ジョイントとする。

### iii) 第 3 床面検出遺構（図版 20・73・74）

石垣 336B 第 1 床面で検出した石垣 336 の下側 1 段分にあたる。検出した長さは 12.6 m で東側は後世の遺構で攪乱される。

埴塼 589 南辺で検出した南面した東西方向の埴塼である。検出した長さは 5.7 m である。残存高は底面から 0.2 m である。直径 0.2 m の埴塼の上部を欠いて、底面を上に向けて並べる。掘形は無く、床面の造成の際に同時に構築したと推定できる。

溝 2289 南辺で検出した東西方向の溝で、埴塼 589 の南側にあたる。検出した長さは 6 m で、東西側共に後世の遺構によって攪乱を受ける。掘形は、断面逆台形で、幅約 0.4 m・深さは検出面から 0.3 m である。

埴塼 2333 東辺で検出した東面した南北方向の埴塼で、石垣 2093C の下で検出した。検出した長さは 3.1 m である。残存高は底面から 0.3 m である。直径 0.2 m の埴塼の上部を欠いて、底面を上に向けて並べる。北端では目違いに 2 列並べる。掘形は無く、床面の造成の際に同時に構築したと推定できる。

埴塼列 2311 東部で検出した南北方向の埴塼列である。検出した長さは 2 m で、南側は抜き取り穴が溝状に凹む。直径 0.2 m の埴塼の上部を欠いて、底面を上に向けて並べる。掘形は無く、床面の造成の際に同時に構築したと推定できる。

土壙 2320 東部で検出した土壙である。掘形は、一辺 0.4 m の不定形で、深さは検出面から 0.14 m である。埋土は、黄色粘土が多く含まれ、粘土溜まりと推定できる。陶器・磁器・埴埴・スラグが出土した。遺物の時期はXI期である。

竪穴 2321(図版 22・79) 東部で検出した埴埴組竪穴で、北側が後世の遺構に攪乱される。掘形は、復元すると南北 1.2 m ・東西 1.65 m の楕円形で、深さは検出面から 0.5 m である。内部施設の内法は南北推定 0.7 m ・東西 1.2 m の楕円形である。直径 0.2 m の埴埴の上部を欠いて長さ約 0.15 m にし、底面を上に向けて 4 段積む。積み方は、下 2 段が直積み、上 1 段が目違い積みで、上部へ広がる。南西部は 1 個だけ石組で、石の平坦面を上に向けて据える。南西部石上面から南西側に木樋が取り付く。検出した長さは 0.8 m で、西側は攪乱される。掘形は、断面逆台形で、幅 0.9 m 深さは検出面から約 0.8 m で、底は西にゆるやかに上る (0.04 m)。掘形内に直径 0.07 m の竹を据える。埋土は黒色泥砂で炭を含み、土師器・陶器・磁器・埴埴・金属製品・銭貨が出土した。遺物の時期はXI期新段階である。

竪穴 2329 (図版 22・79) 東部で検出した埴埴組竪穴で、南側の埴埴が抜き取られる。掘形は、南北 1.15 m ・東西 1.55 m の長方形で、深さは検出面から 0.25 m である。内部施設の内法は南北推定 0.65 m ・東西 1.15 m の長方形である。直径 0.2 m の埴埴の上部を欠いて長さ約 0.15 m にし、底面を上に向けて 2 段に積む。積み方は直積みである。埋土は黒色泥砂で炭を含み、土師器・陶器・磁器・輸入陶磁器・炉壁・埴埴・金属製品・スラグが出土した。遺物の時期はXI期中～新段階である。

井戸 2348A (図版 22・79) 東部で検出した井戸で、上面南側が後世の遺構によって攪乱される。掘形は、南北 1.47 m ・東西 1.6 m の楕円形で、深さは検出面から 2.85 m である。井戸枠は、内径 0.55 m ・高さ 0.85 m の桶を 3 段重ねる。桶側の上部外側に深さ 0.3 m まで埴埴組、深さ 0.5 m まで石組の枠が巡る。上部埴埴組は内径約 0.65 m で、埴埴の上部を欠いて長さ約 0.15 m にし、底面を上に向けて直積みで 2 段積む。石組は内径約 0.65 m で、大きさ 0.1 ～ 0.2 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。桶の部材は、長さ 0.85 m ・幅 0.05 ～ 0.1 m ・厚さ約 0.02 m の扇形板材を組み合わせ、竹のたがを 3 段廻す。枠内埋土は黒褐色砂泥で、土師器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・取瓶・炉壁・金属製品・スラグが出土した。遺物の時期はXI期中～新段階である。

炉 584・585・841・842・857・865・869・870・890・891・893・894・902・904・909・910・947 (図版 23) 西部で 17 ヶ所検出し、中部から東部では確認していない。炉 910・902・890・904・909・893・585・584・891・857・947・842・841 は北辺から約 1 m 南側で東西方向に並ぶ。これに対して、炉 870・869・865 は南北中央に位置する。北側列の炉は、1 ～ 2 m の間隔で配置される。各炉は重複したものが多く、炉 910 → 炉 890 → 炉 902、炉 585 → 炉 584、炉 947 → 炉 842 → 炉 857 と、若干位置を移して順次構築されたと推定できる。

#### iv) 第 4 床面検出遺構 (図版 21・75)

柱列 2362・2366・2374 中部から東部の東辺・北辺・南辺で検出した柱列である。2366 は

表2 炉一覧表

遺構番号	検出床面	位置	形態分類	規模	炉穴残存上端標高	炉穴底標高	掘形残存上端標高	掘形底標高	形態の特徴	備考	時期
55	第1床面	中部	1B類	径不明・深6、掘形径88・深30	41.13	41.07	41.13	40.8	第2床面728の北側一部を切る。底部一部残存。円形で大型。側壁立ち上がりは不明、底面は平坦。底面は粗く締まり、掘形は粘質シルトとスパイの互層からなり、周囲赤化する。	図版76	D期
57	第1床面	中部	2類	21×34・深7、掘形(126)×(85)・深不明	41.12	41.05	41.1	40.9	攪乱に掘形北側を切られる。底部残存。長方形。南北方向。方形の穴にスパイを埋めて造られた。側壁立ち上がりは不明、底面は丸い。底部炉壁は粗く締まる。抜取穴は下半部残存。方形。規模は炉とほぼ同じ大きさで、深さは26cm。側壁は直に立ち上がり、底面は丸い。炉壁は全体的に熔融激しい。掘形周囲赤化する。		D期
74	第1床面	西部	1B類	径29・深45、掘形径91・深58	41.25	40.8	41.24	40.7	第2床面329の掘形東側を切る。下半部残存。円形で大型。側壁は上部へ広がり、底面は平坦。西方向に羽口あり。周辺に杭跡残存。炉壁は粗く締まる。内部に坩堝の破片、底部に灰が残存。掘形は焼土片を多く含み、周囲赤化する。	図版76	D期
99	第1床面	中部	2類	28×13・深12、掘形63・深25	41.13	41.01	41.14	40.9	100の掘形東側を切る。底部残存。長方形。東西方向。側壁立ち上がりは不明、底面は丸い。側壁は粗く締まり、底面は強く焼け締まる。掘形周囲赤化する。		D期
100	第1床面	中部	2類	径不明・深13、掘形66×22・深21	41.12	40.99	41.15	40.9	99に掘形東側を一部切られる。底部東半残存。長方形。東西方向。側壁立ち上がりは不明、底面は丸い。周辺に杭跡が残存。側壁は粗く締まり、底面は強く焼け締まる。掘形周囲赤化する。		D期
101A	第1床面	中部	1B類	32×39・深10、掘形径52・深30	41.12	41.02	41.09	40.8	102に掘形西側を切られる。109の掘形西側一部を切る。底部残存。円形で大型。側壁立ち上がりは不明、底面は丸い。周辺に杭跡が残存。底面は強く焼け締まる。掘形周囲赤化する。		D期
101B	第1床面	中部	1B類	32×39・深15、掘形径52・深27	41.05	40.9	41.09	40.8	101Aの炉壁抜取穴。109の掘形西側一部を切る。下半部残存。円形で大型。側壁は広がり、底面は平坦。粘質シルトとスパイの互層で埋めた後101Aを作る。表面は強く焼け締まり、掘形は101Aと同じである。		C期
102	第1床面	中部	1類	径29×34・深8、掘形径42・深12	不明	不明	41.12	41.0	炉壁抜取穴。101Bの掘形西側一部、103の掘形東側を切る。底部残存。円形。側壁立ち上がりは不明、底面は丸い。底部東側に杭跡あり。掘形に貼られた粘質シルトは赤化する。		E期
105	第1床面	中部	1B類	径33・深28、掘形径120・深52	40.97	40.69	41.03	40.5	106の東側を切る。下半部残存。円形で大型。側壁は直に立ち上がり、底面は丸い。側壁は粗く締まるが底部ほど熔融激しく、底面は強く焼け締まる。掘形周囲赤化する。	図版23・76	D期
106	第1床面	中部	1類	径(60)・深15、掘形径(60)・深19	41.03	40.88	41.03	40.8	105に東側を切られる。底部西半残存。円形。側壁立ち上がりは不明、底面は丸い。炉壁は赤く焼ける。	図版23・76	C期
2255	第1床面	東部	2類	径不明・深5、掘形深34	40.98	40.93	41.09	40.8	攪乱に南西側を切られる。底部残存。長方形。斜方向。側壁立ち上がりは不明、底面は丸い。底面は粗く締まる。掘形周囲赤化する。		D期
2256	第1床面	東部	不明	規模不明、掘形径不明・深8	不明	不明	41.18	41.1	掘形一部残存。側壁、底面は不明。掘形周囲赤化する。		E期
2080	第1床面	東部	2類	14×(30)・深不明、掘形径51・深28	41.64	不明	41.65	41.4	土壙2073に東側を切られる。下半部残存。長方形。東西方向。側壁は直に立ち上がり、底面は不明。東側からファイゴの羽口を挿入したと推定した。側壁は粗く締まる。底部炉壁は残存しない。掘形埋土は炉壁片を含み、周囲赤化する。		E期

遺構番号	検出床面	位置	形態分類	規模	炉穴残存上端標高	炉穴底標高	掘形残存上端標高	掘形底標高	形態の特徴	備考	時期
65	第2床面	西部	不明	規模不明、掘形径不明・深8	不明	不明	41.14	41.1	炉壁抜取穴。66の西側を切る。掘形東半残存。側壁立ち上がりは不明、底面は丸い。掘形に貼られたシルトは赤く焼け、周囲赤化する。		C期
68	第2床面	西部	不明	26×38・深8、掘形43×57・深14	不明	不明	41.07	40.9	炉壁抜取穴。69に北側を一部切られる。底部残存。側壁立ち上がりは不明。底面は楕円状になり、中心に杭跡がある。埋土にスパイを含む。掘形に貼られたシルトは赤く焼け、周囲赤化する。		C期
69	第2床面	西部	2類	17×31・深8、掘形(28)×57・深(14)	41.14	41.06	41.12	41.0	68の北側を一部切る。底部残存。長方形。東西方向。側壁立ち上がりは不明、底面は平坦。埋土中に羽口破片を含む。周辺に杭跡が残存。底面は堅く焼け締まる。掘形周囲赤化する。		D期
103	第2床面	中部	1B類	径29・深42、掘形径52・深50	41.09	40.67	41.12	40.6	102に掘形東側を切られる。ほぼ完存。円形で大型。側壁は上部がややすばまり、底面は不明。側壁は粗く締まる。底部炉壁は残存しない。掘形周囲赤化する。		C期
109A	第2床面	中部	1B類	径33・深(44)、掘形径101・深(58)	41.05	40.61	41.09	40.5	101A・Bに掘形西側、104に掘形北側、井戸108に南半を切られる。下半部北側残存。円形で大型。109Bを埋めて造り替える。側壁は直に立ち上がり、底面は丸い。側壁は粗く締まり、底面は堅く焼け締まる。掘形周囲赤化する。	図版77	C期
109B	第2床面	中部	1類	不明	計測不可	計測不可	計測不可	計測不可	109Aの炉壁抜取穴。下半部東側一部残存。円形。側壁は広がり、底面は平坦。表面は堅く焼け締まり、掘形は109Aと同じ。		C期
291	第2床面	中部	1A類	径20・深不明、掘形径101・深(65)	41.13	不明	41.13	40.5	588の西側を切る。ほぼ完存。円形で小型。側壁は羽口下部で極度に広がるが、上部に向かいややすばまる。底面は不明。東方向に羽口あり。羽口より下の側壁表面は溶融激しく、青黒色ガラス質になる。底部炉壁は残存しない。掘形は炉壁片を多量に含み、周囲赤化する。	図版23・77	C期
295	第2床面	中部	1A類	規模不明、掘形径(47)・深11	41.16	不明	41.17	41.1	576に南側を切られる。炉壁一部が残存。円形で小型。側壁、底面は不明。側壁は粗く締まり、底部炉壁は残存しない。掘形に貼られたシルトは赤く焼け、周囲赤化する。		D期
303	第2床面	西部	1B類	径40・深31、掘形径83・深44	41.18	40.87	41.15	40.7	下半部残存。73・561に掘形東側を切られる。円形で大型。側壁は直に立ち上がり、底面は丸い。周辺に杭跡が残存。側壁は粗く締まり。底部炉壁は堅く締まる。掘形周囲赤化する。		D期
329	第2床面	西部	2類	規模不明、掘形57×(74)・深5	不明	41.17	41.17	41.1	73・561に掘形西側、74に掘形東側を切られる。底部一部残存。長方形。東西方向。側壁立ち上がりは不明、底面は平坦。周辺に杭跡が残存。底面は粗く締まる。掘形周囲赤化する。		D期
408	第2床面	西部	1A類	径26・深28、掘形径64・深25	41.14	40.86	41.1	40.9	410に掘形北側一部、井戸544に東側を切られる。下半部西側残存。円形で、やや小型。側壁は直に立ち上がり、底面は平坦。周辺に杭跡が残存。側壁表面は底部に向かって溶融激しく、青黒色のガラス質になり、底面は堅く焼け締まる。掘形周囲赤化する。		D期
410	第2床面	西部	1類	径不明・深(18)、掘形規模不明	41.14	40.96	計測不可	計測不可	408の掘形北側一部を切る。底部一部が残存。円形。側壁、底面は不明。炉壁は粗く締まる。掘形周囲赤化する。		C期
560	第2床面	西部	2類	27×10・深25、掘形径(60)・深29	41.06	40.81	41.05	40.8	完存。長方形。東西方向。側壁は上部がややすばまり、底面は平坦。西方向に羽口あり。口縁周辺は焼き締まり、平坦。側壁は粗く締まり、底面は堅く焼け締まる。掘形周囲赤化する。	図版23・77	C期

遺構番号	検出床面	位置	形態分類	規模	炉穴残存上端標高	炉穴底標高	掘形残存上端標高	掘形底標高	形態の特徴	備考	時期
569	第2床面	中部	1類	規模不明、掘形径56・深33	不明	不明	41.14	40.8	炉壁抜取穴。掘形下半部残存。円形。側壁は不明、底面は半球状である。掘形に粘質シルトが薄く残存し、表面は多量の炭付着。掘形周囲赤化する。		C期
570	第2床面	西部	不明	規模不明、掘形径不明・深20	不明	不明	41.18	41.0	330と井戸205に西側・東側を切られる。掘形の一部残存。側壁、底面は不明。掘形周囲赤化する。		C期
587	第2床面	西部	1類	径(38)・深不明、掘形径不明・深20	41.2	不明	41.2	41.0	炉壁抜取穴。攪乱に北側を切られる。南半の炉壁一部残存。円形。側面は直に立ち上がり、底面は不明。周辺に杭跡が残存。側壁は粗く締まり、底部炉壁は残存しない。		C期
588	第2床面	中部	1A類	径17・深7、掘形径25・深17	40.95	40.88	40.95	40.8	291に西側、728に東側を切られる。下半部残存。円形で小型。側壁はややすぼまり、底面は平坦。炉壁は粗く締まる。掘形周囲赤化する。抜取穴が残る。		C期
634	第2床面	西部	1類	径21・深10、掘形なし	41.13	41.02	41.12	41.0	炉壁抜取穴か。下半部残存。円形。側壁は上部ややすぼまり、底面は平坦。周辺に杭跡が残存。炉壁は粗く締まる。掘形周囲赤化する。		D期
728	第2床面	中部	1A類	径28・深53、掘形(不明)×(105)・深50	41.06	40.53	41.02	40.5	第1床面の55に北側一部を切られる。588の掘形東側を切る。ほぼ完存。円形でやや小型。側壁は直に立ち上がり、底面は平坦。断面より西方向に羽口の痕跡がある。側壁表面は溶融激しく青黒色のガラス質になり、内面は粗く締まる。底部は堅く焼け締まる。掘形周囲赤化する。		C期
2310	第2床面	東部	2類	14×(43)・深16、掘形径46・深28	40.94	40.78	40.94	40.7	下半部北壁残存。長方形。南北方向。側壁は上部すぼまり、底面は平坦。側壁は粗く締まり、底面は堅く焼け締まる。掘形周囲赤化する。		C期
2317	第2床面	東部	2類	18×40・深19、掘形63×71・深34	40.8	40.61	40.84	40.5	1面遺構に南側を切られる。下半部残存。長方形。南北方向。側壁は上部すぼまり、底面は凸凹。北方向に羽口あり。周辺に杭跡が残存。炉壁表面は灰白色で粗く締まる。底部炉壁一部残存。掘形周囲赤化する。		B-2期
584	第3床面	西部	1類	規模不明、掘形径不明・深20	不明	不明	41.0	40.8	炉抜取穴。585に西側を切られる。掘形西半残存。円形。側壁は直に立ち上がり、底面は平坦。側壁は粗く締まり、底部炉壁は残存しない。掘形周囲赤化する。		B-2期
585	第3床面	西部	1類	規模不明、掘形径34・深16	不明	不明	40.96	40.8	炉抜取穴。584に掘形東側を切られる。894の掘形北側、897の東側を切る。下半部分が残存。円形。側壁はやや広がり、底面は平坦。側壁は粗く締まり、底部炉壁は残存しない。掘形周囲赤化する。		B-2期
841	第3床面	中部	1B類	径35・深21、掘形径70・深41	40.65	40.44	40.63	40.2	完存。円形で大型。側壁は一方は直に立ち上がり、他方はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。口縁周辺は焼き締まり、平坦。周辺に杭跡が残存。炉壁は堅く焼け締まる。掘形埋土はスパイとシルトの互層からなり、周囲赤化する。		B-2期
842	第3床面	中部	1B類	径31・深不明、掘形径65・深24	40.8	不明	40.72	40.5	857の掘形東側一部を切る。完存。円形で大型。側壁は直に立ち上がり、底面は不明。口縁周辺は焼き締まり、平坦。炉壁は堅く焼け締まり、底部炉壁は残存しない。掘形周囲赤化する。		B-2期
857	第3床面	西部	1B類	径50・深20、掘形径(80)・深23	40.83	40.63	40.8	40.6	842に掘形東側を一部切られる。底部残存。円形で大型。側壁は広がり、底面は丸い。周辺に杭跡が残存。炉壁表面は黒く焼け締まる。掘形埋土はスパイを含み、周囲赤化する。		B-2期
865	第3床面	中部	2類	20×35・深8、掘形40×52・深13	40.68	40.60	40.71	40.6	868に掘形西側を切られる。下半部分が残存。長方形。南北方向。側壁は直に立ち上がり、底面は平坦。北方向に羽口の痕跡あり。側壁は粗く締まり、底面は堅く焼け締まる。掘形周囲赤化する。		B-2期

遺構番号	検出床面	位置	形態分類	規模	炉穴残存上端標高	炉穴底標高	掘形残存上端標高	掘形底標高	形態の特徴	備考	時期
869	第3床面	中部	2類	17×(26)・深不明、掘形径42×(51)・深24	40.83	不明	40.85	40.6	868に北側一部を切られる。上部欠損。ほぼ完存。長方形。南北方向。側壁上部すばまり、底面は不明。南方向に羽口あり。側壁は粗く焼け締まり、底部炉壁は残存しない。掘形周囲やや赤化する。		B-2期
870	第3床面	中部	1類	規模不明、掘形径52・深25	不明	不明	40.82	40.6	炉壁抜取穴。868に東側を切られる。円形。側面は直に立ち上がり、底面は平坦。表面は堅く焼け締まる。埋土中に炭を多く含む。		B-2期
890	第3床面	西部	1類	径(40)・深(20)、掘形径68・深(22)	計測不可	計測不可	計測不可	計測不可	炉壁抜取穴。902に東側一部を切られる。下半部残存。904の北西側を切る。円形。側壁は直に立ち上がり、底面は平坦。炉壁は残存せず、底面にシルト残存。掘形周囲赤化する。		B期
891	第3床面	中部	1B類	径30・深7、掘形67×75・深16	40.63	40.56	40.66	40.5	第4床面949の西半を切る。底部残存。円形で大型。側壁は不明、底面は平坦。底面は粗く焼け締まる。掘形埋土はスパイを含み、周囲赤化する。		B-2期
893	第3床面	西部	不明	規模不明、掘形径48・深29	不明	不明	41.04	40.8	攪乱に南側を切られる。867・909の掘形東側を切る。掘形下半部残存。円形。周辺に杭跡が残存。掘形周囲赤化する。		B期
894	第3床面	中部	不明	規模不明、掘形径38・深24	不明	不明	41.01	40.8	炉壁抜取穴。585に掘形北側一部を切られる。側面は直に立ち上がり、底面は平坦。掘形周囲やや赤化する。		B期
902	第3床面	西部	不明	規模不明、掘形径31・深35	不明	不明	41.02	40.7	炉壁抜取穴。890の東側一部、910の南側一部を切る。下半部残存。側壁はほぼ直に立ち上がり、底面は平坦。掘形埋土はシルトとスパイの互層になり、表面のシルトは堅く焼け締まる。内面は粗く締まる。掘形周囲赤化する。		C期
904	第3床面	西部	不明	径45・深27、掘形径50・深29	41.05	40.78	41.05	40.8	890に北側を切られる。下半部残存。円形。側壁はやや広がり、底面は平坦。表面はやや赤く焼け、底面のシルト赤く焼ける。掘形周囲赤化する。		B-2期
909	第3床面	西部	1類	径不明・深3、掘形径(33)・深12	40.79	40.76	40.79	40.7	炉壁抜取穴。867・893に南側一部を切られる。底部残存。円形。側面は不明、底面はやや丸い。周辺に杭跡が残存。底部粗く締まり、暗灰色。掘形周囲赤化する。		C期
910	第3床面	西部	1B類	規模不明、掘形径(33)・深(17)	不明	不明	40.91	計測不可	867に掘形東側一部、890・902に南側を切られる。掘形一部残存。円形で大型。側壁、底面は不明。周辺に杭跡が残存。掘形埋土は炉壁片混じりのスパイで、周囲赤化する。		B-2期
947	第3床面	中部	1B類	径36・深12、掘形75×85・深26	40.6	40.48	40.58	40.3	842に上面を切られる。底部残存。円形で大型。側壁は不明、底面は丸い。底面は粗く締まる。掘形周囲赤化する。		B-1期
843	第4床面	中部	1A類	径24・深不明、掘形径59・深43	40.52	不明	40.51	40.2	844の北側を一部切る。ほぼ完存。円形で小型。側面は上部がややすばまり、底面は平坦。西方向に羽口あり。側壁表面は激しく溶融し、内部は粗く締まる。底部炉壁は残存せず、底面に一部からみ残存。掘形埋土は炉壁片を含み、周囲赤化する。	図版23・77	B-1期
844	第4床面	中部	1B類	径40・深8、掘形径不明・深17	40.54	40.46	40.54	40.4	841に東側、843に北側を切られる。底部残存。円形で大型。側壁は不明、底面は半球状である。下層に942がある。掘形埋土はシルトとスパイの互層からなり、周囲赤化する。		B-1期
945	第4床面	中部	1類	径40・深23	不明	不明	40.60	40.4	炉壁抜取穴。下半部残存。円形。側壁はほぼ直に立ち上がり、底面は平坦。掘形埋土はスパイで表面は堅く締まり、周囲赤化する。		B期

遺構番号	検出床面	位置	形態分類	規模	炉穴残存上端標高	炉穴底標高	掘形残存上端標高	掘形底標高	形態の特徴	備考	時期
949	第4床面	中部	不明	径不明・深6、掘形径(34)・深12	40.6	40.54	40.6	40.5	炉壁抜取穴。950の西側一部を切る。891に西側半分を切られる。東側下半部残存。側面はやや湾曲し、底面は半球状である。周辺に杭跡が残存。掘形埋土にスパイが入り粗く締まり、周囲赤化する。		B-2期
950	第4床面	中部	1類	規模不明、掘形径不明・深11	不明	不明	40.6	40.5	949に西側一部を切られる。951の南側を切る。下半部残存。円形。側面は不明、底面は半球状である。周辺に杭跡が残存。掘形表面は粗く締まり、周囲赤化する。		B-2期

凡例：円形炉の直径は、内側最大径。( )は推定値。長方形炉の規模は、短辺×長辺で表記。完存以外の深さは、残存最上部と底部の距離。( )内は推定残存長。単位はcm。

表3 小型方形遺構(型)一覧表

遺構番号	検出床面	位置	規模	掘形残存上端標高	型底標高	掘形底標高	形態の特徴	備考	時期
2212	第1床面	東部	16×30・深9、掘形34×50・深13	41.38	41.29	41.25	2213の掘形北側一部、2214の上面を切る。完存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。周辺に杭跡が残存。表面堅く焼け締まる。		D期
2213	第1床面	東部	規模不明、掘形径37・深19	41.34	不明	41.15	2214の掘形南側一部を切る。2212に掘形北側一部を切られる。底部一部残存。側面・底面は不明。表面堅く焼け締まる。		D期
2214	第1床面	東部	15×25・深4、掘形31×35・深不明	41.26	41.22	計測不可	2212に上面を削平される。2213に掘形南側一部を切られる。底部残存。長方形。東西方向。側面不明、底面平坦。表面堅く焼け締まる。		D期
2215	第1床面	東部	22×30・深15、掘形54×80・深21	41.38	41.23	41.17	完存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は平坦で固まる。周辺に杭跡が残存。表面堅く焼け締まる。	図版78	D期
2216	第1床面	東部	10×31・深4、掘形径41・深17	41.32	41.28	41.15	2217の掘形東側を一部切る。底部残存。長方形。東西方向。側面不明、底面平坦。表面堅く焼け締まる。		D期
2217	第1床面	東部	10×18・深13、掘形30×40・深16	41.37	41.24	41.21	2216に掘形東側を切られる。西半完存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面凹む。口縁周辺は平坦で固まる。表面堅く焼け締まる。		D期
2219	第1床面	東部	(10)×33・深13、掘形54×69・深24	41.31	41.18	41.07	南半崩壊。北半残存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面凹凸あり。口縁周辺は平坦で固まる。表面堅く焼け締まる。		D期
2220	第1床面	東部	16×24・深5、掘形20×31・深不明	41.32	41.27	計測不可	底部残存。長方形。南北方向。側面不明、底面平坦。表面堅く焼け締まる。		D期
2221	第1床面	東部	18×31・深12、掘形67×100・深19	41.33	41.21	41.14	2225の掘形北側一部を切る。2222に掘形東側を一部切られる。ほぼ完存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。周辺に杭跡が残存。表面堅く焼け締まる。	図版78	D期
2222	第1床面	東部	11×33・深14、掘形79×(85)・深18	41.32	41.18	41.12	2223の掘形一部を切る。完存。長方形。南北方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は平坦で固まる。表面堅く焼け締まる。	図版78	D期
2223	第1床面	東部	10×27・深14、掘形79×(85)・深18	41.32	41.18	41.14	2222に掘形南側を切られる。完存。長方形。斜方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は平坦で固まる。表面堅く焼け締まる。	図版78	D期
2226	第1床面	東部	12×(27)・深10、掘形35×40・深22	41.34	41.24	41.12	2224に西側を切られる。東半部残存。長方形。斜方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。表面堅く焼け締まる。	図版78	D期

遺構番号	検出床面	位置	規模	掘形残存上端標高	型底標高	掘形底標高	形態の特徴	備考	時期
2227	第1床面	東部	10×27・深4、掘形32×41・深13	41.23	41.19	41.1	攪乱に上部を削平される。2228Aの西側を切る。底部一部残存。長方形。斜方向。側面不明、底面凹凸あり。表面堅く締まる。	図版24・78	D期
2228	第1床面	東部	掘形径49・深26	41.38	Aは41.21 Bは41.22 Cは41.24	41.12	掘形内で3回の造り替えがある。順番はC→B→Aとなる。いずれも長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は一部平坦で固まる。Cは規模不明・深14、Bは12×26・深16、Aは12×26・深17である。いずれも表面堅く焼け締まる。	図版24・78	D期
2230	第1床面	東部	20×36・深11、掘形径不明・深21	41.38	41.27	41.17	完存。長方形。南北方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は平坦で固まる。表面堅く焼け締まる。周辺に杭跡が残存。		D期
2232	第1床面	東部	(16)×33・深4、掘形24×44・深13	41.32	41.28	41.19	底部一部残存。長方形。斜方向。側面不明、底面平坦。表面粗く焼け締まる。		D期
2233	第1床面	東部	12×36・深7、掘形径43・深14	41.38	41.31	41.22	完存。長方形。南北方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は平坦で固まる。表面堅く焼け締まる。周辺に杭跡が残存。	図版78	D期
2234	第1床面	東部	径不明・深14、掘形径・深21	41.36	41.22	41.15	2235の掘形を切る。底部一部残存。長方形。南北方向。側面不明、底面平坦。表面粗く焼け締まる。		D期
2235	第1床面	東部	(16)×32・深9、掘形(26)×54・深不明	41.32	41.23	計測不可	2234に切られる。底部一部残存。長方形。南北方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。表面粗く焼け締まる。		D期
2263	第1床面	東部	17×32・深14、掘形33×42・深不明	41.07	40.93	計測不可	完存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は平坦で固まる。表面堅く焼け締まる。		C期
62	第2床面	中部	15×29・深不明、掘形径不明・深9	41.14	不明	41.05	北半残存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面は不明。口縁周辺は平坦で固まる。底部残存しない。表面堅く焼け締まり、底部に金属粒残る。		C期
64	第2床面	西部	径不明・深6、掘形30×40・深11	41.16	41.1	41.05	302の北側を切る。底部一部残存。長方形。東西方向。側面不明、底面平坦。表面堅く焼け締まる。		C期
66	第2床面	西部	14×28・深7、掘形40×65・深16	41.12	41.05	40.96	65に掘形西側を切られる。完存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は平坦で固まる。表面堅く焼け締まる。		C期
67	第2床面	西部	掘形41×70・深12	41.14	Aは41.02 Bは40.94	Aは41.00 Bは40.89	同一掘形内で2回の造り替えがある。順番はB→Aとなる。いずれも長方形。東西方向。掘形はA・B共に同一。Aは側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺平坦部一部残存。Bは規模不明・深25、Aは15×34・深12である。いずれも表面堅く焼け締まる。	図版24・78	C期
70	第2床面	西部	14×27・深6、掘形32×(50)・深15	41.16	41.1	41.01	建物63に掘形東側を切られる。ほぼ完存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は平坦で固まる。表面堅く焼け締まる。	図版24	C期
71	第2床面	西部	22×31・深12、掘形34×49・深16	41.14	A・Bは41.02	40.98	同一掘形内で2回の造り替えがある。順番はB→Aとなる。いずれも長方形。東西方向。いずれも側面ほぼ直に立ち上がり、底面は平坦。口縁周辺平坦部一部残存。Bは規模不明・深12、Aは22×31・深12である。いずれも表面堅く焼け締まる。	図版24	C期
296	第2床面	中部	14×34・深9、掘形径42・深14	41.2	41.11	41.06	61に掘形北側を切られる。完存。長方形。斜方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。口縁周辺は平坦で固まる。周辺に杭跡が残存。表面堅く焼け締まる。スラグ付着。	図版24	C期
302	第2床面	西部	規模不明、掘形(40)×50・深不明	41.16	計測不可	計測不可	64に北側を切られる。底部一部残存。長方形。東西方向。側面・底面は不明。表面焼け締まる。		C期

遺構番号	検出床面	位置	規模	掘形残存上端標高	型底標高	掘形底標高	形態の特徴	備考	時期
411	第2床面	西部	不明	41.17	計測不可	計測不可	559の掘形東側を切る。底部一部残存。平面形は長方形と推定。南北方向か。側面・底面は不明。表面焼け締まる。		C期
554	第2床面	中部	11×28・深7、掘形規模不明	41.14	41.07	計測不可	下半部残存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。表面堅く焼け締まる。		C期
555	第2床面	中部	14×(30)・深5、掘形33×(41)・深7	41.15	41.1	41.08	攪乱に南半を切られる。北半部残存。長方形。南北方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。表面堅く焼け締まる。周辺に杭跡が残存。		C期
559	第2床面	西部	不明	41.17	計測不可	計測不可	304に西半、411に東半を切られる。底部一部残存。平面形は長方形と推定。南北方向。側面・底面は不明。表面焼け締まる。		C期
576	第2床面	中部	13×27・深8、掘形27×36・深11	41.15	41.07	41.04	底部残存。長方形。斜方向。側面不明、底面平坦。表面堅く焼け締まる。	図版24	C期
577	第2床面	中部	10×23・深1、掘形11×30・深4	41.15	41.14	41.11	底部残存。長方形。東西方向。側面不明、底面平坦。表面堅く焼け締まる。からみ残る。	図版24	C期
649	第2床面	西部	13×21・深7、掘形規模不明	41.04	40.95	計測不可	下半部残存。長方形。斜方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。表面堅く焼け締まる。		C期
2271	第2床面	東部	(12)×29・深19、掘形規模不明	41.08	40.89	計測不可	2272に切られる。北半部残存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。表面堅く焼け締まる。		C期
2272	第2床面	東部	13×40・深18、掘形規模不明	41.08	40.9	計測不可	2271を切る。ほぼ完存。長方形。東西方向。側面ほぼ直に立ち上がり、底面平坦。表面堅く焼け締まる。		C期
2304	第2床面	東部	(13)×38・深9、掘形42×(60)・深18	41	40.91	40.82	底部残存。長方形。側面不明、底面平坦。周辺に杭跡が残存。表面堅く焼け締まる。		C期
2319	第2床面	東部	25×40・深13、掘形不明・深24	40.91	40.78	40.67	下半部残存。長方形。東西方向。側面は不明、底面は平坦。表面堅く焼け締まる。		C期

凡例：型の規模は、短辺/長辺で表記する。( )内は推定値。深さは、残存最上部と底部の距離、( )内は残存長。単位はcm。

表4 小型円形遺構一覧表

遺構番号	検出床面	位置	規模	形態の特徴	備考	時期
104	第2床面	中部	径51・深41	109の北側を一部切る。ほぼ完存。円形。側面は直に立ち上がり、底面は平坦。周辺に杭跡が残存。壁面下位2ヶ所(南西・北東側)に竹樋が取り付け。南西竹樋は、長さ1.5m確認し、西側は炉103掘形に接する。掘形は、断面U字形(幅15・深25)で、底は西にゆるやかに上る。穴径は7。北東竹樋は、長さ1.7m確認し、東側は攪乱される。掘形は、断面U字形(幅15・深15)で、底は平坦である。中央部分に丸瓦を伏せて置き、ジョイントとする。壁・底部内面は堅く締まるが、焼けていない。	図版23・78	C期
568	第2床面	中部	径53・深30、掘形規模不明	完存。円形。側面は直に立ち上がり、底面は平坦。表面は堅く焼け黒い。埋土中に炭の層が堆積する。		C期
581	第2床面	中部	径45、掘形規模不明	円形。側面は直に立ち上がり、底面は平坦。壁・底部内面は堅く締まる。		C期
2514	第2床面	中部	径46・深24、掘形規模不明	568に南側を切られる。円形。側面は直に立ち上がり、底面は平坦。表面は堅く締まり黒い。埋土中に炭の層が堆積する。		C期

凡例：直径は下半半周以上残存した内側最大径。深さは、残存最上部と底部の距離。単位はcm。  
残存状態は、平面形が全周・半周・一部、断面形が完存・下半・底部。全周完存を完存と略記。

石垣 336 の下、2362 は埧塙垣 2333 の下、2374 は石垣 2245・埧塙垣 589 の下で検出した。2366・2374 の西側は後世の遺構で攪乱される。掘形は直径 0.4～0.6 m の円形で、深さは検出面から 0.3～0.6 m である。底部に大きさ約 0.1 m の石の平坦面を上にして据えるものも 4ヶ所ある。柱が残存した例が 2ヶ所あり、柱直径 0.15 m である。柱の間隔は心々で 1.0～1.1 m である。掘形埋土は黒褐色砂泥で、土師器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埧塙・取瓶・炉壁・金属製品・スラグが出土した。遺物の時期は XI 期中～新段階である。

竪穴 2267 (図版 22) 中部北側で検出した竪穴で、西側は後世の遺構に攪乱される。掘形は、南北 1.6 m・東西 1.7 m の楕円形で、深さは検出面から 1.6 m である。内部施設の内法は、直径 1.75 m の円形である。大きさ 0.2～0.3 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて積む。石組の下には一辺約 0.1 m の角材を四方に置き、内側を杭で止める。埋土は黒褐色泥砂で、土師器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埧塙・炉壁・砥石が出土した。遺物の時期は XI 期中～新段階である。

井戸 2348B (図版 22) 第 3 床面で検出した井戸 2348 の下部にあたる。

炉 843・844・945・949・950 (巻頭図版 3、図版 23・77) 西部で 5ヶ所検出し、中部から東部では確認していない。炉はいずれも北辺から約 1 m 南側で東西方向に並ぶ。炉の間隔は 1～2.5 m で配置される。

#### v) 床面下整地 (図版 17・75)

第 4 床面の下層で整地を検出した。整地の範囲は工房部中部から東部にかけての範囲で、第 2 面で検出した土壌 1377・1378 の上部にあたる。規模は南北 5～5.5 m・東西 17.3 m の長方形で、深さは、北側の深い所で検出面から 0.7～0.8 m、南側の浅い所で検出面から 0.4～0.6 m である。底面は凹凸があり、壁面はなだらかである。このことから、整地の凹みは掘り込んだものではなく、前代の土壌の凹みを利用したと推定できる。

整地埋土は、黒褐色砂泥と黄褐色砂礫層が互層に堆積する。中央部では土嚢列 2426 (図版 22・79) を検出した。土嚢は長辺約 0.6 m・短辺約 0.4 m の長楕円形で厚さ約 0.15 m で、十字に縄を掛ける。土嚢は互い違いに 3 段程度積む。

### (4) 第 2 面の検出遺構 (図版 3・4・66・68)

2 面の遺構は柵列 1321 を境にして北部と南部に分かれる。各遺構は北部・南部に分けて述べる。

#### 1) 北部

井戸 661 (図版 25) 西南側で検出した石組井戸である。掘形は、南北 1.9 m・東西 2.0 m の楕円形である。深さは検出面から 3.0 m である。井戸枠は下部が残り、内径 0.75 m で、大きさ 0.1～0.3 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部中央に径 0.6 m・深さ 0.78 m の凹みがある。枠内埋土は暗褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器が出土した。遺物の時期は VIII 期～IX 期である。

柵列 711 中央で検出した布堀り東西柵列である。検出した長さは約 7.5 m で、北側は土壌 1380 に攪乱され、東側は上面が削平を受ける。溝は A・B の 2 時期に分かれ、711A が埋まった後、北側に幅を広げて 711B が位置するが、後世の攪乱のため残存状態が悪い。

711A 掘形は、断面 U 字形で、幅約 0.7 m ・深さは検出面から 0.4 ～ 0.7 m である。溝底部に大きさ約 0.2 m の石の平坦面を上にして据える。石の間隔は不揃いである。埋土は暗褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・砥石が出土した。遺物の時期は XI 期中～新段階である。中心座標は X=-109,982.2 ・ Y=-21,250 で、西で 2.2 度北へ振れる。

柵列 731 南側で検出した東西柵列である。東端は調査区外へ延びる。柱穴の間隔は約 1.2 m で、掘形直径 0.7 m ・深さは検出面から 0.4 m である。埋土は褐灰色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期は XI 期古～中段階である。中心座標は X=-109,988 ・ Y=-21,256 で、西で約 1.8 度北へ振れる。

土壌 1057 北側で検出した土壌で、部分的に井戸 1316 ・ 1317 ・ 1379 などの攪乱を受ける。掘形は、南北 2.6 m ・東西 8.1 m の長方形で、深さは検出面から 0.7 m で、底部は平坦で壁が直に落ちる。底部東寄りには東西幅 2.2 m ・深さ 0.5 m の凹みがある。埋土は灰黄褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・石臼が出土した。遺物の時期は XI 期古～中段階である。

井戸 1117 (図版 25) 南側で検出した石組井戸である。掘形は、直径 2 m の円形で、深さは検出面から 2.2 m である。井戸枠は下部が残り、内径 1 m で、大きさ 0.1 ～ 0.3 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部を方形に 0.4 m 掘下げ、中央に径 0.55 m ・深さ 0.2 m の円形の凹みがある。枠内埋土は暗灰黄色泥砂で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類・埴埴・金属製品・銭貨が出土した。遺物の時期は XI 期中～新段階である。

竪穴 1126 (図版 26・80) 南側で検出した竪穴で、掘形南西部は井戸 132 に攪乱される。掘形は、南北 1.3 m ・東西 1.65 m の長方形で、深さは検出面から 0.8 m である。内部施設の内法は、南北 0.8 m ・東西 1.2 m の長方形である。大きさ 0.05 ～ 0.15 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて積む。底部中央に、南北 0.45 m ・東西 0.55 m の楕円形の凹みがある。埋土は褐灰色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期は XI 期中～新段階である。

井戸 1195 南西側で検出した井戸で、南西側が後世の攪乱を受ける。掘形は、一辺約 2 m の方形で、深さは検出面から 1.6 m である。井戸枠は残存しない。底部中央に一辺 1.2 m ・深さ 0.5 m の凹みがあり、さらに中央に直径 0.5 m ・深さ 0.19 m の凹みがある。埋土は灰黄褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・須恵器・陶器・輸入陶磁器・白色土器・瓦類・砥石・金属製品が出土した。遺物の時期は IX 期新段階～X 期古段階である。

柵列 1210 南西側で検出した南北柵列である。検出した長さは約 2 m で、北側は後世の遺構に攪乱される。柱穴は 2 基並び、柱穴は直径 0.5 m ・深さは検出面から 0.25 ～ 0.4 m で、いずれも大きさ 0.3 m の石の平坦面を上にして据える。塀の基礎と考えた。柱穴から土師器・瓦器・須恵器・瓦類が出土した。遺物の時期は VI 期中段階である。

井戸 1269 北側で検出した井戸で、井戸 333・738 に攪乱を受ける。掘形は、直径約 2.5 m の円形で、深さは検出面から 2 m である。底部中央に、一辺 0.3 m で 10 角形・深さ 1 m の凹みがあり、木枠の痕跡が部分的に残ることから、井戸枠は木組み 10 角形と推定できる。枠内埋土は暗褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅥ期中～新段階である。

土壙 1297 北側で検出した土壙で、南側は削平を受ける。掘形は、南北 4.2 m ・東西 2 m の長方形で、深さは検出面から 1.2 m で、底部は平坦で壁が直に落ちる。埋土は灰黄褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅥ期である。

井戸 1300(図版 25・80) 北側で検出した井戸で、東側は後世の攪乱を受ける。掘形は、南北 2.2 m ・東西 2 m の長方形で、深さは検出面から 1.3 m である。井戸枠は残存しない。底部中央に、一辺約 1.1 m ・高さ 0.3 m の方形木組み井筒を据える。埋土は灰黄褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・砥石が出土した。遺物の時期はⅤ期中段階～Ⅵ期中段階である。

土壙 1377 北側で検出した土壙で、南東部は土壙 2354 に攪乱を受ける。掘形は、南北 2.5 m ・東西約 14 m の長方形で東側は南に広がり南北幅 4.1 m となり、土壙 1378 と接する。深さは検出面から約 1.1 m で、壁がやや直に落ちる。北壁南壁は土壙 1057 とラインが揃う。埋土は黒褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・炉壁・埴埴・スラグが出土した。遺物の時期はⅪ期中段階である。

土壙 1378 北側で検出した土壙で、東部は土壙 2354 に攪乱を受ける。掘形は、南北 2 m ・東西約 10 m の長方形で、北東部は土壙 1377 と接する。深さは検出面から約 1 m で、壁が直に落ちる。西側は土壙 1377 西側とラインがほぼ揃う。東西ラインは土壙 1083 と揃う。埋土は暗褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅪ期中段階である。

井戸 1379 北側で検出した井戸で、南西側が後世の攪乱を受ける。掘形は、南北 1.35 m ・東西 2.5 m の方形で、深さは検出面から 1.0 m である。井戸枠は残存しない。底部中央に一辺 1 m ・深さ 0.2 m の方形の凹みがあり、さらに中央に一辺 1.05 m ・深さ 0.2 m の凹みがある。埋土は暗褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅦ期古段階～Ⅷ期中段階である。

土壙 1387 中央で検出した土壙で、北西側は後世の攪乱、南側は井戸 226 ・土壙 1200 に攪乱を受ける。掘形は、南北 3.1 m ・東西 2.6 m の楕円形で、深さは検出面から 1.6 m である。埋土は灰褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅥ期中～新段階である。

溝 2391 北東側で検出した素掘り南北溝である。検出した長さは約 5 m で、北側南側共に後世の遺構によって攪乱を受け、東側は調査区外へ延びる。掘形は、断面逆台形で、幅 0.3 m 以上・深さは検出面から 0.45 m である。埋土は暗褐色砂泥で小礫を含み、土師器・陶器が出土した。遺物の時期はⅤ期新段階～Ⅵ期古段階である。位置は、十町の東西半分よりやや東にあたる。

井戸 1811 北側で検出した井戸で、上部は削平を受け、東側は後世の遺構に攪乱される。掘形は、直径 1.5 m の円形で、深さは検出面から 0.9 m である。井戸枠は残存しない。底部中央に、井筒として直径 0.52 m ・高さ 0.64 m の曲物を据える。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、土師器・陶器・

磁器・埴埴が出土した。遺物の時期はXI期中～新段階である。

井戸 1865 (図版 25) 北側で検出した石組井戸で、上部は土壙 1358 に攪乱を受ける。掘形は、一辺 2.7 m の方形で、深さは検出面から約 1.5 m である。井戸枠は最下部が残り、内径 0.8 m、大きさ 0.3 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部中央に、径 0.9 m・深さ 0.4 m の凹みがある。枠内埋土は褐灰色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はVI期新段階～VII期である。

土壙 2300・2465・2479 北東側で検出した土壙で、東側は調査区外へ延びる。掘形は、南北 2.3～2.5 m で、深さは検出面から約 0.5 m である。いずれも西壁のラインが揃い、約 0.7 m 間隔で位置する。埋土はいずれも黒褐色砂泥で小礫を含み、土師器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴 (2300 だけ出土)・砥石・金属製品が出土した。遺物の時期は 2465・2479 がIX期新段階～X期新段階で、2300 がXI期古～新段階である。

土壙 2354 北東側で検出した土壙で、土壙 1377・1378 と重複して新しい。掘形は、南北 3.3 m・東西 4.5 m の不定形で、深さは検出面から 0.8 m である。埋土は黒褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類・埴埴・炉壁・砥石・金属製品・木製品が出土した。遺物の時期はXI期中段階である。

土壙 2520 北東側で検出した土壙で、土壙 328 底部東側で検出した。掘形は、南北約 5 m・東西 7 m の不定形で、深さは検出面から 0.9 m である。埋土は、黒褐色砂泥で灰炭を多量に含み、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・輪羽口・炉壁・砥石・スラグ・木製品が出土した。遺物の時期はXI期中段階である。土壙 2354 と埋土や遺物の出土状況が同一なことから、同一性格の廃棄土壙と考えられる。

## 2) 南部

井戸 529 (図版 13) 南側で検出した石組井戸で、北側は井戸 497 に攪乱される。掘形は、直径 1.9 m の円形で、深さは検出面から 2 m である。井戸枠は内径約 0.8 m で、大きさ 0.1～0.3 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。底部中央に径 0.7 m・深さ 0.4 m の凹みがある。枠内埋土は、褐灰色砂泥で炭焼土を含み、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はX期古～中段階である。

竪穴 542 (図版 26・81) 西側で検出した竪穴で、北部は井戸 378・189 に、東側上面は土壙 556 などに攪乱される。掘形は、南北 11 m・東西 6 m の長方形で、南側に幅 3 m で 2.1 m、東側に幅 4.5 m で 1.5 m 張り出す。深さは検出面から 2.2 m である。

内部施設は、石積みが西側中央に 4 段、東側中央に 3 段残り、他は 1～2 段残存した。内法は、東西 3.5 m・南北 8.4 m の長方形で、南壁東側に幅 1.3 m・奥行き 3 m の階段、東壁中央部に幅 1.9 m・奥行き 3.1 m の階段が取り付く。西壁・北壁・東壁は、大きさ 0.2～0.5 m 大の自然石と切石を、小口面を内側に向けて積む。南壁は残存しない。西壁の石組の下には一辺約 0.1 m の角材を据える。

西壁中央階段は、初段の南側に高さ 9.5 m・幅 0.65 m・奥行 0.6 m の切石を立てて据え、北側の抜き取り穴にも同規模の切石を据えたと推定できる。階段面は 1 段残存し、大きさ 0.4～0.7

m大の自然石を、平坦面を上に向けて据える。階段南側は大きさ0.2～0.8 m大の自然石を、小口面を内側に向けて積む。南壁階段は、階段面が1段残存し、大きさ0.4～0.6 m大の自然石を、平坦面を上に向けて据える。階段西側は大きさ0.2～0.5 m大の自然石を、小口面を内側に向けて積む。

底面に施設は見られないが、北壁から5.6 mの地点に南向き石垣が1段据えられる。石垣は、大きさ0.2～0.5 m大の自然石を、小口面を南側に向けて積み、裏込めに多数の河原石を入れる。枠内埋土は褐灰色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦類・埴埴・砥石・金属製品が出土した。遺物の時期はXI期古～新段階である。

井戸 615 (図版 25・80) 北側で検出した石組井戸である。掘形は、直径1.8 mの円形で、深さは検出面から2.1 mである。井戸枠は内径0.9 mで、下部が残り、大きさ0.1～0.2 m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積む。内径は0.9 mである。底部中央に径0.55 m・深さ0.18 mの凹みがある。枠内埋土は暗褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はVI期である。

溝 745 (図版 82) 南端で検出した素掘り東西溝で、数ヶ所後世の遺構に攪乱され、東西両側は調査区外へ延びる。掘形は、断面逆台形で、幅1.75 m・深さは検出面から0.9 mである。埋土は2層に分かれ、上層は暗褐色砂泥で小礫を含み、下層は黒褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類・鞆羽口が出土した。遺物の時期はVII期～IX期新段階である。なお、中心座標はX=-110,030.52、Y=-21,274である。位置は、三条坊門小路北築地にあたる。

竪穴 804 中央で検出した竪穴で、南部は後世の遺構に攪乱される。掘形は、南北2.8 m・東西4.1 mの長方形で、深さは検出面から約1.6 mである。内部施設は残存しない。底部中央に幅約1 m・長さ2.5 m・深さ0.3 mの凹みがあり、中央部はさらに0.2 m凹む。埋土は黒褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はV期新段階～VI期中段階である。

溝 810 東側で検出した素掘り南北溝で、北側は後世の遺構に攪乱され、南側は調査区外へ延びる。掘形は、浅いU字形で、幅1.1 m・深さは検出面から0.15 mである。埋土は暗褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はVI期中～新段階である。

溝 907A・B 北側で検出した素掘り南北溝で、北側は土壌 276、南側は後世の遺構に攪乱される。溝はA・Bの2時期に分かれ、907Aが埋まった後、東側に幅を広げて907Bが造られる。907Aの掘形は、断面U字形で、幅約1.5 m・深さは907B底面から0.6 mである。埋土は黒褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。なお、中心座標はX=-119,999.52、Y=-21,255.55である。907Bの掘形は、断面逆台形で、幅1.7～2 mで北側は狭くなる。深さは検出面から0.4 mである。埋土は灰褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。なお、中心座標はX=-119,999.52、Y=-21,255.4である。遺物の時期はいずれもVI期中段階～VII期新段階である。

柵列 1209 (図版 28・81) 西側で検出した南北柵である。検出した長さは約8 mで、北側は後世の遺構、南側は竪穴 542 に攪乱される。柱穴の間隔は約0.9～1.1 mで、柱穴相互の間隔から

北部中ほどに2基の柱穴があったと推定できる。柱穴は直径0.3～0.6 m・深さは検出面から0.2～0.35 mで、いずれも大きさ0.2～0.35 mの石の平坦面を上にして据える。塀の基礎と考えた。柱穴掘形から土師器などが出土した。遺物の時期は不明である。

柵列1321A・B(図版27・81)北側で検出した東西布堀り柵列で、東側上部は石垣149によって攪乱を受ける。西端は調査区外へ延びる。溝はA・Bの2時期に分かれ、1321Bが埋まった後、同位置で上部に1321Aがつくられる。1321Aは東端が調査区外へ延び、西端はY=-21,266付近で止まるが、1321Bは東西両端が調査区外へ延びる。

1321Aの掘形は、断面逆台形で、幅約0.6 m・深さは中央部で検出面から0.6 mで、西に浅くなる。溝底部で柱列を検出した。柱穴の間隔は約0.8～1.2 mで、掘形は直径約0.4 m・深さは検出面から約0.2 mで、いずれも大きさ約0.2 mの石の平坦面を上にして据える。溝埋土は灰黄褐色粘質土で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。時期はIX期である。なお、中心座標はAと同様である。

1321Bの掘形は、断面U字形で、幅約0.7 m・深さは1321B底面から0.3 mである。溝底部で柱列を検出した。柱穴の間隔は約0.9～1 mで、掘形は直径0.4 m・深さは検出面から0.2 mで、いずれも大きさ約0.2 mの石の平坦面を上にして据える。石の下に小石を根石として据えるものもある。溝埋土は褐灰色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器が出土した。時期はVII期～VIII期である。中心座標はX=-109,994.3、Y=-21,260で、西で2.3度北へ振れる。

## (5) 第3面の検出遺構(図版5・6・66・69)

3面の遺構は、溝1862を境にして北部と南部に分かれる。各遺構は北部・南部に分けて述べる。

### 1) 北部

井戸1316 北側で検出した井戸で、上面が後世の削平を受ける。掘形は、一辺1.9 mの方形で、深さは検出面から1.2 mである。井戸枠は残存しない。底部中央に一辺1.3 m・深さ0.35 mの凹みがあり、さらに中央に直径0.55 m・深さ0.15 mの凹みがある。埋土は灰オリーブ褐色砂泥で、土師器・須恵器・瓦器・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はIV期中～新段階である。

土壇1336 南側で検出した土壇で、南側は土壇1331に攪乱を受ける。掘形は、南北1.3 m・東西1.4 mの長方形で、深さは検出面から2 mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、土師器・須恵器・白色土器・瓦器・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦類・砥石が出土した。遺物の時期はV期古～中段階である。

柵列1479(図版28)南東側で検出した南北布堀り柵列で、北側は石垣149に攪乱され、南側は土壇1474などに攪乱される。掘形は、断面逆台形で、幅約0.8 m・深さは検出面から約0.2 mである。掘形底面に直径0.35～0.45 mの柱穴が、約0.7 m間隔で6基並ぶ。柱穴の深さは0.2～0.3 mで、北側4基には一辺0.2～0.3 m大の石の平坦面を上にして据える。塀の基礎と推定

できる。掘形埋土は黒褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器が出土した。時期はⅥ期新段階～Ⅶ期古段階である。なお、礎石の中心座標は X=-109,997.2、Y=-21,249.6 である。位置は、十町のほぼ一行と二行の境にあたる。

柵列 1487 南東側で検出した南北柵列で、北南側は攪乱される。柱穴が約 0.6 m 間隔で並ぶ。柱穴の深さは検出面から 0.2 m である。塀の基礎と推定できる。掘形埋土は褐灰色泥砂で、土師器・瓦器が出土した。時期はⅥ期である。

溝 1510 南西側で検出した素掘り南北溝で、中央部付近は後世の遺構に、南側は竪穴 557 に攪乱される。掘形は、断面逆台形で、幅約 0.4 m・深さは検出面から約 0.2 m である。埋土は黒褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。時期はⅦ期である。なお、中心座標は X=-109,999、Y=-21,268.9 である。

竪穴 1546 (図版 29・83) 南西側で検出した竪穴で、西部は後世の遺構に攪乱される。掘形は、南北 2.8 m・東西 3.2 m の長方形で、深さは検出面から 1.5 m である。内部施設は西側で掘形壁面に沿って石組み 1 段が残り、内法は不明である。大きさ 0.1～0.15 m 大の自然石を、小口面を内側に向けて積む。底部に大きさ 0.05～0.15 m 大の河原石を敷き、2 層に敷く部分も見られる。埋土は黒褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅧ期である。

柵列 1562 南東側で検出した南北柵列で、北南側は攪乱される。柱穴が約 0.6 m 間隔で並ぶ。柱穴の深さは検出面から 0.2 m である。塀の基礎と推定できる。掘形埋土はオリーブ褐色泥砂で、土師器・瓦器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。時期はⅥ期である。

井戸 1783 (図版 28・83) 南西側で検出した石組井戸である。掘形は、南北 1.5 m・東西 1.4 m の楕円形で、深さは検出面から約 2.8 m である。井戸枠は最下部が残り、内径約 0.7 m で、大きさ 0.1～0.2 m 大の自然石を、小口面を内側に向けてほぼ垂直に円形に積む。底部中央に、一辺 0.6 m・高さ 0.3 m の木組み方形井筒を据える。枠内埋土はにぶい黄褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器が出土した。遺物の時期はⅥ期である。

柵列 1787 南東側で検出した東西柵列で、西側は 1487 に、東側は 1479 に取り付くと推定できる。柱穴が約 0.6 m 間隔で並ぶ。柱穴の深さは検出面から 0.2 m である。塀の基礎と推定できる。掘形埋土は褐灰色泥砂で、土師器・瓦器が出土した。時期はⅥ期である。

井戸 1798 中央で検出した井戸である。掘形は、直径約 1.7 m の円形で、深さは検出面から 1.6 m である。井戸枠は残存しない。底部中央に直径 0.7 m・深さ 0.4 m の凹みがある。埋土は暗灰色砂泥で、土師器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅤ期新段階である。

井戸 1803 中央で検出した井戸で、北側は削平を受ける。掘形は、南北 2.5 m・東西 2.8 m の不定形で、深さは検出面から約 1.8 m である。井戸枠は残存しないが、底部中央に一辺 0.8 m の横棧木が 1 段残存し、方形縦板横棧組と推定できる。横棧木は、両端に凹凸柄を作り、組み合わせる目違い柄組みで、長さ約 0.8 m・幅 0.04 m・厚さ 0.03 m である。埋土は灰褐色砂泥で礫を多く含み、土師器・須恵器・白色土器・輸入陶磁器が出土した。遺物の時期はⅤ期中段階～Ⅵ期

中段階である。

土壙 2462 北東側で検出した土壙で、東側は後世の遺構に、西側は土壙 2475 に攪乱を受ける。掘形は、南北 3.1 m・東西 2 mの楕円形で、深さは検出面から 0.3 mである。埋土は暗灰黄色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類・砥石が出土した。遺物の時期はV期新段階～VI期古段階である。

## 2) 南部

井戸 368 南側で検出した井戸で、南側は井戸 10 に、北西側は後世の攪乱を受ける。掘形は、直径約 2 mの円形に復元でき、深さは検出面から約 0.9 mである。井戸枠は残存しない。底部中央に、一辺 0.8 m・高さ 0.3 mの木組みの井筒を据える。埋土は灰褐色砂泥で炭を含み、土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。遺物の時期はVI期である。

井戸 597 南西側で検出した井戸である。掘形は、直径約 1.7 mの円形で、深さは検出面から 0.7 mである。井戸枠は残存しない。底部中央に直径 0.7 m・深さ 0.2 mの凹みがある。埋土は灰黄褐色砂泥で小礫を含み、土師器・須恵器・灰釉陶器・白色土器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はV期古～中段階である。

井戸 598 南西側で検出した井戸である。掘形は、南北 1.9 m・東西 1.7 mの長方形である。深さは検出面から 2 mである。井戸枠は残存しない。底部中央に直径 0.6 m・深さ 0.3 mの凹みがある。埋土はにぶい黄褐色砂泥で小礫を含み、土師器・須恵器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はIV期中～新段階である。

溝 1047 南側で検出した素掘り東西溝で、数ヶ所後世の遺構に攪乱を受け、西両側は調査区外へ延びる。掘形は、断面逆台形で、幅 0.8 m・深さは検出面から 0.8 mである。埋土は 2 層に分かれ、上層は黄褐色砂泥で小礫を含み、下層は暗褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はVI期である。なお、中心座標は X=-110,0292、Y=-21,274 である。位置は、三条坊門小路北築地内溝推定位置にあたる。

井戸 1415(図版 28・82) 北側で検出した石組井戸で、南西側が後世の遺構に攪乱される。掘形は、直径約 1.8 mの円形に復元でき、深さは検出面から 2.1 mである。井戸枠は内径約 0.95 mで、大きさ 0.1～0.2 m大の自然石を、小口面を内側に向けてほぼ垂直に円形に積む。底部中央に、径 0.5 m・深さ 0.4 mの凹みがある。枠内埋土はにぶい黄褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はXI期新段階である。

井戸 1418 北側で検出した石組井戸で、南西側が後世の遺構に攪乱される。掘形は、直径約 2.2 mの円形に復元でき、深さは検出面から 1.9 mである。井戸枠は内径約 1 mで、大きさ 0.1～0.3 m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積み、上部はわずかに広がる。枠内埋土はにぶい黄褐色砂泥で砂礫を含み、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類・砥石が出土した。遺物の時期はV期新段階～VI期古段階である。

井戸 1445(図版 29) 北側で検出した石組井戸で、南東側が土壙 1784 に攪乱される。掘形は、

南北 1.7 m・東西 1.9 mの楕円形で、深さは検出面から 2.2 mである。井戸枠は内径約 1.1 mで、大きさ 0.1～0.2 m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積み、上部はわずかに広がる。枠内埋土は暗褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅨ期中段階である。

井戸 1482 (図版 28・82) 南東側で検出した石組井戸で、上面が土壙 1481 に攪乱を受ける。掘形は、直径約 1.6 mの円形に復元でき、深さは検出面から 1.7 mである。井戸枠は内径約 0.9 mで、大きさ 0.1～0.3 m大の自然石を、小口面を内側に向けてほぼ垂直に円形に積む。底部中央に、径 1.5 m・深さ 0.5 mの凹みがあり、底部に大きさ 0.05～0.1 m大の河原石を敷く。枠内埋土は黒褐色泥砂で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類・砥石が出土した。遺物の時期はⅤ期新段階～Ⅵ期中段階である。

井戸 1507 (図版 28・82) 南側で検出した石組井戸で、上面が後世の遺構に攪乱される。掘形は、直径約 1.8 mの円形に復元でき、深さは検出面から約 1.5 mである。井戸枠は上部内径約 0.9 mで、大きさ 0.1～0.3 m大の自然石を、小口面を内側に向けて円形に積み、内面中部がやや広がる。掘形には同じ位の大きさの河原石が多量に含まれる。底部中央に、一辺 0.8 m・深さ 0.45 mの凹みがあり、木枠の痕跡が部分的に残ることから、木組み方形井筒を据えたと推定できる。枠内埋土はにぶい黄褐色砂泥で小礫を含み、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅦ期中段階である。

竪穴 1548 (図版 29・83) 北西側で検出した竪穴で、南側は後世の遺構に攪乱される。掘形は、南北 2.2 m・東西 2.8 mの長方形で、深さは検出面から 1.2 mである。内部施設の内法は、大きさ 0.1～0.2 m大の自然石を、小口面を内側に向けてほぼ垂直に方形に積む。内法は、一辺 1.3 mの正方形である。壁面沿いに、底部から 0.15 m上まで幅 0.2 mの板を貼る。埋土はオリーブ褐色砂泥で、土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はⅥ期新段階～Ⅶ期古段階である。

溝 1550 北西側で検出した素掘り南北溝で、北側は井戸 406 に、南側は土壙 556 に攪乱される。掘形は、断面逆台形で、幅 1～1.2 m・深さは検出面から 0.3 mである。埋土は黄褐色泥砂で、土師器・須恵器などが出土した。時期はⅤ期である。なお、中心座標は X=-110,004、Y=-21,265.7 である。

井戸 1801 中央で検出した井戸で、上部は竪穴 542 に大きく削平を受け、底部のみ残存した。掘形は、一辺 1.5 m程度の方形に復元でき、深さは検出面から 0.2 mである。井戸枠は残存しないが、底部中央に一辺 0.6 mの横棧木が 1 段残存し、井戸枠は方形縦板横棧組と推定できる。横棧木は両端に凹凸柄を作り、組み合わせる目違い柄組みである。埋土は暗褐色泥砂で、土師器などが出土した。遺物の時期はⅦ期である。

#### (6) 第 4 面の検出遺構 (図版 7・8・67)

溝 1500・1825・1859・1860 中央で検出した素掘りの南北溝群で、南北両側は後世の遺構に攪乱される。掘形は、断面浅い U 字形で、幅 0.3～0.5 m・深さは検出面から 0.1～0.2 mである。間隔は 0.3～1 m と不揃いである。埋土は褐灰色砂泥で、土師器・須恵器などが出土した。遺物

の時期はV期である。

土壙 1549 中央西側で検出した土壙である。掘形は、南北 2.2 m・東西 2 mの楕円形で、深さは検出面から 1.8 mである。埋土は暗灰黄色泥砂で、土師器甕・須恵器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。遺物の時期はIV期新段階～V期古段階期である。

土壙 1815 北側で検出した土壙で、上部は削平を受ける。掘形は、南北 1.7 m・東西 2.1 m以上の不定形で、深さは検出面から 0.7 mである。埋土は、にぶい黄褐色泥砂で小礫を含み、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦類が出土した。遺物の時期はIII期古段階である。

井戸 1888 南側で検出した井戸である。掘形は南北 1.5 m・東西 1.7 mの不定形で、深さは検出面から 1.8 mである。井戸枠は最下部の一部が残り、内径約 0.8 mと復元でき、大きさ 0.15～0.2 mの自然石を使用する。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器が出土した。遺物の時期はIV期古～中段階である。

溝 1914 中央で検出した素掘り東西溝で、東側は溝 907 に攪乱され、中央は井戸 615 に攪乱される。掘形は、断面逆台形で、幅は東側が 1.4 mで、西に狭くなり 0.7 mとなる。深さは検出面から約 0.3 mである。埋土は灰黄褐色砂泥で炭を多く含み、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦類が出土した。時期はII期である。なお、中心座標は X=-109,999、Y=-21,257 である。位置は、六門と七門の境にほぼあたる。

井戸 2005 北西側で検出した井戸で、北側は調査区外に延びる。掘形は、南北 1.5 m・東西 1.4 mの方形で、深さは検出面から 1.5 mである。井戸枠は残存しないが、方形木組みと推定できる。底部中央に直径 0.5 m・深さ 0.3 mの凹みがある。埋土は黄褐色砂礫で、土師器・須恵器などが出土した。遺物の時期はV期古～中段階である。

井戸 2033 北側で検出した井戸である。掘形は、南北 1.1 m以上・東西 1.5 mの方形で、深さは検出面から 1.6 mである。井戸枠は残存しないが、方形木組みと推定できる。底部中央に直径 0.7 m・深さ 0.3 mの凹みがある。埋土は黄褐色砂泥で、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。遺物の時期はII期～III期である。

井戸 2052 北西側で検出した井戸で、上面は削平を受け、北側は調査区外に延びる。掘形は、南北 1.7 m・東西 1.5 mの方形で、深さは検出面から 1.6 mである。井戸枠は残存しないが、方形木組みと推定できる。底部中央に一辺 1 m・深さ 0.3 mの凹みがある。埋土は灰黄褐色砂泥で、土師器・須恵器・白色土器・輸入陶磁器が出土した。遺物の時期はIV期新段階～V期中段階である。

井戸 2498 (図版 29・83) 北東側で検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形は、直径 1.5 mの円形で、深さは検出面から 0.9 mである。井戸枠は、内法一辺 0.6 m、残存長は下端から 0.68 mである。縦板は各面 4 枚で、横棧木は最下段が残存した。縦板は内側のものが幅約 0.15 mである。底部中央に井筒として径 0.5 m・高さ 0.24 mの曲物を据える。枠内埋土は黄褐色粘質土で、土師器・白色土器・緑釉陶器が出土した。遺物の時期はIV期中～新段階である。

## (7) 第5面の検出遺構 (図版9・10・67)

流路 2053 北西側で検出した北東から南西方向の流路で、西側は調査区外へ延びる。掘形は、幅約4m・深さは検出面から0.1～0.3mである。東端と西端では底部の高低差がほとんどない。埋土は黄褐色砂泥で、土師器甕・高杯などが出土した。遺物の時期は古墳時代(庄内式併行期～布留式併行期)である。

流路 2054 北西側で検出した北東から南西方向の流路で、東側は後世の遺構に攪乱され、西側は調査区外へ延びる。南側は流路2055と接する。掘形は、幅10m前後・深さは検出面から約0.4mで、底部はかなり凹凸があり、西側にはやや深い凹み(約0.2m)がある。底部の高低差は、東端に比べ西端では0.1m下がる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、弥生土器・土師器などが出土した。遺物の時期は弥生時代(畿内第V様式)から古墳時代(庄内式併行期)である。

流路 2055 中央から南側で検出した北東から南西方向の流路で、西側は後世の遺構に攪乱され、東側は調査区外へ延びる。北側は流路2054と接し、南側は流路2056と接する。掘形は、幅6～12mと一定せず、深さは検出面から約0.3mで、底部はかなり凹凸がある。東端と西端では底部の高低差がほとんどない。埋土は灰黄褐色砂泥で礫を多量に含み、弥生土器・土師器小片などが出土した。遺物の時期は弥生時代(畿内第V様式)から古墳時代(庄内式併行期)である。

流路 2056 南側で検出した北東から南西方向の流路で、東西共に調査区外へ延びる。北側は流路2055と接する。掘形は、幅5～12mと一定せず、深さは検出面から約0.5mで、底部にかなりの凹凸がある。中央部や南端部に、凹み(約0.2m)がある。底部の高低差は、東端に比べ西端では0.2m下がる。埋土は明黄褐色砂泥で、弥生土器などが出土した。遺物の時期は弥生時代(畿内第IV様式後半～V様式前半)である。

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要

弥生時代から近代にわたる各時代の遺物が出土した。

調査では1・2区合わせて、整理箱に約1386箱の遺物が出土した。出土遺物の内容は、土器陶磁器類・瓦類・土製品・木製品・金属製品・骨角製品・ガラス製品・石製品・動植物遺体などの種類がある。遺物のほとんどが土器類で、次に瓦類・土製品で、他の種類の遺物は少ない。遺物の時期は、江戸時代に属する遺物が7～8割を占め、他の時期のものは少ない。

弥生時代から古墳時代の遺物は、流路2053・2056などから弥生土器・土師器が少量出土した。弥生時代中期後半(IV様式後半)から古墳時代前期(庄内式併行期)の土器類である。高杯・器台・壺・甕などの器種がある。器壁表面の磨滅が激しいものもあり、上流から流れてきたとみられる。

平安時代の遺物は、柱穴・土壇・井戸・溝などから出土した。土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器などの土器類と、瓦類・石製品がある。土師器の器形には、杯・皿・椀・高杯・

鉢・甕などがあり、黒色土器には、杯と甕が出土した。須恵器は、杯・壺・甕などがある。緑釉陶器と灰釉陶器には、椀・皿・杯・壺などがある。

鎌倉時代から室町時代の遺物は、井戸・竪穴・土壇・溝・柱穴などから出土した。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などの土器類と、瓦類・木製品・石製品がある。

桃山時代から江戸時代初頭の遺物は、井戸・竪穴・土壇・溝・柱穴などから出土した。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などの土器類と、瓦類・金属製品・木製品・石製品がある。

江戸時代前期から後期の遺物は、井戸・竪穴・石垣・土壇・溝・柱穴などから出土した。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器などの土器類と、瓦類・金属製品・木製品・石製品・骨角製品がある。特に今回の調査では木製品の出土量が多い。注目すべき遺物には、多量の埴塼をはじめとする金属生産に関係するものがある。また、当地域で陶器生産が行われていたことを示す陶器未製品や窯道具などがある。

以下、今回出土した遺物は膨大であり、各時期毎に取り上げて報告することが困難なため、土器類ではまとめて出土した土壇 328 出土遺物を紹介することとした。他の種類の遺物は、概要を述べると共に主要なものを報告する。なお、個々の遺物の詳細については巻末の遺物観察表（付表 1～8）に掲載した。

## （2）土壇 328 出土土器・陶磁器類（図版 30～41・84～87、付表 1）

ここでは、江戸時代前期の廃棄土壇 328 からまとめて出土した遺物を記述する。土壇 328 出土土器類には、土師器・瓦器・磁器・施釉陶器・軟質施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器などがあり、土師器皿が半数以上を占める。

表 5 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～古墳時代	弥生土器、土師器	6箱		2箱	4箱
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品	6箱	瓦25点	1箱	4箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、施釉陶器、白色土器、焼締陶器、須恵器系陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、金属製品、骨角製品、石製品	115箱	瓦4点、石製品5点	4箱	110箱
桃山時代 ～江戸時代	土師器、瓦器、施釉陶磁器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、木製品、金属製品、骨角製品、ガラス製品、石製品	1259箱	土師器63点、瓦器7点、焼締陶器24点、国産陶磁器144点、輸入陶磁器29点、瓦3点、土製品86点、木製品96点、金属製品102点、骨角製品32点、ガラス製品10点、石製品23点	36箱	1158箱
合計		1386箱	653点（65箱）	45箱	1276箱

土師器（1～64）（図版 30・31）皿類（1～37）、小型壺類（38～51）、鉢類（52～54）、鍋・釜類（57～60・63・64）、灯火具（61・62）などがある。

皿類は、小型皿・中型皿・大型皿・特大型皿の4種類に分類できる。小型皿 Nr（1～10）は、口縁部は緩やかに屈曲して、内弯気味に開き、浅い。底部内外面・体部口縁部外面はナデ、体部・口縁部内面は横ナデで粗製である。中型皿 Sb（11～18）は、口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部は尖る。底部は丸底で、底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位はナデである。大型皿 Sa（19～32）は、口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部は尖る。底部から口縁部の屈曲部は凹み、圏線が廻る。手法は中型皿と同様である。天盃と呼ばれる口径 17 cm 以上の特大型皿（33・34）もある。形態および手法は、大型皿と同様である。これらの皿類は、いずれも褐色から黄橙色を呈し、胎土には少量の雲母や砂粒を含む。6・9・16・17・19 は口縁部の内外面に煤が付着し、灯明皿として使用されたとみられる。

耳皿（35・36）は、口縁部の対面する2ヶ所を内側に曲げる。通常の土師器皿より体部が厚い。

壺類には、焼塩壺と小型壺がある。焼塩壺は、狭口のもの（46・47）と、広口のものがある。広口のは、さらに小型（48・49）と、大型（50・51）に分けられる。すべて輪積みで、口縁部は横ナデである。大型のものには刻印をもつものがあり、銘は二重枠「天下一堺ミなど／藤左衛門<sup>16)</sup>」である。各種には、それぞれ蓋（40～45）が付く。38・39 は小型壺である。56 は火消壺の蓋である。

丸底の鉢は小型の 52 と大型の 53 があり、「でんぼ」と称される。胎土は白い。55 は火入れとみられ、外面をみがく。底部付近に低い足が3ヶ所に付く。

鍋・釜類には、焙烙（57～59）がある。底部の浅い 58 と、深い 59 がある。外面には型作りの痕跡が残り、口縁端部の返りが消失するが、57 は端部に返りがあり古い形態である<sup>17)</sup>。

60 は灰器で、口縁部外面に格子状のタタキ目が施される。63・64 は鏝釜で大・小がある。体部下半に鏝が付き、ハケ目調整である。63 には全体に煤が厚く付着する。62 は灯明具の身で、61 はその蓋である。体部には透かしが入る。

瓦器（65～70）（図版 31）鉢類・壺などがある。65 は香炉で、外面上部にスタンプで施文する。66・70 は壺である。67 は炉で、上部に数ヶ所に削り込みがある。68 は鉢である。69 は火消壺である。体部は底部から直立し、端部は蓋を受ける返りが付き、外面は丁寧にミガキ調整される。

国産磁器（71～123）（図版 31～33・84）肥前系の椀・皿・鉢・壺などがある。

椀には、染付（72～90）、白磁（91～95）、青磁（96・97）、色絵（71）がある。染付椀には、小型（72～81）と大型（82～90）がある。小型のものには、口縁部が外反する端反のものが多い。72 は高台が無釉である。77 の高台内には「三」銘がある。81 は脚が付くもので馬上杯と呼ばれ、漆継ぎがされる。大型のものには、体部が外上方に広がる 83～86 と、直立気味にのびる 82・87・90 がある。また、体部が直立する筒型椀 89 や、天目型の 88 などもある。呉須で絵付けの後、全面に釉を施すものが多い。高台内には圏線や「成化年製」「青徳年製」などの銘がある。白磁椀には、小型（91～93）と大型（94・95）があり、小型のものは端反のものが多い。

91は外面が鎬になる。青磁椀(96・97)は、高台内が無釉である。71は色絵のミニチュア椀である。86の染付椀が、この一群の磁器のなかで一番新しい。

皿・盤には、染付(98～110)、青磁(111・112)がある。染付皿には、直径約9cm・11cm・14cm・21cmの大きさがあり、それぞれ3寸・4寸・5寸・7寸を意識した製品とみられる。100・106・107・112は輪花型、101は八角型である。109は口径に比べ器高が低い。110は外面は無文である。高台内には呉須書き圏線がある。102・107には漆継ぎがされる。108は内面中央に蛇の目釉剥ぎがある。呉須の滲みや、釉調と胎土の特徴からタイ産の可能性もある。青磁盤(111・112)には陰刻で花文が施される。118は内面に梅の枝花を象り貼り付ける装飾皿である。

壺類には、染付(121～123)、白磁(113)、青磁(114)がある。染付壺には、頸部の短い広口の121と頸部の比較的長い122・123がある。青磁壺類には、ミニチュア114がある。外面に青磁釉を厚く施す。白磁壺類には、頸部の細い瓶113がある。

蓋には、染付(120)と青磁(117)がある。117は酒海壺の蓋であり、上面にのみ施釉する。天井部の輪花の表現は退化し、凹線になる。他の器種には、仏飯器・香炉・杯台などがある。

119は染付の仏飯器である。116は青磁の香炉である。体部下半に装飾の足が3ヶ所に付き、輪高台で接地する。全面に施釉し、漆継ぎ跡がある。115は青磁の杯台である。受け皿上面には陰刻花文が施される。

輸入磁器(124～145)(図版33・34・84)中国産と他の産地のものがある。

中国産には、椀・皿・鉢・合子などがある。椀には、青花(124～131)、赤絵(132)がある。青花椀には、小型(124～126)と大型(127～131)があり、小型のものには口縁部が外反する端反型(124)もある。124の高台内には「T」字状の墨書がある。大型の128は文様はなく高台周辺に圏線が入る。127は高台内に圏線と「角福」銘がある。128は見込みの釉を剥ぎ取る粗製のものである。125～127が景德鎮窯系で、他は漳州窯系である。赤絵椀132は見込みに「魁」字があり、高台内は無釉である。漆継ぎがある。漳州窯系の椀の高台には砂粒が多く付着する。皿には、青花(136～140)、赤絵(135)がある。139・140は体部が斜め上方にのび口縁近くで外に大きくひらく。135は赤絵小皿で、高台内には圏線がある。京都市内では出土例が少ない。136は器壁が薄く、呉須の発色も良好である。高台内には「大明萬曆年製」銘がある。複数個体出土した。141・142は鉢で、141は外面に絵付けがない。143は径38cmほどの盤である。145は紫泥の茶銚蓋である。外面には密なミガキを施した宜興窯の製品である。144は青白磁の合子蓋である。16世紀後半のもので、この遺構の中では最も古いものである。

133・134は、ベトナム産の染付椀である。133は体部が外方に直線的に開く。134は見込みの釉を剥ぎ取る粗製のものである。絵付けは呉須がにじむ。133は2個体、134は5個体が出土した。

国産施釉陶器(146～179・182～224)(図版35～38・85) 椀・皿・鉢・壺蓋などがあり、肥前系、瀬戸・美濃系、京都などの各産地の製品がある。

146～157は肥前系の椀である。小型の146は底部が糸切りである。146～148・151・153は灰釉。149・157は鉄釉、152は銅緑釉である。150は銅緑釉に藁灰釉を流し掛ける。155は鉄釉に藁灰釉を流し掛ける。154・156は刷毛目椀である。158～165は瀬戸・美濃系の椀である。小型の158は底部が糸切りである。160は碁笥底風で口縁部付近で外側に大きく広がる体部である。162・163は天目椀である。164は貼り付け高台である。165は瀬戸黒椀である。166～178は京焼の椀である。166・167は灰釉、168・171・174～178は銹絵染付、169は金彩色絵である。170は呉須を刷毛で塗り分けている。167は筒形、170は天目形である。172～178は平椀である。体部内面に部分的に銹絵染付などの文様を描く。175～178は乾燥前に口縁部を外側から押してゆがみをつけている。172・173は文様部分が欠損しているとみられる。見込みには3つの小さな目跡が残る。高台内の刻印は、168・170・173が「清」銘、172・176「清閑寺」銘、174・177「京」銘、169「音羽」銘、175「岩倉」銘、178「寶」銘がある。179は陶胎染付である。貼り付け高台で、外面全体に呉須で山水楼閣文を描く。肥前系の可能性が高い。

182～186は肥前系の皿である。灰釉掛けで、高台付近が無釉のものが多い。191～202は瀬戸・美濃系の皿である。191・192・194は灰釉、193・197～199は長石釉、196は長石釉鉄絵、200～202は織部釉で、201は総織部である。200は碁笥底である。202は大型の盤状である。

他の器種には鉢・向付・香炉・壺・蓋類などがある。203・212～218は瀬戸・美濃系である。203は黄瀬戸の鉢である。216・217は織部で216は筒形向付、217・218は内面が無釉で火入れとみられる。217は横耳が欠損した跡がある。218は鉄釉香炉である。212～215は蓋である。212は総織部。213は志野織部。214・215は灰釉を掛け流す美濃伊賀である。187～189・204～211・219～222は肥前系である。187～189は向付である。見込みに鉄絵を描く。204・208は灰釉盤。205～207は鉄絵鉢である。205は内外面に文様を密に施す。209は刷毛目、210は緑褐釉の平鉢である。219は鉄釉の櫛目文鉢。220は灰釉の片口鉢。221は藁灰釉。222は三島手の印花文双耳水指である。190は内面のみ施釉する鉢である。211は鉄釉の蓋である。224は京焼の銹絵染付の瓢箪型水滴である。置物の可能性もある。

輸入施釉陶器（227～229）（図版38）タイ、朝鮮産などのものがある。

227はタイ産の染付椀で、呉須がにじむ。

228・229は朝鮮産である。228は椀底部で、全面に藁灰釉を厚く施す。229は象嵌皿である。図示していないが、他には中国産の壺類が出土した。

軟質施釉陶器（180・181・225・226）（図版35・38・86）180・181は筒形の椀である。共に外面に白土で化粧し、透明釉を施した後に、緑釉を掛け流す。内面は鉄釉を施す。181はロクロ成形である。180は内面に横方向のケズリが見られることから、非ロクロ成形と推定できる。225は白色の胎土で赤色土で化粧し、透明釉を施す。合子の蓋と推定できる。226は内面に印刻文が施された台付皿である。内外面に白土で化粧し、内外面に透明釉を施した後に、文様部に緑釉を掛け流す。

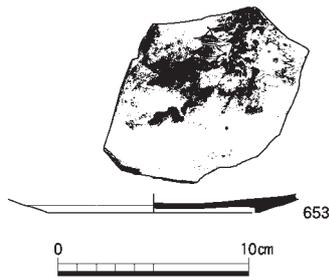


図6 陶器未製品実測図（1：4）

陶器未製品（230～238・653）（図版38・86、図6）未施釉状態の未製品（半製品）と推定できる製品が出土した。椀（230～232）は、内外面に白土の化粧が認められるが、未施釉である。231の高台内には「岩倉」銘の刻印がある。これらは、高火度焼成陶器の未製品と考えられる。653は皿の素地である。碁笥底。内面底部には濃淡をつけた非常に細やかな山水楼閣が墨描きされる。釉下彩の下絵である。

233～238は、軟質施釉陶器の未製品である。233・234は茶入である。233は上半部で口縁部を欠く。234は下半部である。底部の糸切り痕は右まわりである。共に、外面に赤色土で化粧を施す。235は灯明皿の蓋である。白い胎土に赤色土で化粧を施す。236・237は灯明皿である。施釉前の状態である。238は外面に布目が残ることから型成形と推定できる。内外面共に白土で化粧を施し、内面に山水文、外面に波頭文が墨で描かれる。内面の下描き線の上には、色絵具が施される。大形の船形鉢と推定できる。

国産焼締陶器（239～255・260～266）（図版39・41・86）鉢類・盤・壺・甕などがあり、丹波、備前、信楽、唐津の各産地のものがある。

鉢（239～244・248）は丹波産である。240・241は縦方向の耳が付き、やや大型の244は横方向の耳が付く。248は体部が直線的に立ち上がる。239は丸い体部で、口縁は玉縁である。鉢（246・247）は備前産で、246は体部に数条の凹線が付く。鉢（245）は体部が直立する鉢で、底部は糸切り、低い円柱状の足が3ヶ所に付く。褐色の胎土で、全面に鉄泥を施す。産地は特定できない。

盤（251・252）は丹波産である。盤（253・254）は備前産である。253・254共に底部および体部下半はケズリを施す。

他には壺・甕類がある。249・255は丹波産である。249は小型壺で内面に鉄分が多量に付着することから、お歯黒壺とみられる。255は甕である。外面は縦方向のハケ目調整で仕上げる。

播鉢（260～266）は各地のものがある。260・261は肥前系である。小型で底部は糸切り痕が残り、摺り目の数は5本である。胎土は赤色系で焼成は軟質である。262～264は丹波産である。体部外面には形成時の指押さえ痕が多く残る。265・266は信楽産である。体部外面はロクロナデを施し、口縁端部は带状となる。

輸入焼締陶器（256～259）（図版40・87）256は蓋、257は耳付の広口壺で、南蛮水指と呼ばれる。共に波状文を施し、胎土は細かく緻密である。256の裏面には漆が付着する<sup>18)</sup>。ベトナム産である。258・259は四耳壺である。体部下半は横方向のケズリ、肩部には数条の凹線を施し、横方向の耳を貼る。258は器高約90cm、胴部最大径約85cmである。259には漆が多量に付着する。図示していないが他に数個体の出土がある。タイのメナムノイ窯産である<sup>19)</sup>。

### （3）瓦類（図版42・43・88・89、付表2）

今回出土した瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦のほか、少量の鬼瓦・棟瓦・道具瓦などがある。時期別には、奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代のものがある。なお、近世の瓦は大量に出土したが、主要なものを取り上げた。

平安時代前期・中期の瓦は少量で、井戸 2033 のほか、調査区内の広い範囲で、後世の遺構や遺物包含層から出土した。平安時代後期から鎌倉時代の瓦は、調査区南部の溝 1047 などからやや多く出土した。江戸時代の瓦のほとんどは棧瓦である。

出土した軒瓦の内訳は次の通りである。平安京遷都以前の搬入瓦は軒平瓦が 1 点。平安時代前期の軒丸瓦は 2 点、軒平瓦は 2 点。平安時代中期の軒丸瓦は 4 点、軒平瓦は 13 点。平安時代後期の軒丸瓦は 33 点、軒平瓦は 91 点。鎌倉時代の軒丸瓦は 20 点、軒平瓦は 29 点。室町時代の軒丸瓦は 7 点、軒平瓦は 4 点。江戸時代は 38 点である。

#### (4) 土製品 (巻頭図版 4、図版 44～49・90～95、附表 3)

土製品には玩具・人形類の他に金属生産関係のものがある。金属生産関係のものには埴塙・取瓶・蓋・鞆の羽口・炉壁・鋳型類などがある。他に窯道具なども出土した。土壙 328 から出土したものが多くを占める。以下、主要なものについて述べる。

玩具・人形 (299～306) (図版 44・90) 土鈴 (299・300) は上部に墨で文様を描く。人形頭部 (303) は、喉から口中に穴がつながる。布袋 (304)・馬 (305) とともに合わせ型を使用する。ミニチュアの羽釜 (301)、播鉢 (302) がある。播鉢には摺り目が付く。306 は土師器皿を円形に打ち欠いて成形した、おはじきである。

窯道具 (307～313・377～379) (図版 44・90) 陶器生産に関わる遺物として、トチンと窯体に関連すると推定できる部品がある。環形を呈するトチン (307～309) と、円板形のトチン (310～313) が出土した。円板形のトチンには、墨書された 310 がある。ピン部分には堅く焼きしめる白い土が使われる。環形のトチンには、高台を強く押しつけたために窪みが付く 307 もある。窯体に関連すると推定できる部品には 377～379 がある。377 は円盤状で上面に釉薬が垂れ落ちて付着する。窯体内の棚と推定できる。378 は平坦な底部のみで、体部は失う。外面は面取りで整形される。内面は陶器細片と釉薬が付着する。379 は平坦な底部で、体部は外上方に延びる。内面には釉薬が付着する。

鋳型 (314～322) (図版 44・91) 個々の破片の形状から、馬蹄形の鏡鋳型と推定できる (318～322)。両面又は片面に斜格子状の凹線を刻む。粗土部分のみで、真土は剥離している。315～317 は真土部分で、3層が確認でき、飾り金具の鋳型とみられる。刀子柄の鋳型 (314) が 1 点出土し、型内側にすでに「魚々子彫り」が付けられていることが注目される。

埴塙 (323～337・359～369) (図版 45・46・92・93) 埴塙は、全体の形態から、体部が直口壺状を呈する A 型 (323～328・332～337・359～365・368)、体部が球形を呈し中位に把手を付ける B 型 (329～331・366・367)、椀状の C 型 (369) の 3 種類に分類できる。A 型が大半を占め、B 型が少量あり、C 型はごくわずかである。A 型は大きさにより、大型の A I 型 (323

～328・332～337)、中型のAⅡ型(368)、小型のコップ状を呈するAⅢ型(359～365)に分けられる。さらにA型は口縁部の形態から、口縁端部がやや内傾し、端部を丸く収める直口状のa型(323～326)。口縁端部が受け口状のb型(327・328・332・333)。口縁部をドーム状に塞ぐ砲弾状のc型(334～337)、口縁端部が立ち上がり端部を丸く収める直口状のd型(359～365・368)に分類できる。出土量はa型が圧倒的に多く、b型が少量あり、c型・d型は極わずかである。出土した埴塼には口縁部が欠損した個体が多くあるが、この比率は変わらないとみられる。AⅠ・Ⅱ型の側面には、中央よりやや高い位置に径1.5～2cmの穴を穿つ。この穴は複数開けられる例があるが、1穴を残して他を塞いだものもみられる。AⅠc型の中には、336の様に側面に穴が穿たれないものもある。AⅢ型の359・361・364は注ぎ口が付く。B型は大きさにより、大型のBⅠ型(329～331)、小型のBⅡ型(366・367)に分けられる。口縁部の形態は、いずれも端部がやや内傾する。ほとんどのものに、熔けた金属が付着する。C型は大型のCⅠ型(369)がある。注ぎ口が付くと推定できる。

埴塼台(338～341・370)(図版46・94) 長方体状の形状をする338～341は、埴塼の置き台と推定できる。表面は溶解し、ガラス質が著しく付着するものが多い。埴塼337の底部に同様のものが溶着していたことから、使用法が判明した。370は、やや小型である。

蓋(342～348)(図版47・94) 埴塼用のA型(342)と、炉に被せるB型(345～348)とがある。A型(342)は小型で中央部に穴がある。周縁部には溶着痕があり、径は埴塼AⅠ型の口径とほぼ同じであることから、AⅠ型埴塼蓋と推定できる。B型は大型で丸形(345～348)である。上面が盛り上がる円盤状で、4～7個の穴があく。347の中央には筒状のものが付けられる。348には低い円筒形の足が付く。全て下面は高温でガラス質になる。径は円筒形竪型炉の口径とほぼ同じであることから、炉の蓋と推定できる。角形蓋(343・344)は、長方形または方形で、343は円孔がある。表面は堅く焼け締まり、炉の蓋(屏風)として使用した可能性が高い。

土栓(349)(図版47・94) 349は円錐型を呈する。胎土は蓋のものに似る。先端部に金属成分が付着する。蓋の穴を塞ぐものと推定できる。

取瓶(350～358)(図版47・93) 取瓶は全体の形態から、体部が鉢状を呈するA型(350～357)、体部が皿状を呈するB型(358)の2種類に分類できる。A型が大半を占め、B型は極わずかである。ほとんどのものに熔けた金属が付着する。358は土師器皿の転用と推定できる。

鞆(371～376)(図版48・95) 大小各種の羽口がある。内径15cmの大型(375・376)と、内径10cmの小型のもの(372～374)などがある。器壁が厚いものと比較的薄いものがある。大型で厚いものの内面には、竹の表面とみられる痕跡が残る(376)。炉に取り付く先端部分は熱のため溶解する。塩壺の底部を削り抜いて転用した例(371)もある。

炉壁(380・382～384)(図版48・49・95) 平面形が円形(382・383)と楕円形(384)、さらに馬蹄形(380)のものがある。ともに粘土紐を積み上げて成形する。

#### (5) 木製品(図版50～55・96～99、附表4)

今回の調査では、多種多様な木製品が出土した。ほとんどが廃棄土壌 2354・2520 から出土した。漆器には、椀・皿・蓋・しゃもじなどがある。注目されるものには漆工に関する道具類がある。少数ではあるが、竹・シュロなどの材質のものもある。

漆器類 (385～397・455) (図版 50・53・96) 385 は椀蓋である。外面黒漆内面赤漆で外面に赤漆で丸文を描く。386～392 は椀である。386・387・390・392 は外面黒漆内面赤漆である。389・391・393 は内外面赤漆。388 は内外面黒漆で口縁端部のみ赤漆を施す。389・390・392 は高い高台をもつ。394 は角皿と推定でき、内外面黒漆である。395 は蓋である。内外面黒漆で、裏面に赤漆と青漆で葉文を描く。396 はしゃもじで、内外面黒漆である。397 は鉢で、高台内にわずかに黒漆が確認できる。保存状態が悪いため口縁端部の状態が不明である。455 は漆器蓋で、上面に把手の痕跡がある。黒漆が施され、下面には弧状の溝が巡る。

盤 (398) (図版 50) 大型の盤である。割れた後に、割れの対称位置に小穴が穿たれ、補修した痕跡である。漆は確認できない。

荷札 (399～409) (図版 50・51・97) 板状で上部に切り込みがあり、下端部が平坦なもの、幅が狭くなり尖るものがある。401・402・404・406・407 は全体が残存する。403～405・408 は、片面に文字が記される。403 は「御ちの人さま 御きくさま」、404 は「<sup>(ほカ)</sup>こ本<sup>(助カ)</sup>れ <sup>(吉カ)</sup>初谷 <sup>(宗カ)</sup>新右衛門」、405 は「<sup>(村カ)</sup>□□□<sup>(大カ)</sup>」、408 は「□□」である。406・407・409 は、両面に文字が記される。406 は「六月十一日 疋田村 鯨壺桶 安右衛門・□□□□□ □□や・二郎兵衛殿」、407 は「□□□□<sup>(宗カ)</sup>左衛門 九郎右衛門七ノ割り一分・九月十八日 小□□□□<sup>(屋カ)</sup><sup>(徳カ)</sup><sup>(蔵カ)</sup>」、409 は「□□□□<sup>(合カ)</sup>徳久□□・やや」である。407 は上部を欠く。409 は中央に円孔がある。400～402 は文字は記されていない。399 は薄い板状で、上端に「大坂 わんや」の焼き印がある。同様のものがほかに 1 点ある。

櫛 (410・411) (図版 51) 410・411 は共に挽歯技法による横櫛である。410 は歯の密度が高い梳櫛である。411 は歯の密度が低い解櫛である。

茶筌 (413) (図版 51) 先端の細い部分の内向きの曲がり失われるが、茶筌である。竹製。

へら (414・415・418～420・423) (図版 51・97) 414・415・418・419 はへらである。2 種類に分類できる。414・415 は先端を肥厚させた刃部をもつ。刃部分は尖らせる。418・419 は撥状の形態で、刃先が幅広い。全体が薄く、刃部分は尖らせる。418 の刃部には漆が付着し、漆工に関わる道具である。

しゃもじ (421) (図版 51・97) 飯用のしゃもじである。柄は直線的で、身の先端は半円形を呈する。

柄 (417・422) (図版 51) 417 は片側しかないが、組み合わせ式の柄である。表面には 2 ケ所に責金の痕跡が残る。刃物の柄と見られる。422 は工具の柄とみられる。断面は楕円形を呈し、中莖の打ち込まれた痕跡が残る。

刷毛 (424～428) (図版 51・97) 刷毛の柄である。柄中央で刷毛部分が両側に広がるもの (424～426) と、柄が斜めになり刷毛部分と鋭角をなすもの (427・428) の 2 種類がある。刷毛の幅には各種の規格がある。

人形（429～433）（図版 52・99）人形頭部である。429 は顔の各部分が丁寧に表現され、頭髪を植え込む孔がある。431 は頭部に丸みをもたせて成形する。433 は体部上半まで表現する。

鞘（434）（図版 52）玩具の組み合わせ式の鞘とみられる。表面は粗い削り痕が残る。

独楽（435～437）（図版 52）435 は薄い円盤状で中央部に心棒穴がある。436 は円盤状で厚みがある。心棒の竹籤が残存する。437 は体部側面に切り込みを入れる。

毬（438）（図版 52）毬杖の毬である。一部を欠くが平面形は円形である。上下に面があり平滑にされる。角は丸くなる。

舟（440・441）（図版 52・99）木材を削り抜き、440 は船首に丸みをもたせ、船尾は直線的である。441 は両端を尖らせる。

容器（443）（図版 52）平面形が正方形を呈する削り抜きの容器である。

団扇（446）（図版 52）骨の部分を欠くが団扇の柄部分である。柄の上部に縁を通す穴を穿つ。竹製。

羽子板（447）（図版 52・99）全長 32 cm の羽子板である。1 尺を意図して作られたと推定できる。彩色は確認できない。

柄杓（448）（図版 52）曲物で作られた柄杓の杓部分である。径 12 cm で、4 寸の規格である。

灯明皿台（449・450）（図版 52・99）2 枚の板を十字に組んだ灯明台である。中央の窪みに灯明皿を乗せて使用する。

木栓（451～453）（図版 52・99）樽などの容器の孔に差し込む木栓である。451・452 は差し口が細くなる形態である。453 は直径が太く全長が短い。半球状の頭部が付く。

蓋（454・456）（図版 52・53・96）454 は上面中央に円柱状の摘みの付いた痕跡があり、蓋と推定できる。下面には弧状の溝が付く。漆器蓋 455 と形状が似る。456 は桶の蓋と推定できる。周縁付近に 2ヶ所穴が穿たれ、木栓が付く。内面には漆が付着し、漆容器桶の蓋と推定できる。

曲物（457・458）（図版 53・96）曲物製の容器である。457 は上方からの圧力で潰れる。458 は上端部を欠く。共に内面全体に漆が付着し、漆容器として使用されたと推定できる。

釣瓶（459）（図版 53）逆台形状の箱型を呈する釣瓶である。上部に把手を付ける。把手には綱を付ける穴が開く。

下駄（461～471）（図版 54・55・98）多数の下駄が出土した。大別すると連歯下駄（464～471）と、差歯下駄（461～463）がある。連歯下駄には 470・471 の削り下駄もある。平面形には楕円形と長方形のものがあり、小型のものも含まれる。差歯下駄は露卯下駄と呼ばれる種類である。467 上面には渦巻き文が刻まれる。

折敷（472）（図版 55）隅切り折敷である。隅を落とした方形の底板に側板を付ける。

箸（473～478）（図版 55）473～478 は箸と推定できる。断面円形に近いものが多く、先端部を細くしているものも多い。全面に丁寧な面取りを施す。

箒（479・480）（図版 55）シュロ製の箒先端部である。共に柄は失っている。1～4 cm 幅の単位で 3～4 段にまとめて編む。

## (6) 金属製品 (図版 56～60・100～102、付表 5)

金属製品には装飾品・刀装具・文房具・化粧道具・調理用具・灯明用具・銭貨・容器・生産に  
関係するものなどがある。広範囲の遺構から出土した。銭貨については種類・点数・出土遺構を  
表 6 にまとめた。資料は、金属の成分分析を経っていないので、肉眼観察によるものである。

鈴 (481・482) (図版 56) 鈴の上半 (481) と下半 (482) であるが、径が異なるため同一の  
ものではない。非常に薄い作りである。真鍮製。

飾金具 (483) (図版 56) ドーム状の中央に長方形の穴を穿つ。波文の意匠をもつ。真鍮製。

煙管鐺 (484) (図版 56・102) 鐺付煙管の鐺部分である。5 弁輪花状の中央に穴を穿つ。真鍮製。

襖引手金具 (487) (図版 56) 襖引手の縁部分の金具とみられる。真鍮製。

刀装具 (488～493) (図版 56) 刀に関連する部品が多く出土した。488 は切羽である。楕円  
形の板状金具の中央を刀身断面状に抜く。489 は柄縁である。楕円形箱形の中央を刀身断面状に  
抜く。490 ははばきである。板状金具を断面三角形状に折り曲げ溶接する。491～493 は目貫と  
みられる。各種の意匠があり、煙草入れの前金具の可能性もある。

椀 (494・485) (図版 56・100) 495 は体部は緩やかに外反して立ち上がり、口縁端部も外反  
する。口径は 9.5 cm で、3 寸の製品である。494 は体部は外上方に直線的に立ち上がる。口径 6.3  
cm の小型のものである。

灯芯押え (497・498) (図版 56・100) 細長い板状の金具を円形に曲げ、一端を上方に延ばす  
灯心押さえである。497 は上部を捻って螺旋状とする。

水滴 (499・500) (図版 56・100) 平面形は長方形と円形のものがある。499 は長方形の箱形で、  
中央部に長方形の口頸部がある。500 は円形の中央部に口頸部があり、一端に注口を設ける。

鏡 (501) (図版 56・100) 小型の和鏡である。背面に 2 羽の鶴と 1 匹の亀、三つ亀甲文が表される。

匙 (502～504) (図版 56・100) 大小のものがある。502 は小型の匙である。薄板状で、体部  
は長円形で平坦である。503 は 502 より大きく、受け部はやや窪む。504 は体部が銀杏葉形を呈  
し凹みは無い。柄の端部は紡錘形の装飾が付く。502・504 は香道具の可能性はある。

把手 (506) (図版 57) 板状金具を捻って螺旋状にした後、弧状に曲げた 把手である。端部に  
穴を開ける。

鉤針 (507～514) (図版 57・100) 棹秤の鉤針と推定できる。釣り針状で、先端はほとんどの  
ものが尖る。大きさに各種のものがある。507～510 は断面円形。513・514 は断面長方形の板  
状である。512・514 は元部に円孔を開ける。他は端部を環状に曲げる。

分銅 (515～518) (図版 57・100) 小型の分銅である。形状により大きく 2 種類に分類できる。  
515・516 は直方体の縦中央に円孔を開ける。円孔から外部に切れ目を入れる。517・518 は隅  
丸の直方体の一端に小さな摘みを付ける。摘みは円孔を有する。518 は大型で、側面に刻印があ  
るが、不明である。515 は 13.7 g、516 は 18.7 g、517 は 10.7 g、518 は 48.3 g である。お  
よそ 516 は 5 匁、517 は 3 匁、518 は 13 匁の重さである。

棹秤 (519～521) (図版 57・100) 棹秤の軸部分である。519 の端部には骨製の蓋が付く。521 の端部には骨製の接合部が付く。520 には一方向にのみ目盛りが刻まれる。

簪 (522) (図版 57・100) 薄い板状の簪である。頭部は銀杏形を呈し、ハート形の透かしを入れる。先端は尖る。

火箸 (523) (図版 57) 断面円形の細い棒状の火箸である。上端を還状に曲げる。

棒状製品 (524・525) (図版 57) 断面円形の細い棒 (524) と、断面長方形の棒 (525) である。524 は上部が釘状を呈する。525 は上部に円孔を穿つ。

貝杓子 (527) (図版 57・100) 薄い板をホタテ貝型に成形する。柄部を欠く匙と推定できる。

煙管 (530～563) (図版 58・59・102) 煙管の部品が多数出土した。530～546 は短い雁首である。548～556 は短い吸口である。ともに肩が付くものが古い様式である。551 には[大吉]銘があり、<sup>20)</sup>556 には文様が施される。547 は一体型と推定できる。557・558・559・560 は接合型と推定できる。561・562・563 は同一のものと推定できる。真鍮製。

おろし金 (564) (図版 59) 大半を欠くが、塵取り形のおろし金である。体部には横方向に粗い爪刺が付けられる。銅製。

提瓶 (565・566) (図版 59) 566 は提瓶である。底部には低い輪高台が付く。体部は斜め上方にのび、口縁部端部両側に板状の把手が付く。体部上端に注口部がある。565 はその蓋である。円形で下面の端部付近に返りがある。上面中央には小さな丸いつまみが付く。

蓋 (567) (図版 59) 円形蓋で、薄い板で成形し、端部が下方に曲げられる。板状の摘みが上面中央に溶接される。

五徳 (568) (図版 59) 環状をなす底部の上方に、3本の腕を溶接する五徳である。鉄製。

鍋 (569) (図版 59・101) 円形鍋で、底部・体部は非常に薄い。受け口状の口縁付近に、鋳で把手をとめた痕跡がある。銅製。

台付鉢 (570) (図版 60・101) 円形鉢で、高い高台が付く。高台内に木製の板を十字に組み入れる。口縁端部は外側に水平に開く。二方に把手が付く。

爛鍋 (571) (図版 60・101) 体部は椀形で、体部上半に注口が付く爛鍋である。底部外面には小さな足が付く。鉄製。

十能 (572) (図版 60・101) 平面形は台形状で、把手の差込部分を欠く。銅製か。

金網 (573) (図版 60) 針金を環状に曲げ、細い銅線で網目を張る。縦横十字方向に2本ずつの針金を入れ補強する。

包丁刃 (574) (図版 60・101) 切先を欠くが、刀身から茎部分がほぼ残る。鉄製。

垂鉛塊 (575) (図版 60・101) 断面形が台形を呈する垂鉛の固まりである。表面は白い粉状に風化が進む。

床尻 (576) (図版 60・101) 床尻と見られる。平面形は不定形で、底部外面は丸く、内部は凹む。鉄製。

真鍮材 (577～582) (図版 60) 精製した真鍮を細い板状や棒状に成形したものである。いず

れも地金として成形したものか、これそのものが製品であるかは不明である。

錢貨（表6） 多数の錢貨が、広い範囲の遺構や包含層などから出土した。ここでは、出土した錢貨の種類・初鑄年・出土枚数・主な出土遺構などについて表6にまとめた。

### （7）骨角製品（図版61・62・103、付表6）

骨角製品には棹秤・櫛払・櫛・笄・玩具・不明品などがある。また未製品・骨切断片なども出土した。土壙328から出土したものが多くを占める。材質は分析を経ていないので、種類は肉眼観察によった。

棹秤（583～593）（図版61・103）棹秤の棹部が多数出土した。多くは端部が欠損しているが、完形品も含まれる。583は両端部まで遺存し、三方に上目・前目・元目の目盛りの星が刻まれる。584・586もそれぞれ三方に目盛りが刻まれる。586には「天下一」銘が刻まれる。585は四方にそれぞれ目盛りが刻まれる。590は中心線が引かれてるが、目盛りは付けられていない。587～589は一方のみ目盛りがあるが、端部は削って尖らせる。592・593は表面を粗く削り、調整

表6 出土錢貨一覧表

種類	初鑄年	出土枚数	出土遺構
開元通寶	621	16	土壙200・627・1345、井戸373、竪穴42、他
宋通元寶	960	1	竪穴1546
太平元寶	976	1	土壙328
淳化元寶	990	2	土壙328、炉地域周辺掘下げ
至道元寶	995	1	土壙1388
咸平元寶	998	3	竪穴1546、掘下げ、第2面掘下げ
景德元寶	1004	2	土壙328、柵列1736
祥符元寶	1008	4	土壙627・696・2453、井戸1117
天禧通寶	1017	3	土壙328・471
天聖元寶	1023	7	土壙200・606・2423、竪穴1546、炉周辺検出中、他
皇宋通寶	1039	17	土壙46・200・328・557・1528、他
至和元寶	1054	2	土壙1083、竪穴1546
治平元寶	1064	3	土壙1083、竪穴1546、柵列1736
治平通寶	1064	2	土壙1528、遺構検出中
熙寧元寶	1068	9	土壙207・328、竪穴1548、柵列1736、炉地域整地層、他
元豐通寶	1078	14	土壙200・382・667、井戸94、建物2153、他
元祐通寶	1086	7	土壙84・328・882、井戸132,1117、他
紹聖元寶	1094	2	土壙1381、竪穴1546
元符通寶	1098	2	土壙328・1181
聖宋元寶	1101	7	土壙627・1528、井戸141・201、竪穴1546、他
政和通寶	1111	4	土壙328、竪穴1546・1548
宣和通寶	1119	1	土壙440
正隆元寶	1158	2	土壙328、第1層下層掘下げ
洪武通寶	1368	4	土壙200・328・534・1528
永樂通寶	1403	10	土壙43・328・388,667・1381、他
寛永通寶	1626以降	101	土壙328・335・2092、井戸94、竪穴42、他
銘不明		191	土壙200・328・667・1083、石垣2134、他
雁首錢		6	土壙114・238、井戸139・2075、遺構検出中、他
鏡屋錢		1	井戸250
その他		1	土壙2132
		計 426	

が施されている。590・592・593は未製品、587～589は制作途中で中止し、破棄したと推定できる。材質は鹿角と推定できる。

櫛払（594・595）（図版62・103）ブラシ状である。594は3列の穴があげられる。595は2列の穴があげられ、柄の端部は欠く。材質は牛骨と推定できる。

櫛（596）（図版62）歯をすべて欠いているが、梳櫛である。材質は鼈甲である。

耳搔き（597・598）（図版62・103）未製品と推定できる。表面のケズリは粗く、長短がある。材質は鹿角である。

玩具類（602～606）（図版62・103）602・603はおはじきである。表面は良く磨かれる。材質は鹿角である。604は白色の基石とみられる。円形扁平に成形し、表面は平滑に調整を施される。材質はハマグリである。606は双六の駒である。骨を輪切り状にし、断面部に模様を刻み、彩色する。材質は牛骨と推定できる。

骨角切断片（607～614）（図版62・103）609～612は牛の中手骨、中足骨片である。骨片は関節部より7～12cmの部分で切断する。608は両方に切断面があり、鹿骨と推定できる。613・614は鹿角。613は二股部に円形の浅い窪みを彫り込む。

## （8）ガラス製品（図版62・102、附表7）

ガラス製品には、輪花杯・皿・簪・珠などがある。少量しか出土しなかったが、各種の遺構から出土した。これらの試料の比重を計測した結果、すべて鉛ガラス製品である。

簪（615～618）（図版62・102）615～617は断面円形の棒状を捻って螺旋状とした簪である。615と616は比重差があるため別個体とみられる。618は丸い形状をするため頭部とみられる。

珠（619～622）（図版62・102）619は小型で横長。620は横長。621・622は球形である。全て中心に円孔がある。

杯（623）（図版62・102）体部は緩やかに立ち上がり口縁部は外反する。口縁部・体部とも輪花状を呈する。底部を欠く。

皿（624）（図版62・102）平坦な底部をもち、体部は垂直に立ち上がり、強く外反する。口縁部は欠損する。

## （9）石製品（図版63・64・104、附表8）

石製品には、硯・石鍋・砥石・基石・石臼などがある。調査区内の広範囲の遺構から出土した。

硯（625～635）（図版63・104）大きさや形態に各種のものがある。長方形の平面形をもつものが最も多く、隅丸形状のもの・楕円形のもの・不定形のものがある。635は、蓋が付く仕様である。625～628・630は小型で、携帯用と推定できる。630の側面・裏面には模様、632裏面には刻線の絵、633の裏面には「硯屋 弥三兵衛」の線刻、634・635裏面には人名・年号が刻字される。また、砥石に転用されものも多くみられる。

紡錘車（636）（図版63・104）円盤状で、中央部に穿孔がある。側面の平端部には同心円状の

凹線を刻む。

基石（637・638）（図版 63・104）黒色の石を円形扁平で成形し、表面は平滑に調整を施す。

石鍋（641・642）（図版 63）いずれも底部を欠く。材質は滑石で、表面に成形の痕跡が残る。

温石（639）（図版 63・104）滑石製の石鍋を再加工した温石である。不定型な台形状で穿孔がある。調整は粗い。

砥石（645・646）（図版 63）破片は多く出土したが、全体の形を復元できるものはない。砥石表面の窪みから細い棒状のものを研いだと推測できる。

円柱状製品（643・644）（図版 63）細い棒状のもので両端は欠損する。表面は平滑に調整を施す。

容器（640・647）（図版 64・104）647は小型方形の容器である。底部四隅には足が付く。柔らかい材質の石材を用い、表面は平滑に調整を施す。640は用途不明である。全面にケズリ調整が施される。

石塔（652）（図版 64・104）石塔の一部である。一辺 24 cm の直方体で、側面四面に梵字を刻む。梵字はそれぞれ「阿閼如来」・「宝生如来」・「阿弥陀如来」・「不空成就如来」である。五輪塔または宝篋印塔の軸部と推定できる。

石臼（648～651）（図版 64・104）挽き臼と搗臼がある。茶臼上臼（648）は中央に円孔が貫通し、側面に菱形の横打込穴がある。上面は皿状に窪め、下面には鋸歯文状の目を刻む。茶臼下臼（650）は中央に方形の心棒孔が貫通する。上面には鋸歯文状の目を刻み、周囲には皿状の受けが巡る。651は直径 1.1 m 程の大型搗臼である。底部中央には摩耗して薄くなり穴があく。長期使用に拠るとみられる。外面は粗く調整する。なお、石臼 651 は巨大なため現地から搬出してない。

## 5. まとめ

### （1）遺構の変遷（図 7～20）

ここでは、これまでの周辺の調査成果も含め、今回の調査で出した遺構を、各時期毎にまとめておく。

平安時代以前（図 7）今回の調査で検出した最も古い時代の遺構は、流路 2053～2056 である。これらの流路は、いずれも北東から南西方向に流れ、北から南に緩やかに下がる地形に沿って流れる自然流路である。出土遺物が少ないために時期は特定できないが、2056 が弥生時代畿内第Ⅳ様式～Ⅴ様式とやや古く、他は庄内式併行期が中心である。1 次調査の流路 300・3 次調査の溝 152 も、畿内第Ⅴ様式末から庄内式併行期で、特に溝 300 では土器がまとまって出土した。当該期の生活面は残存していないが、流路 300 出土土器片などは磨滅が少ないことから、周辺に居住地域が想定できる。

調査地周辺では、これまで縄文時代から古墳時代にかけての遺構が確認されている。縄文時代の遺構としては、白川三条ビルの調査で晩期の土壙・包含層（図 4－7）、弥生時代の遺構としては、

高倉御池の調査で末期の竪穴住居（図4-3）、柳馬場御池の調査で土壙・流路（図4-15）。古墳時代の遺構としては、高倉御池の調査で初期の流路（図4-4）、堺町御池の調査で溝（図4-11）、御池富小路の調査で落ち込み（図4-21）が検出された。これらのことから、今回の調査地は、鴨川西岸の自然堤防上に立地した縄文時代から古墳時代の集落遺跡である、烏丸御池遺跡（範囲は、北側は押小路付近、西側は堀川通付近、南は六角通付近、東側は御幸町通付近）の北東部にあたる。

平安時代前期・中期（Ⅰ期～Ⅳ期、図8～10）平安時代にはやや遺構が増えるが、後世の遺構によって大半が削り取られ、部分的にしか残存していない。

今回の調査では、調査区の配置関係から条坊関連の遺構は検出できなかったが、調査地は左京三条四坊十町にあたり、北側を押小路、西側を万里小路、南側を三条坊門小路、東側を富小路に囲まれる。ただ、調査区中央で検出した東西溝1914は六門・七門の境にあたり、当地域にも条坊が施工され、宅地となっていたと考えられる。

平安時代前期における、この地の居住者の文献史料上の記録はない。しかし、土壙2038から土器片（Ⅰ期）、溝1914から平安時代前期（Ⅱ期）の土師器・須恵器がまとめて出土し、後世の遺構埋土から平安時代前期・中期の瓦が出土した。また1・3次調査を含め、同時期（Ⅱ期～Ⅳ期）の土壙・井戸・柱穴などを少数検出したことから、平安京造営当初から調査地に人々が居住したことが明らかとなった。しかし、遺構の分布密度はかなり低く、当地域の利用の度合いが低調であったことを示唆する。御池通における立会・発掘調査成果では、烏丸小路を境にして鴨川に近づくほど、当該期の遺構密度が下がることが確認され、<sup>21)</sup>当調査区も同様の状況であることが明らかとなった。

平安時代後期（図11）平安時代後期（Ⅴ期）には以前に比べ、遺構の数が増し、遺物の出土量も増える。ただ、後世の攪乱が多く、遺構面は島状にしか残存していない。残存した遺構面では、平安時代後期と推定されるオリブ褐色砂泥層（うぐいす色砂泥）の整地土層が部分的に残存し、左京域のほぼ全域に行われた地業が、当地域にまで及んでいたことをものがたっている。

検出した遺構としては、井戸・土壙・柱穴などが散在するが、前代と同じく分布密度はかなり低く、当地域の利用が引き続き低調であったことがわかる。井戸は万里小路から約12～22m付近、三条坊門小路から17m付近に位置する。また、中央部南側では第6層上面で南北方向の小溝を数本検出した。耕作に関係した遺構である可能性が高いが、出土遺物が小片のため時期は特定できない。調査地内は、引き続き居住者がいたことは明らかではあるが、宅地の利用方法については不明な点が多い。

鎌倉時代（図12・13）鎌倉時代（Ⅵ期～Ⅶ期）の段階には、遺構・遺物共に増加する。

遺構では、区画を示す南北方向の溝2391・溝810、南北方向の柵1210・1479がある。溝2391は、二行・三行の境にほぼあたり、当街区（十町域）のほぼ東西中央に位置することから、街区は少なくとも東西に二分されていたと考えられる。1次調査の南北溝190はこの続きと推定できる。また、Ⅶ期には東西方向の柵1321Bが造られ、それを切って南北溝907や、南北溝1510の存在も確認できる。柵1321Bは御池通（三条坊門小路）から北約37mの位置で、押小路通・御池

通の約1/3に位置する。

東西溝 1047・1次調査の溝 250 は、御池通北築地の位置にあたり、埋土中から築地用の小型瓦が出土したことから、これらの溝が築地内溝で、その南側に築地が造られたことを示唆する。柵 1479 は、柳馬場通（万里小路）から約 30 m の位置にあたり、柳馬場通に面した町屋の裏側の区画施設と推定できる。

井戸は増加し、柳馬場通から 20～30 m 奥の部分に並ぶものと、御池通（三条坊門小路）から約 17～27 m 奥の部分に集中する傾向がある。柱穴は、1 区中央部から北側に向け、当街区の西辺部に集まる。また、1 次調査区南側でも柱穴が集中する。このことから、街路に沿って建物が建っていたことは確実であるが、規模や柱間の復元はできない。また、この段階では、以前に比べ土地の利用密度が高くなったことがわかる。

町屋の間口や奥行きを復元することは困難であるが、1 区柵 1479 が町屋裏側の区画施設とすると、井戸の分布から考え、柳馬場通に面して東西奥行き約 30 m の町屋が並んだ様子が想像できる。また、東西柵 1321B や 3 次調査の溝 60・南北柵 61 が宅地裏側の区画施設とすると、御池通に面して南北奥行き約 35 m の町屋が並び、富小路に面して東西奥行き約 30 m の町屋が並んだと推定できる。当街区の中心部には、土壙 2394・2462・2482 などの大規模な土壙があり、町屋裏側の空地に穴を掘ってゴミを捨てたことがわかる。

室町時代から桃山時代（図 14～16）室町時代から室町時代後半（Ⅷ期～Ⅹ期）の段階には、Ⅶ期まで増加傾向が続いた遺構の数が減少し、出土遺物の量もかなり減少する。

御池通北築地の位置にあたる東西溝 745・溝 102 は、前代からほぼ同じ位置で造り替えられ、Ⅹ期にはなくなる。御池通に面する町屋裏側の区画施設と考えられる東西柵 1321B も、Ⅹ期になっても同位置で造り替えられる。各通りに面しては、柱穴・土壙・井戸などが散在するものの、数も少なく規模が縮小する。井戸の位置は、柳馬場通から奥へ約 15 m に位置する。街区中心部の土壙なども少なくなる。

室町時代の京都市街地の中心部は、上京と下京の二つの町組に大きくまとまることが指摘され<sup>22)</sup>、調査地はこの上京と下京の間の東側に位置し、このため、居住者が少なくなった可能性が指摘できる。また、Ⅹ期は応仁の乱（1467～1477 年）前後の時期にあたるが、調査地周辺においてどの程度の影響があったかは不明である。遺構・遺物の減少と関連した可能性もある。

Ⅹ期になると、さらに遺構は減少する。Ⅸ・Ⅹ期の遺構をみると、柱穴・土壙・井戸が散在するのみで、まとまった遺構がみられない。Ⅹ期中段階は天文法華一揆（1532～1536 年）の時期にあたり、この段階に調査地の遺跡が減少する状況は、極めて示唆的な現象といえよう。

当地域では、天正年間（1573～1592 年）以後、豊臣秀吉によって京都の改造（天正地割：1580 年頃）が行われ、本来は一辺 40 丈（約 120 m）の方形の街区であったが、富小路通が西へ約 30 m ほど移動し、街区の形が南北に長い長方形に変更される。また、街路の方位も北で西に振れ、当地域も大きな画期を迎える。

江戸時代初期（図 17）江戸時代初頭前期（Ⅺ期古・中段階）の段階には、遺跡は急激に変貌する。

遺構の数は激増し、遺物もいままでの時期に倍する量が出土した。

東西柵 731 は、区画施設と推定できる。また、井戸・土壙などの遺構は、柳馬場通から東へ約 15 ～ 30 m の範囲で多数出したことから、柳馬場通に面して東西方向の町屋が並び、裏手にあたる部分に井戸やゴミ処理穴を穿ったと推定できる。御池通に面しても北に約 48 m に位置する柵 731 までの間に土壙などが多い。

街区中央では、長方形の大規模な土壙が並べて掘られる。土取りかとも考えられるが、詳細は不明である。土壙 1057・1377・1378 の北辺は、当街区のほぼ南北中央にあたる。また、その北側や南側にも大規模な土壙が数多く見られる。中央部で検出した土壙 2354・2520 は木製品が多量に出土し、注目できる。

江戸時代前期（図 18）江戸時代前期（XI 期新段階）の段階には、遺構の数はさらに増加し、遺物も急増する。

南北石垣 2093C・2132 は、柳馬場通と富小路のほぼ東西中央に位置し、当街区を東西に二分する背割りの溝にあたる。石垣 2093C は、上部に石垣 B・A が積み重ねられ、江戸時代後半（期以降）まで踏襲される。

街区西半部では、柵 1321 と同位置に石垣 149 が造られ、この石垣を境にして北部と南部に分かれ、遺構の様相が異なる。この石垣も江戸時代後半（期以降）まで踏襲される。

西半北側では、東西方向柵 711 や、東西方向の工房の区画石垣 2244 があり、これらが町屋の区画施設と推定できる。井戸・土壙・竪穴は、柳馬場通から東へ 10 m 前後に位置するものと、30 m 前後に位置するものがある。このことから、柳馬場通に面して東西方向の町屋が並び、内部裏側に竪穴・井戸やゴミ処理穴を造ったと推定できる。

西半北側の区画の一部には金属生産関連工房が設置される。生産工程で出る廃棄物は、工房北側の土壙 328 へ投棄する。これらの工房は XI 期新段階で廃絶し、北側土壙 328 も埋められる。

調査地での町屋の規模は明らかではないが、間口は 10 ～ 15 m 前後と推定でき、奥行きが約 45 m である。御所南小学校の調査では、柳馬場通・竹屋町通・富小路通に面して建ち並ぶ町屋の様子が詳細に判明し、調査地でも同様の景観が成立したことがうかがえる。

西半南側は、かなり広く使われたと推定でき、礎石建ちの建物や粘土を貼った土間が見られ、江戸時代後半に建てられた法泉寺の敷地と推定できる。

街区東半部では、石垣 2131 を埋め、南北石垣 2093C に東西石垣 2115B が直接取り付け、これが町屋の区画施設と考えられる。町屋の内部は、攪乱による破壊の影響で西側ほどわからないが、土壙などが多く見られ、排水処理穴の可能性のある竪穴 2167 もある。

江戸時代中期前半（図 19）江戸時代中期（XII 期）の段階には、遺構・遺物共に急激に増加し、活況を呈している。

東西中央には、前代に引き続き南北石垣 2093B が積み上げられ、当街区を東西に二分する。西半部では、石垣 149 も継続する。西半北側では、工房や土壙 328 も埋められ、それらの上に東西方向の石垣 337、南に 12 m 離れて石垣 110 があり、これらが町屋区画施設と推定できる。井戸・

土壌・竪穴は全域に散在し、柳馬場通から東へ20 m前後のものと、45 m前後に位置するものがある。柳馬場通に面して東西方向の町屋が建ち並び、町屋中央部と裏側に井戸やゴミ処理穴を穿ったと推定できる。他に、町屋奥部には土蔵と推定できる建物63・2153も造られる。さらに、排水処理穴の可能性のある土壌79もある。また、土壌49は糞を据えた便所の可能性が高く、多数検出した小型の竪穴も便所であった可能性が考えられる。

西半南側では、南北溝196などが見られ、区画施設と推定できる。井戸・土壌は、御池通から20～30 mに位置し、御池通に面して南北方向の町屋が並び、裏側に井戸やゴミ処理穴を穿ったと推定できる。

街区東半部では、南北石垣2093Bに、北から埧塙石垣2119B・石垣2158・石垣2115A・石垣2134Bが取り付き、これが富小路通に面した東西方向の町街区画と考えられる。各区画の幅は、約4 m・7 m・7 mで、これが、町屋の間口と推定できる。奥行きは約45 mである。これらの石垣は北向きであるが、同位置で面を逆にして上部に石垣が積み重ねられ、江戸時代後半まで踏襲される。町屋の内部は、攪乱のため不明であるが、西側と同様に井戸やゴミ処理土壌が多く造られる。町屋奥部には西側と同じく土蔵である建物2160がある。これらの遺構によって、町屋の裏側の様子が明らかとなった。

江戸時代後期以降（図20）江戸時代中期～後期（期以降）の段階では、遺構の重複が多く、調査地の状況はますますわかりにくくなる。ただ、深い遺構は残存し、遺物も以前の時期以上の量が出土した。

街区東西中央の背割り石垣2093A、西半部の石垣194は、前代に引き続き執拗に造り続けられ、基本的な区画は前代を踏襲する。

街区の西半北側では、区画施設は見られないが、井戸・土壌は柳馬場通から10 m・30 m・45 m付近に位置し、柳馬場通に面した町屋の各位置に存在したと推定できる。

街区の西半南側では、井戸・土壌が御池通から北約20～30 mに散在する。

街区東半部では、前代に引き続き、石垣2120A・2119A・2134Aが、前代の石垣を踏襲して造られる。間隔は15 m・6 mで、これらの石垣は東西方向の区画と推定でき、富小路通に面して東西方向の町屋が建ち並んでいた状況が復元できる。町屋の最奥には井戸・土壌などが見られる。

## （2）金属関連工房について

### 1）位置規模と時期

位置 当街区西半中央部で、金属生産に関連した工房を検出した。工房は御池通と押小路通のほぼ中央で、北辺は街区南北の中央にあたる。東辺は、柳馬場通から約47 m東側で、柳馬場通と（新）富小路通のほぼ中央にあたる。工房の西側では、当該期の柱穴・井戸・竪穴などを検出した。また、工房北側では、東西石垣2244までの間に大規模な塵芥用の土壌328を穿ち、作業中の廃棄物を投棄する。

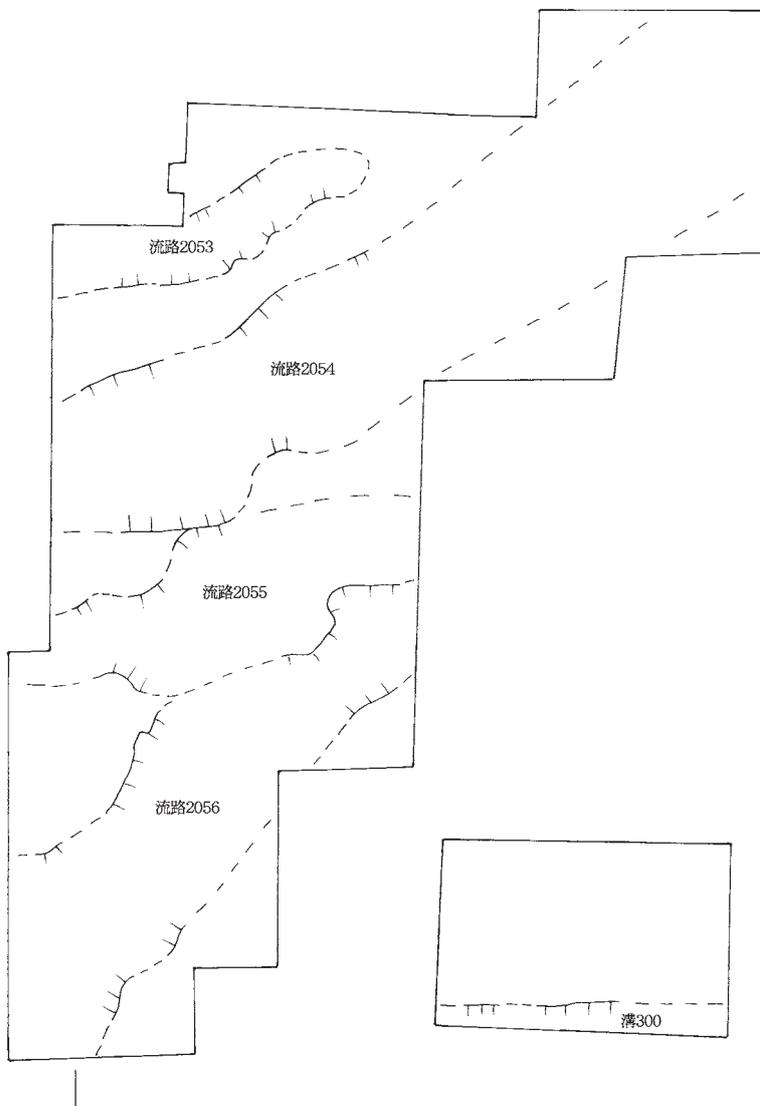
規模 工房の範囲は、北辺が石垣336、東辺が石垣2093C、南辺が石垣2245に区画され、西

Y=-21,270

Y=-21,210



X=-109,940



X=-110,000



図7 平安時代以前（弥生時代から古墳時代）の遺構概要図（1：600）

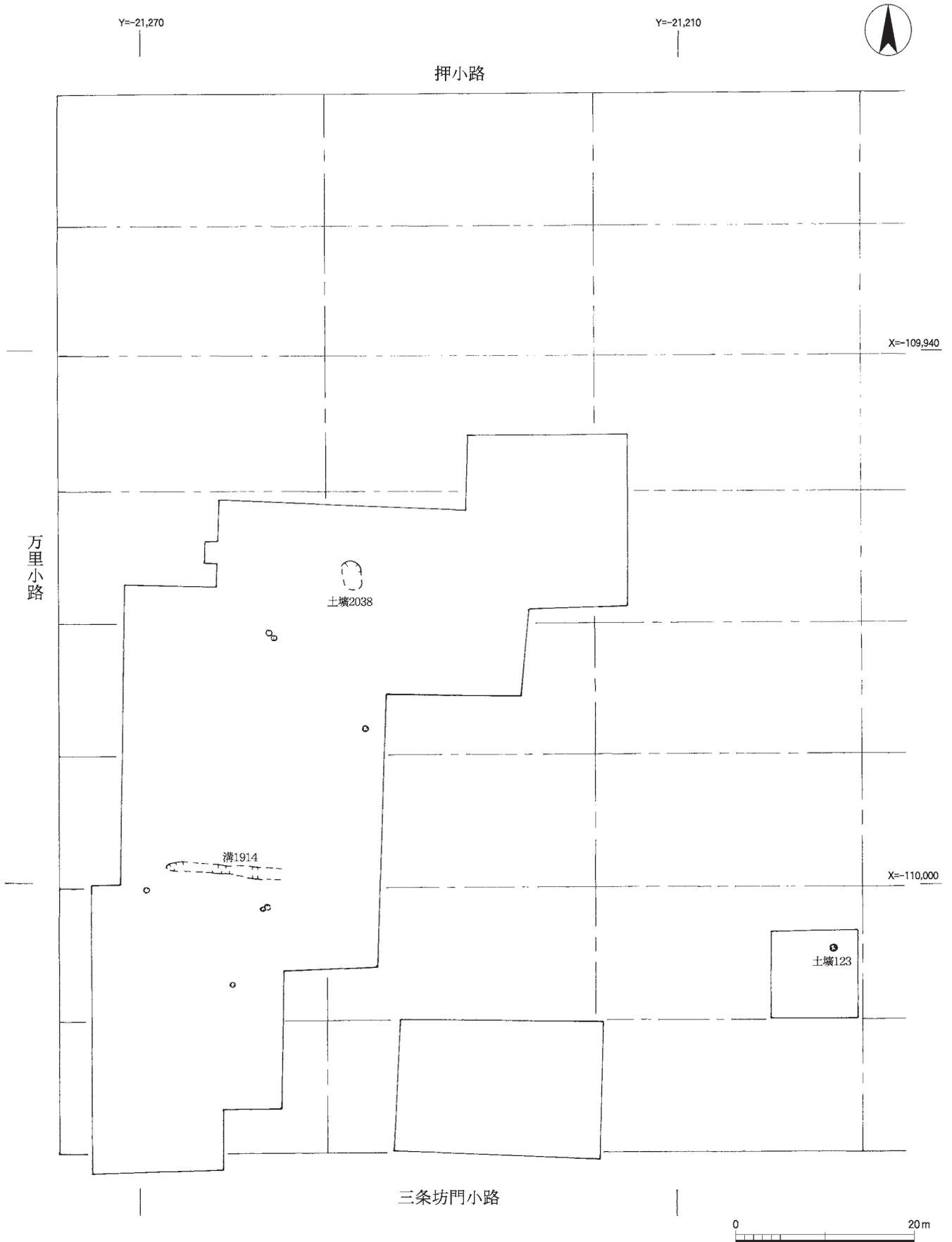


図8 平安時代前期 (I期・II期) の遺構概要図 (1 : 600)

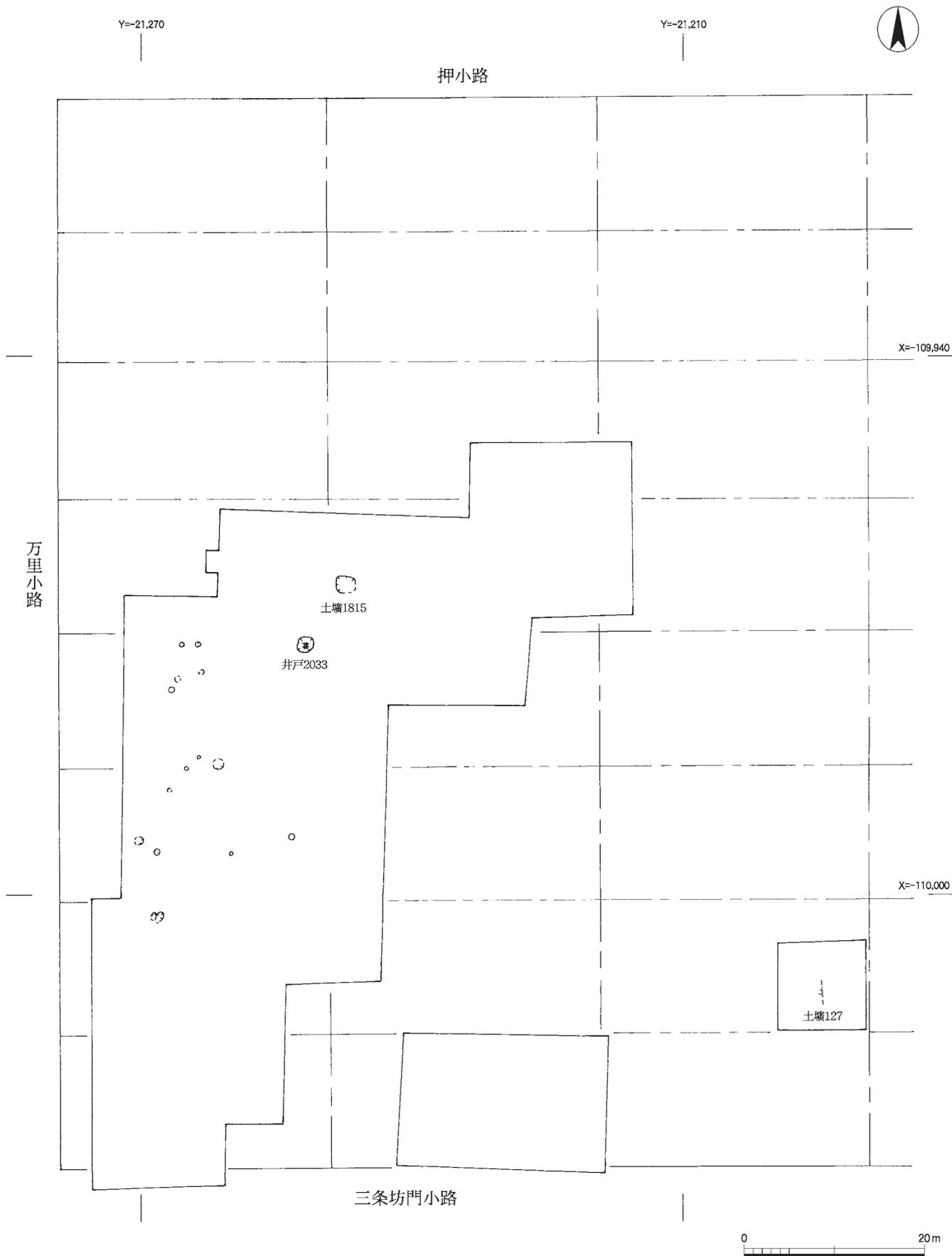


図9 平安時代前期～中期（Ⅲ期）の遺構概要図（1：600）

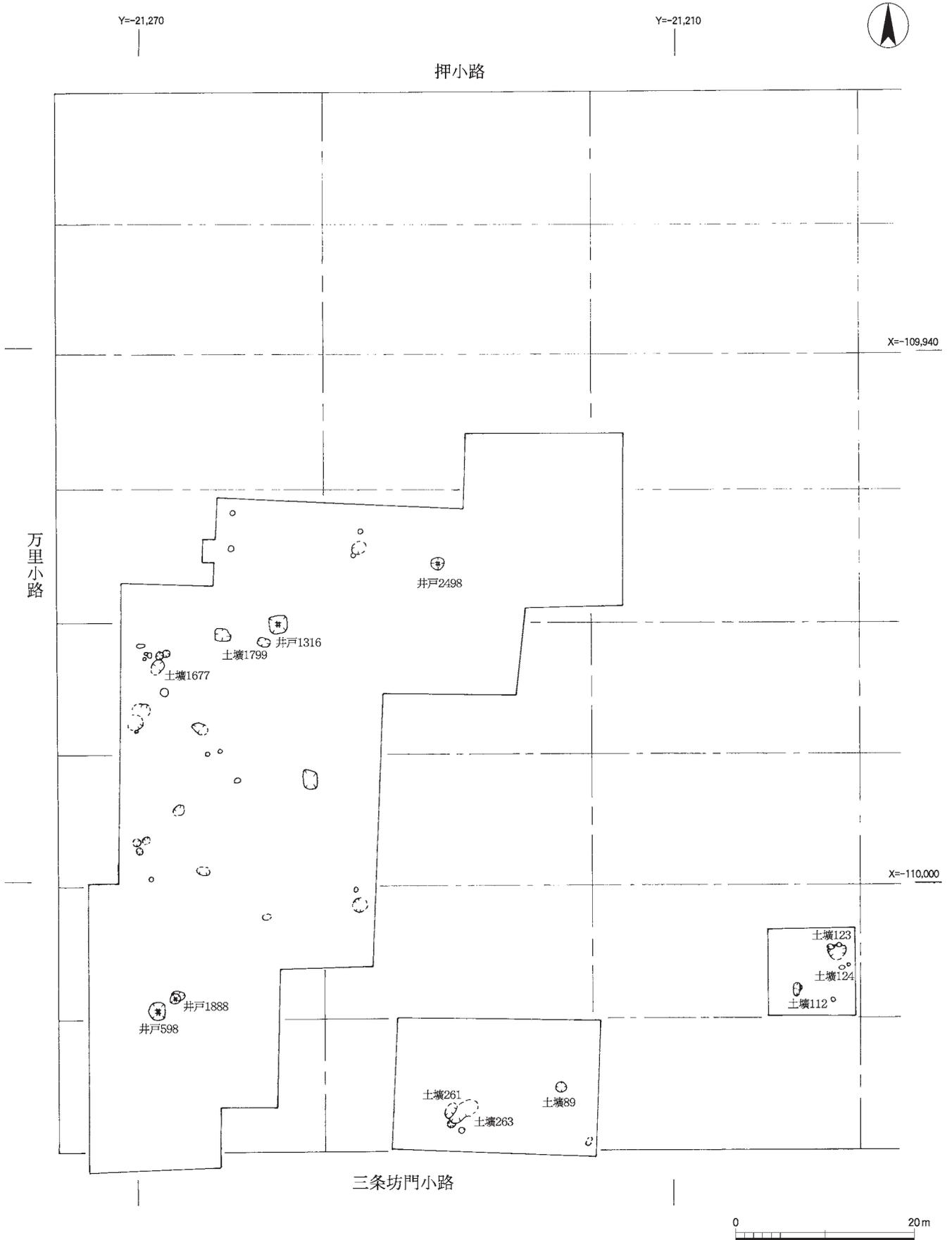


図10 平安時代中期（IV期）の遺構概要図（1：600）

Y=-21,270

Y=-21,210

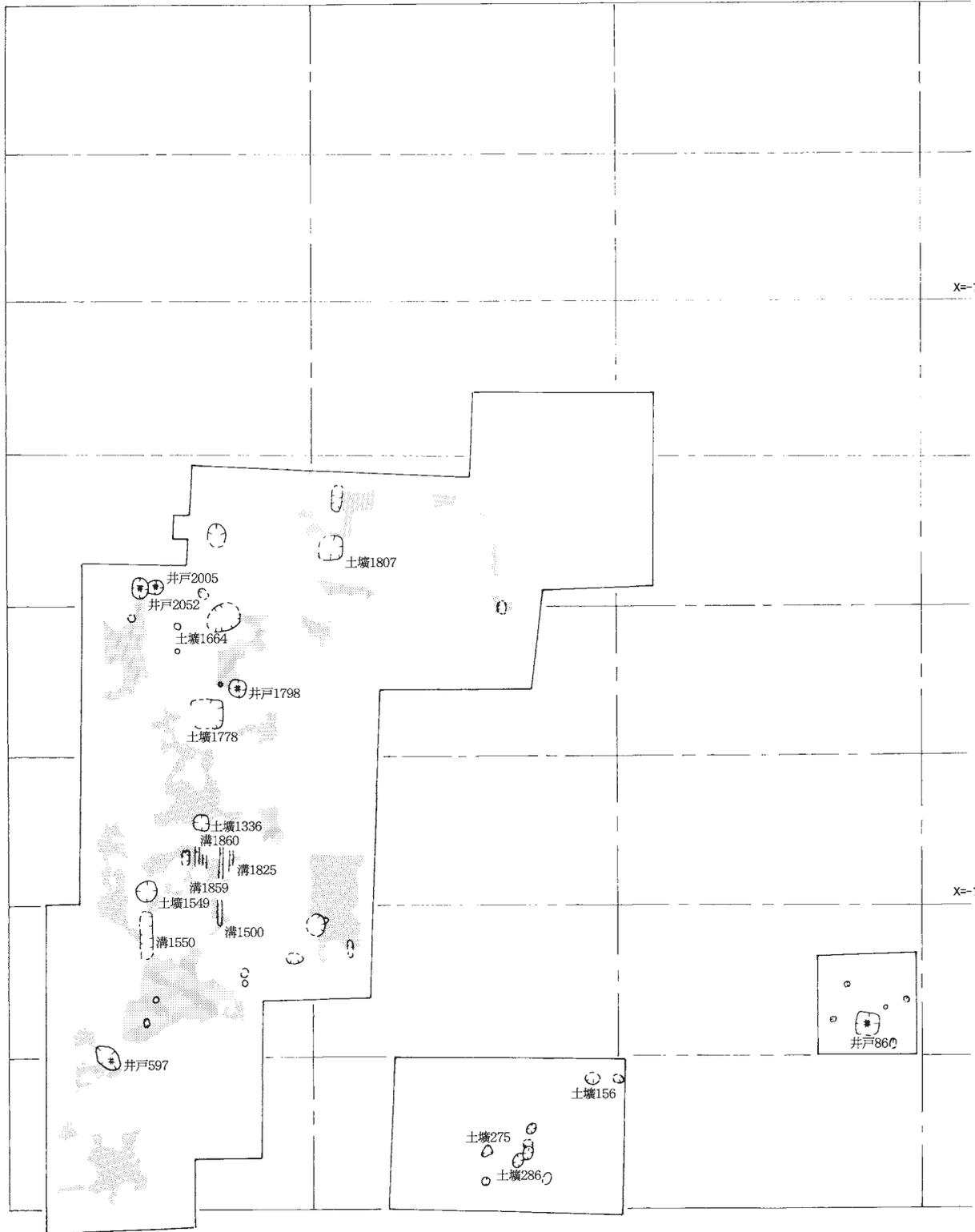


押小路（押小路通）

X=-109,940

X=-110,000

万里小路（柳馬場通）



三条坊門小路（御池通）

※網目はオリーブ褐色砂泥整地層の残存地域



図 11 平安時代中期～後期（V期）の遺構概要図（1：600）

Y=-21,270

Y=-21,210

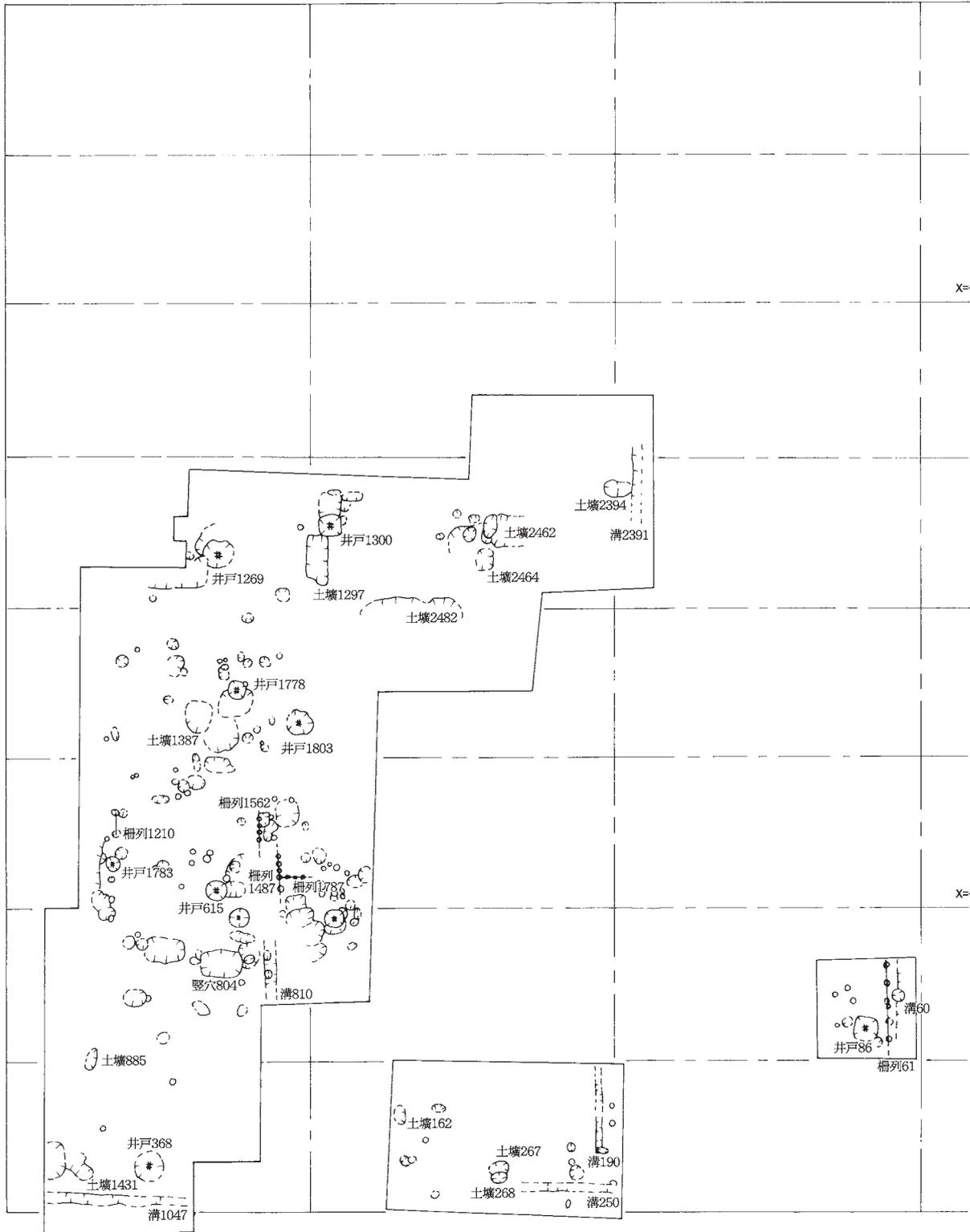


押小路通 (押小路)

X=-109,940

柳馬場通 (万里小路)

X=-110,000



御池通 (三条坊門小路)



図 12 平安時代後期～鎌倉時代前期 (VI期) の遺構概要図 (1 : 600)

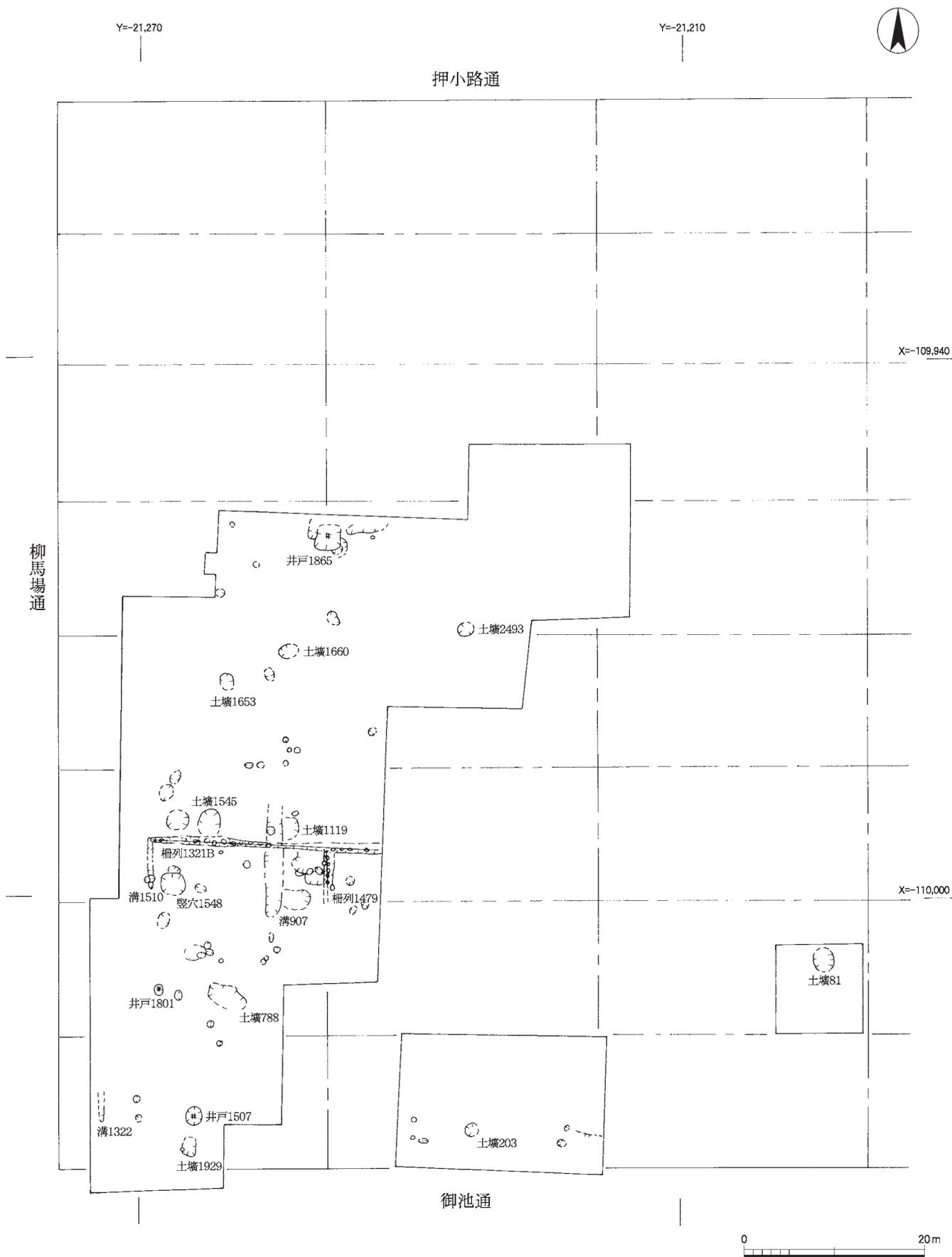


図 13 鎌倉時代中期～室町時代前期 (VII期) の遺構概要図 (1 : 600)

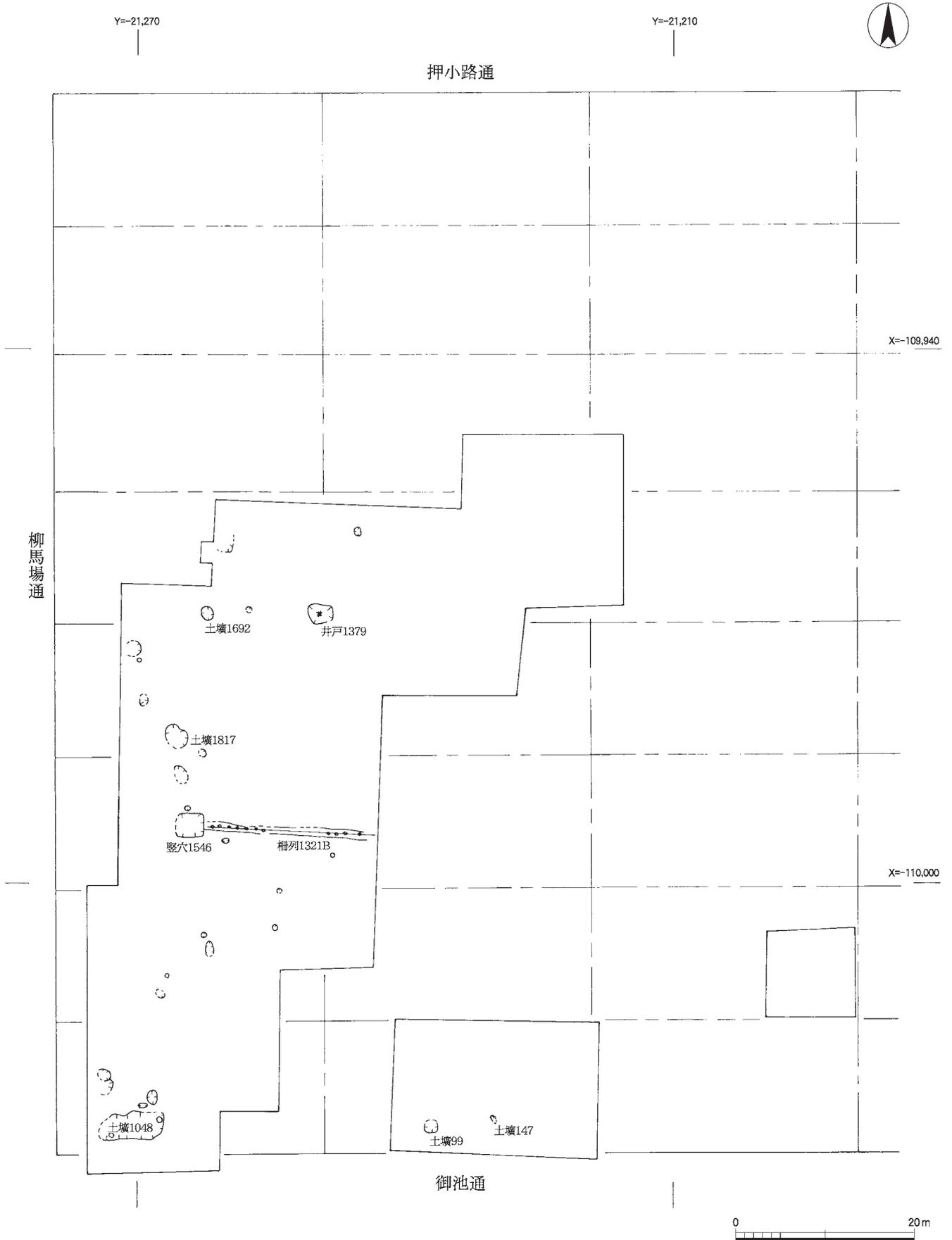


図14 室町時代中期（Ⅷ期）の遺構概要図（1：600）

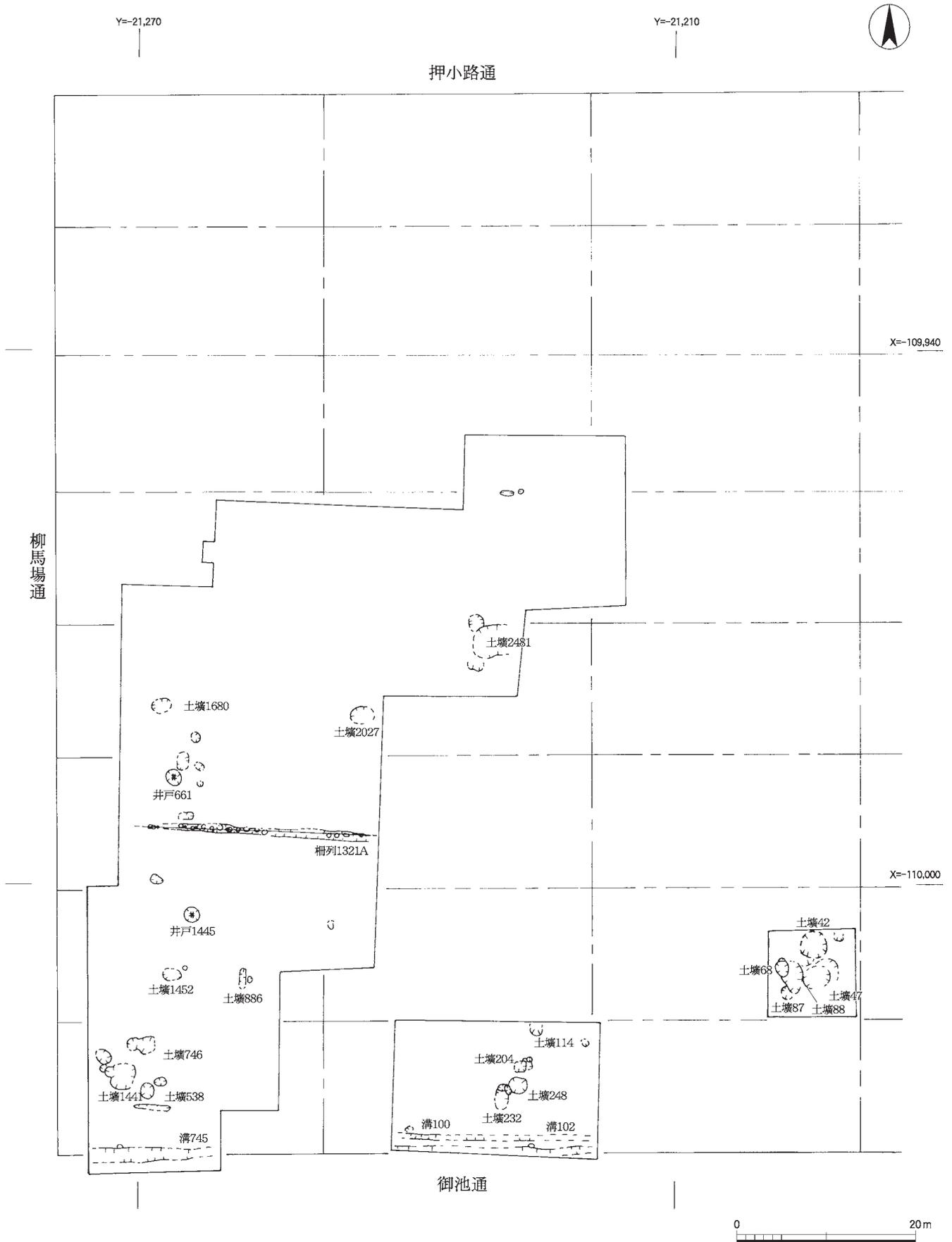


図 15 室町時代後期 (IX期) の遺構概要図 (1 : 600)

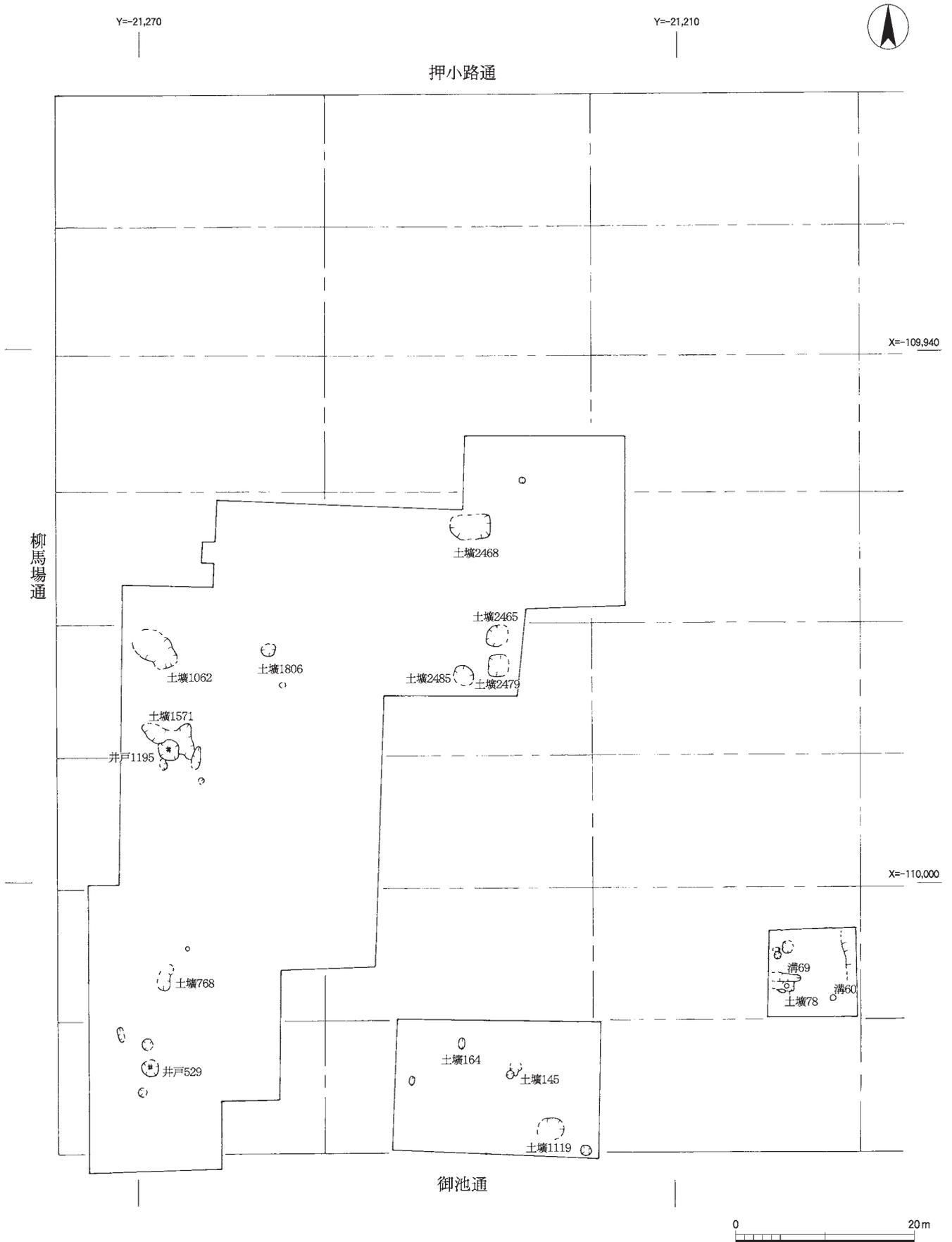


図16 室町時代後期～桃山時代（X期）の遺構概要図（1：600）

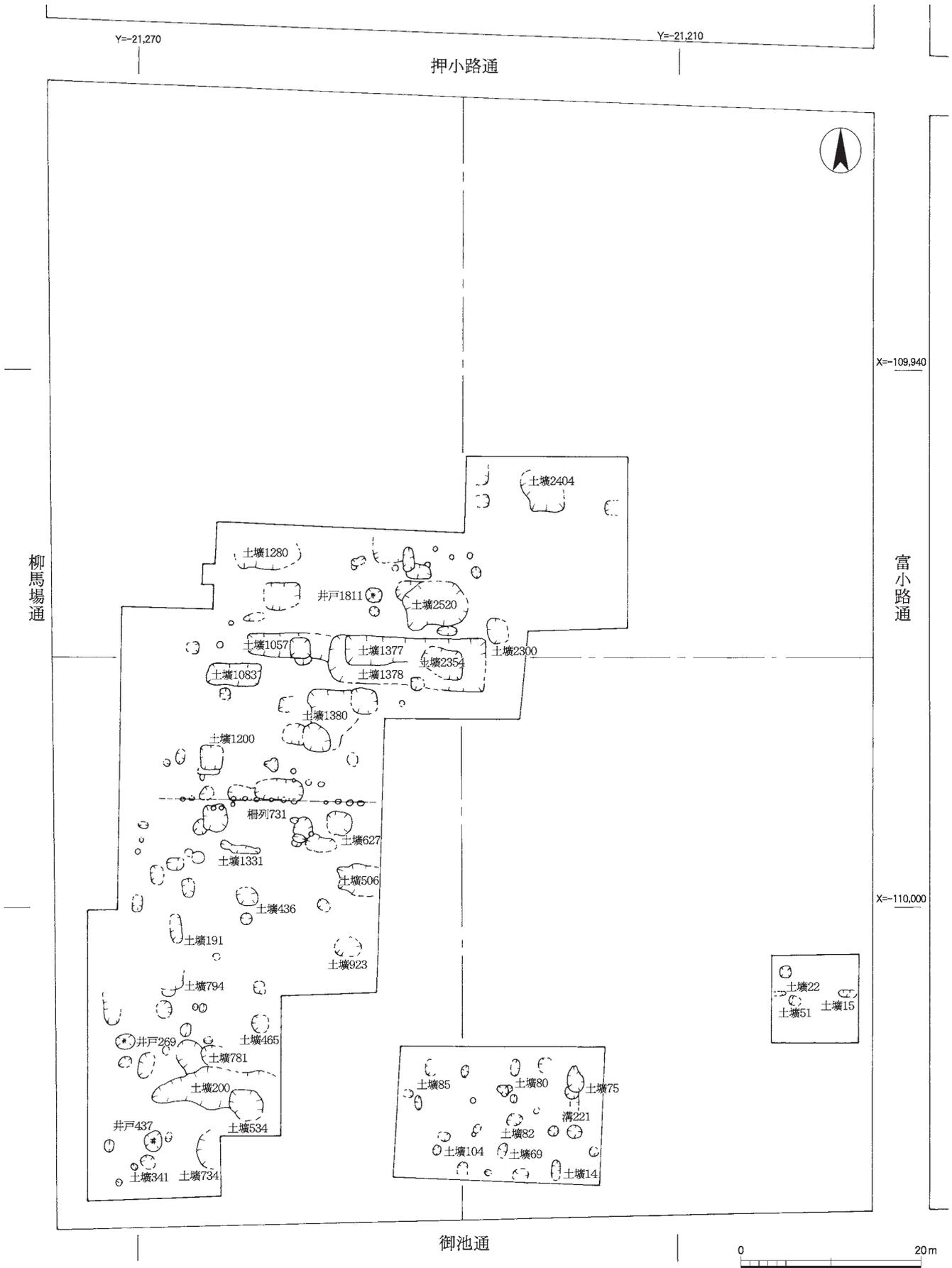


図 17 江戸時代初頭 (XI期古・中段階) の遺構概要図 (1 : 600)

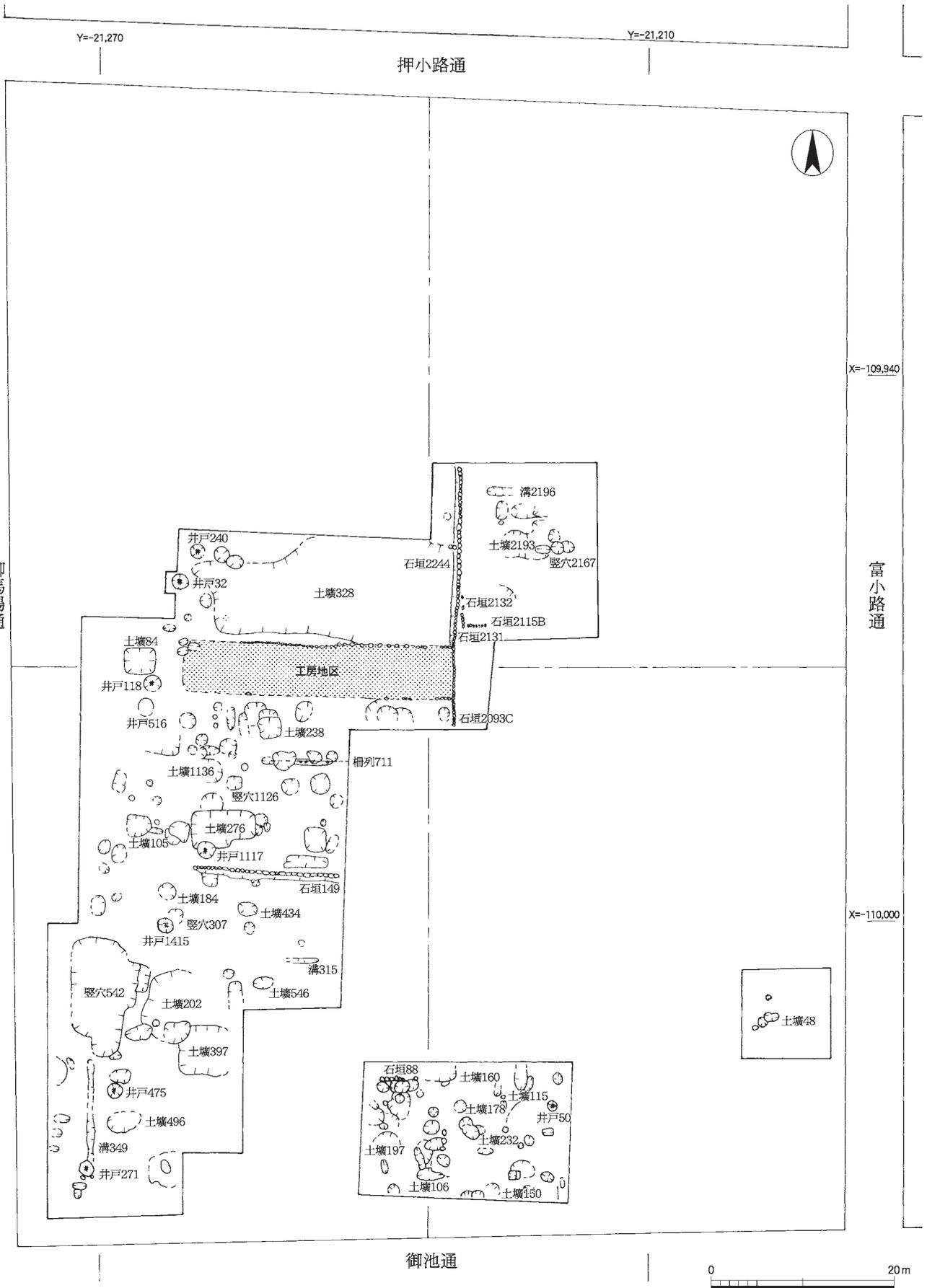


図18 江戸時代前期 (XI期新段階) の遺構概要図 (1:600)

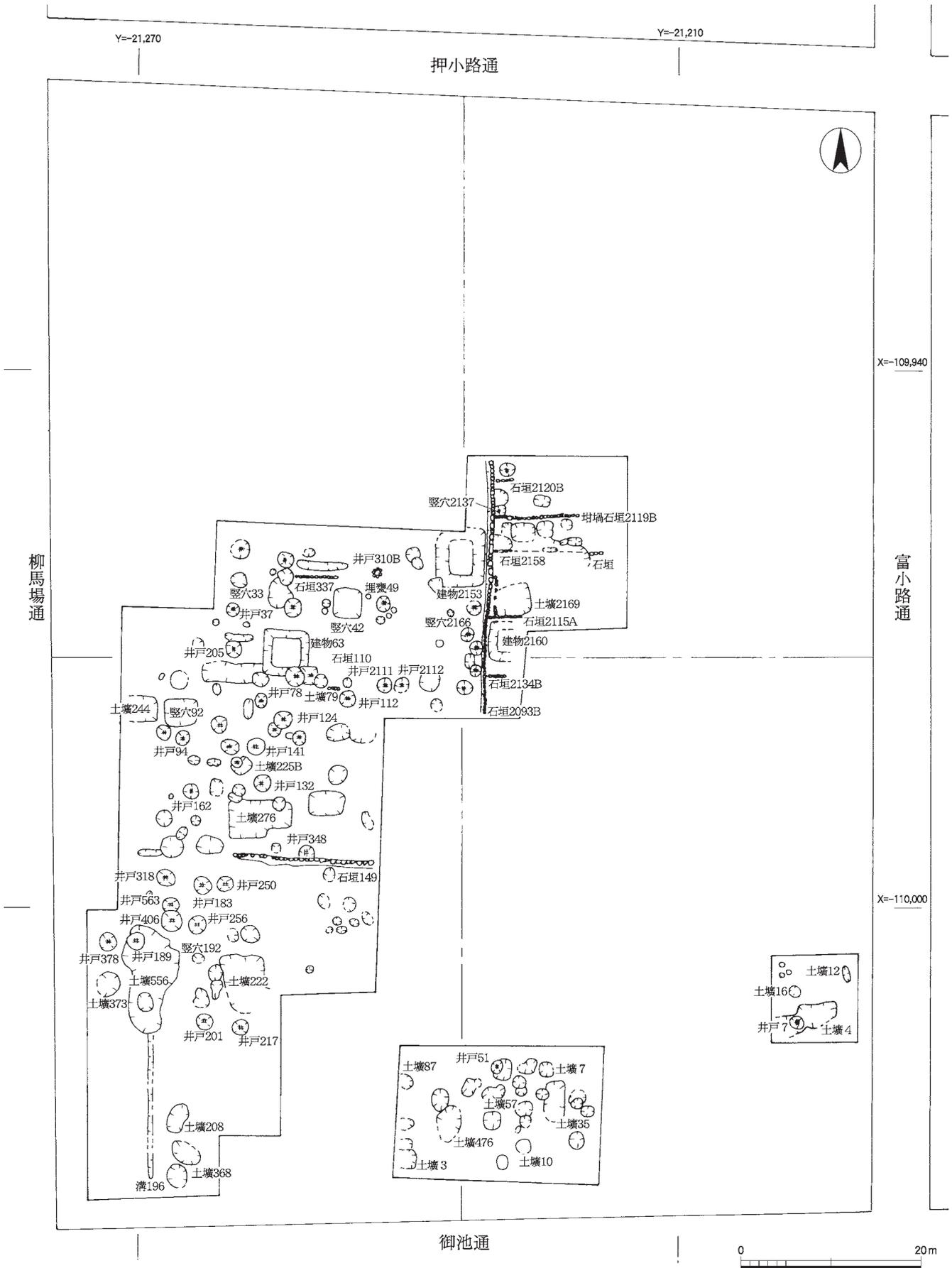


図 19 江戸時代中期 (XII期) の遺構概要図 (1 : 600)

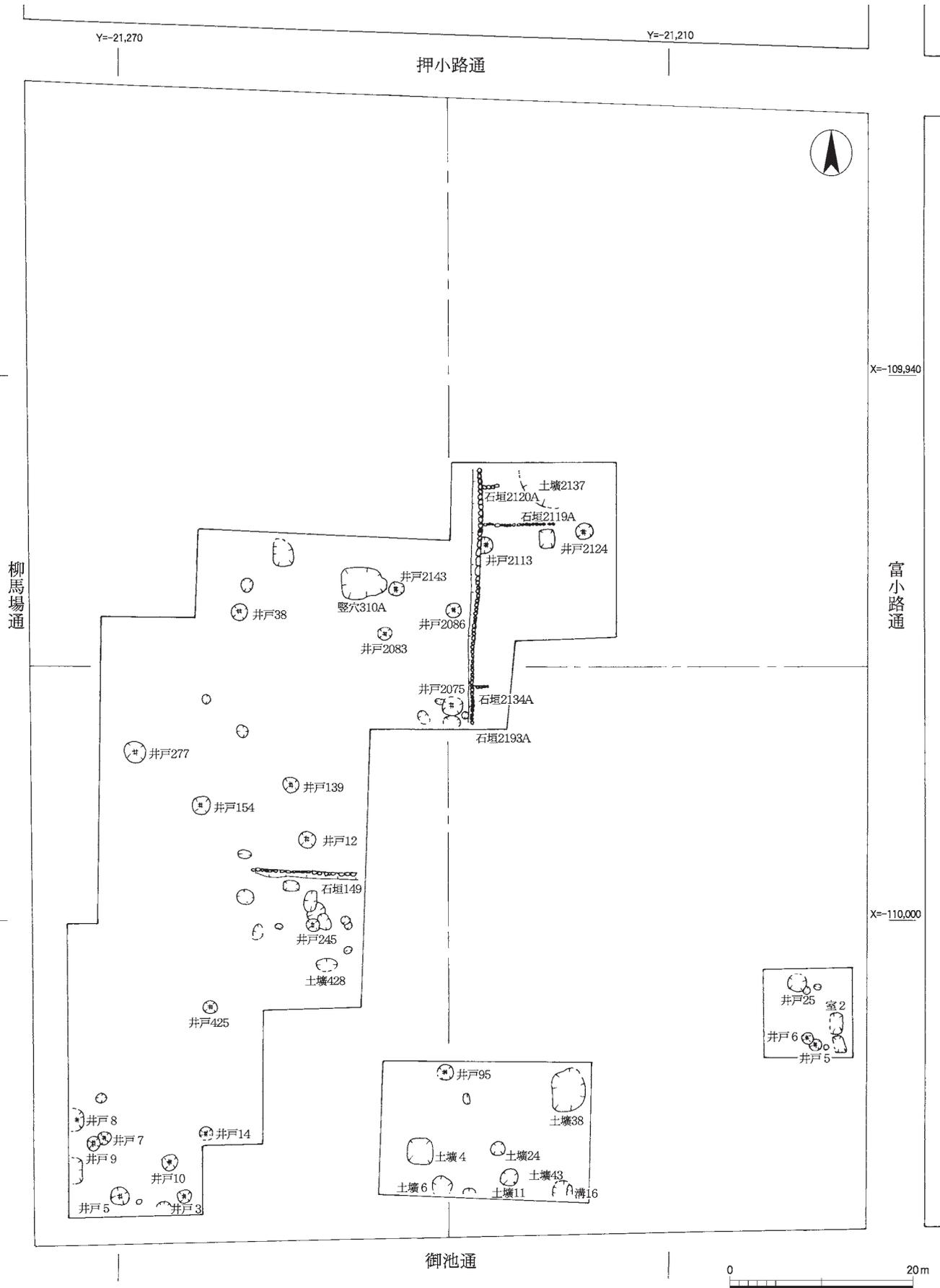


図 20 江戸時代後期以降（期以降）の遺構概要図（1：600）

辺は施設未検出なため確定できないが、最も西側で検出した炉 570 付近を西辺とすると、規模は南北幅 5.9 m (約 2 間)・東西幅 28.5 m (約 9.5 間) となる。工房方向は、北で東へ約 1.9 度振れる。

このことから、工房を含んだ全体の町屋 (吹屋) は、柳馬場通に面して店 (吹所店) があり、その奥に工房 (吹所)、工房の北側に廃棄場所が想定できる。廃棄土壌を含めた町屋 (吹屋) 全体の規模は、間口が南北 17 m (約 5.5 間) で、奥行き東西 47 m (約 14 間) と復元できる。

時期 工房の操業時期は、工房下層の土壌・工房整地土内および土壌 328 から出土した遺物から、XI 期新段階と推定でき、実年代で 1650 年頃～ 1680 年頃まで、操業年数は約 30 年と推定できる。

## 2) 工房の構造

構造 工房の築造は、最初の段階で凹地の整地を行い、平坦面 (第 1 床面) を造る。床面には、部分的に黄色い粘土を貼り、土間を成形し作業面とする。各々の操業面では作業が終わった後に、炉などを壊して埋めて廃棄した後に、スパイ (炭粉・砂などの混合土)・粘土などを互層に敷いて、嵩上げを行って次々と作り替える。操業床面は、大きく 4 面に分かれる。

工房床面の標高は、第 3 床面西端で約 41.1 m、東端で約 40.54 m で、西の方が約 0.5 m 高く、西から東へ緩やかに傾斜する。他の床面もそれと同様に傾斜する。そのため、第 1 床面の西半部はかなり削平を受ける。また床面の中央部と南北端部の比高差は、第 3・4 床面で約 0.2 m あり、中央部が高いかまぼこ型を呈する。床面の高さは最も高く残存した第 1 床面東辺部で、検出面 (第 1 面) から約 1.1 m である。

## 3) 炉の構造

炉は、形態によって円筒形で竪型 (1 類) のものと、長方形 (馬蹄形) で竪型 (2 類) のものに分かれる。さらに、円筒竪型炉 (1 類) は、壁面が内弯し内径が約 30 cm 以下のやや小型のもの (1 A 類) と、壁面が直立して内径が約 30 cm 以上のやや大型のもの (1 B 類) に細分できる。

小型円筒形竪型炉 (1 A 類) 掘形は、径約 0.5～1 の円形で、深さは検出面から約 60 cm である。側壁 (炉壁) は幅 5～10 cm 程度の粘土帯を構築しながら、掘形を埋める。掘形内埋土はスパイや粘土などである。掘形の周囲まで大きく焼けて赤変する。

炉の内径は約 20～30 cm で、深さは検出面から約 50 cm 程度残存し、上部は削平を受ける。周辺で出土した炉壁口縁部 (内径約 30 cm) (382・383) から判断し、地上部分に口縁部が約 20 cm 程度出しており、全体の深さとしては約 70 cm の「半地下式竪型炉」に復元できる。側壁上部はすぼまり、底部は平坦で、底部よりやや上に鞆の羽口を斜め方向に挿入する。炉壁は堅く焼け締まり、表面は溶けてガラス質となり、かなりの高温になったと推定できる。口縁部の内径から考え、大型坩堝 A I を入れることはできず、小型坩堝 A III を入れて火箸で出し入れ、または、炉内で直接に金属を溶かし、取瓶で汲み出す型式の炉と推定できる。底部の炉壁が無いものが多く、炉の廃絶時に底部に溜まった「からみ (床尻)」を再利用するために、割って取り出したと推定できる。また、当型式の炉の口縁径に合う蓋 A (直径約 29 cm) (354～348) が数点出土し、溶解中には

蓋をしたと推定できる。

大型円筒形竪型炉（1 B類）掘形は、径約 90 cmの円形で、深さは検出面から約 25 cmである。側壁（炉壁）は幅 10 cm程度の粘土帯を構築しながら、掘形を埋める。掘形内埋土はスパイや粘土などである。掘形の周囲まで大きく焼けて赤変する。

炉は円形で、内径が約 30 ～ 35 cmで、深さは検出面から 20 cm程度で、周囲上面が平坦である。側壁は直立し、底部は平坦である。炉周囲上面が平坦で強く焼け締まり、「地下式竪型炉」と推定できる。周辺に杭の跡が見られるものもある。炉壁は強く焼け締まり、表面は溶けてガラス質となり、かなりの高温になると推定できる。口縁部の径から考え、内部に大型坩堝 A Iを入れて、火箸で出し入れしたと推定できる。底部の炉壁が残存したものが多い。また、坩堝 A I に組み合う蓋 B（直径約 13 cm）（342）が出土し、溶解中には坩堝に蓋をしたと推定できる。

長方形竪型炉（2類）掘形は、幅 60 cm・長さ約 70 cmの楕円形で、深さは検出面から約 30 cmである。側壁（炉壁）は粘土で構築しながら、掘形を埋める。掘形内埋土はスパイなどである。掘形の周囲は焼けて赤変する。

炉は馬蹄形で、幅 10 cm・長さ約 27 cmで、深さは検出面から約 25 cm程度残存し、上部は削平を受ける。周辺で出土した炉壁口縁部（長辺約 50 cm・短辺約 40 cm）（384）から判断し、地上部分に口縁部が約 20 cm程度出て、全体の深さが約 50 cmの「半地下式吹き床炉」に復元できる。側壁はやや斜めを呈し、底部は平坦で、短辺の一方から鞆の羽口を斜め方向に挿入する。炉壁は強く焼け締まり、表面は溶けてガラス質となり、かなりの高温になったと推定できる。大きさから考え、炉内で直接に金属を溶かし、取瓶で直接くみ出したと推定できる。

#### 4) 小型方形遺構の構造

第 1・2 床面で、小型方形遺構を多数検出した。掘形は、幅約 40 cm・長さ約 65 cmの楕円形で、深さは検出面から約 16 cmである。掘形内埋土は黄褐色粘土である。2228 では一つの掘形内で 3 回の作り替え、67・71 では一つの掘形内で 2 回の作り替えが見られる。

内面の平面は長方形で、幅約 10 cm・長さ約 27 cmの小型のもの、幅約 17 cm・長さ約 33 cmの大型のものがある。深さはいずれも検出面から 15 cm程度である。周辺上面は平坦で、杭の跡が見られるものもある。底部は平坦で、側面は傾斜して広がる。底部残存状況から、形態はほぼ同様で規模もよく揃う。底部壁面は強く締まるが、炉の壁面のように溶けてはいない。底部から上側 5 cm付近までは、表面が青灰色に変色し、溶けた金属を流し込んだと推定でき、「地金」（インゴット）成形用の「型」と推定した。

#### 5) 関連遺構

工房に関連した遺構としては、小型円形遺構・竪穴・井戸・土壇・排水溝・坩堝列・柱穴などがある。

第 2 床面中央で、小型円形遺構（104・581・568・2514）を 4 基検出した。形態はほぼ同様で規模もよく揃う。いずれも壁面は締まっているが、焼けてはいない。炉北列と南列の間に位置し、

炉と適当な間隔を保っていることや、104 西側送風管が炉 103 に接することから考え、鞆を設置した痕跡と推定できる。104 は対象位置に送風管が設けられる。送風管は、節を抜いた竹を使用したと推定できる。

第 2～4 床面の東側で、竪穴（2267・2308・2321・2329）を 4 基検出した。浅い土壌で、木枠または埴塼で護岸する。炉壁や鋳滓（スラグ）を粉碎して洗浄（ゆりもの）などを行う水槽と推定できる。

第 3・4 床面の南東部で、井戸（2348）を検出した。床面の嵩上げの際には、上部に埴塼を積み上げる。洗浄用水槽に水を供給した井戸と推定できる。

第 1・2 床面で播鉢状の土壌を数基検出した。埋土に黄色粘土を含み、粘土溜めと推定した。

第 1 床面で瓦組の排水溝（2250）を検出した。床面を造成する際の暗渠と推定できる。

第 4 床面と第 1 床面の東側では、柱穴もしくは石列を検出した。いずれも建物の柱跡と推定でき、作業スペースを覆う施設と推定できる。

## 6) 関連遺物

今回の調査では、金属生産に関連した遺物が多量に出土した。道具類としては、埴塼・取瓶・埴塼台・埴塼蓋など、炉の構造物としては炉壁・鞆の羽口・炉蓋などがある。

これらの遺物は、工房整地層内や炉跡・廃棄土壌などから多量に出土すると共に、埴塼のほとんどは、井戸や竪穴の構築材料として再利用されたものか、または廃棄された状態での出土である。このため、使用状態のままで検出した遺物はなく、使用の状態については不明な点が多い。以下、埴塼の制作方法や、遺物の痕跡から道具類の使用方法について考えてみたい。

埴塼 A I・II 型埴塼は、細かい砂粒を含むきめ細かい土で成形した直径約 20 cm、高さ約 18 cm の芯材（コップ状の容器）を核にして、底部や側面などの外面に粗い土を被せて、体部を成形する二重構造のものである。上部は芯材の上端から粗い土によって更に体部を高く作り足す。A I a 型は口縁部をやや内傾させて口端部とする。b 型は口縁部を受け口に作り、矢筈口状の口縁部とする。口縁部を内側に水平に延ばし、受け口にする b 1 型（327・328）と、口縁部を上方に延ばす b 2 型（332・333）がある。A I c 型は上部の形状から、さらに 2 種類に分けられる。c 1 型（334～336）は b 型の開口部をさらに狭めて、粗い土で口縁部を塞ぐ。c 2 型（337）は芯材の上端に直接椀状の芯材を被せ、さらに外面や下部との接合部に粗い土を被せ、砲弾状に成形する。内部の芯材の胎土は、細かい砂粒を多く含み、内面は平滑に仕上げる。外側に付け足す土は、粗い砂粒を多く含み、さらにスサが混ぜられ、耐火性を向上させる。

A I 型埴塼の a 型・b 型のほとんどと、A II 型埴塼には、口縁端部に剥離痕が認められる。これは、口縁部に 342 のような円形の蓋をかぶせ、塞いで使用したと推定できる。また、A I・II 型の側面には大半のものに穴が開けられ、使用中は詮をして塞いだと推定できる。

埴塼の口縁部や側穴を使用中に塞ぐのは、銅と化合させる亜鉛成分が蒸発して外部に出にくくするためと考えられる。『天工開物』には、亜鉛の精錬の場合、亜鉛（炉甘石）と銅を埴塼の中に

詰め、泥で包み固め、坩堝を重ねて焼くとある。これは、蓋をして密封しないと垂鉛が煙になって飛び散るからである。<sup>23)</sup> 坩堝の内、全体を密封するA c 1型・A c 1型が最も古いタイプと考えられ、それより簡略化された蓋をかぶせるA a型・b型が新しいタイプと推定できる。

坩堝 337 の底部には、煉瓦状の「置き台」(338～341・370)が溶着する。また、他のA I型坩堝の底部にも「置き台」の痕跡が認められるものが多い。このことから、A I型坩堝は大形円筒形竪型炉(1 B類)底部に置き台を設置し、この上に坩堝を乗せて安定させ、その周囲に燃料を入れ使用したと考えられる。A型の坩堝は、体部側面全面に被熱し、高熱によりガラス質になり、特に底部は溶着が激しいものがほとんどである。

小型のA III型坩堝(359～365)も少量出土した。大型と同様にきめ細かい土で成形する。内面は平滑に仕上げる。体部全面に被熱し、大きさから考え、小型円筒形竪型炉(1 A類)、または、長方形竪型炉(2類)に入れて使用された可能性が高い。

B型坩堝は、体部が椀状を呈し上部に把手が付く。少数出土した。大型のB I型坩堝(329～331)は、内面には凹凸があり調整は粗い。A型の坩堝にみられた芯材は使用していない。体部全面に被熱するが、特に側面一方向のみが高い被熱によりガラス質に溶解する。これは炉の中に入れて使用したと考えられ、把手を向かって右側にし、熱源を囲む形で置かれたと考える。B型坩堝の口縁部には、剥離痕が認められず、蓋を被せずに使用したと推定できる。

小型のB II型坩堝(366・367)は、体部全面に被熱し、大きさから考え、長方形竪型炉(2類)に入れて使用された可能性が高い。B型の口縁部には剥離痕が認められず、A III型と同じく蓋を被せずに使用したと推定できる。

C型坩堝(369)については、出土量が少ない事、破片であることから、使用方法については不明な点が多い。

炉壁 平面形が円形と楕円形または馬蹄形の2種類がある。円形のもの(382・383)は、口径から考え円筒形竪型炉(1類)の上部と推定できる。内面は被熱しているが、外面は熱を受けていない。スサ入りの粘土紐を積み上げて成形する。

楕円形または馬蹄形のもの(380・384)は、長方形竪型炉(2類)の上部に使用されたと推定できる。内外面は被熱によりガラス質に溶解している。スサ入りの粘土紐を積み上げて成形する。

蓋 蓋B型(345～348)は、内面のみが被熱によりガラス質に溶解していること、口径から考え、円筒形竪型炉I A III類の蓋と推定できる。炉使用中に、円形の蓋をかぶせ、塞いで使用したと考えられる。また、蓋の上面には穴が開けられ、穴内部も被熱によりガラス質に溶解していることから、使用中は開けていた可能性が高い。ただ、栓(349)は蓋と同様の胎土で、その栓の可能性が高く、作業中の条件によっては、蓋に栓をして塞いだと推定できる。

角形蓋(343・344)については、使用方法は不明であるが、被熱していることや、蓋B型と同じような円孔がある点から、炉の蓋(屏風)として使用されたと推定できる。

取瓶 取瓶(350～358)が少量出土した。大きさなどから考え、小型円筒形竪型炉(1 A類)、または、長方形竪型炉(2類)に入れて使用された可能性が高い。

## 7) 工房の変遷 (図 21・22)

工房床面整地層の堆積状況や、遺構の切り合い、炉の上部や底部の高さなどから、工房の変遷を復元する。A期からE期までの5段階に分ける。

**整地作業** 工房設定地区には、土壙 1377・1378・2354 (XI期古～中段階) などの大規模な土壙があり、床面の構築に先立ちこれらを埋め整地を行う。範囲は、A期の工房の範囲と合致する。整地埋土は、スパイ層 (木炭の粉と土を混合した土) と黄褐色砂礫層を互層にし、上面に黄色粘土を貼り床面とする。整地埋土はさほど堅くしまっていない。

ただ、整地土層中には、坩堝片などの遺物が多く含まれ、今回検出した工房を造る以前に近隣で同様の生産が行われていた可能性が高い。

**A期** A期の工房は、東辺から約 14 m西までである。床面では、北側に竪穴 2267、南東隅に井戸 2348B が配される。炉・型は検出できなかったが、床面に鋳滓などが散在することから、精錬又は鑄造関係の作業場となっていたことが明らかである。また、南北両辺と東辺に柱穴が廻り、作業場全体に覆屋が造られたと推定できる。

**B - 1期** A期の床面上に厚さ 10～20 cmスパイ層を盛り上げ、北辺に石垣 1段 (石垣 336B)・南辺 (坩堝垣 589)・東辺 (坩堝垣 2333) に坩堝を立て並べ、B期の床面を形成する。工房は、A期の作業場を西側に約 12 m拡張し、炉の空間 (吹床) が付加される。また、床面東部には黄色粘土が貼られたと推定できる。当該期の工房は、遺構の切り合いや炉の高さから、B - 1期・B - 2期に分かれる。

B - 1期では、西部と東部に大きく分かれる。西部では、炉が北列に配置される。北列は北辺から約 1.5 m南側で、東西方向に並ぶ。炉の間隔は約 2 mである。炉の型式は、1 B類が主体で、1 A類も後に作られる。東部は坩堝列 2311 で区画し、北側には水槽と考えられる竪穴 2329・南東隅の井戸 2348B の側石上には坩堝を積み上げる (2348A)。

以上のことから、西部が吹床、東部が作業場となっていたと推定できる。

**B - 2期** B - 2期も基本的にはB - 1期と同じ規模・配置である。西部では、1 B類の炉が北列に配置される。北列は北辺から約 1.5 m南側で、東西方向に並ぶ。炉の間隔は 1.5～2 mである。各炉は重複し、若干位置をずらして順次構築されたと推定できる。中央では、2類の炉が数基配される。東部では、北側に2類の炉1基が配される。北側に竪穴 2321 と南東隅に井戸 2348A が配される。

**C期** B期の床面上に 35～50 cmスパイ層を盛り上げ、北辺 (石垣 336A)・南辺 (石垣 2245)・東辺 (石垣 2093C) 共に石垣を積み上げ、C期の床面を形成する。床面はさらに西側に約 7 m拡張する。また、床面には粘土が貼られたと推定できる。工房は、坩堝列 2261 を境に西部と東部に大きく分かれる。

西部では、炉が北列と南列に配置される。北列は北辺から約 1 m南側で、東西方向に並ぶ。炉の間隔は 1～3 mである。炉の型式は、1 A類が主体で、2類も見られる。南列は北辺から約 4.5 m南側で、東西方向に並ぶ。炉の間隔は 1～2 mである。炉の型式は、1 B類が主体である。小

型方形遺構（型）は、北辺から南側に1～2 m付近に東西方向に配置されるものが多く、中央や南列付近にも散在する。南北炉列の間のやや東寄りには、小型円形遺構（104・568・581・2514）が配される。東部では、西側に坩堝石敷 2262・石列 2260 があり、南側に竪穴 2308 が配される。

以上のことから、西部が吹床、東部が作業場であったと推定できる。当時期から炉 1 B 類が本格的に出現することや、型が出現することから、当工房における画期と考えられる。

D 期 C 期の床面上に約 20 cm スバイ層を盛り上げ、D 期の床面を形成する。工房の規模は C 期と同様で、中央の空閑地を境に西部と東部に大きく分かれる。

西部では、炉が北列と南列に配置される。北列は北辺から 1～1.5 m 南側で、東西方向に並ぶ。炉の間隔は 1.5～2.5 m である。南列は北辺から 4～5 m 南側で、東西方向に並ぶ。炉の間隔は 1～2.5 m である。炉の型式は、北列・南列共に 1 B 類と 2 類が主体で、1 A 類も見られる。北列と南列の間は空閑地となる。東部では、中央部付近に型が配される。型の配置は、規則性が見られず間隔も不規則である。床面の北辺石列 2094 と中央に礎石が据えられ、覆屋が造られたと推定できる。

以上のことから、西部が吹床、東部が型鑄込みなどの作業場であったと推定できる。炉の数や工房の規模から考え、C 期・D 期が工房の最盛期と言えよう。

E 期 D 期の床面上に約 40 cm スバイ層を盛り上げ、E 期の床面を形成する。工房の西側は縮小される。工房の床面は、後世の削平を大きく受け、特に西側では攪乱が多い。

東部で炉 2 類を 1 基検出した。関連施設が検出されていないため、詳細は不明である。

## 8) 当地域における金属生産工房について

今回検出した金属生産関連工房は、周辺から出土した土器などから、江戸時代の前期、約 30 年間にわたり、操業を行ったことが明らかとなった。特に北側の廃棄土壙 328 には、坩堝などの工具や炭などの生産廃棄物が大量に捨てられていたことから考え、町屋の中における大規模な工房であった様子がうかがえる。

工房の変遷を大きく見ると、A 期に操業が始まり、B 期には工房が拡大される。C 期には型が出現すること、坩堝を使用する大型の炉 1 類 B が増加することから考え、当該期が大きな画期と推定できる。D 期は、炉・型の数が増加することなどから、当工房の最盛期と推定できる。E 期には炉などが減少し規模も縮小し、これ以降工房は衰退・廃絶する。

当工房では、A 期・B 期には型が見られない事、小型の竪穴炉が主体であることなどから、小型製品を鑄造または精錬した工房と推定できるが、具体的にどのような作業が行われたかは不明な点が多い。これに対して、C 期以降は地面に作られた型が出現し、主に大型の竪穴炉を用い、容量の大きい坩堝を使用していることから、「地金」（インゴット）を製造した精錬作業と推定できる。ただ、このような形状の地金がこれまで京都では出土していないので、今後の検討が必要であろう。

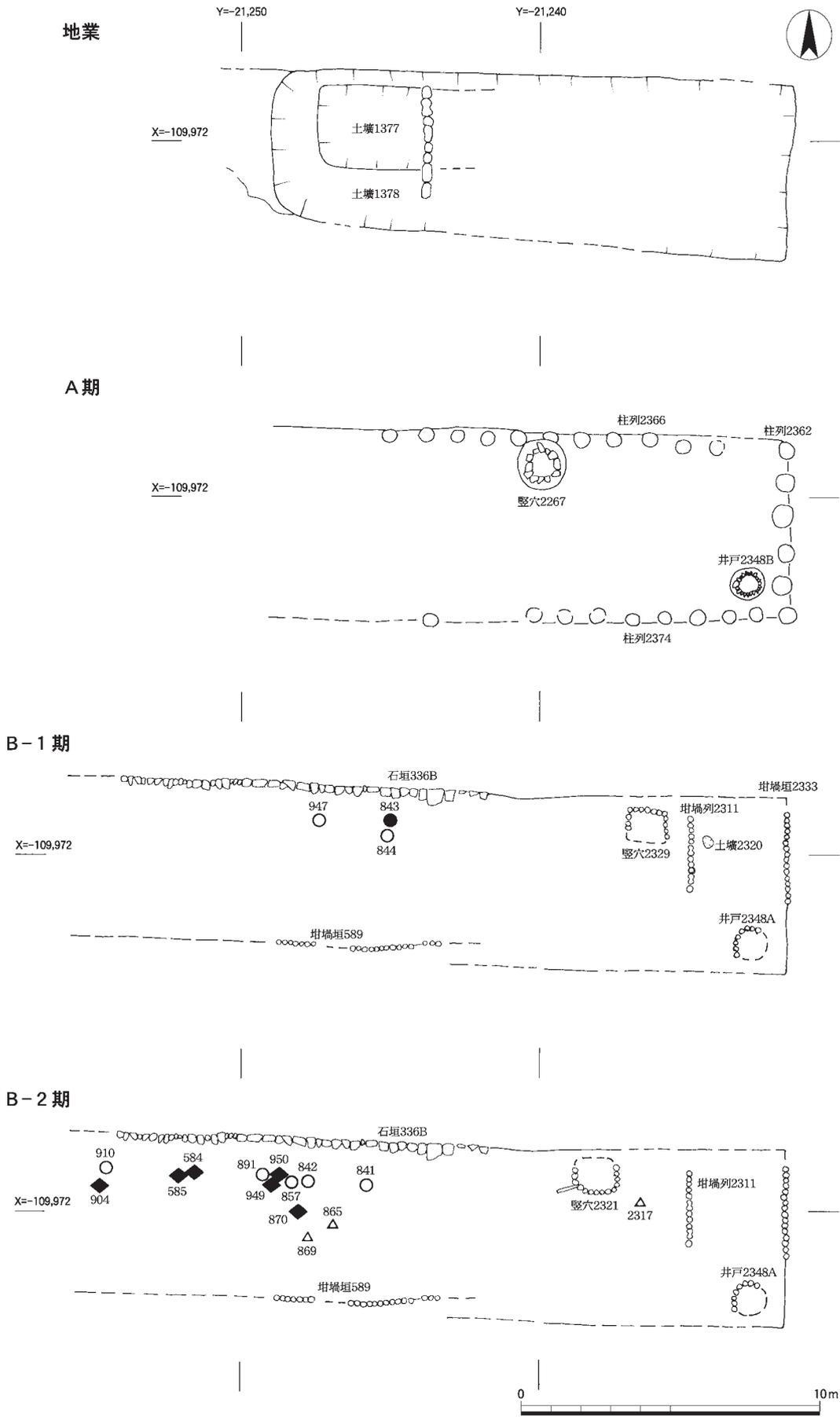


图 21 工房地区遺構変遷图 1 (1 : 200)

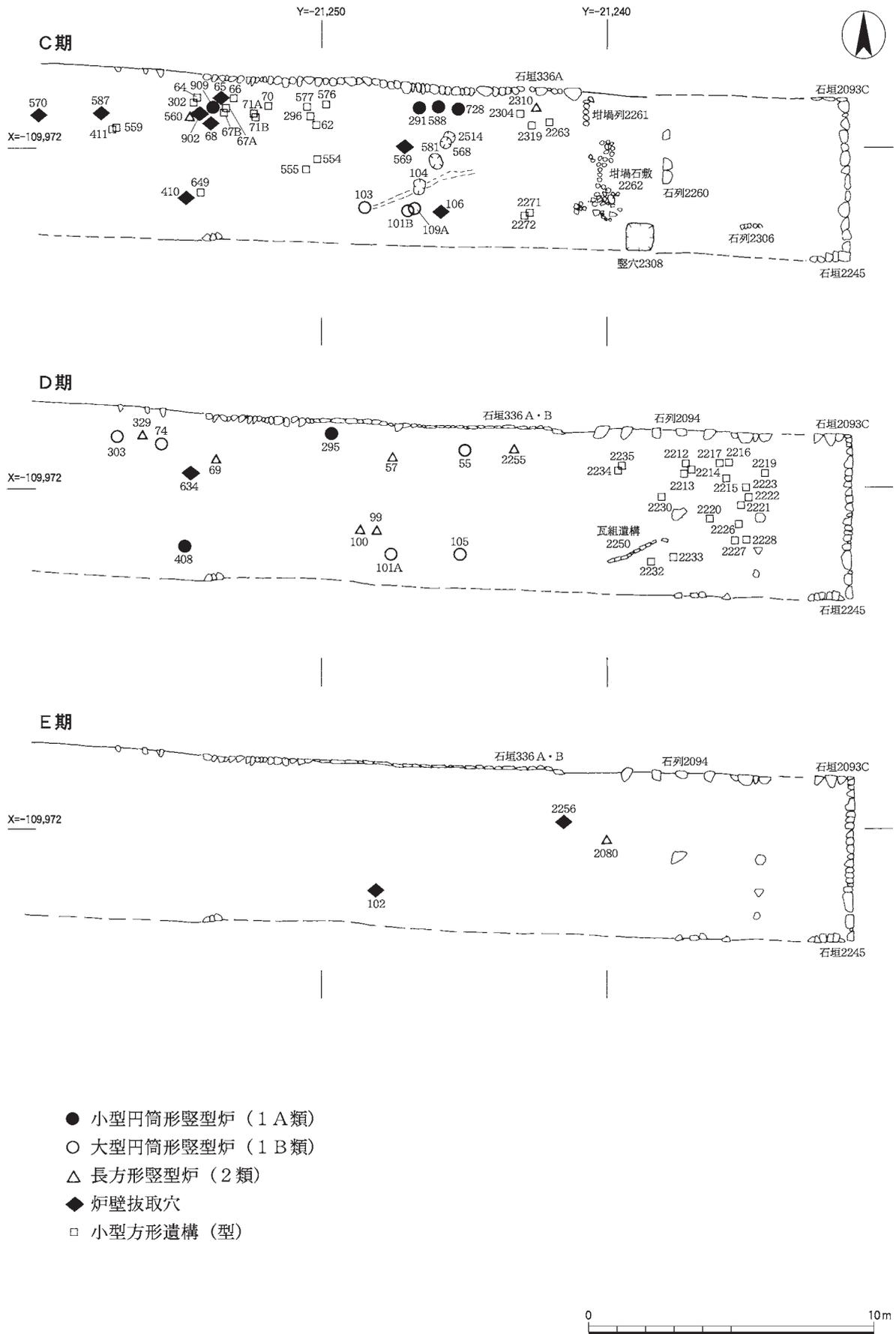


図 22 工房地区遺構変遷図 2 (1 : 200)

当工房において生産された金属は、工房整地土に含まれた鋳滓、および坩堝・炉の表面の溶解物を分析したことで、明らかにすることができた。(4 金属関係遺物の分析についてを参照。)その結果によると、第3面整地層から出土した資料4が銅であることから、A期・B期には、主として銅の精錬または鋳造を行っていた可能性が高い。第1面から第2面の整地層から出土した資料1～3は真鍮であることから、C期以降には真鍮の精錬を行い「地金」を製造したと推定できる。また、資料9・10の炉片や資料8の炉蓋および各坩堝に、いずれも亜鉛が付着していることから考え、これらが真鍮の精錬に使用されたことが明らかとなった。寛文五年(1665)刊行の『京雀跡追』には「あかがねや 柳のぼゞ押小路下」、貞享二年(1685)刊行の『京羽二重織留』には「眞銖問屋 柳ぼゞ押小路下ル町 七右衛門」との記載があり、今回検出した工房(吹屋)と位置や時期的にも合致する点が多く、銅の生産から真鍮の生産に移行したことが裏付けられた。

整地層から出土した真鍮滓の銅と亜鉛の比率を見ると、資料3が9:1、資料1が8:2、資料2が7:3、資料8蓋裏側が6:4の比率で、C期～D期には用途に応じて、真鍮の配合を変えていた可能性がある。また、第2床面から亜鉛の地金(575)が出土しており、真鍮の製造に使用されたと推定できる。

文献史料によると、1600年代の比較的早い時期に亜鉛がオランダ船・唐船によって輸入され、大阪では1700年代に真鍮吹屋が操業したことが知られている。また、当該期の出土遺物の中には、かなりの真鍮製品が存在しているが、日本における真鍮製造の開始時期は明確になっていない。いずれにしても、大規模な真鍮工房の検出は日本で初めてであり、操業時期が特定できたことは、真鍮の生産開始の時期および製作工程を知る上で、今後の貴重な資料となった。<sup>24)</sup>

## 9) 周辺関連遺構の分布

調査地周辺で、江戸時代頃の金属製品生産関連遺構・遺物検出地を、平安京の条坊を準用して述べると、以下のとおりである。

左京一条三坊九町の調査(メゾン清和、1986年調査、市埋文)では、小鍛冶と考えられる石組遺構、鉄滓・銅滓・取瓶・砥石・坩堝などが出土した。<sup>25)</sup>左京二条三坊十町の調査(ホテルハーベスト、1991年調査、市埋文)では、坩堝などが出土した。<sup>26)</sup>左京二条四坊十町の調査(京都地方簡易裁判所、1999年調査、市埋文)では、鞆羽口・鏡鑄型・坩堝・取瓶が出土した。<sup>27)</sup>左京二条四坊十一町の試掘調査(御所南小学校、1992年調査、市埋文)では、炉壁・焼台・鏡鑄型・鞆羽口などが出土した。<sup>28)</sup>左京二条四坊十一町の調査(御所南小学校、1993年調査、市埋文)では、焼台・屏風・鏡鑄型・鞆羽口・刀装具鑄型・坩堝などが大量に出土した。<sup>29)</sup>左京三条三坊十五町の調査(ニチコン本社、2003年調査、古代文化調査会)では天秤計り鑄型(木瓜)・坩堝・取瓶・鞆羽口などが多数出土した。<sup>30)</sup>左京三条三坊十五町の調査(ハートンホテル、1994年調査、関西文化財調査会)では坩堝・銅地金などが出土した。<sup>31)</sup>左京三条三坊十町の調査(京都労働基準局、2002年調査、市埋文)では、鞆羽口・坩堝・取瓶・鏡鑄型・銅滓・炉壁などが出土した。<sup>32)</sup>左京三条三坊十一町の調査(明治生命ビル、1977年調査、古代学協会)では、鍛冶場跡、鞆羽口・坩堝などが出土し

<sup>33)</sup>た。左京三条三坊十二町の調査（千吉烏丸ビル、1969年調査、古代学協会）では、坩堝などが出土した。<sup>34)</sup>左京三条四坊六町十一町の調査（地下鉄東西線No.1416、1989年調査、市埋文）では、鋳型原型（木型）・坩堝・鞆羽口・銅製杓・銅滓・金属片などが出土した。<sup>35)</sup>左京四条四坊四町の調査（大丸百貨店駐車場、1994年調査、京都文化博物館）では、鏡鋳型・坩堝・鞆羽口・屏風・砥石などが出土した。<sup>36)</sup>

さらに、『舜旧記』・『京雀跡追』・『京羽二重織留』に記載された「かがみや」・「かざりや」・「あかがねや」・「しんちゅうや」などの位置を考え合わせると、<sup>37)</sup>おおむね北側が今出川通、東側が富小路通、南側が四条通、西側が西洞院通内に、金属加工に関する手工業者が散在し、江戸時代前期頃に当地域で金属の精錬や製品の生産が盛んに行われたことが明らかとなった。

### 10) 周辺地域での生業

今回の調査では、当地において金属精錬の他に鏡・飾金具、漆器、棹秤の棹、軟質施釉陶器・施釉陶器などの製造が推測できる。

今回の調査では、鏡（318～322）や飾金具の鋳型（314～317）が少量ながら出土したことは注目できる。調査地北側の御所南小学校の調査では鏡の鋳型が多量に出土し、<sup>38)</sup>史料では近隣に「鏡師」の記載はないが、周辺で鏡や飾金具などの鋳造が行われたと推定できる。さらに、土壌328から尻鉄のかたまり（746）が1点出土し、近隣で鉄製品の鋳造も行っていた可能性がある。

土壌2354・2520では漆容器（456・457）や、髹漆作業用ヘラ（419・420）などが出土した。左京三条三坊五町の調査（ハートンホテル、1994年調査、関西文化財調査会）では髹漆作業用ヘラ・漆容器・漆濾過用の袋などが出土した。<sup>39)</sup>『京雀跡追』には「うるしや 押小路柳のはゝかと」、『京羽二重織留』には「江戸本町四町目塗り物 柳ばゞ押小路上ル町 木村與三右衛門」「漆屋 柳のばゞ押小路下ル町 漆屋次郎七左衛門」などの記載があり、近隣で漆製品が生産されたと想定できる。

調査では、棹秤の棹・耳搔きなどが大量に出土し、未製品（590・592・593）や、加工用の骨・角片（608～614）などが出土した。3次調査や、富小路通押小路通の立会調査（立会調査、1991年）でも、牛馬骨を用いた未製品や端材が出土した。<sup>40)</sup>さらに左京三条三坊十五町の調査（2003年調査、関西調査会）では、天秤計り支柱の鋳型（木瓜）や天秤棹が出土した。<sup>41)</sup>『京羽二重織留』には「三条坊門通とみのこうじ 目貫小柄類」、『京羽二重』には「針口師 御池東洞院西へ入町 堺（中堀）與一朗」などの記載があり、天秤関係製品の金属製品や骨角製品の製造が周辺で行われたことが明らかとなった。

この他に、付近で陶器を生産していたと推定できるが、これは次節で詳細を述べる。

### (3) 土壌328出土土器・陶磁器類について

江戸時代前期の土壌328から、整理箱に約40箱分の土器・陶磁器類が出土した。この資料は、当該期における町内の廃棄土壌内の遺物である。遺物には、時期幅が若干認められるものの、ま

とまった量の良好な資料であるため、ここで若干の検討を行う。

**土器・陶磁器類の概要** 出土した土器・陶磁器類には、土師器・瓦器・磁器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器などの種類がある。国産陶器には瀬戸・美濃系、肥前（唐津）系、京焼などがあり、肥前系の磁器も含まれる。肥前系磁器には、17世紀半ばの染付・白磁・青磁などの器種がある。輸入陶磁器には明末の芙蓉手・呉須赤絵、朝鮮産の椀・皿、タイ産の椀・皿、ベトナム産の椀なども含む。焼締陶器には唐津産、備前産、丹波産、信楽産のほかに、ベトナム産の壺、タイ産の四耳壺、中国産の壺なども含む。

**陶磁器の時期** 出土遺物の中で最も古い時期のものは、16世紀後半の輸入の青白磁合子蓋 144 がある。これに対し、最も新しい時期の遺物には肥前系染付蝶文椀 86 があげられる。この椀は生産地では 1670 年代が与えられる<sup>42)</sup>。中国などからの輸入陶磁器は 16 世紀後半からのものが少量あり、他は 17 世紀前半のものが多くを占める。生産地別では、17 世紀前半の景德鎮窯系に加えて、漳州窯系の青花椀皿類などがある。国産陶器では、17 世紀前半の肥前（唐津）系、瀬戸・美濃系陶器などがある。京焼の椀類は 17 世紀中頃である。

出土土器類の中で、主体をなす土師器皿は XI 期中～新段階（17 世紀中頃）に属しているが、伴出した陶磁器類などから考え、全体ではやや時間幅をもつ。

**陶磁器の組成（器種）** 出土土器類 33,728 点の総破片を分類すると、土師器類の出土は全体のほぼ 60% に達し、同時期の遺構と同様の傾向を示す。陶器は施釉陶器と焼締陶器を含めて約 20% を占める。肥前系磁器の割合は全体の約 14% で、瀬戸・美濃系陶器の約 2 倍弱出土した。他には瓦器が約 4% ある。中国産などの輸入磁器類は 3% 弱である。

国産の陶磁器 11,498 点の中で、磁器は 4,589 点、約 40% を占める。その内、染付は 2,903 点で磁器の約 60% を占める。次に白磁が 832 点、青磁は 752 点と共に 2 割弱の割合である。色絵はごく少量である。国産陶器では、肥前系が最も多く 2,161 点で、25% 以上を占める。次いで瀬戸・美濃系が 1,305 点である。以下、信楽、丹波、備前、京都と続く。輸入陶磁器は 869 点出土し、青花が 465 点で、5 割以上を占める。色絵は少ない。陶器の中には、中国以外のベトナム、タイ、朝鮮産のものを含む。

**（器形）** 国産の磁器 4,598 点の中では、椀・皿類が 4,277 点と多く、9 割を越える。次いで壺・甕が 1 割弱になる。陶器では椀・皿類が 2,949 点と多く、7 割を越える。次いで壺・甕がほぼ 1 割、盤・大皿が 1 割弱になる。磁器に比べ器種が多様である。輸入の陶磁器 869 点の中では、椀・皿類が 570 点あり、壺・甕がほぼ 3 割に達する。

**タイ産焼締四耳壺について** タイのメナム・ノイ窯産焼締四耳壺<sup>43)</sup>が数個体分出土した。最近の京都市内の調査においても、各所で東南アジア産の陶磁器類の出土例が増加している。京都以外では、長崎・博多・大分府内・堺・大坂城下などで出土例が見られる。

四耳壺 258 には、内外面に漆が大量に付着する。この漆は「チチオール」というタイ・カンボジア・ミャンマーあたりで採取される漆で、ベトナム・台湾産の「ラッコール」、日本・中国産の「ウルシオール」とは種類が異なる<sup>44)</sup>。「南蛮屏風」には、この四耳壺と同様の壺が陸揚げされたことが描

表7 土壙 328 出土総破片数分類

種類	器種	破片数	比率 (%)	種類	器形	破片数	比率 (%)	
土師器		20,194	59.9	国産磁器	碗・皿・鉢	4,277	93.0	
瓦器		1,167	3.4		壺・甕	170	3.7	
国産磁器	染付	2,903	63.1		盤・大皿	61	1.3	
	白磁	832	18.1		他・不明	90	2.0	
	青磁・青磁染付	752	16.4	13.6	小計	4,598	100.0	
	色絵・赤絵	72	1.6		国産陶器	碗・皿	2,879	74.4
	他・不明	39	0.8		鉢・向付	70	1.8	
	小計	4,598	100.0		壺・甕	385	9.9	
国産陶器	瀬戸・美濃	1,305	33.7		盤・大皿	312	8.1	
	唐津	2,161	55.8		他・不明	226	5.8	
	京焼	246	6.4	11.5	小計	3,872	100.0	
	他・不明	160	4.1		輸入陶磁器	碗・皿・鉢	570	65.6
	小計	3,872	100.0		壺・甕	244	28.1	
焼締陶器	備前	264	8.7		盤・大皿	20	2.3	
	信楽 (伊賀)	1,360	44.9		他・不明	35	4.0	
	丹波	977	32.3	9.0	小計	869	100.0	
	常滑	5	0.2					
	他・不明	422	13.9					
	小計	3,028	100.0					
輸入陶磁器	青花	465	53.5					
	白磁	65	7.5					
	青磁	4	0.5					
	色絵・赤絵	21	2.4	2.6				
	南方系	277	31.9					
	他	37	4.2					
	小計	869	100.0					
総数		33,728	100.0					

かれ、<sup>45)</sup>さらに、当時のオランダ商館長の日記には、平戸・長崎に中国・シヤムなどから大量の漆が搬入されたことが記される。<sup>46)</sup>このことから、今回出土したタイ産の四耳壺を容器として、タイ産の漆液が輸入されたと推測できる。

しかし、堺市環濠都市遺跡では、壺に硫黄を充満していた例もあり、<sup>47)</sup>多様なものの運搬容器として利用されたと考えられる。

軟質施釉陶器と未製品について (図 23) この遺構からは、いわゆる軟質施釉陶器のほか、未施釉の素焼きの陶器 (未製品) などが、少なからず出土した。その内容は、軟質施釉陶器 19 点、未施釉の素焼きの陶器 14 点である。これらの資料は、当地域で生産された可能性を示す遺物と推測できるので、ここでふれてみたい。

軟質施釉陶器には、未施釉の未製品も含めて、茶碗・茶入・水滴・皿・鉢・灯明皿・小型片口・ミニチュア茶碗などがある。これらに使われている胎土には、白色と赤色を呈するものの 2 種類があるが、多くは白色であり、赤色胎土のものは、灯明皿・水滴・茶碗などの一部に限られている。外面の白化粧は、赤色胎土の茶碗に認められる他、白色胎土の器にも少量見られる。器体の成形手法は 3 種に分かれ、ロクロ成形が主体であるが、筒型碗の一部やミニチュア茶碗などには手捏ねのものがある。また、型成形と推定できるものも少量存在する。

未製品と推定できる素焼きの器形には、椀・鉢・茶入・壺・蓋・灯明皿などがある。それらの資料には、①単に素焼きしただけのもの（素地）、②素地に釉下彩の下絵を墨で描いたもの、③墨描きの下絵に沿って色絵の具を施すものがあり、製作工程の各段階のものが確認できる。特に注目できるのは、高火度焼成の京焼と共通する器形の未製品（素地）が出土していることで、高台内に小判形枠の「岩倉」印が押捺されているものもある。

これらの軟質施釉陶器・未製品の出土分布は図 23 に示した。調査地全域にわたって分布するが、特に調査区の北辺（土壙 328 周辺）と南辺に集中する傾向が見られる。

さらに、陶器生産に関係する窯道具（307～312・377～379）も出土した。トチンの器形には、環状のもの、円盤状のものがある。さらに、陶器焼成に使用した窯体の一部や、窯内で使用す

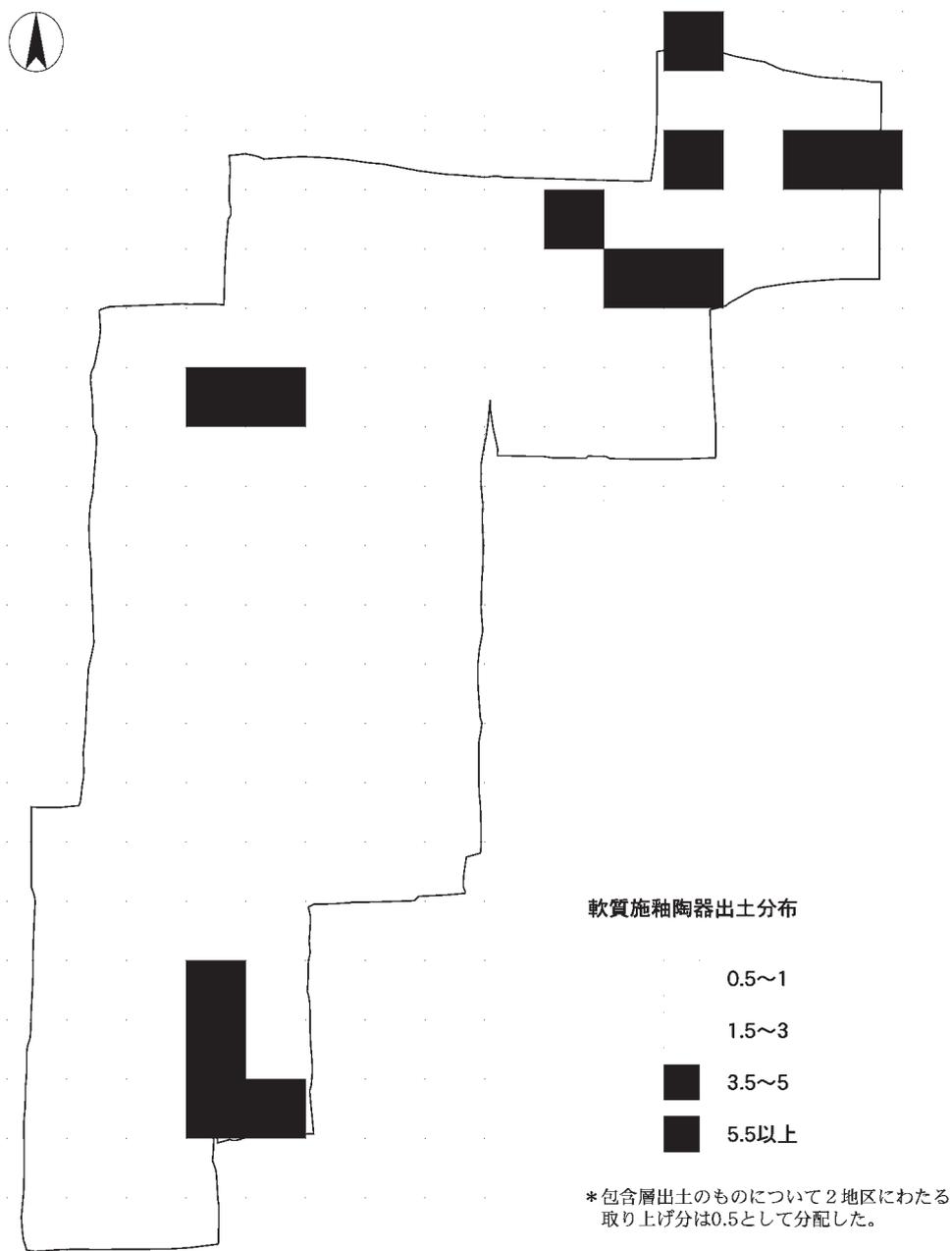


図 23 軟質施釉陶器出土分布図（1：500）

る棚の破片と推定できる資料も確認し、体部内外面に釉薬が付着した個体も認められる。

以上のように、当調査では、軟質施釉陶器と陶器の未製品、および陶器焼成関連遺物が確認できた。このことから、当調査地周辺において軟質施釉陶器の生産が行われていた可能性が高い。

京焼陶工尾形乾山の『陶工必用』には、「京都押小路柳馬場ノ東」に「押小路焼物師一文字屋助左衛門」が所在したとの記載があり、調査地がその南隣接地にあたることから、今回出土した軟質施釉陶器および未製品が押小路焼に相当する蓋然性は高いといえる。

さらに、京焼とみられる印銘の押捺された高火度焼成品が多数出土したことも注目できる。これらの資料には、銕絵や染付で文様が施されているものも少なくない。京焼には銕絵・染付に加えて上絵付けが施されている例も多くあるので、これらの資料は当地域で上絵付けを施すため他の窯からの製品が持ち込まれたと推定できる。当初、軟質施釉陶器の生産を行っていた押小路焼物師は、後に色絵陶器の絵付けにその活動内容を変えたともみることができよう。

#### (4) 金属関係遺物の分析について (表 8・9、図 24・25)

##### 1) 分析の概要

出土資料の分析については、X線解析を株式会社堀場製作所京都本社に依頼し、同社分析センターが 2005 年 10 月 13 日に実施した。

分析を行った鉍滓は、炉跡床面を構成する整地土層中から出土したものの内、原材料として搬入された金属片もしくは精錬・鋳造の後にできあがった製品ではないと推定できるものを除き、形状が整っておらず、できるだけ作業中に落下したと推定できるものを選択した。

##### 2) 分析方法

鉍滓資料(資料 1～4)は、観察を行う部分をダイヤモンドカッターで切断し、セルの中に切断面を上にして据え、X線の照射を行った。

金属生産関係土製品(資料 5～10)の分析は、資料の中で最も溶解した部分を、分析に必要な最小量(約 1 g)を削り取り、セルの中に入れ、X線の照射を行った。

各資料のX線解析に使用した装置は、「HORIBA エネルギー分散型 蛍光X線元素分析装置 MESA-500W」を使用した。

##### 3) 分析結果

資料 1 資料 1 は、工房東半部第 1 床面掘り下げ整地土層から出土した鉍滓である。重量は 167.8 g である。分析結果は、他の不純物が余り含まれていない、銅と亜鉛の化合物である。銅と亜鉛の比率は、約 8 : 2 で純度の高い真鍮である。

資料 2 資料 2 は、工房東半部第 1 床面掘り下げ整地土層から出土した鉍滓(581)である。重量は 87.3 g である。分析結果は、他の不純物がほとんど含まれていない、銅と亜鉛の化合物である。銅と亜鉛の比率は、約 7 : 3 で純度の高い真鍮である。

資料3 資料3は、工房東半部第2床面掘り下げ整地土層から出土した鉱滓である。重量は42.7 gである。分析結果は、若干の不純物を含むが、主体は銅と亜鉛の化合物である。銅と亜鉛の比率は、約9：1の真鍮である。

資料4 資料4は、工房東半部第3床面掘り下げ整地土層から出土した鉱滓である。重量は23 gである。分析結果は、若干の不純物を含むが、純度の高い銅である。

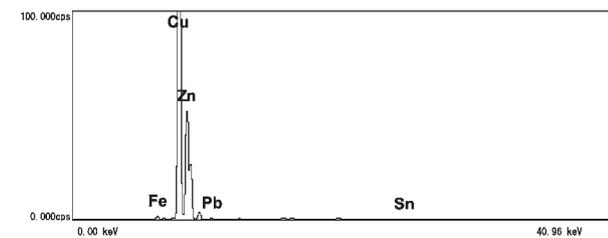
資料5 資料5は、井戸2078掘形から出土したAⅠ型坩堝（323）である。分析資料は口縁部付近を削り取った。分析結果は、珪素が最も多く、次にカリウム・カルシウムで、銅と亜鉛が同比率で約1割ずつ付着する。

資料6 資料6は、2区井戸2084から出土したAⅡ型坩堝（368）である。分析資料は体部付近を削り取った。分析結果は主体は鉄・カリウム・カルシウムで、亜鉛が2%付着している。

資料7 資料7は、竪穴276から出土したBⅠ型坩堝（330）である。分析資料は口縁部付近を削り取った。分析結果は、不純物を多く含むが、珪素が最も多く、銅が2割を占め亜鉛も2%付着する。

表8 工房出土鉱滓分析表

資料1



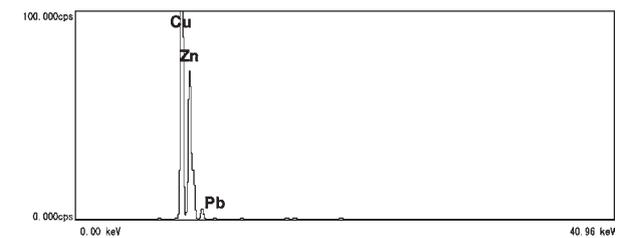
1078-2.SPM ('05/10/18 13:32)

測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 7 μA  
試料室 : 大気 試料種 : あり

定量補正法 : スタンダード法

元素	ラシ	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps/μA]
26 Fe 鉄	K	0.25	0.05	2.166
29 Cu 銅	K	78.69	1.28	484.669
30 Zn 亜鉛	K	19.81	1.29	141.942
50 Sn すず	K	0.20	0.08	0.474
82 Pb 鉛	L	1.05	0.17	1.496

資料2



1134-8.2.SPM ('05/10/18 13:28)

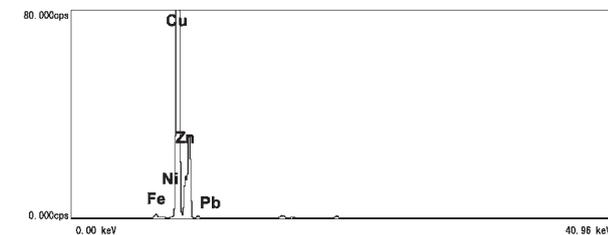
断面測定

測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 7 μA  
試料室 : 大気 試料種 : あり

定量補正法 : スタンダード法

元素	ラシ	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps/μA]
29 Cu 銅	K	70.68	1.32	435.788
30 Zn 亜鉛	K	28.12	1.34	199.143
82 Pb 鉛	L	1.20	0.17	1.672

資料3



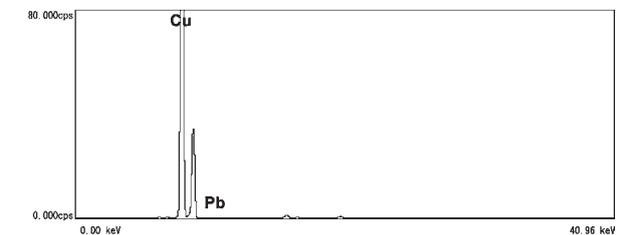
510-5.SPM ('05/10/18 13:24)

測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 7 μA  
試料室 : 大気 試料種 : あり

定量補正法 : スタンダード法

元素	ラシ	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps/μA]
26 Fe 鉄	K	0.30	0.05	2.662
28 Ni ニッケル	K	0.02	0.02	0.166
29 Cu 銅	K	93.43	0.38	572.711
30 Zn 亜鉛	K	5.80	0.37	42.101
82 Pb 鉛	L	0.44	0.11	0.634

資料4



540-9.SPM ('05/10/18 13:17)

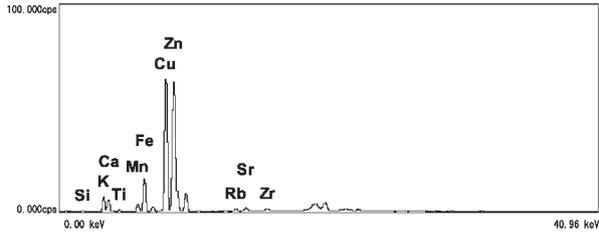
測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 7 μA  
試料室 : 大気 試料種 : あり

定量補正法 : スタンダード法

元素	ラシ	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps/μA]
29 Cu 銅	K	99.73	0.09	622.021
82 Pb 鉛	L	0.27	0.09	0.388

表9 金属関係土製品分析表

資料5



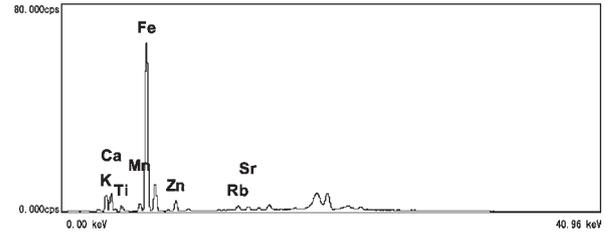
323.SPM ('05/10/18 12:53)

測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 20 μA  
試料室 : 大気 試料枚 : なし

定量補正法 : スパイク法

元素	ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/μA]
14 Si	けい素	44.26	8.79	0.351
19 K	カリウム	17.37	2.83	5.088
20 Ca	カルシウム	10.69	1.79	4.153
22 Ti	チタン	0.71	0.17	0.625
25 Mn	マンガン	1.18	0.20	3.024
26 Fe	鉄	3.97	0.64	13.323
29 Cu	銅	11.41	1.81	58.025
30 Zn	亜鉛	10.03	1.70	60.056
37 Rb	ルビウム	0.14	0.03	1.392
38 Sr	ストロンチウム	0.15	0.03	1.609
40 Zr	ジルコニウム	0.08	0.02	1.111

資料6



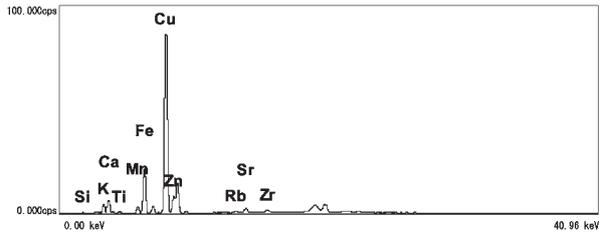
368.SPM ('05/10/18 12:58)

測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 38 μA  
試料室 : 大気 試料枚 : あり

定量補正法 : スパイク法

元素	ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/μA]
19 K	カリウム	22.10	0.97	2.390
20 Ca	カルシウム	20.60	0.97	2.436
22 Ti	チタン	3.96	0.38	0.912
25 Mn	マンガン	2.28	0.20	1.167
26 Fe	鉄	48.02	0.90	29.779
30 Zn	亜鉛	2.13	0.32	1.841
37 Rb	ルビウム	0.52	0.08	1.037
38 Sr	ストロンチウム	0.38	0.06	0.853

資料7



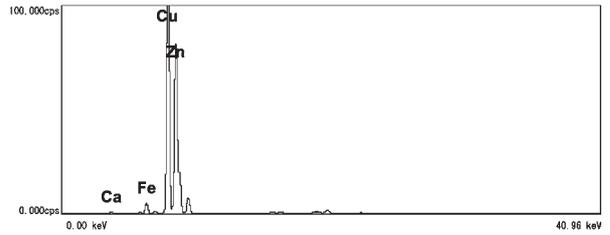
214.SPM ('05/10/18 13:13)

測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 22 μA  
試料室 : 大気 試料枚 : あり

定量補正法 : スパイク法

元素	ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/μA]
14 Si	けい素	32.43	5.89	0.103
19 K	カリウム	14.68	1.51	2.928
20 Ca	カルシウム	15.64	1.56	4.248
22 Ti	チタン	0.90	0.19	0.523
25 Mn	マンガン	1.34	0.15	2.219
26 Fe	鉄	7.67	0.70	16.448
29 Cu	銅	24.85	2.19	73.211
30 Zn	亜鉛	1.87	0.34	6.655
37 Rb	ルビウム	0.13	0.04	0.756
38 Sr	ストロンチウム	0.04	0.05	2.177
40 Zr	ジルコニウム	0.15	0.03	1.129

資料8



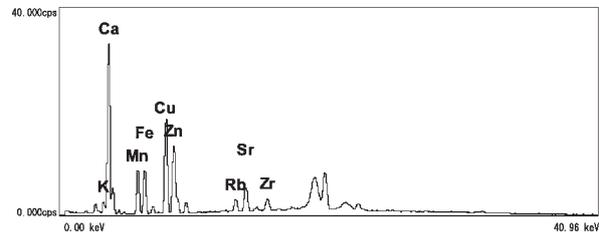
346.SPM ('05/10/18 13:02)

測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 12 μA  
試料室 : 大気 試料枚 : あり

定量補正法 : スパイク法

元素	ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/μA]
20 Ca	カルシウム	1.54	0.34	0.688
26 Fe	鉄	1.47	0.09	6.557
29 Cu	銅	61.72	1.38	203.554
30 Zn	亜鉛	35.26	1.43	132.098

資料9



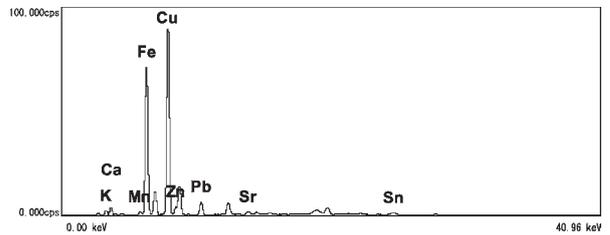
474.SPM ('05/10/18 13:09)

測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 42 μA  
試料室 : 大気 試料枚 : あり

定量補正法 : スパイク法

元素	ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/μA]
19 K	カリウム	5.37	0.55	0.792
20 Ca	カルシウム	70.27	0.74	11.893
25 Mn	マンガン	6.68	0.27	3.379
26 Fe	鉄	4.62	0.23	3.073
29 Cu	銅	7.04	0.21	7.879
30 Zn	亜鉛	4.45	0.45	5.969
37 Rb	ルビウム	0.46	0.06	1.238
38 Sr	ストロンチウム	0.87	0.06	2.611
40 Zr	ジルコニウム	0.24	0.06	0.874

資料10



1194.SPM ('05/10/18 13:06)

測定時間 : 100 sec  
X線管電圧 : 50 kV 電流 : 26 μA  
試料室 : 大気 試料枚 : あり

定量補正法 : スパイク法

元素	ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/μA]
19 K	カリウム	7.94	0.70	1.245
20 Ca	カルシウム	9.04	0.63	2.144
25 Mn	マンガン	0.62	0.09	0.777
26 Fe	鉄	30.04	0.45	47.301
29 Cu	銅	41.36	0.55	64.070
30 Zn	亜鉛	1.28	0.12	2.375
38 Sr	ストロンチウム	0.34	0.06	0.991
50 Sn	スズ	1.50	0.18	1.427
82 Pb	鉛	6.97	0.28	4.642



図 24 工房出土鉾滓分析資料（資料 1～4）

13) 家崎孝治『平安京左京三条四坊十一町ーコスモシティ御池富小路新築に伴う調査ー』古代文化調査

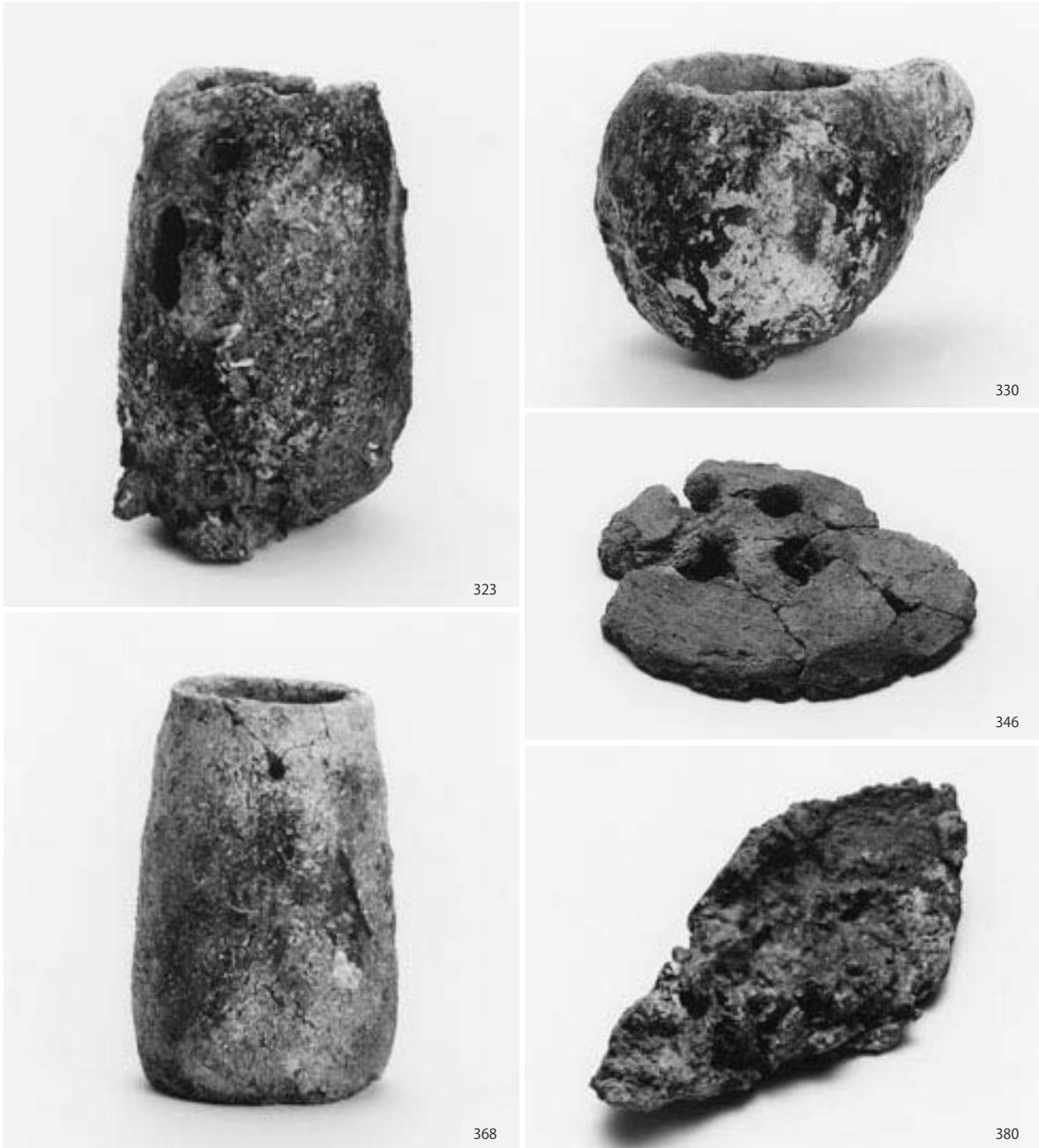


図 25 金属生産関係土製品分析資料（資料 5～8・10）

資料 8 資料 8 は、工房東半部第 1 床面掘り下げ整地土層から出土した炉蓋 B 型 (346) である。分析資料は下面を削り取った。分析結果は、若干の不純物を含むが、主体は銅と亜鉛の化合物である。銅と亜鉛の比率は、約 6 : 4 である。

資料 9 資料 9 は、工房東半部第 1 床面から検出した炉 291 の窯体である。炉は円形竪型 1 B 類である。分析資料は内側面溶解部付近を削り取った。分析結果は、不純物を多く含むが、カルシウムが最も多く、銅・亜鉛も 5 % 程度付着する。

資料 10 資料 10 は、工房東半部整地土層から出土した馬蹄形炉壁 (380) の破片である。分析資料は内側面溶解部付近を削り取った。分析結果は、不純物を多く含むが、鉄と銅が最も多く、亜鉛も 10 % 程度付着する。

#### 註

- 1) 歴史的状況については、京都市編『史料 京都の歴史』第 9 巻 中京区 平凡社 1985 年、『京都市の地名』平凡社 1979 年、『平安京提要』角川書店 1994 年、などを参考にした。
- 2) 京都市埋蔵文化財研究所編『京都市域における埋蔵文化財の発掘試掘立会調査一覧 1981』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1982 年。
- 3) 小森俊寛・上村憲章「平安京左京三条四坊」『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1993 年。小森俊寛・上村憲章・原山充志・長戸満男「平安京左京三条四坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994 年。小森俊寛・上村憲章・百瀬正恒「平安京左京三条四坊」『平成 4 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995 年。
- 4) 上村憲章・鎌田泰知「平安京左京三条四坊四町跡」京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2001-10、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2003 年。
- 5) 寺島孝一・乗安和二三・松井忠春ほか『東洞院大路・曇華院跡 中京郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』平安京跡研究調査報告 第 3 輯、近畿郵政局・平安博物館、1977 年。山田邦和「左京全町の概要」『平安京提要』角川書店、1994 年。
- 6) 植山 茂・山田邦和・寺升初代・岡 桂子・南 博史『平安京左京三条四坊四町』京都文化博物館(仮称)調査研究報告 第 2 集、京都文化財団、1988 年。
- 7) 片岡 肇・南 博史・鋤柄俊夫・田中 聡・岩元雅毅『平安京高倉宮・曇華院跡』平安京跡研究調査報告 第 8 輯、古代学協会、1983 年。
- 8) 飯島武次・片岡 肇・寺島孝一『平安京高倉宮・曇華院跡の発掘調査』古代学協会、1979 年。
- 9) 片岡 肇・植山 茂・山田邦和・森下英治・寺升初代・川内由美子・岡 桂子『平安京高倉宮・曇華院跡第 4 次調査』平安京跡研究調査報告 第 18 輯、古代学協会、1987 年。
- 10) 家崎孝治『平安京左京三条四坊五町ーメロディーハイム堺町新築に伴う調査ー』古代文化調査会、2001 年。
- 11) 京都市編『史料 京都の歴史』第 2 巻 考古、平凡社、1983 年。
- 12) 尾藤徳行『平安京左京三条四坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-4、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004 年。

- 会、2002年。
- 14) 堀内明博「平安京左京三条四坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1991年。
  - 15) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1999年。
  - 16) 渡辺 誠「焼塩壺」『江戸の食文化』吉川弘文館、1992年。
  - 17) 難波洋三「徳川氏大坂城期の焙烙」『難波宮址の研究 第九』(財)大阪市文化財協会、1992年。
  - 18) 茶道資料館編『東南アジアの茶道具』茶道資料館、2002年。
  - 19) Caaruk Wiraikeow「タイ国シンブリー県ノイ川窯跡発掘調査報告書」『関西近世研究2』関西近世研究会、2002年。
  - 20) 古泉弘「日本の初期煙管に関する覚書」『平井尚志先生古希記念考古学論攷』2、1992年。
  - 21) 註3と同じ。
  - 22) 高橋康夫『京都中世都市史研究』思文閣出版、1983年。
  - 23) 宋 應星撰 藪内清訳注『天工開物』東洋文庫130、平凡社
  - 24) 伊藤博之・小泉好延・原 祐一『日本における真鍮の歴史』
  - 25) 木下保明・本 弥八郎・平田 泰「平安京左京一条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1989年。
  - 26) 山本雅和・磯部 勝「平安京左京二条三坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年。
  - 27) 山本雅和・上村和直『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第19冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2001年。
  - 28) 吉崎 伸「平安京左京二条四坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年。
  - 29) 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広「平安京左京二条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。久世康博「京都柳馬場通竹屋町出土の柄鏡鑄型資料」『研究紀要』第3号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。
  - 30) 家崎孝治『平安京左京三条三坊十五町ーニチコン株式会社本社新築に伴う調査ー』古代文化調査会、2004年。
  - 31) 吉川義彦『平安京左京三条三坊十五町埋蔵文化財発掘調査終了報告』関西文化財調査会、1995年。
  - 32) 山本雅和『平安京左京三条三坊十町(押小路殿・二条殿)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-7、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。
  - 33) 松井忠春・横田洋三・芝野康之『押小路殿跡 平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告 第12輯、古代学協会、1984年。
  - 34) 下條信行・植山 茂・定森秀夫・隴谷 寿『三条西殿跡』平安京跡研究調査報告 第7輯、古代学協会、1983年。
  - 35) 小森俊寛・長戸満男・原山充志「平安京左京三条四坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1993年。
  - 36) 植山 茂・南 博史・山下秀樹・定森秀夫『平安京左京四条四坊四町 京都市中京区阪東屋町』京都文化博物館研究報告 第9集、同博物館、1993年。

- 37) 久保智康『中世・近世の鏡』日本の美術No. 394、至文堂、1999年。『飾金具』日本の美術No. 437、至文堂、2002年。
- 38) 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広「平安京左京二条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。
- 39) 註31と同じ。
- 40) 竜子正彦「平安京左京三条四坊」『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度、京都市文化観光局、1992年。
- 41) 註31と同じ。
- 42) 九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会、2000年。
- 43) 註19に同じ。
- 44) 明治大学 宮越哲雄氏のご教示による。
- 45) 坂本満編『南蛮屏風』日本の美術No. 135、至文堂、1977年。
- 46) 東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料オランダ商館長日記』1～9、東京大学出版会、1976～2001年。
- 47) 續伸一朗他『堺市文化財調査報告第49集』堺市教育委員会、1989年。

付表1 土壙328出土土器・陶磁器類観察表（図版30～41・84～87、図6）

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
1	土師器	皿Nr	口縁部は緩やかに屈曲して、内 弯気味に開く。浅い。小型。	底部・口縁部外面はオサエ。底 部内面はナデ。	口径5.7・器高1.5。口 縁完存。2.5Y7/3浅黄 色。	2区土壙328 第4層。
2			同上。	同上。	口径5.7・器高1.5。口 縁完存。2.5Y7/3浅黄 色。	同上。
3			同上。	同上。	口径5.8・器高1.3。口 縁完存。2.5Y7/3浅黄 色。	同上。
4			同上。	同上。	口径6.0・器高1.1。口 縁完存。10YR7/4に ぶい黄橙色。底部中央 に穿孔。	2区土壙328 第2層。
5			同上。	同上。	口径5.9・器高1.2。口 縁完存。7.5YR7/6橙 色。	2区土壙328 第1層。
6			同上。	底部・口縁部外面下位はオサエ。 底部内面はナデ、口縁部外面上 位は横ナデ。	口径6.1・器高1.5。口 縁完存。7.5YR7/6橙 色。灯明皿。	同上。
7			同上。	同上。	口径6.2・器高1.3。口 縁完存。7.5YR7/6橙 色。	同上。
8			同上。	底部・口縁部外面はオサエ、内 面はナデ。	口径7.0・器高1.7。口 縁完存。10YR7/3に ぶい黄橙色。	2区土壙328 第2層
9			同上。	同上。	口径7.2・器高1.6。口 縁完存。2.5Y7/3浅黄 色。灯明。	1区土壙328 第3層。
10	土師器	皿Nr -h	口縁部は緩やかに内弯して開き、 底部中央が上に突出する。	同上。	口径5.9・器高1.4。口 縁1/2以上。10YR7/4 にぶい黄橙色。ヘソ皿。	1区土壙328 第2層。
11			口縁部は緩やかに内弯して開き、 端部は尖る。中型。	底部・口縁部外面下位はオサエ 後ナデ。底部内面はナデ、口縁 部内面・外面上位は横ナデ。	口径9.4・器高1.9。口 縁完存。5YR6/6橙色。	2区土壙328 第1層。
12			同上。	同上。	口径9.5・器高1.9。口 縁完存。2.5Y7/3浅黄 色。	同上。
13			同上。	同上。	口径9.6・器高1.9。口 縁ほぼ完存。5YR7/6 橙色。	同上。
14			同上。	同上。	口径9.5・器高1.9。口 縁ほぼ完存。5YR7/6 橙色。	同上。
15			同上。	同上。	口径9.4・器高2.0。口 縁1/2以上。7.5Y6/6 ～7/6橙色。	同上。
16			同上。	同上。	口径9.7・器高2.0。口 縁ほぼ完存。7.5YR8/ 4浅黄橙色。灯明皿。	同上。
17			同上。	同上。	口径9.8・器高2.0。口 縁1/2以上。5YR7/6 ～6/6橙色。灯明皿。	同上。
18			同上。	同上。	口径9.4・器高2.2。口 縁1/2以上。7.5YR7/ 4～6/4にぶい橙色。	2区土壙328 第2層。
19	土師器	皿Sa	口縁部は緩やかに内弯して開き、 端部は尖る。底部から口縁部の 屈曲部は凹む。大型。	同上。	口径10.2・器高2.2。 口縁完存。10YR8/3 浅黄橙色。灯明皿。	2区土壙328 第1層。

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構	
20	土師器	皿Sa	口縁部は緩やかに内弯して開き、端部は尖る。底部から口縁部の屈曲部は凹む。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデ。	口径10.3・器高2.0。口縁ほぼ完存。10YR8/3～8/4浅黄橙色。	1区土壙328第2層。	
21			同上。	同上。	口径10.3・器高2.1。口縁完存。7.5YR8/3～8/4浅黄橙色。	2区土壙328第1層。	
22			同上。	同上。	口径10.4・器高2.3。口縁完存。2.5Y7/2灰黄色。	同上。	
23			同上。	同上。	口径10.6・器高2.3。口縁完存。7.5YR8/4浅黄橙色。	1区土壙328第2層。	
24			同上。	同上。	口径10.7・器高2.2。口縁完存。10YR8/3浅黄橙色。	1区土壙328第4層。	
25			同上。	同上。	口径11.0・器高2.0。口縁完存。10YR7/3～7/4にぶい橙色。	1区土壙328第3層。	
26			同上。	同上。	口径11.0・器高2.2。口縁完存。7.5YR7/4にぶい橙色。	同上。	
27			同上。	同上。	口径11.4・器高2.3。口縁完存。7.5YR7/4にぶい橙色。	1区土壙328第2層。	
28			同上。	同上。	口径11.4・器高2.2。口縁完存。5Y8/4浅黄色。	1区土壙328第3層。	
29			同上。	同上。	口径11.6・器高2.1。口縁1/2以上。7.5YR7/4にぶい橙色。	2区土壙328第1層。	
30			同上。	同上。	口径11.8・器高2.1。口縁ほぼ完存。7.5YR7/4にぶい橙色。	1区土壙328第2層。	
31			同上。	同上。	口径12.5・器高2.5。口縁1/4以上。10YR7/3～7/4にぶい橙色。	1区土壙328第4層。	
32			同上。	同上。	口径12.7・器高2.5。口縁1/2以上。7.5YR7/4にぶい橙色。	同上。	
33			同上。	同上。	口径17.0・器高2.5。2.5Y6/4にぶい黄色。	2区土壙328第2層。	
34			同上。	同上。	口径17.7・器高2.5。10YR7/3～7/4にぶい黄橙色。	1区土壙328第1層。	
35			耳皿	口縁部は両側が屈曲して内傾する。器壁が厚い。小型。	底部外面はオサエ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	口径5.6・器高2.2。口縁完存。7.5YR6/6～7/6明黄褐色。	2区土壙328第1層。
36				同上。	同上。	口径6.0・器高2.4。口縁完存。7.5YR6/6～7/6明黄褐色。	同上。
37			皿	体部は浅い半球形で、口縁部にひだを付ける。	底部・体部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面はオサエ。	口径6.6・器高2.1。口縁1/4以上。2.5Y8/3浅黄色。	2区土壙328第2層。
38			小型壺	体部は内弯し、口縁部は内傾して、端部は尖る。	底部内外面・体部口縁部外面はナデ、体部・口縁部内面は横ナデ。	口径3.4・器高2.3。口縁完存。10YR8/3～8/4浅黄色。	2区土壙328第1層。
39	同上。	同上。		口径3.2・器高2.6。口縁完存。2.5Y8/3～8/4浅黄色。	同上。		

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
40		焼塩壺蓋	天井部はふくらみ、口縁部は開く。	天井部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	口径6.4・器高2.2。口縁完存。5YR6/6~7/6明黄褐色。	2区土壙328第1層。
41			同上。	同上。	口径6.6・器高2.2。口縁完存。7.5YR6/6~7/6橙色。	同上。
42			天井部は平坦で、口縁部は開く。	同上。	口径7.2・器高2.3。口縁完存。2.5Y8/1~8/2灰白色。	同上。
43			同上。	同上。	口径7.4・器高2.0。口縁完存。5YR4/6赤褐色。	同上。
44			同上。	同上。	口径8.2・器高1.6。口縁1/2以上。5YR6/6~7/6橙色。	同上。
45			同上。	同上。	口径8.2・器高1.9。口縁1/2以上。5YR6/6~7/6橙色。	1区土壙328第2層。
46	土師器	焼塩壺	体部は球形で、口縁部はすぼまる。	底部・体部外面はナデ、内面はオサエ。口縁部内外面は横ナデ。	口径6.3・器高6.1。口縁完存。10YR7/4にぶい黄褐色。京都産。	2区土壙328第1層。
47			同上。	同上。	口径6.6・器高7.3。口縁完存。10YR7/6明黄褐色。京都産。	1区土壙328第4層。
48			体部は直立し、口縁部はすぼまる。外面に段あり。体部外面は面取状になる。	底部・体部外面はナデ、内面はしぼり後オサエ。口縁部内外面は横ナデ。	口径6.3・器高8.7。口縁完存。10YR6/6明黄褐色。堺産。	1区土壙328第2層。
49			同上。	同上。	口径6.3・器高8.4。口縁完存。7.5YR6/8橙色。堺産。	2区土壙328第2層。
50			同上。	同上。	口径7.8・器高11.2。口縁完存。7.5YR6/6橙色。二重杵「天下一堺ミなど／籐左衛門」刻印あり。	同上。
51	同上。	同上。	口径8.0・器高11.1。口縁完存。7.5YR5/4にぶい褐色。二重杵「天下一堺ミなど／籐左衛門」刻印あり。	同上。		
52		丸底鉢	体部は浅い半球形で、口縁部は内傾する。	底部・体部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	口径9.0・器高4.2。口縁1/2以上。2.5Y8/2灰白色。	同上。
53			同上	同上	口径15.0・器高6.0。口縁1/2以上。2.5Y8/3淡黄色。	2区土壙328第1層。
54		鉢	体部は内傾して立ち上がる。底部は平坦。口縁端部に面あり。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ。	口径7.0・器高5.0。口縁1/2以上。10YR8/2灰白色。	1区土壙328第3層。
55		火入れ	体部は直立して立ち上がる。底部は平坦で、三足あり。口縁端部に面あり。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ、体部外面は横ミガキ。足は貼付。	口径12.8・器高6.2。口縁1/4以上。5YR6/4にぶい橙色。	2区土壙328第1層。
56		火消壺蓋	天井部は平坦で、口縁部は短く開く。	天井部外面はオサエ後ナデ。天井部内面・口縁部内外面は横ナデ。	口径20.7・器高2.3。口縁1/5。10YR8/1~8/2灰白色。	2区土壙328第2層。
57		焙烙	体部は浅い半球形で、口縁部は屈曲して開く。端部は立ち上がる。器壁は薄い。	底部・体部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。型作り。	口径30.8・器高5.7以上。口縁1/6以下。10YR7/4にぶい黄褐色。	1区土壙328第4層。
58	体部は浅い半球形で、口縁部は屈曲して開く。端部は肥厚して面がある。器壁は薄い。		同上。	口径31.6・器高7.0。口縁1/4以上。7.5YR2/2黒褐色。	2区土壙328第1層。	

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
59	土師器	焙烙	体部は浅い半球形で、口縁部は屈曲して開く。端部は肥厚して面がある。器壁は薄い。	底部・体部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	口径30.4・器高9.4。口縁1/2以上。7.5YR 8/8黄橙色。	1区土壙328第2層。
60		灰器	体部は浅く、底部はやや平坦で、口縁部は内に屈曲して、端部は肥厚して面がある。	底部・体部外面はナデ後ハケ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。口縁部に片口を付け、格子目タタキ。	口径31.0・器高8.5。口縁ほぼ完存。7.5YR 7/6橙色。	2区土壙328第1層。
61		秉燭蓋	天井部はふくらみ、体部は直線的に垂下する。天井部中央につまみが付き、上部は皿状になる。体部前後面に透かし孔あり。	天井部・体部外面はナデ、内面はオサエ後ナデ。つまみ内外面は横ナデ。透かしはヘラ切り。	口径18.3・器高21.0。口縁1/2以上。10YR7/4にぶい黄橙色。	同上。
62		秉燭身	体部は内弯して開き、受部は水平に開く。立ち上がり部はやや内傾し、端部は丸く収まる。高台あり。立ち上がり部の一部に半円形の反射板が付く。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・立ち上がり部内外面は横ナデ後体部外面はミガキ。貼付高台。	口径18.6。口縁1/4以上。10YR7/4にぶい黄橙色。	同上。
63	羽釜		体部は扁平な球形で、口縁部は大きく屈曲して、端部は立ち上がる。体部下位に鏝あり。	底部内外面はナデ。体部内面はナデ後ハケ。口縁部内外面は横ナデ。	口径16.2・器高10.3。口縁1/2以上。10YR7/1灰白色。スス付着。	1区土壙328第4層。
64			体部は扁平な球形で、口縁部は大きく屈曲して、端部は丸く収める。体部下位に鏝あり。	同上。	口径21.8。口縁1/4以上。10YR7/2にぶい黄橙色。	2区土壙328第1層。
65	瓦器	香炉	体部は内弯して直立し、口縁部は受け口となる。体部外面に段あり。上段に陰刻紋を付ける。	底部内外面はナデ。体部内面上半は横ナデ、下半は横ケズリ。	底径10.0。底部1/4以上。N8/0灰白色。	1区土壙328第3層。
66		壺	体部は内弯し、口縁部は直立する。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。	口径15.0・口縁1/5。10BG4/1暗青灰色。	2区土壙328第1層。
67		炉	体部は内弯して立ち上がる。口縁端部に面あり。体部前面に半円形の切り込みあり。底部は平坦で、三足あり。	底部内外面はナデ。体部外面は縦ミガキ。足は貼付。	底径17.0。底部1/4以上。5BG1.7/1緑黒色。	1区土壙328第3層。
68		鉢	体部は内弯し、高い高台が付く。	底部内外面はナデ。体部・高台内外面は回転ナデ、体部外面横ミガキ。	2.5Y7/1灰白色。	1区土壙328第4層。
69		火消壺	体部は直線的に立ち上がり、受部は水平で、立ち上がり部は内傾する。	底部内外面はナデ。体部・立ち上がり部内外面は横ナデ後、体部外面は縦ミガキ。	器高15.0。口縁1/4未満。N8/0~7/0灰白色。	2区土壙328第1層。
70		壺	体部は内弯し、口縁部は直立し、端部は肥厚して面となる。	体部・口縁部内外面は回転ナデ、外面横ミガキ。	口径26.2・器高6.4以上。口縁1/10未満。2.5Y7/1灰白色。	1区土壙328第4層。
71	磁器	ミニチュア椀	体部は内弯して開く。特小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に透明釉を施す。釉上色絵。	口径3.0・器高2.0・底径1.6。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第1層。
72			体部は内弯して開き、口縁端部が外反する。小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後、内外面に透明釉を施す。染付。	口径5.4・器高3.8・底径2.7。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
73		杯	体部は内弯して開く。小型。	同上。	口径5.0・器高3.0・底径2.3。口縁1/2以上。肥前系。	同上。
74			同上。	同上。	口径5.9・器高3.3・底径2.5。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第1層。
75			同上。	同上。	口径6.4・器高4.1・底径2.9。口縁1/2以上。肥前系。	同上。

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
76	磁器	杯	体部は内弯して開き、口縁端部が外反する。小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後、内外面に透明釉を施す。染付。	口径7.5・器高4.2・底径2.8。口縁はぼ完存。肥前系。	2区土壙328第1層。
77			体部は直線的に開き、口縁端部が尖る。小型。	同上。	口径7.8・器高4.7・底径2.9。口縁1/2以上。肥前系。	同上。
78			体部は内弯して開く。小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に施釉。染付。	口径7.6・器高4.2・底径4.6。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
79			体部は内弯して開き、口縁端部が外反する。小型。	同上。	口径9.2・器高5.2・底径4.2。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第1層。
80			同上。	同上。	口径9.0・器高5.9・底径3.8。口縁1/2以上。肥前系。	同上。
81		脚付杯	体部は内弯して開き、口縁端部が外反する。底部に高い高台が付く。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。高台外面・底部回転ナデ。内外面に施釉。染付。	器高7.1。口縁1/4未満。肥前系。	1区土壙328第2層。
82		椀	体部は内弯して立ち上がり、口縁端部は尖る。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に施釉。染付。	口径9.6・器高6.4・底径5.0。口縁1/4以上。肥前系。	1区土壙328第1層。
83			体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	同上。	口径10.4・器高6.6・底径4.3。口縁1/4以上。肥前系。	2区土壙328第1層。
84			同上。	同上。	口径10.9・器高7.0・底径4.6。口縁1/4以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
85			同上。	同上。	口径11.1・器高6.1・底径3.8。口縁1/2以上。肥前系。	1区土壙328第1層。
86			同上。	同上。	口径10.8・器高5.4・底径4.3。口縁1/4以上。肥前系。	同上。
87			体部は内弯して立ち上がり、口縁端部はすぼまる。	同上。	口径8.7・器高7.4・底径5.1。口縁はぼ完存。肥前系。	2区土壙328第2層。
88			体部は内弯して開き、口縁端部は外反する。	同上。	口径10.5・器高7.0・底径4.7。口縁1/2以上。肥前系。	同上。
89			体部は屈曲して直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	底部・体部内外面は回転ナデ。削出高台。染付。	口径8.9・器高7.4・底径5.8。口縁はぼ完存。肥前系。	1区土壙328第1層。
90			体部は内弯して立ち上がり、口縁端部は尖る。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に施釉。染付。	口径12.0・器高7.0・底径6.4。口縁1/4以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
91	杯		体部は内弯して開き、口縁端部が外反する。外面にしぎを付ける。小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に施釉。白磁。	口径7.2・器高4.5・底径2.7。口縁1/2以上。肥前系。	同上。
92		体部は内弯して開き、口縁端部が外反する。小型。	同上。	口径6.5・器高4.6・底径3.1。口縁1/4以上。肥前系。	1区土壙328第1層。	
93	椀	体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	同上。	口径9.3・器高4.7・底径4.4。口縁はぼ完存。肥前系。	同上。	

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
94	磁器	椀	体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に施釉。白磁。	口径12.2・器高2.6・底径4.5。口縁1/4以上。肥前系。	1区土壙328第2層。
95			体部は内弯して開き、口縁端部はわずかに外反する。器壁厚い。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に施釉。白磁。	口径13.6・器高7.5・底径6.0。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第4層。
96			体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に施釉。青磁。	口径10.6・器高6.8・底径4.4。口縁ほぼ完存。肥前系。	1区土壙328第3層。
97			同上。	同上。	口径11.0・器高2.6・底径4.7。口縁1/2以上。肥前系。	同上。
98		皿	体部は内弯して開き、口縁端部は内弯する。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。染付。	口径7.6・器高2.2・底径2.7。口縁1/4以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
99			同上。	同上。	口径7.6・器高2.3・底径3.2。口縁ほぼ完存。肥前系。	同上。
100		輪花皿	体部は内弯して開き、口縁端部は四方に開く。	同上。	口径9.7・器高2.7・底径4.3。口縁ほぼ完存。肥前系。	1区土壙328第1層。
101		八角皿	体部は内弯し、口縁端部は八角形となる。	同上。	口径9.1・器高2.5・底径5.2。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
102		皿	体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して端部は外反する。	同上。	口径11.0・器高2.5・底径5.3。口縁1/4以上。肥前系。	同上。
103			体部は内弯して開き、口縁端部は内弯する。	同上。	口径11.0・器高2.8・底径5.4。口縁ほぼ完存。肥前系。	2区土壙328第1層。
104			体部は内弯して開き、口縁端部は直線的となる。	同上。	口径13.0・器高2.9・底径5.7。口縁1/2以上。肥前系。	同上。
105			体部は直線的に開き、内面中位に段がある。	同上。	口径13.5・器高3.0・底径6.2。口縁ほぼ完存。肥前系。	2区土壙328第2層。
106			体部は内弯して開き、口縁部内外面に花卉あり。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。口縁部内外面に放射状にケズリ、端部は刻む。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。染付。	口径13.6・器高3.6・底径5.7。口縁ほぼ完存。肥前系。	2区土壙328第1層。
107			体部は内弯して開き、口縁端部を輪花とする。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。口縁端部は刻む。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。染付。	口径14.3・器高2.7・底径6.3。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
108			体部は内弯して開き、口縁端部は内弯する。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。染付。	口径14.3・器高3.7・底径5.8。口縁1/2以上。肥前系。	1区土壙328第4層。
109	体部は直線的に開き、口縁部端部は外反する。	同上。	口径20.7・器高2.2・底径11.3。口縁1/4以上。肥前系。	1区土壙328第1層。		

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
110	磁器	盤	体部は内湾して開き、口縁端部は肥厚し面がある。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。染付。	口径24.4・器高6.2・底径7.5。口縁1/4以上。肥前系。	2区土壙328第2層
111			体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して端部は外反する。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に施釉。内面に陰刻文を施す。青磁。	口径22.4・器高5.2・底径7.7。口縁1/4以上。肥前系。	1区土壙328第2層。
112			体部は内湾して開き、口縁端部に輪花を付ける。内面に模様を施す。	同上。	器高7.3。口縁1/4未満。肥前系。	同上。
113		瓶	体部は内湾気味に立ち上がり、受部は水平に伸び、立ち上がり部は内傾する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部立ち上がり部内外面は回転ナデ。外面に施釉。白磁。	器高8.0。口縁1/4以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
114		小壺	体部は内湾して立ち上がり、肩が内湾し、口縁部は短く立ち上がる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。外面に施釉。青磁。	口径3.0・器高4.4・底径2.6。口縁1/2以上。肥前系。	1区土壙328第1層。
115		杯台	体部は内湾して開き、立ち上がり部はやや外反する。高い高台あり。	底部・体部内外面はナデ。体部・立ち上がり部・高台部内外面は横ナデ。貼付高台。内外面に施釉。青磁。	肥前系。	1区土壙328第3層。
116		香炉	体部は直線的に開く。高台・三足あり。	底部・体部内外面は横ナデ。削出し高台。内外面に施釉。青磁。	底径5.5。口縁1/4以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
117		壺蓋	天井部は丸まり、受け部は直線的に張り出し、6方向に開く。返り部は内傾する。	天井部内面・受け部・立ち上がり部内外面横ナデ。天井部外面は放射状に条線を付ける。内外面に施釉。青磁。	口径18.2・器高2.8。口縁1/2以上。肥前系。	同上。
118		盤	体部は直線的に開き、口縁端部は内湾する。梅の枝花を象り内面に貼り付ける。	口縁部内外面は回転ナデ。内外面に施釉。青磁。	器高3.8。口縁1/4未満。肥前系。	1区土壙328第2層。
119		脚付杯	体部は内湾して開き、口縁端部が外反する。底部に脚が付く。	底部・体部・口縁部内外面は回転ケズリ。高台外面・底部回転ナデ。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	口径7.7・器高6.6・底径4.0。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第2層。
120		蓋	天井部は平坦で、口縁部は下降し、返り部は内傾する。天井部に環状のつまみが付く。	天井部・口縁部・返り部内外面横ナデ。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	口径8.4。口縁1/4以上。肥前系。	2区土壙328第1層。
121		広口壺	体部は直線的に開き、肩は張る。口縁部は短く立ち上がる。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	口径7.1・器高5.0・底径5.0。口縁ほぼ完存。肥前系。	2区土壙328第2層。
122		壺	体部は卵形で、口縁部は直立する。小型。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、外面に透明釉を施す。	口径7.3・器高13.7・底径5.9。口縁1/4以上。肥前系。	2区土壙328第4層。
123			同上。大型。	同上。	口径10.0・器高20.7・底径9.2。口縁1/2以上。肥前系。	2区土壙328第1層。
124	杯	体部は内湾して開き、口縁端部は外反する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	漳州窯系。	2区土壙328第4層。	
125	小椀	体部は内湾して開き、口縁端部はやや内湾する。	同上。	口径7.4・器高4.0・底径3.2。口縁1/2以上。景德鎮産。	2区土壙328第2層。	
126		同上。	同上。	口径7.4・器高5.0・底径4.3。口縁1/4以上。景德鎮産。	1区土壙328第2層。	

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構	
127	磁器	碗	体部は内弯して開き、口縁端部は外反する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	口径10.7・器高5.4・底径5.0。口縁1/4以上。景德鎮産。	2区土壙328第1層。	
128			体部は内弯して開き、口縁部は直線的に伸びる。	同上。	口径12.5・器高5.0・底径4.5。口縁1/4以上。漳州窯系。	2区土壙328第2層。	
129			同上。	同上。	口径12.2・器高5.7・底径4.5。口縁完存。漳州窯系。	1区土壙328第4層。	
130			同上。	同上。	口径13.8・器高5.8・底径5.5。口縁1/2以上。漳州窯系。	同上。	
131			同上。	同上。	口径17.4・器高6.8・底径7.4。口縁1/2以上。漳州窯系。	1区土壙328第3層。	
132			体部は内弯して開き、口縁端部はやや内弯する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。絵施文後に、内外面に透明釉を施す。釉上に赤絵。	口径16.8・器高7.1・底径6.6。口縁1/2以上。漳州窯系。	2区土壙328第2層。	
133			体部は直線的に開き、口縁端部はやや内弯する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。染付	口径13.0・器高5.6・底径4.6。口縁1/4未満。ベトナム産。	2区土壙328第1層。	
134			体部は内弯して開き、口縁端部は直線的に伸びる。	同上。	口径12.8・器高4.8・底径5.4。口縁ほぼ完存。ベトナム産。	1区土壙328第2層。	
135			小皿	体部は内弯して開き、口縁端部は内弯する。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。絵施文後に、内外面に透明釉を施す。釉上に赤絵。	漳州窯系。	1区土壙328第1層。
136			皿	同上。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	口径13.4・器高3.0・底径8.0。口縁1/2以上。景德鎮産。	1区土壙328第4層。
137		体部は内弯して開き、口縁端部は外上方に伸びる。		同上。	口径10.4・器高6.7・底径7.8。口縁ほぼ完存。漳州窯系。	2区土壙328第2層。	
138		輪花皿	体部は内弯して開き、口縁端部は水平に広がり、体部・口縁部外面に輪花を付ける。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。外面はしのぎを付ける。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	口径12.5・器高2.8・底径6.5。口縁1/2以上。漳州窯系。	1区土壙328第2層。	
139		皿	体部は内弯し、口縁部は内弯する。内外面中位に段がある。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	口径14.5・器高2.5・底径7.5。口縁1/2以上。漳州窯系。	同上。	
140			同上。	同上。	漳州窯系。	1区土壙328第1層。	
141	鉢	体部は内弯し、口縁端部は外反する。	同上。	口径15.0・器高4.5・底径7.8。口縁ほぼ完存。漳州窯系。	2区土壙328第2層。		
142		体部は大きく内弯し、口縁部は内弯気味に伸びる。	同上。	口径17.4・器高5.9・底径8.8。口縁1/4以上。漳州窯系。	1区土壙328第1層。		
143	盤	体部は内弯しながら外上方に伸び、口縁端部は外反する。	底部外面・体部下端は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	口径38.0・器高8.9・底径18.0。口縁1/4以上。漳州窯系。	2区土壙328第2層。		

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構	
144	磁器	合子蓋	天井部はふくらみ、口縁部は内傾する。	天井部・口縁部内外面は回転ナデ。内外面に施釉。青白磁。	口径9.0・器高2.1。口縁完存。中国産。	1区土壙328第2層。	
145	炆器	茶銚蓋	天井部はふくらみ、受け部は水平に伸び、口縁部は直立する。	天井部・口縁部内外面は回転ナデ。外面ミガキ。紫泥。	口径9.0・器高2.7。口縁1/4以上。宜興窯産。	2区土壙328第1層。	
146	施釉陶器	杯	体部は直線的に開き、口縁部はやや内弯気味となる。小型。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。底部糸切り。内外面に灰釉を施す。	器高4.4。口縁1/4未満。7.5Y6/3オリーブ黄色。肥前系。	1区土壙328第4層。	
147			体部は内弯して立ち上がり、口縁端部はすぼまる。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。底部糸切り。内外面に灰釉を施す。	口径6.0・器高5.1・底径3.2。口縁1/2以上。10YR6/1褐灰色。肥前系。	1区土壙328。	
148		椀	体部は内弯して開き、口縁端部は外反する。	同上。	器高4.7。口縁1/4未満。2.5Y7/1灰白色。肥前系。	1区土壙328第1層。	
149			体部は内弯して直に立ち上がる。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に鉄釉を施す。	口径10.0・器高7.7・底径4.2。口縁1/2以上。2.5Y7/2灰黄色。肥前系。	1区土壙328第4層。	
150			体部は内弯して開き、口縁部は外反気味に立ち上がる。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に銅緑釉を施す。	口径10.4・器高7.4・底径4.8。口縁1/4以上。7.5YR6/3にぶい褐色。肥前系。	2区土壙328第1層。	
151			体部は内弯して直に立ち上がる。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に灰釉を施す。	口径11.6・器高7.2・底径5.0。口縁1/4以上。2.5Y8/2灰白色。肥前系。	2区土壙328第2層。	
152			体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に銅緑釉を施す。	口径11.4・器高6.2・底径4.3。口縁1/2以上。2.5Y7/1灰白色。肥前系。	2区土壙328第1層。	
153			同上。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に灰釉を施す。	口径13.6・器高5.5・底径5.5。口縁1/2以上。2.5Y8/1~8/2灰白色。肥前系。	2区土壙328第2層。	
154			体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に白土の刷毛目を施す。	口径14.6・器高7.0・底径5.5。口縁1/4以上。7.5Y7/1灰白色。肥前系。	同上。	
155			体部は内弯して開き、口縁部はやや外反し、端部は立ち上がる。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に鉄釉を施す。	口径12.5・器高5.9・底径4.3。口縁1/4以上。5YR6/4にぶい橙色。肥前系。	同上。	
156			体部は内弯して開き、口縁部は外上方に伸びる。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。底部糸切り。内外面に打ち刷毛目を施す。	口径11.6・器高7.2・底径5.0。口縁ほぼ完存。5YR4/1褐灰色。肥前系。	1区土壙328。	
157			体部は内弯して開き、口縁部は内弯し、端部は肥厚する。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に鉄釉を施す。	口径11.2・器高8.0・底径5.3。口縁1/2以上。5YR5/2灰褐色。肥前系。	1区土壙328第3層。	
158			小椀	体部は内弯して開き、口縁端部は丸く収める。平高台。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に長石釉を施す。	口径7.1・器高3.8・底径3.4。口縁1/2以上。5YR6/2灰褐色。瀬戸・美濃系。	2区土壙328第1層。
159				体部は内弯して開き、口縁部はやや外反する。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に鉄釉を施す。	口径8.3・器高3.7・底径4.2。口縁ほぼ完存。10YR8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	2区土壙328第2層。

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
160	施種 陶器	小椀	体部は直線的に開き、口縁は大きく外反し、端部は尖る。基筒底風高台。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。内外面に長石釉を施す。	器高5.0。口縁1/4未満。5Y8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第4層。
161			体部は内弯して開き、体部は直線的に開き、端部は内へ肥厚する。	底部外面・体部下半は回転ケズリ。底部内面・口縁部内面・外面上半は回転ナデ。削出高台。内外面に鉄釉を施す。	口径9.7・器高5.0・底径4.2。口縁完存。10YR7/2~7/3にぶい黄橙色。瀬戸・美濃系。	2区土壙328第2層。
162		天目椀	体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して端部は外反する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に鉄釉を施す。	口径11.4・器高7.0・底径4.6。口縁1/4以上。2.5Y8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第3層。
163			同上。	同上。	口径11.4・器高6.8・底径5.0。口縁1/2以上。2.5Y8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第2層。
164			体部は内弯して開き、体部は直線的に開く。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内外面に鉄釉を施す。	口径11.0・器高6.9・底径5.2。口縁1/4以上。5Y7/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第4層。
165		椀	底部は水平に開き、体部・口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	底部・体部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に鉄釉を施す。	口径12.5・器高7.6・底径6.1。口縁1/2以上。2.5Y8/1灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第3層。
166			体部は内弯して直に立ち上がる。	底部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。灰釉を施す。	口径9.9・器高6.6・底径4.2。口縁1/2以上。2.5Y8/1灰白色。京都産。	2区土壙328第1層。
167			体部は屈曲して開き、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	同上。	口径10.5・器高5.8・底径5.8。口縁1/4以上。2.5Y7/2灰黄色。京都産。	2区土壙328第2層。
168			体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	底部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。錆絵を施した後、灰釉を施す。	口径10.8・器高5.5・底径4.1。口縁1/2以上。2.5Y8/2灰白色。京都産。高台内「清」印。	2区土壙328第1層。
169			体部は内弯して開き、口縁端部はやや内弯する。	底部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。灰釉を施した後、釉上に色絵・金彩を上絵付する。	口径12.2・器高7.5・底径4.8。口縁ほぼ完存。5Y8/1~8/2灰白色。京都産。高台内「音羽」印。	同上。
170			体部は内弯して開き、口縁端部は外反する。	底部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。呉須を刷塗した後、釉を施す。	口径12.0・器高6.0・底径4.2。口縁1/2以上。5Y8/1灰白色。京都産。高台内「清」印。	同上。
171			体部は内弯して開き、口縁端部はやや内弯する。	底部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。外面に錆絵を施す。	器高7.5。口縁1/4未満。5Y8/1~8/2灰白色。京都産。	2区土壙328第1層。
172			体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	底部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。灰釉を施す。	口径14.0・器高5.2・底径5.3。口縁1/2以上。2.5Y8/2灰白色。京都産。高台内「清閑寺」印。	2区土壙328第2層。
173		同上。	同上。	口径13.4・器高4.2・底径5.1。口縁1/4未満。2.5Y8/3淡黄色。京都産。高台内「清」印。	2区土壙328第1層。	

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
174	施釉陶器	椀	体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	底部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。灰釉を施す。	器高4.8。口縁1/4未満。2.5Y6/1黄灰色。京都産。高台内「京」印。	2区土壙328第1層。
175			体部は内弯して開き、口縁端部は三方を内側に押さえる。	同上。	口径12.7・器高4.7・底径5.0。口縁ほぼ完存。5Y7/1灰白色。京都産。高台内「岩倉」印。	1区土壙328第4層。
176			体部・口縁部は内弯し、口縁端部は三方を内側に押さえる。	同上。	口径14.4・器高5.4・底径5.3。口縁1/2以上。7.5YR8/3浅黄橙色。京都産。高台内「清閑寺」。	2区土壙328第2層。
177			体部・口縁部は内弯し、口縁端部は四方を内側に押さえる。	底部外面は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面に錆絵・染付を施す。	器高5.4。口縁1/4以上。5Y7/1灰白色。京都産。高台内「京」印。	同上。
178			体部は内弯して開き、口縁部は外上方に開く。	同上。	器高5.7。口縁1/4以上。2.5Y8/3淡黄色。京都産。高台内「寶」印。	2区土壙328第1層。
179			体部は内弯して開き、口縁端部は尖る。	底部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。外面に呉須で絵を施す。	口径14.3・器高4.9・底径4.9。口縁1/4以上。5Y6/1灰色。京都産。	同上。
180	軟質施釉陶器	椀	体部は内弯した後、直線的に立ち上がる。	体部内面に横方向のケズリ。白土化粧の後、緑彩を施す。	2.5YR5/6黄褐色。京都産。	1区土壙328第4層。
181			同上。	体部内外面は回転ナデ。白土化粧の後、緑彩を施す。	口径10.2。口縁1/4以上。5YR7/6橙色。京都産。	同上。
182	施釉陶器	皿	体部は内弯し、口縁部は直線的に開く。内外面中位に段がある。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に灰釉を施す。	器高3.2。口縁1/4未満。5Y7/1灰白色。肥前系。	同上。
183			体部は内弯し、口縁部は内弯気味に開き、端部は外反する。内外面中位に段がある。	同上。	口径12.6・器高3.0・底径4.4。口縁1/2以上。5Y8/1灰白色。肥前系。	1区土壙328第3層。
184			体部は内弯し、口縁部は直線的に開き、端部は外反する。内外面中位に段がある。	同上。	口径12.9・器高3.9・底径4.4。口縁1/4以上。5Y7/1灰白色。肥前系。	1区土壙328第1層。
185			同上。	同上。	口径13.4・器高3.1・底径4.9。口縁1/4以上。2.5Y8/2灰白色。肥前系。	2区土壙328第2層。
186			体部は直線的に開き、口縁部は内弯し、端部は外反する。内外面中位に段がある。	同上。	口径13.6・器高2.7・底径4.6。口縁1/4以上。N7/0灰白色。肥前系。	1区土壙328第2層。
187		鉢	体部・口縁部は内弯し、端部は内傾する。内外面中位に段がある。四方を押さえる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面に鉄絵を施し、内外面に灰釉を施す。	口径13.0・器高4.5・底径4.7。口縁1/2以上。10YR7/2にぶい黄橙色。肥前系。	同上。
188	体部は内弯して開き、口縁部はやや内弯する。四方を内に押さえる。		同上。	口径14.2・器高4.4・底径5.1。口縁1/2以上。5Y7/1灰白色。肥前系。	1区土壙328第4層。	

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
189	施釉 陶器	鉢	体部は内弯して開き、口縁部はやや内弯する。四方を内に押さえる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面に鉄絵を施し、内外面に灰釉を施す。	口径13.8・器高4.8・底径4.9。口縁1/2以上。7.5YR5/1褐灰色。肥前系。	1区土壙328第1層。
190			体部は内弯気味に開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部外面にカキ目あり。	体部外面は回転ケズリ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。外面に灰釉を螺旋に施す。	器高7.3。口縁1/4未満。2.5Y8/2灰白色。肥前系。	2区土壙328第2層。
191		皿	体部は内弯気味に開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に灰釉を施す。	口径6.2・器高2.1・底径3.6。口縁1/2以上。2.5Y8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第3層。
192			口縁部は直線的に開き、上位は水平に伸び、端部は立ち上がる。口縁部内面に花卉あり。	同上。	口径10.8・器高2.1・底径5.9。口縁1/4以上。10YR8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第2層。
193			口縁部は内弯気味に開く。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内外面に長石釉を施す。	口径12.2・器高2.4・底径7.8。口縁1/2以上。2.5Y8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第3層。
194			体部は内弯気味に開き、口縁部は外上方に伸びる。口縁部内面に花卉あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内外面に灰釉を施す。	口径14.2・器高2.8・底径8.2。口縁ほぼ完存。2.5Y8/1灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第4層。
195			口縁部は内弯気味に開く。口縁部内外面に花卉あり。	同上。	口径14.2・器高4.2・底径7.1。口縁1/4以上。2.5Y7/2灰黄色。瀬戸・美濃系。	同上。
196			鉢	同上	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内面に鉄絵を施し、内外面に長石釉を施す。	口径14.8・器高4.3・底径6.1。口縁ほぼ完存。2.5Y7/1～8/1灰白色。瀬戸・美濃系。
197		皿	体部は直線的に開き、口縁部は外反する。	底部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内外面に長石釉を施す。	口径16.6・器高4.2・底径8.4。口縁1/4以上。10YR8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第3層。
198			体部は内弯して開き、口縁部は外上方に開く。口縁部内外面に花卉あり。内外面中位に段がある。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内外面に長石釉を施す。	口径18.6・器高4.2・底径8.7。口縁1/4以上。7.5Y7/1灰白色。瀬戸・美濃系。	2区土壙328第2層。
199			体部は直線的に開いた後、立ち上がる。端部は水平に開く。内外面中位に段がある。	同上。	口径22.6・器高4.0・底径12.5。口縁1/2以上。2.5Y7/1灰白色。瀬戸・美濃系。	同上。
200			底部は内弯気味に開き、口縁部は内弯する。基筈底高台。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。内面に鉄絵を施し、緑釉を施す。織部。	口径16.6・器高2.2・底径7.0。口縁1/2以上。2.5Y8/1灰白色。瀬戸・美濃系。	同上。
201			体部は内弯し、口縁部は直線的に開く。内外面中位に段がある。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内外面に緑釉を施す。総織部。	器高3.7。口縁1/4未満。2.5Y8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	同上。
202		盤	口縁部は内弯し、端部は水平に伸びる。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面に緑彩を施す。	口径30.6・器高6.5・底径18.1。口縁1/4以上。2.5Y6/1黄灰色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第1層。
203		鉢	同上	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に黄釉を施す。黄瀬戸。	器高5.8。口縁1/4未満。2.5Y8/1～8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第3層。

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
204		皿	体部は直線的に開き、口縁部は内弯気味、端部は水平に開く。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に灰釉を施す。	口径21.8・器高3.0・底径9.0。口縁1/2以上。2.5Y8/2灰白色。肥前系。	2区土壙328第2層。
205		大鉢	体部は内弯して開き、口縁部は内弯気味に立ち上がる。大型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に鉄絵を密に施す。	口径21.8。口縁1/2以上。N6/0~7/0灰色。肥前系。	同上。
206		輪花鉢	体部は内弯して開き、口縁部は内弯気味に立ち上がる。四方に花卉あり。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面に鉄絵を施す。	口径17.3・器高5.6・底径6.5。口縁1/4以上。5Y7/1灰白色。肥前系。	同上。
207		鉢	体部は内弯し、口縁部は外反気味に開く。内外面中位に段がある。	同上。	器高5.5。口縁1/4未満。5Y6/1灰色。肥前系。	1区土壙328第1層。
208		鉢	体部・口縁部は直線的に開き、端部は外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に灰釉を施す。	器高7.2。口縁1/4未満。5Y6/1灰色。肥前系。	2区土壙328第1層。
209		大鉢	体部は内弯し、口縁部は外反気味に開く。内外面中位に段がある。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面に刷毛目を施す。	口径28.1・器高7.6・底径9.5。口縁1/4以上。5Y5/1灰色。肥前系。	2区土壙328第2層。
210		大鉢	体部は内弯し、口縁部は内弯気味に開く。内外面中位に段がある。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面に緑・褐彩を施す。	口径31.8・器高9.9・底径12.5。口縁1/4以上。7.5Y6/2灰オリーブ色。肥前系。	同上。
211	施釉陶器		天井部は傘型で、底部は平坦で、立ち上がりあり。中央に摘みあり。	天井部・底部内外面は回転ナデ。内外面に鉄釉を施す。底部は糸切り。	口径8.0・器高3.1。口縁1/2以上。N7/0灰白色。肥前系。	同上。
212			天井部は盛りあがり、底部は平坦。天井中央に摘みあり。	天井部外面は回転ナデ。天井部内面は回転ケズリ。内外面に緑釉を施す。総織部。	口径8.0・器高1.9。口縁完存。7.5Y7/1灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第1層。
213		蓋	天井部は盛りあがり、底部はふくらむ。	天井部・底部内外面は回転ナデ。上面に鉄絵を施した後に、長石釉を施す。志野織部。	口径9.0。口縁1/2以上。2.5Y6/1黄灰色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第4層。
214			天井部は平坦で、口縁部は外反し、端部は水平に伸びる。天井中央に摘みあり。	天井部外面・口縁部内外面は回転ナデ。天井部内面は回転ケズリ。美濃伊賀。	口径11.2・器高2.4。口縁1/2以上。5Y7/1灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第3層。
215			天井部は平坦で、口縁部は外反する。天井中央に摘みあり。	天井部外面・口縁部内外面は回転ナデ。天井部内面は回転ケズリ。底部は糸切り。美濃伊賀。	口径11.6・器高2.5。口縁1/2以上。2.5Y8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第2層。
216		壺	体部は屈曲して直線的に立ち上がる。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。外面に鉄絵を施す。織部。	底径5.7。底部ほぼ完存。5Y8/2灰白色。瀬戸・美濃系。	2区土壙328第2層。
217		壺	体部は屈曲して直線的に立ち上がる。口縁部は内傾し、つまみが付く。	同上。	底径6.4。底部1/2以上。5Y8/1灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第4層。
218		香炉	体部は屈曲して直線的に立ち上がる。口縁端部が内側へ肥厚する。底部に三足付く。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。高台は貼り付け。外面に鉄釉を施す。	口径12.0・器高5.8。口縁1/4以上。2.5Y7/2灰黄色。瀬戸・美濃系。	2区土壙328第2層。
219		大鉢	体部は内弯気味に開き、口縁部は立ち上がり、端部は内外に拡張する。口縁部外面に櫛描波状文を施す。	底部外面中位まで回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に鉄釉を施す。	口径28.4・器高12.0・底径11.7。口縁1/4以上。10YR8/3浅黄橙色。肥前系。	1区土壙328第2層。
220		片口鉢	体部は内弯して開き、口縁部は外反する。片口あり。	底部外面中位まで回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に灰釉を施す。	器高11.0。口縁1/4未満。2.5Y5/3黄褐色。肥前系。	2区土壙328第2層。

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
221	施釉陶器	大皿	体部・口縁部は内弯する。	底部外面中位まで回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面にワラ灰釉を施す。	口径36.7・器高11.0・底径13.3。口縁1/4以上。10YR7/2にぶい黄橙色。肥前系。	1区土壙328第2層。
222		双耳壺	体部は屈曲して内弯気味に立ち上がる。口縁部は内傾し、端部は立ち上がる。体部両側に把手あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。外面に象嵌を施した後、白土を刷毛で施す。	口径12.8・器高18.8・底径14.7。口縁1/2以上。7.5Y6/1灰色。肥前系。	2区土壙328第4層。
223		四耳壺	体部は卵型で、肩が張る。口縁部は屈曲して外反し、端部は肥厚して垂下する。肩部と体部に櫛描あり。肩部4ヶ所に把手あり。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。外面に灰釉を施す。	口径10.7。N7/0灰白色。瀬戸・美濃系。	1区土壙328第2層。
224		水滴	底部は平坦で、体部は中位でくびれる。頸部は細い。	体部外面は回転ナデ。外面に錆絵を施す。	口径0.8・器高3.2。N8/0灰白色。京都産。	2区土壙328第2層。
225	軟質施釉陶器	合子蓋	天井部は盛り上がり、返りあり。天井部に螺旋状に条線あり。	口縁部内外面は回転ナデ。胎土は白土で赤化粧を施した後、透明釉を施す。	口径6.0・器高1.8。口縁1/4以上。10YR6/1褐灰色。京都産。	2区土壙328第1層。
226		皿	体部はやや内弯して開き、口縁端部は立ち上がる。高い高台あり。内面縁に陰刻紋あり。	底部・体部・口縁部内外面は横ナデ。貼付高台。白土化粧の後、陰刻部に緑釉を施す。	口径16.4・器高4.8・底径6.8。口縁1/4以上。2.5Y8/2灰白色。京都産。	1区土壙328第1層。
227	施釉陶器	椀	体部は屈曲して立ち上がり、口縁部は外反する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。呉須で施文後に、内外面に透明釉を施す。	口径10.0・器高7.5・底径5.8。口縁1/4以上。7.5Y7/1灰白色。ベトナム産。	1区土壙328第3層。
228			体部は屈曲して立ち上がる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に藁灰釉を施す。	底径4.8。7.5Y7/1灰白色。朝鮮産。	2区土壙328第4層。
229			体部は内弯して開く。	底部内面・体部内外面は回転ナデ。削出高台。内面に象嵌を施した後、白土を施す。	底径5.4。底部1/4以上。N5/0～4/0灰色。朝鮮産。	1区土壙328第2層。
230	陶器	椀	同上。	底部内面・体部内外面は回転ナデ。削出高台。白土化粧を施す。未施釉。	2.5Y8/2灰白色。京都産。陶器未製品。	2区土壙328第1層。
231			同上。	同上。	2.5Y8/3灰白色。京都産。未施釉。高台内「岩倉」印。陶器未製品。	2区土壙328第2層。
232			体部は内弯して開き、口縁部は外上方に伸びる。口縁端部は三方を内側に押さえる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。白土化粧を施す。未施釉。	器高5.7。口縁1/4未満。10Y8/2灰白色。京都産。陶器未製品。	2区土壙328第1層。
233	軟質陶器	小型壺	体部は直線的に立ち上がり、肩が張る。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。未施釉。外面に鉄泥を施す。	10Y8/2灰白色。京都産。軟質陶器未製品。	2区土壙328第2層。
234			体部は屈曲して立ち上がる。	体部外面下位は回転ケズリ。体部内面は回転ナデ。底部糸切り。外面に鉄泥を施す。未施釉。	10Y8/3灰白色。京都産。軟質陶器未製品。	同上。
235		蓋	天井部は盛り上がり、口縁部は伸びる。返りあり。	天井部外面・口縁部内外面は回転ナデ。白い胎土に赤化粧を施す。未施釉。	器高1.1。口縁1/4未満。7.5YR7/4にぶい橙色。京都産。軟質陶器未製品。	2区土壙328第1層。
236		灯明皿	体部は直線的に開き、口縁部は水平に伸びる。口縁部内面に立ち上がりが廻り、側面に穴あり。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・立ち上がり部は回転ナデ。未施釉。	口径12.2・器高2.4・底径5.7。口縁1/2以上。5YR6/4にぶい橙色。京都産。軟質陶器未製品。	同上。

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構	
237	軟質陶器	灯明皿	体部は直線的に開き、口縁部は水平に伸びる。口縁部内面に立ち上がり廻り、側面に穴あり。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面・立ち上がり部は回転ナデ。未施釉。	器高2.8。口縁1/4未満。2.5Y6/4にぶい黄色。京都産。軟質陶器未製品。	2区土壙328第2層。	
238		大鉢	体部は内湾し、口縁部は直立する。口縁部内面に段あり。稜あり。舟形と推定できる。	体部外面に布目残存。未施釉。内外面に白土化粧を施す。内外面に墨で絵を描き、内面の下描き線の上に、色絵具が施される。	2.5Y8/1~8/2灰白色。京都産。	同上。	
239	焼締陶器	鉢	体部は内湾して開き、口縁部は屈曲し、端部は肥厚して玉縁となる。	体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。	口径14.6・器高5.8・底径6.8。口縁1/2以上。5Y7/1灰白色。丹波産。	1区土壙328。	
240			体部は内湾して開く。口縁部は外反し、端部は内側へ屈曲する。外面に把手貼付痕跡有り。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。	口径12.5・器高5.9・底径10.2。口縁1/4以上。10YR6/3にぶい黄橙色。丹波産。	2区土壙328第2層。	
241			体部は内湾して開く。口縁部は外反し、端部は肥厚する。外面に把手あり。	同上。	器高5.6。口縁1/4未満。10YR4/3にぶい黄橙色。丹波産。	同上。	
242			体部は内湾して開く。口縁部は外反し、端部は肥厚する。外面に把手あり。	同上。	口径13.0・器高5.9・底径10.1。口縁1/2以上。10YR6/1褐灰色。丹波産。	1区土壙328。	
243			体部は内湾して開く。口縁部は外反し、端部は内側へ屈曲する。	同上。	口径14.2・器高6.7・底径12.7。口縁1/4以上。5Y7/1明褐灰色。丹波産。	2区土壙328第2層。	
244			体部は内湾して開く。口縁部は屈曲して端部は立ち上がる。体部中位に2ヶ所把手あり。	同上。	口径15.4・器高9.2・底径17.8。口縁1/2以上。5Y7/1明褐灰色。丹波産。	同上。	
245			体部は屈曲して直に立ち上がる。口縁端部に面がある。底部3ヶ所に足が付く。	同上。	口径14.8・器高7.8・底径13.9。口縁1/2以上。5YR6/4にぶい橙色。	1区土壙328第2層。	
246			体部は屈曲して、体部・口縁部は内傾気味に立ち上がる。口縁端部に面がある。体部外面に条線あり。	同上。	7.5YR3/1黒褐色。備前産。	2区土壙328第1層。	
247			体部は屈曲して、体部・口縁部は内傾し、口縁端部は肥厚する。	同上。	口径14.4・器高9.4・底径17.2。口縁1/4以上。N7/0灰白色。備前産。	1区土壙328第2層。	
248			体部は屈曲して、体部・口縁部は内傾気味に立ち上がる。口縁端部に面あり。	同上。	口径18.1・器高10.7・底径18.8。口縁1/2以上。N7/0灰白色。丹波産。	2区土壙328第4層。	
249			小壺	体部は球形で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は肥厚する。体部外面に条線を施す。片口あり。	底部内面・体部内外面は回転ナデ。	口径6.5・器高8.6・底径7.0。口縁1/2以上。N7/0灰白色。丹波産。	2区土壙328第2層。
250			匣鉢	体部は屈曲して直に立ち上がる。口縁端部に面がある。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。底部は糸切り。	器高9.8。口縁1/4未満。10YR6/6明黄褐色。内側に付着物あり。	1区土壙328第1層。
251			盤	体部は屈曲して開く。口縁端部に面あり。	底部外面はナデ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。	口径34.6・器高5.5・底径24.0。口縁1/4以上。10YR3/3暗褐色。丹波産。	1区土壙328第2層。
252		体部は屈曲して開き、口縁端部は内傾する。		同上。	器高6.0。口縁1/4未満。10YR3/3暗褐色。丹波産。	同上。	

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
253	焼締 陶器	盤	体部は屈曲して開く。口縁端部に面あり。	底部外面はケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。	口径34.0・器高6.6・底径26.1。口縁1/4以上。10YR4/3にぶい黄褐色。備前産。	2区土壙328第2層。
254			体部は屈曲して開き、口縁端部は立ち上がる。	同上。	口径41.9・器高9.5・底径22.1。口縁1/4以上。10YR4/2灰黄褐色。備前産。	1区土壙328第4層。
255		甕	体部はやや内弯して立ち上がり、肩部は内傾し、口縁部は外反する。	体部・肩部・口縁部内外面は回転ナデ。体部外面にハケを施す。	7.5YR6/1褐灰色。丹波産。	2区土壙328第2層。
256		蓋	天井部は平坦で、口縁部は内弯し、端部が肥厚する。天井部周囲に櫛描波状紋を施す。	天井部外面・口縁部内外面は回転ナデ。	口径33.4・器高4.7。口縁1/2以上。7.5YR6/2灰褐色。ベトナム産。漆附着。	2区土壙328第1層。
257		広口壺	体部は卵形で内弯して立ち上がり、肩はやや張り、口縁部は内傾し、端部は肥厚して面となる。肩部外面5ヶ所に櫛描波状紋あり。	底部外面はナデ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。	口径20.1・器高46.0。口縁1/4以上。2.5Y6/2灰黄色。ベトナム産。	1区土壙328第1層。
258		四耳壺	体部は卵形で内弯して立ち上がり、肩はやや張り、口縁端部は肥厚して玉縁となる。肩部外面2ヶ所に櫛描あり。把手あり。	底部外面はナデ。体部外面下位はケズリ、底部内面・体部外面上位・口縁部内外面は回転ナデ。	口径・器高・底径。口縁1/4以上。5YR6/4にぶい橙色。タイ産。	1区土壙328第2層。
259			同上。	同上。	口径・器高・底径。口縁1/4以上。2.5YR6/6橙色。タイ産。内外面漆附着。	1区土壙328第3層。
260			体部は直線的に開き、口縁端部に面がある。播目あり。	底部外面はオサエ。底部内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。底部糸切り。	口径21.8・器高8.6・底径15.8。口縁1/2以上。5YR7/4にぶい橙色。肥前系。	1区土壙328第1層。
261		体部は直線的に開き、口縁端部は内傾する。播目あり。	同上。	口径21.0・器高10.8・底径10.1。口縁1/4以上。2.5Y6/4にぶい黄色。肥前系。	1区土壙328第4層。	
262		体部は直線的に開き、口縁端部は外反する。播目あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部外面はオサエ、体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	器高12.6。口縁1/4未満。N5/0~6/0灰色。丹波産。	1区土壙328第2層。	
263	播鉢	体部は直線的に開き、口縁端部に面がある。口縁部内側に段あり。播目あり。	同上。	口径34.0・器高14.0・底径13.6。口縁1/2以上。N7/0灰白色。丹波産。	同上。	
264		体部は直線的に開き、口縁端部に面がある。口縁部内側に段あり。播目あり。片口あり。	同上。	口径40.4・器高19.0。口縁ほぼ完存。7.5YR6/4にぶい橙色。丹波産。	同上。	
265		体部は直線的に開き、口縁部を上方に拡張する。外面に凹線あり。播目あり。片口あり。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。底部外面に板圧痕跡あり。	口径38.0・器高15.9・底径16.9。口縁1/2以上。7.5YR6/4~7/4にぶい橙色。信楽産。	2区土壙328第2層。	
266		同上。	同上。	口径44.0・器高18.0・底径19.2。口縁1/2以上。N8/0~7/0灰白色。信楽産。	同上。	
653	陶器	皿	碁笥底。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部・体部内面は回転ナデ。削出碁笥底。	底径10.2・残存長辺12.1・短辺8.8。2.5Y7/2灰黄色。京都産。陶器未製品。	1区土壙328第4層。

付表2 出土軒瓦観察表 (図版42・43・88・89)

No.	種類	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
267	軒丸瓦	単弁16弁蓮華文で、蓮弁は接する。蓮子は1+4。外区は珠文帯、周縁は素文。	接合手法は不明。瓦当部裏面は横ナデ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ。	平安時代前期。山城産。	2区工房地区整地層。
268		単弁8弁蓮華文で、蓮弁はハート形。中房に「左」を配す。外区は珠文帯、周縁は素文。	接合手法は一本づくり。瓦当部側面上半縦ケズリ、裏面は布目が残る。	平安時代中期。「左」瓦屋産。	1区第4層。
269		単弁9弁蓮華文で、間弁あり。中房は不明。外区は部分的に珠文帯、周縁は素文。	接合手法は不明。瓦当部側面上半横ナデ、下半横ケズリ、裏面はオサエ。	平安時代中期。不明。	1区第3層。
270		複弁6弁蓮華文で、間弁は2つに割れる。蓮子は1+6。外区は密な珠文帯、周縁は素文。	瓦当部裏面上部に丸瓦を当て接合。瓦当側面上位は縦ナデ、下位は横ナデ、裏面はオサエ。	平安時代中期。山城産。	2区土壙2460。
271		複弁6弁蓮華文で、間弁共に線状である。蓮子は1+6。外区は密な珠文帯、周縁は素文。	瓦当部裏面上部に丸瓦を挿入し接合。瓦当側面上位は縦ナデ、裏面はオサエ。	平安時代後期。山城幡窯枝産。	1区土壙716。
272		単弁8弁蓮華文で、蓮弁はハート形。間弁は珠状。蓮子は1+4で、中房周囲に蓋めぐる。周縁は素文。	接合手法は不明。瓦当部側面下半横ナデ、裏面はオサエ。	平安時代後期前半。播磨産。	1区井戸2005。
273		単弁4弁蓮華文で、蓮弁はハート形。間弁はT字状。中心は蓮子1。外区界線は花文で、密な珠文帯、周縁は素文。	瓦当部裏面上部に丸瓦を当て接合。瓦当側面下位は横ナデ、裏面はオサエ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ。	平安時代後期後半。山城産。	1区土壙605。
274		単弁8弁蓮華文で、蓮弁に界線が廻るが、1ヶ所だけ無し。蓮子は1+5で、周縁は素文。	瓦当部裏面上部に丸瓦を当て接合。瓦当側面上位は縦ケズリ、下位は横ナデ、裏面はナデ。	同上。	1区第3層。
275		8弁複弁蓮華文で、蓮弁は互いに接す。凸中房で上面に「卍」を配す。珠文は粗く巡る。周縁は素文。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当て接合。瓦当裏面はナデ。	鎌倉時代前半。山城産。	1区土壙34。
276		右廻り三巴文で、中心は接する。尾は短い。周縁は素文。	接合不明。瓦当裏面はオサエ。	平安時代後期後半。山城産。	2区土壙2431。
277		左廻り三巴文で、尾は長い。周縁は素文。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当て接合。瓦当側面上位は縦ナデ、下位は横ナデ、裏面はナデ。	鎌倉時代前半。山城産。	1区土壙747B。
278		同上。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当て接合。瓦当側面は縦ナデ、裏面はオサエ。丸瓦凸面は縦ナデ、後ろは横ナデ、凹面は布目、側面は縦ケズリ。	同上。	1区溝1047。
279		右廻り三巴文で、尾は短く他の尾に接する。珠文は密に巡る。周縁は素文。	瓦当部裏面上部に丸瓦を当て接合。瓦当側面上位は縦ナデ、下位は横ケズリ、裏面はナデ。	桃山時代。	1区土壙381。
280	軒平瓦	重郭文。	直線頸。瓦当部上縁は横ケズリ、平瓦凹面は縦ナデ、頸部凸面から平瓦凸面は縦ナデ、側面は縦ケズリ。	奈良時代。難波宮6574形式。搬入瓦。	1区土壙1048。
281		中心飾りは対向C字で紡錘形を配す。外行唐草文。外区は密な珠文帯、周縁は素文。	曲線頸。瓦当部上縁は横ケズリ、頸部下面・裏面は横ナデ。平瓦凹面は布目。	平安時代前期。大山崎窯産。	1区土壙1361。
282		中心飾りは花文で、3回反転外行唐草文。外区は粗い珠文帯、周縁は素文。	同上。	平安時代前期。山城上ノ庄田窯産。	1区土壙1799。
283		中心飾りは対向C字で、3回反転外行唐草文。唐草が2重となる。外区は密な珠文帯、周縁は素文。	同上。	平安時代中期。山城産。	1区土壙1336。

No.	種類	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
284	軒平瓦	中心飾りは対向C字で、外行唐草文。周縁は素文。	半折曲技法。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面・裏面は横ナデ。平瓦凹面は布目、凸面はオサエ、側面は縦ケズリ。	平安時代中期。山城産。	1区井戸264。
285		左向偏行唐草文。外区は粗い珠文帯、周縁は素文。	同上。	同上。	同上。
286		右向偏行唐草文。上端部のみ素文・周縁残存。	半折曲技法。瓦当部上縁は横ナデ、顎部下面ナデ、裏面オサエ。平瓦凹面は布目、凸面はオサエ、側面は縦ケズリ。平瓦凸面にヘラ記号あり。	平安時代後期前半。山城産。	1区井戸1300。
287		右向4回反転偏行唐草文。	半折曲技法。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面・裏面は横ナデ。平瓦凹面は布目、凸面は縦ナデ、側面は縦ケズリ。	同上。	1区井戸597。
288		左向偏行唐草文。	半折曲技法。瓦当部上縁は横ナデ、顎部裏面はオサエ。平瓦凸面はオサエ。	平安時代後期。山城産。	1区土壇1048。
289		中心飾りは卵型で、3回反転外行唐草文。周縁は素文。	半折曲技法。瓦当部・顎部下面ケズリ、裏面はオサエ。	同上。	1区竪穴804。
290		中心飾りは無く、外行唐草文。周縁は素文。	瓦当部上縁はオサエ、顎部下面・裏面は横ナデ。	平安時代後期。播磨三木久留美窯産。	2区重機掘削中。
291		格子目文。周縁は素文。	顎貼り付け技法。瓦当部上縁・平瓦凹面は布目。顎部下面・裏面はナデ。	平安時代後期。山城産。	1区土壇1380。
292		陰刻剣頭文。	折曲技法。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面・裏面は横ナデ。平瓦凹面は布目、凸面はオサエ、側面は縦ケズリ。	同上。	1区井戸1195。
293		同上。	同上。	同上。	1区土壇747B。
294		中央に右廻り二巴文、両側に陰刻剣頭文を配す。	折曲技法。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面は横ナデ、裏面はナデで曲げじわが残る。平瓦凹面は布目、凸面はオサエ、側面は縦ケズリ。	同上。	1区土壇1048。
295		中央に花文、両側に陰刻剣頭文を配す。		同上。	1区土壇1380。
296	中心飾り不明で、外行唐草文。周縁は素文。	顎貼り付け技法。瓦当部上縁ナデ、平瓦凹面は布目、顎部下面・裏面は横ナデ。平瓦凸面はオサエ、側面は縦ケズリ。	鎌倉時代。山城産。	1区溝1047。	
297	中心飾りは花文で、3回反転外行唐草文。周縁は素文。	顎貼り付け技法。瓦当部上縁はナデ、平瓦凹面・凸面はナデ。顎部下面・裏面は横ナデ。側面は縦ケズリ。	桃山時代。	1区土壇742。	
298	中心飾りは花文で、2回反転外行唐草文。周縁は素文。	顎貼り付け技法。瓦当部上縁横ケズリ、平瓦凹面はナデ・凸面はオサエ、顎部下面・裏面は横ナデ。側面は縦ケズリ。	同上。	1区土壇423。	

付表3 出土土製品観察表(図版44~49・90~95)

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
299	玩具	土鈴	体部は球形で、上部に円孔の付いた摘みあり。下部に鈴口あり。体部に墨描模様あり。	摘み外面はナデ。体部内面上部にしぼりあり。鈴口はヘラ切り。	径3.4・高さ4.1。 10YR8/2灰白色。	2区土壙328 第1層。
300			同上。	同上。	径3.6・高さ3.8。 10YR8/2灰白色。	同上。
301		ミニチュア釜	底部は丸く、口縁部は内弯する。体部中位に鈎が付く。	底部外面ケズリ、底部内面ナデ。体部・口縁部内外面横ナデ。	径5.2・高さ3.6。 7.5Y7/4にぶい橙色。	1区土壙328 第2層。
302		ミニチュア播鉢	体部は直線的に開き、口縁部は外反する。播目あり。	底部外面はオサエ。底部内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	径6.0・高さ3.0。 10YR8/2灰白色。	2区土壙328 第1層。
303		人形頭部	面長で、目と口に凹みを付ける。	手捏ね成形。全体にナデ。	縦4.2・横2.1・幅2.0。 10YR8/2灰白色。	2区土壙328 第2層。
304		人形馬	台上に俵を乗せた馬を表現。	型作り成形。	横3.7・高さ4.9・幅2.5。 5YR6/6橙色。	2区土壙328 第1層。
305		人形	童子を脇に従えた布袋を表現。	同上。	長さ6.3・高さ6.5・幅2.7。 2.5Y8/4淡黄色。	1区土壙328 第3層。
306		おはじき	円形で、周囲を面取りする。薄い。	土師器片を打ち欠き円形に加工する。	径2.8、厚さ0.5。 7.5YR7/6橙色。	2区土壙328 第2層。
307	工具	輪トチン	環状で、上面に段が付く。	粘土ヒモを環状につなぐ。	径4.3・高さ0.7。 2.5Y7/2灰白色。 上面に高台跡が残る。	2区土壙2172。
308			環状で、断面は楕円形。	同上。	径4.1・高さ0.6。 2.5Y7/1灰白色。	2区土壙328 第1層。
309			同上。	同上。	径4.4・高さ0.8。 2.5Y7/2灰白色。	2区土壙328 第2層。
310		円板トチン	円板の下面3ヶ所に三角錐の足をつける。	円盤の上下面はナデ、足は貼り付け。	径6.2・高さ1.4。 5YR7/6橙色。 不明墨書あり。	1区土壙52。
311			同上。	同上。	径5.8・高さ1.5。 10YR6/3~7/3にぶい黄橙色。	2区土壙2191。
312	同上。		同上。	径5.3・高さ1.0。 5YR4/4にぶい赤褐色。	2区第3層。	
313	同上。		同上。	径6.3・高さ1.3。 2.5Y7/1灰白色。	2区土壙328 第1層。	
314	鑄型	刀子柄	長方形の板状で、中央部が凹み、文様を付ける。中央に菊花文を陰刻、周囲に魚々子が付く。	外面はナデ。	長径5.7・短径3.0・厚さ1.0。	1区土壙200。
315		不明	長方形の板状で、中央部に葡萄唐草文を陰刻する。	同上。	長径5.9・短径4.5・厚さ1.4。	2区第3層。
316			長方形の板状で、文様不明。	同上。	長径5.7・短径4.1・厚さ1.5。	同上。
317		鏡	長方形の板状で、中央部に葡萄唐草文を陰刻する。	同上。	径4.5・厚さ1.0。	同上。
318		鏡	鏡の鑄型。馬蹄形で、上下面は平坦で、側面は直立する。上下面に斜格子状の沈線がかすかに残る。	粘土板で成形。上下面はナデ、側面は横ナデ。沈線はヘラで刻む。上下面に真土を薄く塗る。	長径11.5・短径6.0・厚さ2.4。	1区第3層。
319	鏡の鑄型。円形で、上下面は平坦で、側面は直立する。		同上。	径12.3・厚さ2.3。	1区土壙1377。	

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
320	鑄型	鏡	鏡の鑄型。裁頭円形で、上下面は平坦で、側面は直立する。中央1ヶ所と脇に2ヶ所円孔あり。	粘土板で成形。上下面はナデ、側面は横ナデ。	径12.0・厚さ24。	1区土壇1377。
321			鏡の鑄型。上下面は平坦で、側面は直立する。上下面に斜格子状の沈線がある。	粘土板で成形。上下面はナデ、側面は横ナデ。沈線はヘラで刻む。上下面に真土を薄く塗る。	径不明(9.8以上)・厚さ3.0。	1区土壇484。
322			鏡の鑄型。円形で、上下面は平坦で、側面は直立する。片面に斜格子状の沈線がある。	同上。	径16.6・厚さ3.2。	1区井戸1445。
323	工具	埴塼	体部は卵形で、口縁部は内傾する。端部は丸く収まる。体部中位に円孔あり。	底部・体部・口縁部外面はオサエと推定。底部内面・体部内面はナデ。口縁部内面はオサエ。	径19.9・高さ28.9。 A I a型。	2区井戸2078。
324			同上。	同上。	径20.6・高さ28.9。 A I a型。	同上。
325			体部は卵形で、口縁部は内傾する。端部は丸く収まる。体部中位に円孔あり。粘土栓で塞ぐ。	底部・体部・口縁部外面はオサエと推定。底部内面・体部内面はナデ。口縁部内面はオサエ。	径19.9・高さ28.9。 A I a型。	1区井戸85・井戸112。
326			同上。	同上。	径19.5・高さ29.5。 A I a型。	2区井戸2078。
327			体部は卵形で、口縁部は内傾する。端部は受け口となる。体部中位に円孔あり。	同上。	径20.4・高さ31.2。 A I b 1型。	1区井戸85・井戸112。
328			体部は卵形で、口縁部は内傾する。端部は受け口となる。体部中位に円孔あり。粘土栓で塞ぐ。	同上。	径20.0・高さ31.3。 A I b 1型。	同上。
329			体部は球形で、体部に長方形の片手を取り付く。口縁端部は丸く収める。	底部・体部・口縁部外面はオサエと推定。底部内面はオサエ、体部・口縁部内面はナデ。	径17.5・高さ18.5。 B I型。	1区土壇783。
330			同上。	同上。	径18.6・高さ17.2。 B I型。	1区堅穴276。
331			同上。	同上。	径17.7・高さ16.7。 B I型。	同上。
332			体部は卵形で、口縁部は内傾する。端部は受け口となる。体部中位に円孔あり。	同上。	径21.0・高さ29.0。 A I b 2型。	2区埴塼石垣2119B。
333			体部は卵形で、口縁部は内傾する。端部は受け口となる。体部中位に円孔あり。粘土栓で塞ぐ。	同上。	径22.0・高さ37.6。 A I b 2型。	同上。
334			体部は卵形で、口縁部をドーム状に塞ぐ。体部中位に円孔あり。	底部・体部・口縁部外面はオサエ。底部内面・体部内面はナデ。口縁部・天井部内面はオサエ。	径20.4・高さ34.2。 A I c 1型。	1区井戸254。
335			同上。	同上。	径19.5・高さ30.0。 A I c 1型。	同上。
336			体部は卵形で、口縁部をドーム状に上部を塞ぐ。器高が低い。	同上。	径20.0・高さ26.0。 A I c 1型。	2区工房第4床面。
337			体部は卵形で、口縁部に碗状の天井部を取り付け、上部を塞ぐ。体部中位に円孔あり。底部中央に埴塼台が付着する。	同上。	径20.0・高さ29.0。 A I c 2型。	1区土壇1341。
338			埴塼台	直方体である。上面に埴塼底部の痕跡が残る。	手握ね成形。全体にナデ。	長辺15.7・短辺8.8・厚さ5.1。
339	同上。	同上。		長辺17.0・短辺8.7。	同上。	
340	同上。	同上。		長辺16.5・短辺9.1・厚さ5.4。	同上。	

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構	
341	工具	坩堝台	直方体である。上面に坩堝底部の痕跡が残る。	手捏ね成形。全体にナデ。	長辺17.3・短辺8.2・厚さ7.4。	1区炉408。	
342		坩堝蓋	底部・体部は丸く、上面は平坦で中央に円孔がある。体部・縁辺部に坩堝口縁部が溶着する。	同上。	径12.5・厚さ4.2。 A型。	2区土壙2106。	
343		炉蓋	板状で、長方形または正方形。円孔あり。側面は1方が盛り上がり、他面は平坦である。	同上。	長辺12.5・短辺9.2・厚さ4.9。	2区井戸2078。	
344			板状で、長方形または方形。側面は両面とも盛りあがる。	同上。	長辺13.0・短辺10.5・厚さ5.4。	1区土壙52。	
345			円形で、底部は平坦、天井部はふくらむ。中央の周辺部に円孔がある。	底部はオサエ、体部・天井部は横ナデ。	径27.0・高さ5.6。 B型。	2区土壙328 第1層。	
346			円形で、底部は平坦、天井部はふくらむ。中央と周囲に円孔がある。	底部はオサエ、体部・天井部は横ナデ。	径38.0・高さ4.8。 B型。	2区工房第1 床面。	
347			円形で、底部は平坦、天井部はふくらむ。中央部は煙突状になる。中央と周囲に円孔がある。	同上。	径36.0・高さ9.3。 B型。	2区攪乱。	
348			円形で、底部は平坦、天井部はふくらむ。中央部に円孔がある。底部4ヶ所に不定形の台が付く。	同上。	径26.6・高さ6.6。 B型。	同上。	
349			土栓	円形で一方が丸く尖る。炉蓋の栓と推定できる。先端が溶着する。	手捏ね成形。全体にナデ。	径4.7・高さ5.0。	1区土壙239。
350			取瓶	底部は丸く、口縁部は上方に開く。	底部・口縁部内外面はナデ。	径3.8・高さ2.7。 A型。	2区土壙2121。
351		半球状で、口縁部は丸く収める。		同上。	径4.8・高さ2.2。 A型。	2区第3層。	
352		同上。		底部・口縁部内外面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	径5.2・高さ2.5。 A型。	同上。	
353		同上。		全体にナデ。	径4.9・高さ2.4。 A型。	1区土壙397。	
354		同上。		同上。	径4.9・高さ2.8。 A型。	2区第3層。	
355		同上。		底部・口縁部内外面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	径6.7・高さ2.8。 A型。	2区土壙2286。	
356		同上。		全体にナデ。	径4.9・高さ3.5。 A型。	2区第4層。	
357		同上。		同上。	径8.0・高さ3.7。 A型。	同上。	
358		底部は屈曲して開き、口縁部は内弯する。		底部・体部下外面はオサエ、底部・体部内面・口縁部内外面はナデ。	径10.9・高さ3.3。 B型。	2区土壙2286。	
359		坩堝		底部は平坦で、口縁部は直立する。片口が付く。	内外面共にオサエと推定。	径8.2・高さ6.2。 AⅢ型。	2区第3層。
360			底部は平坦で、口縁部はやや内弯して直立する。	同上。	径10.1・高さ5.5。 AⅢ型。	2区第4層。	
361	同上。		同上。	径10.3・高さ4.8。 AⅢ型。	同上。		
362	同上。		同上。	径11.0・高さ5.0。 AⅡ型。	2区工房第3 床面。		

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構	
363		坩堝	底部は平坦で、口縁部は直立する。	内外面共にオサエと推定。	径8.0・高さ8.0。 AⅢ型。	2区工房第4床面。	
364			底部は平坦で、口縁部はやや内弯して直立する。片口が付く。	同上。	径10.7・高さ8.5。 AⅢ型。	2区第3層。	
365			底部は平坦で、口縁部は直線的に開く。	同上。	径11.0・高さ8.4。 AⅢ型。	2区井戸2122。	
366			体部は球形で、体部に把手が取り付く。口縁端部は丸く収める。	同上。	径7.9・高さ6.7。 BⅡ型。	1区土壇200。	
367			同上。	同上。	径8.4・高さ6.7。 BⅡ型。	1区土壇1200。	
368			底部は平坦で、体部はやや内弯して直立する。口縁端部は内側に肥厚する。体部に円孔あり。	同上。	径11.8・高さ19.1。 AⅡ型。	2区井戸2084。	
369			半球状で、口縁端部は面を持つ。	同上。	径21.0・高さ8.8。 C型。	2区工房地区整地層。	
370		坩堝台	長方体である。上面に坩堝の痕跡が残る。小型。	手捏ね成形。全体にナデ。	長辺7.0・短辺4.8・厚さ3.8。	1区炉560。	
371		工具	焼塩壺身	円筒形で、底部に円孔がある。塩壺を鞆羽口に転用。	内外面は横ナデ。	径6.0・高さ7.5。	2区土壇328第1層。
372			鞆羽口	円筒形で、先端がすばまる。	粘土板を筒状に接合。	径7.6・高さ10.7。	1区土壇1341。
373	円筒形で先端部がすばまる。	同上。		径8.4・高さ10.2。	2区竪穴2274。		
374	円筒形で、すばまらない。	同上。		径6.9・高さ5.4。	2区工房地区整地層。		
375	円筒形で先端はすばまる。外面中位に炉壁が溶着し、先端部は溶ける。	棒を芯にして、手捏ね成形。外面はナデ。		径10.6・高さ18.1。	1区炉560。		
376	同上。	同上。		径10.6・高さ30.0。	2区工房第3床面。		
377		窯体	円盤状。	内外面は横ナデ。	長辺9.7、短辺9.0、厚さ2.4。釉薬附着。陶器窯関連と推定。	1区井戸181。	
378			底部は平坦で体部は失う。	外面はケズリ調整。	長辺13.5、短辺9.7、厚さ3.0。釉薬附着。陶器窯関連と推定。	2区土壇2193。	
379		平坦な底部から体部が外上方に伸びる。	内外面は横ナデ。	長辺4.1、短辺3.5、厚さ0.9。釉薬附着。陶器窯関連と推定。	1区土壇1057。		
380		炉壁	馬蹄形で、底部は平坦で、上部はふくらむ。	手捏ね成形。	長辺41.8、短辺14.2・高さ18.3。	2区工房地区整地層。	
381	鉄滓	床尻	炉の内部のからみと推定できる。鉄製か。	不明。	径39.4・高さ23.6。	2区土壇2520。	
382	工具	炉壁	口縁部は直立し、端部は丸く収まる。	粘土帯を積み上げて成形。内外面は横ナデ。	推定径44.0・高さ22.0。	2区土壇2355。	
383			口縁部はやや内弯し、端部は丸く収まる。	同上。	推定径48.0・高さ16.9。	1区炉728。	
384			楕円形で、底部は平坦で、上部はふくらむ。	手捏ね成形。	推定長径51.4、推定短径19.2・高さ16.0。	2区第4層。	

付表4 出土木製品観察表(図版50~55・96~99)

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
385	漆器	椀蓋	径の広い摘みから口縁部は下外方に伸びる。	内外面共にロクロでケズリ成形。外面に黒漆、内面に赤漆を髹漆する。外面に赤で丸文を描く。	口径10.8・器高3.0。	2区土壙2520。
386		椀	体部は内湾して開き、口縁端部は尖る。高台は低い。	内外面共にロクロでケズリ成形。外面に黒漆、内面に赤漆を髹漆する。外面に赤で花文を描く。	口径12.8・器高5.9。	2区土壙2354。
387			体部は屈曲して開き、口縁部は上外方に伸びる。高台は低い。	内外面共にロクロでケズリ成形。外面に黒漆、内面に赤漆を髹漆する。外面に赤で丸文を描く。	径12.3・高さ6.3。	同上。
388			体部は屈曲して開き、口縁部は直立し、端部は外反する。高台は低い。	内外面共にロクロでケズリ成形。外面、内面共に黒漆を髹漆する。口縁部に赤漆を入れる。	口径14.2・器高6.0。	2区土壙2520。
389			体部は屈曲して開き、口縁部は上外方に伸びる。高台は厚く高い。	内外面共にロクロでケズリ成形。外面、内面共に赤漆を髹漆する。外面に黒漆で松文を描く。	径10.6・高さ5.7。	同上。
390			同上。	内外面共にロクロでケズリ成形。外面に黒漆、内面に赤漆を髹漆する。外面に赤で花文を描く。	口径13.5・器高8.2。	2区土壙2354。
391			体部は屈曲して開き、口縁部は上外方に伸びる。高台は低い。	内外面共にロクロでケズリ成形。外面、内面共に赤漆を髹漆する。外面に黒漆で松文他を描く。	径14.2・高さ7.1。	同上。
392			体部は屈曲して開き、口縁部は上外方に伸びる。高台は厚く高い。	内外面共にロクロでケズリ成形。外面に黒漆、内面に赤漆を髹漆する。	径14.0・高さ8.0。	同上。
393		盤	体部は水平に開き、口縁部は上外方に開く。高台は低い。	内外面共にロクロでケズリ成形。外面、内面共に赤漆を髹漆する。高台内に赤漆で「三」と記す。	径17.0・高さ2.5。	2区土壙2520
394		角皿	長方形。底部は丸く、口縁部は内湾し、端部は尖る。	調整不明。全面に黒漆を髹漆する。	長辺16.4・短辺5.1・高さ2.4。	2区土壙2354。
395		蓋	円形。上面に直方体の把手を取り付け痕跡がある。	内外面共にロクロでケズリ成形。全面に黒漆を髹漆する。裏面に赤と青で葉文を描く。	径16.0・厚さ0.4。	2区工房第3床面。
396		しゃもじ	楕円形の体部に、尖った把手が取り付け。体部は浅い。	調整不明。全面に黒漆を髹漆する。	長さ12.3・幅7.1。	2区土壙2520。
397		鉢	体部は屈曲して内湾する。高台は低い。	内外面共にロクロでケズリ成形。部分的に黒漆が残る。	径20.2・高さ7.0。	2区土壙2354。
398		容器	盤	底部は丸く、口縁部は内湾気味に開く。	内外面共にロクロでケズリ成形。	口径45.0・器高8.1。 口縁1/2以上。補修痕あり。
399	木札	荷札	長方形で中央部に円孔を穿つ。上面上部に「大坂 わんや」の焼き印あり。	側面はケズリ調整。	縦23.1・横5.0・厚さ0.4。	2区土壙328第2層。
400			板状で長方形。上部両側に切り込みあり。	同上。	縦23.1・横5.0・厚さ0.4。	2区土壙2354。
401			板状で下端は尖る。上部両側に切り込みあり。	同上。	縦15.1・横2.9・厚さ0.2。	同上。
402			同上。	同上。	縦16.1・横3.0・厚さ0.3。	同上。
403			板状で、上部両側に切り込みあり。「御ちの人さま 御きくさま」の墨書あり。	同上。	縦9.0・横2.4・厚さ0.2。	2区土壙2520。

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
404	木札	荷札	やや厚い板状で下端は尖る。上部両側に切り込みあり。「こ(ほカ)本れ初(助カ)谷(吉カ)新右衛門」の墨書あり。	側面はケズリ調整。	縦11.1・横2.2・厚さ0.9。	2区土壇2520。
405			板状で長方形。上部はけい頭状で、両側に切り込みあり。「□□(村カ)□(太カ)」の墨書あり。	同上。	縦17.4・横2.1・厚さ0.4。	2区土壇2354。
406			板状で下端は尖る。上部両側に切り込みあり。表に「六月十一日 疋田村 鯨壺桶 安右衛門」裏に「□□□□□ □□や 二郎兵衛殿」の墨書あり。	同上。	縦12.0・横2.9・厚さ0.5。	2区土壇2520。
407			板状で下端は尖る。表に「□□(宗カ)□□左衛門 九朗右衛門七ノ割り一分」裏に「九月十八日 小□□(屋カ)□(徳カ)□(蔵カ)」の墨書あり。	同上。	縦14.2・横3.0・厚さ0.5。	同上。
408			やや厚い板状で長方形。墨書は判読不明。	同上。	縦12.4・横3.5・厚さ0.8。	1区土壇89。
409			板状で両端を丸く尖らせる。中央に円孔がある。表に「□□(合カ)□□徳久□□」裏に「やや」の墨書あり。	同上。	縦16.2・横3.2・厚さ0.6。	2区土壇2520。
410	装身具	櫛	棟部は断面半円形で、緩い円弧状である。目は密である。	歯は鋸で両側から挽き出す。	縦4.6・横8.0・厚さ1.3。	2区土壇2354。
411			棟部は断面楕円形で、緩い円弧状である。目は粗い。	同上。	縦4.1・横9.0・厚さ1.2。	同上。
412	文具	題箋	やや厚い板状で、上部は上端・下端を削る。中央に円孔あり。下部は角柱。	全面ケズリ調整。	縦11.0・横1.6・厚さ0.8。	2区土壇2520。
413	喫茶具	茶筌	下部は断面楕円形で、上部1/3を割る。	節付の竹を使用。上部は割る。	縦13.0・長径2.8・短径2.4。	2区土壇2354。
414	工具	ヘラ	板状で、前部は半円形である。棟は直に伸びる。	側面はケズリ調整。	長さ22.9・幅4.1・厚さ0.5。	2区土壇2520。
415			同上	同上	長さ28.6・幅3.8・厚さ0.8。	同上。
416	形代	刀	棟は大きく湾曲し、刃部は薄くする。柄部は断面楕円形である。	全面ケズリ調整。	長さ31.1・幅3.4・厚さ1.5。	同上。
417	工具	柄	断面楕円形で、両側を凹め、縛ったと推定できる。	同上。	長さ11.7・幅3.3・厚さ2.1。	2区土壇2354。
418			板状で、三角形。下部を薄く尖らす。	側面はケズリ調整。	長さ15.5・幅2.9・厚さ0.2。刀部に漆付着。	2区土壇2520。
419		ヘラ	同上。	同上。	長さ25.3・幅6.1・厚さ0.2。	2区第4層。
420			板状で、長方形。柄部は尖らせる。	同上。	長さ18.7・幅2.2・厚さ0.3。	2区土壇2520。
421			しゃもじ	板状で、前部先端を丸くする。柄部は細く長方形である。	同上。	長さ22.8・幅4.5・厚さ0.4。

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
422	工具	柄	棒状で、断面は楕円形。両端は平坦で、片方に差込孔がある。	両端は鋸引き。側面はケズリ調整。	長さ21.2・幅3.6・厚さ1.9。	2区土壌2520。
423		ヘラ	隅丸長方形で、両側に稜がある。柄部は断面円形。	全面ケズリ調整。	長さ16.9・幅7.3・厚さ1.5。	同上。
424		刷毛	刷毛部は駒形で、柄部は長方形。刷毛部下端に溝があり、円孔を穿つ。	側面はケズリ調整。	縦12.8・横6.5・厚さ0.7。	同上。
425			刷毛部は半円形で、柄部は長方形。刷毛部下端に溝があり、円孔を穿つ。	同上。	縦13.9・横12.1・厚さ0.7。	同上。
426			刷毛部は長方形で緩い円弧状である。柄部は長方形。刷毛部下端に2条溝があり、円孔を穿つ。	同上。	縦11.8・横12.7(残存)・厚さ0.9。	同上。
427			刷毛部と柄部が一体となる。刷毛部下端に溝があり、円孔を穿つ。	同上。	縦20.4・横4.4・厚さ0.3。	同上。
428			同上。	同上。	縦19.6・横9.3・厚さ0.7。	同上。
429			玩具	人形 頭部	顔部は頭部がやや尖り気味で、前面の目と口は凹み、鼻は低い。頸部は断面円形である。	全面ケズリ調整。
430	顔部は断面方形で、角部に大・小の凹みがある。頸部は断面円形である。	同上。			高さ8.1・幅2.3・奥行き2.0。	2区土壌2520。
431	顔部は楕円形で、前面の鼻は低い。頸部は断面円形である。	同上。			高さ9.6・幅3.1・奥行き2.9。	2区土壌2354。
432	顔部は断面方形で、頭部は尖る。角部に凹みがある。頸部は断面円形である。	同上。			高さ9.7・幅3.0・奥行き2.5。	2区土壌2520。
433	やや厚い板状で、頭は尖り、鼻は出る。体部は断面三角形。	同上。			高さ11.7・幅3.0・奥行き1.7。	2区井戸2348。
434	鞘	棟は湾曲する。断面は楕円形で孔は方形である。		外面はケズリ調整。	長さ10.1・幅1.5・厚さ0.9。	1区土壌1341。
435	円盤	板状で、円形。中央に円孔がある。		全面ケズリ調整。	径5.4・厚さ0.2。	2区土壌2520。
436	独楽	体部は円盤状で、中央に竹ひごが通る。		同上。	径3.8・厚さ1.0。	同上。
437		体部は円筒状で、中央に1条の溝がある。中央に円孔がある。		同上。	長径4.3・短径3.0・厚さ2.2。	同上。
438		毬		体部は円筒状で、上下両面が丸くなる。	同上。	長径5.8・厚さ3.1。
439	工具	摘み	体部は多面体で、下面に断面円形の柄がある。	同上。	高さ5.7・幅5.9・奥行き5.4	2区土壌2354。
440	玩具	舟	先部が丸い長方形である。底部平坦で、先部が外上方に伸びる。上面が凹む。	同上。	長さ7.6・幅4.0・高さ2.4。	2区土壌2520。
441			平面は葉形で、底部は丸くなる。上面が凹み、中央に円孔、尾部に溝がある。	同上。	長さ11.6・幅4.4・高さ2.1。	2区土壌2357。

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構
442	工具	部材	立方体で、上面から側面に円孔が続く。	全面ケズリ調整。	縦5.1・横4.1・厚さ3.5。	1区土壇2173。
443	容器	容器	平面形は方形である。底部は平坦で、体部は内穹気味に立ち上がる。	底部・体部外面はケズリ、内面は鑿で穿つ。	長辺8.0・短辺7.9・高さ6.2。	2区土壇2520。
444	不明	不明	板状で、上部は切り込みあり。下部は平坦。	側面はケズリ調整。	長さ15.6・幅3.0・厚さ0.7。	同上。
445	工具	浮子	棒状で、断面は楕円形。両端はやや尖らせ、下端に楕円孔がある。	全面ケズリ調整。	長さ19.4・長径4.6・短径3.0。	同上。
446		団扇	板状で長方形。上部側面に方形の孔がある。	竹製。側面はケズリ調整。	長さ19.1・幅1.6・厚さ0.7。	同上。
447	玩具	羽子板	板状で、下部がすばまる長方形で、2段を付けて長方形の柄がある。	全面ケズリ調整。	長さ32.4・幅10.1・厚さ1.3。	同上。
448	工具	柄杓	円形曲物の側面中位に方形穴を開け、先端の尖る柄部をさしこみ、内部に楔を差し込む。	曲物は薄板を丸めて成型。側面に、方形穴を穿ち柄を差し込む。	口径12.3・器高6.0・底径13.0。口縁ほぼ完存。	2区第4層。
449		灯明皿台	底部は平坦で上部に刳りがある板材を十字に組み合わせる。	全面ケズリ調整で組み合わせる。	縦13.5・横12.9・高さ2.5	同上。
450			両端部が上る板材を十字に組み合わせる。	同上。	縦13.4・横12.5・高さ4.9。	2区土壇2520。
451		栓	円筒形で、下方がややすばまる。上下面は平坦。	全面ケズリ調整。	長さ9.7・長径3.7・短径3.2。	同上。
452			円筒形で、下方が尖る。上面は平坦。	同上。	長さ12.8・長径5.4・短径3.3。	同上。
453			平面不定形で、天井部はふくらむ。下部は直に垂下し、底面は平坦である。	不明。	長径11.5・短径10.1・高さ3.2。	2区土壇2354。
454	容器	蓋	板状で、平面円形。上面中央は凹み円孔がある。下面の辺部に溝が廻る。	不明。	口径26.5・厚さ1.4。	2区土壇2520。
455		漆器蓋	板状で、平面円形。上面中央に方形の把手の痕跡が残る。下面の辺部に溝が廻る。	全面ケズリ調整、底面周囲に溝を彫る。黒漆を髹漆する。	口径29.4・厚さ1.1。	同上。
456		蓋	板状で、平面円形。片側に2ヶ所の円孔あり。1ヶ所の円孔には円錐形の栓を差し込む。辺部に釘の痕跡あり。	側面はケズリ調整。	口径21.0・厚さ1.0。漆附着。	同上。
457		曲物	平面円形の曲物である。	薄板を丸めて成型。	口径27.9・高さ11.4。漆附着。	同上。
458			平面円形の曲物である。底部は平坦で、体部は直立する。外面上端・下端にたがが廻る。	同上。	底径33.0・高さ20.7。漆附着。	2区土壇2354。
459		釣瓶	平面方形である。底部は平坦で、体部は外上方に開く。上端に長方形の把手が渡される。中央に円孔あり。	全面ケズリ調整の板材を組み合わせる。	高さ26.5。	同上。
460	把手	厚い板状で、下面中央にえぐりがあり、上面両側は傾斜する。	側面はケズリ調整。	長さ30.5・幅4.7・厚さ1.5。	同上。	

No.	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土遺構	
461	履き物	露卯下駄	台部は平面長円形で、底部は中央部がふくらむ。前壺は中央。歯は台形である。	全部材全面ケズリ調整、歯部を差し込む。	長さ21.4・幅9.0・厚さ2.6。	2区土壙2520。	
462			同上。小型。	同上。	長さ16.6・幅6.9・厚さ2.1。	同上。	
463			台部は平面長方形で、底部は中央部がふくらむ。前壺はやや左より。前壺に鼻緒止めの凹みあり。歯は台形である。	同上。	長さ21.2・幅9.1・厚さ2.9。	同上。	
464		連歯下駄	台部は平面長円形で、底部は平坦である。前壺は中央。歯は直立する。小型。	全面ケズリ調整、歯部は鋸で成形し、調整を施す。	長さ14.8・幅6.0・厚さ1.2。	2区土壙2354。	
465			台部は平面長方形で、底部は平坦である。前壺は中央。後壺に鼻緒止めの凹みあり。歯は直立する。小型。	同上。	長さ12.9・幅5.1・厚さ1.4。	2区土壙2520。	
466			台部は平面長方形で、底部は平坦である。前壺は中央。歯は直立する。	同上。	長さ15.7・幅6.9・厚さ1.6。	同上。	
467			同上。前壺・後壺に鼻緒止めの凹みあり。台表面中央に渦巻き紋様の焼き印あり。	同上。	長さ21.4・幅7.9・厚さ1.3。	2区土壙2434。	
468			台部は平面長方形で、底部は平坦である。前壺は中央。歯は直立する。	同上。	長さ22.0・幅9.0・厚さ1.3。	同上。	
469			同上。後壺に鼻緒止めの凹みあり。	同上。	長さ22.9・幅11.0・厚さ1.8。	2区土壙2520。	
470			刳り下駄	台部は平面長方形で、底部中央を刳り込む。前壺は中央。前壺・後壺に鼻緒止めの凹みあり。	全面ケズリ調整、歯部は鋸で成形し、内部を繰り込む。	長さ21.0・幅8.4・厚さ1.6。	同上。
471		同上。前壺に鼻緒止めの凹みあり。		同上。	長さ21.6・幅9.5・厚さ1.7。	同上。	
472		容器	折敷	平面は隅切りの方形。底部は平坦で、口縁部は外上方に短く開く。	全面ケズリ調整。	長辺34.0・短辺33.0・高さ3.2。	2区土壙2434。
473		食器	箸	断面多角形で、両端は平坦である。体部は直立する。	側面ケズリ調整。	長さ23.4・径0.7。	同上。
474				同上。	同上。	長さ24.1・径0.8。	2区土壙2354。
475	断面多角形で、両端は平坦である。体部は両端がすばまる。			同上。	長さ24.9・径0.7。	同上。	
476	同上。			同上。	長さ25.3・径0.8。	同上。	
477	同上。			同上。	長さ26.2・径0.9。	同上。	
478	同上。			同上。	長さ26.2・径0.7。	同上。	
479	工具	ほうき	上部はすばまり、下部は開く。断面は菱形である。	シュロ製の繊維をたばねて、ヒモを成形し、それを組み合わせる。	縦30.2・横19.0・厚さ2.1。	2区土壙2520。	
480			同上。	同上。	縦25.0・横15.0・厚さ1.6。	同上。	

付表5 出土金属製品観察表(図版56~60・100~102)

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構
481	玩具	鈴	球形の体部に、円孔の付いた摘みあり。体部に穿孔して、摘みをはめこみ、内側を折り曲げて固定する。	径2.4・高さ1.8。	2区土壙328第1層
482			球形の体部の下面に、両端ハート形の溝あり。	径3.0・高さ1.6。	1区第3層。
483	金具	不明	平面円形で、天井部が盛り上がり、波紋様が付く。中央に長方形孔あり。	径2.3・高さ0.4。	2区攪乱。
484	煙管	罎	板状で、平面花形。中央に円孔あり。	径2.2・高さ0.4。	2区第3層。
485	金具	不明	平面円形の筒状で、側面中央に円孔あり。	径2.5・高さ0.5。	同上。
486			板状で、平面三葉形である。端部に円筒状の取り付け金具あり。	長辺3.2・短辺2.1・高さ0.7。	2区攪乱。
487		引き手	平面隅丸菱形の棒状で、周辺部は波形。	長辺5.6・短辺3.7・高さ0.2。	2区竪穴2167。
488	刀装具	切羽	楕円形の薄板で、中央に刀身断面形の孔あり。	長径3.9・短径2.2・高さ0.2。	2区土壙328第1層
489		柄縁	楕円形の筒状で、中央に刀身断面形の孔あり。	長径4.0・短径2.2・厚さ0.2。	2区土壙2132。
490		はばき	断面は刀身断面形で、峰部は尖る。銅板を曲げて成形。	長辺3.1・短辺2.3・高さ1.1。	2区攪乱。
491	金具	目貫	平面長円形で、上面は盛りあがり、紋様あり。	長辺8.3・短辺1.3・高さ0.6。	2区重機掘削中。
492			同上。	長辺3.9・短1.7・高さ0.6。	2区第4層。
493			平面長円形で、上面は盛りあがり、紋様あり。	長辺3.6・短辺1.5・高さ0.8。	同上。
494	容器	椀	体部は屈曲して、口縁部は外上方に直線的に開く。	径5.2・高さ1.7。	2区土壙2169。
495			体部は屈曲して外上方に開く。口縁部は外反し、端部は外側に肥厚して玉縁となる。	径7.7・高さ3.6。	1区重機掘削中。
496		柄杓	平面円形で、底部平坦、口縁部は外上方に直線的に開く。口縁部中位に断面円形の把手がある。	径1.4・高さ1.2。	2区攪乱。
497	工具	灯芯押さえ	断面方形の針金を円形にし、一方はねじって直立する。	径3.6・高さ3.4。	2区土壙2191。
498			断面長方形の板材を円形にし、一方は直立する。	径4.6・高さ4.7。	1区井戸3。
499	文具	水滴	平面長方形で、底部・天井部平坦、体部直立する。天井部中央に長方形の直立した口あり。	長辺6.0・短辺2.8・高さ1.6。	2区第3層。
500			平面円形で、底部平坦、体部外上方に開き、天井部ふくらむ。天井部中央に円孔、辺部に円形の直立した口あり。	径3.8・高さ1.5。	同上。
501	装身具	鏡	背面中央に半球状の紐あり。内区に界線が廻る。周縁は巾が狭く直立する。鑄造品である。内区に鳥紋・亀紋、亀甲紋を配する。紋様はやや不明瞭。	径8.0・高さ0.8。	2区井戸2252。
502	香道具	匙	板状で、長円形の体部に、把手が取り付けく。	匙部長径2.2・短径1.2、全体長さ7.6。	2区石垣2134。
503	工具	匙	長円形の体部に、断面長方形の把手が取り付けく。体部は浅い。	匙部長径3.8・短径2.2、全体長さ15.6。	2区第3層。

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構
504	香道具	匙	板状で、半円形の体部に、把手が取り付く。尾部は紡錘形である。	匙部長径2・短径2.0、全体長さ20.0。	1区井戸94
505		不明	平面円形で、天井部が盛りあがる。中央に円孔あり。	径4.0・高さ0.4。	1区重機掘削中。
506		吊り金具	ねじった細板をコ字形に湾曲し、端部に円孔あり。	縦10.7・横13.7。	2区第4層。
507		鉤針	断面は円形の鉤形。先端部は屈曲して尖る。基部は環となる。	縦2.9・横2.1。	1区炉74。
508			同上。	縦3.3・横2.1。	同上。
509			同上。	縦3.9・横2.7。	2区第4層。
510			同上。	縦4.7・横3.2。	2区土壙2191。
511			断面は長方形の鉤形。先端部は屈曲して尖る。基部は環となる。	縦3.4・横2.3。	2区第3層。
512			断面は長方形の鉤形。先端部は屈曲して尖る。基部に円孔あり。	縦3.6・横2.7。	2区土壙328第1層
513	金具		断面は長方形の鉤形。先端部は屈曲して尖る。基部は環となる。	縦3.6・横3.2。	2区第4層。
514			断面は長方形の鉤形。先端部は屈曲して尖る。基部に円孔あり。大型。	縦7.4・横5.2。	1区攪乱。
515			分銅	直方体で、中心に円孔あり。	13.7g。
516		同上。		18.7g。	2区第4層。
517		直方体で、上部につまみあり。鋳造品。摘みは接合。		10.7g。	1区土壙1083。
518		直方体で、角部に面取りあり。上部に円孔付きの摘みあり。前面に角印あり。鋳造品。摘みは接合。		48.3g。	2区土壙2169。
519		棹秤	断面は円筒形で、基部に骨製の円形栓を挿入する。目盛なし。	径0.4・長さ6.8。	1区土壙328第4層。
520			断面は円筒形である。一方に目盛あり。	径0.4・長さ7.2。	2区土壙328第1層
521			断面は円筒形で、基部は段がつきすばまる。目盛なし。	径0.5・長さ12.2。	1区第3層。
522	装身具	簪	基部は板状で半円形、ハート形・円形の透かしあり。先端部は断面方形、先端は尖る。	最大幅1.8・長さ14.2。	2区第3層。
523	工具	火箸	断面円形で、先端部は尖る。基部は環となる。	頭部径0.8・径0.2・長さ27.5。	1区井戸250。
524		不明	断面円形で、先端部は尖る。基部は平坦になり、厚い。	頭部径1.1・径0.4・長さ28.5。	2区攪乱2114。
525	金具	不明	断面板状で、基部は楕円形で円孔あり。先端は平坦である。	幅1.0・長さ23.4・厚さ0.6。	2区第3層。
526			基部は八角形、先端部は断面円形。基部と体部に段あり。	頭部径2.5・径0.6・長さ5.4。	1区土壙541。
527		匙	板状で、平面貝形で、上面がふくらむ。	縦4.8・横4.7・高さ1.1。	1区井戸5。

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構	
528	工具	不明	断面板状で、基部は屈曲する。	幅0.7・長さ11.7。	1区井戸250。	
529			同上。	幅1.0・長さ15.5。	2区土壙328 第1層。	
530	煙管	頭部	筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなり、多角形である。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.4・長さ8.4。	1区土壙1115。	
531			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなる。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.3・長さ8.0。	2区土壙328 第2層。	
532			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなり、溝を付ける。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.0・長さ5.5。	2区第3層。	
533			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。受部に穿孔あり。基部は太くなる。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.1・長さ5.5。	1区土壙1756。	
534			同上。	口径1.4・長さ6.0。	1区井戸290。	
535			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなり、多角形である。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.5・長さ4.3。	2区第3層。	
536			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなる。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.5・長さ4.7。	2区土壙328 第1層。	
537			同上。	口径1.6・長さ8.2。	1区土壙423。	
538			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.7・長さ7.9。	2区第3層。	
539			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなり、針銅を巻き付ける。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.4・長さ7.1。	2区石垣2093。	
540			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなり、溝を付ける。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.4・長さ7.0。	2区第4層。	
541			筒部先端は直角に立ち上がり、端部に受部が付く。受部は三角形である。受部に穿孔あり。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.5・長さ2.7。	2区土壙328 第1層。	
542			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。受部に穿孔あり。基部は太くなる。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.5・長さ7.5。	2区土壙2172。	
543			同上。	口径1.5・長さ9.3。	1区土壙328 第2層。	
544			同上。	口径1.3・長さ7.0。	2区土壙328 第1層。	
545			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.7・長さ7.3。	1区竪穴42。	
546			筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなる。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.3・長さ5.0。	2区第3層。	
547			煙管	筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなり、吸口部はすぼまる。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。一体型である。	口径1.5・長さ16.3。	2区土壙328 第1層。
548			吸口	円筒形で、口部先端はすぼまり、基部は太くなり、段あり。筒部は銅板を巻いて成形。	口径1.0・長さ4.5。	1区攪乱。
549		同上。		口径0.9・長さ6.6。	2区土壙2203。	
550	円筒形で、口部先端はすぼまり、基部は太くなり、2段となる。筒部は銅板を巻いて成形。	口径1.0・長さ7.4。		1区土壙83。		
551	円筒形で、口部先端はすぼまり、基部は太くなり、「大吉」銘あり。筒部は銅板を巻いて成形。	口径0.8・長さ4.8。		1区第3層。		

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構
552	煙管	吸口	円筒形で、口部先端はすぼまり、基部は太くなり、溝あり。筒部は銅板を巻いて成形。	口径1.0・長さ7.3。	2区攪乱。
553			円筒形で、口部先端はすぼまり、基部は太くなる。筒部は銅板を巻いて成形。	口径1.1・長さ6.5。	2区土壌328第1層。
554			円筒形で、口部先端はすぼまり、基部は太くなり、溝を付ける。筒部は銅板を巻いて成形。	口径1.0・長さ4.5。	1区土壌84。
555			円筒形で、口部先端はすぼまり、基部は太くなる。筒部は銅板を巻いて成形。	口径0.9・長さ4.0。	2区土壌328第1層。
556			円筒形で、口部先端はすぼまり、基部は太くなり、模様を付ける。筒部は銅板を巻いて成形。	口径1.0・長さ8.4。	1区土壌707。
557		頭部	筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部端は広がり、受け部がある。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.3・長さ15.7。	1区竪穴276。
558		筒部	円筒形で、口部先端はすぼまる。筒部は銅板を巻いて成形。	口径0.9・長さ12.0。	同上。
559		頭部	筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。受部に穿孔あり。基部は太くなる。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.2・長さ4.7。	1区土壌275。
560		筒部	円筒形で、口部先端はすぼまる。銅板を巻いて成形。	口径0.6・長さ14.8。	同上。
561		頭部	筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。基部は太くなる。筒部は銅板を巻いて成形。受部は溶接。	口径1.4・長さ5.7。	2区第4層。
562		吸口	円筒形で、口部は先端はすぼまる。銅板を巻いて成形。	口径0.8・長さ6.6。	同上。
563	同上。		口径0.8・長さ4.1。	同上。	
564	食器	おろし金	板状の体部に、長方形の把手が取り付け、把手には円孔あり。体部上面には等間隔におろし目を付ける。	縦14.0・横8.0・厚さ0.3。	1区井戸22。
565	容器	提瓶蓋	天井部はふくらみ、口縁部内面にかえりあり。天井部外面中央に円形の摘みあり。	径8.4・高さ1.9。 566とセット。	1区井戸406。
566			体部は屈曲して外上方に開く。口縁部端部は内側に伸び、受け口の段がある。体部に注口が取り付け。	径10.4・高さ14.2。	1区井戸406。
567		蓋	天井部は平坦で、口縁部は内湾気味に垂下する。天井部外面中央に長方形の摘みあり。天井部を穿孔し、摘みを鉋で裏から留める。	径13.6・高さ1.5。	1区井戸91。
568	工具	五徳	底部は断面長方形で、環状である。体部上面に三角形の腕が3本立ち上がる。腕部端は内側へ屈曲する。鋳造品か。	径17.0・高さ16.8。	2区竪穴310。
569	容器	鍋	体部は屈曲して上方に立ち上がる。口縁部は外方に拡張し、端部は立ち上がる。体部は非常に薄い。鍛造品か。	径21.4・高さ9.0。	2区工房地区整地層。
570		台付鉢	体部は屈曲して上方に開く。口縁部は外方に拡張し、端部は立ち上がる。体部両側に断面円形の把手が取り付け。高台部は高く外に開く。高台内側に十文字に角材をはめ込む。鍛造品か。	径44.5・高15.3。	1区井戸310B。
571		片口鍋	体部は屈曲して外上方に開く。口縁部端部は肥厚し、面あり。口縁部両側に把手が取り付け。体部に注口が取り付け。底部3ヶ所に足がある。	径18.0・高さ6.7。	2区土壌2172。
572	工具	十能	体部前部は開き、基部はすぼまる。前面を除き、体部は屈曲して立ち上がる。	縦17.2・横19.3・深さ3.6。	2区竪穴2274。
573	食器	網	辺部・枠部は断面円形。内部は断面円形の針金。平面は円形で、内部は六角形に区切る。	長径24.8・短径23.5。	1区土壌282。
574		包丁	刃部は三角形、基部は長方形。棟部はふくらむ。	長さ20.3・幅5.1・厚さ0.7。	2区第3層。

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構
575	地金	亜鉛塊	断面台形の塊である。	縦13.5・横14.0・高さ6.0。	1区工房第2床面。
576	鋳滓	床尻	平面不定形で、底部外面は丸く、内部は凹む。	長径9.7・短径8.3・厚さ2.2。	2区土壙2520。
577	板	棹	板状の棹である。両端はややすばまる。	長さ25.9・幅1.6・厚さ0.5。	1区建物63。
578			板状の棹である。両端は直である。	長さ14.0・幅2.0・厚さ0.4。	2区炉2317。
579			板状の棹である。片側はすばまり、片側は直になる。	長さ10.0・幅2.3・厚さ0.5。	2区工房第2床面。
580			同上。	長さ13.7・幅2.6・厚さ0.6。	2区土壙2364。
581	鋳滓	鋳滓	板状で、平面不定形である。	長さ7.8・幅3.0・厚さ0.9。	2区工房第2床面。
582		棹	断面三角形の棒状で、両端はややすばまる。	長さ16.3・幅1.3・厚さ0.6。	1区竪穴293。

付表6 出土骨角製品観察表(図版61・62・104)

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構
583	工具	棹秤	断面は円形で、両端は平坦である。端部に円孔あり。三方に目盛あり。全体ケズリ。目盛は縦に溝を付け、小孔を穿つ。	長さ22.2・径0.4。鹿角製。	1区土壙328第2層。
584			同上。	長さ12.9・径0.4。鹿角製。	1区土壙328第1層。
585			断面は円形で、基部端を面取りする。端部に円孔あり。四方に目盛あり。全体ケズリ。目盛は縦に溝を付け、小孔を穿つ。	長さ6.9・径0.5。鹿角製。	1区土壙328第3層。
586			断面は円形で、端は平坦である。端部に円孔あり。三方に目盛あり。基部に「天下一」銘あり。全体ケズリ。目盛は縦に溝を付け、小孔を穿つ。	長さ12.5・径0.4。鹿角製。	1区土壙46。
587			断面は円形で、一方に目盛あり。片端部を尖らせる。全体ケズリ。目盛は縦に溝を付け、小孔を穿つ。	長さ9.1・径0.3。鹿角製。	1区土壙328第3層。
588			同上。	長さ8.8・径0.3。鹿角製。	1区土壙328第1層。
589			断面は円形で、端部に円孔あり。一方に目盛あり。全体ケズリ。目盛は縦に溝を付け、小孔を穿つ。	長さ8.7・径0.3。鹿角製。	同上。
590			断面は円形で、両端は平坦である。端部・中央部2ヶ所に円孔あり。目盛なし。全体ケズリ。目盛を付ける前の未製品。	長さ16.5・径0.3。鹿角製。	1区土壙328第4層。
591			断面は円形で、両端は平坦である。端部・中央部3ヶ所に円孔あり。目盛なし。全体ケズリ。目盛を付ける前の未製品。片端部を尖らせる。	長さ14.1・径0.3。鹿角製。	1区土壙328第3層。
592			断面は円形で、端部は平坦。目盛なし。全体ケズリ。目盛を付ける前の未製品。	長さ14.5・径0.5。鹿角製。	2区土壙328第1層。
593			断面は円形で、片端部は平坦、片端部はすばまる。目盛なし。全体ケズリ。目盛を付ける前の未製品。	長さ21.3・径0.5。鹿角製。	1区土壙328第2層。
594	装身具	櫛払い	断面は方形で、表面はややふくらむ。先端に櫛目あり。基部はふくらむ。全体ケズリ。櫛目は鋸で引く。穿孔は一方から。	長さ19.5・幅1.5・厚さ0.5。牛骨製。	2区工房地区第2床面。
595			断面は方形で、表面はややふくらむ。先端に櫛目あり。全体ケズリ。櫛目は鋸で引く。穿孔は一方から。	長さ16.7・幅1.2・厚さ0.4。牛骨製。	2区第4層。

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構
596	装身具	櫛	棟断面は長方形で、上面はふくらむ。	縦1.5・横9.1・厚さ0.4。龜甲製。	1区土壙381。
597		耳搔き	断面は円形で、基部はふくらみ、片端部は屈曲し、匙状となる。全体ケズリ。	長さ7.7・径0.5。鹿角製。	2区第4層。
598			断面は円形で、中央部はふくらみ、片端部は屈曲し、匙状となる。全体ケズリ。	長さ15.7・径0.5。鹿角製。	1区土壙328第4層。
599		不明	断面は円形で、片端部は尖る。	長さ8.6・幅0.9・厚さ0.2。鹿角製。	2区第4層。
600			断面は円形で、両端部は尖る。体部に節あり。	長さ10.9・径0.5。鹿角製。	同上。
601			板状で、端部は広がる。全体ケズリ。	縦2.8・横1.2・厚さ0.3。鹿角製。	1区土壙328第1層。
602	玩具	おはじき	平面円形で、上下両面は平坦である。	径1.8・厚さ0.5。鹿角製。	2区第4層。
603		同上。	径1.8・厚さ0.4。鹿角製。	2区土壙328第1層。	
604	不明	碁石	平面円形で、上下両面はふくらむ。	径2.1・厚さ0.4。ハマグリ、白色。	2区第4層。
605		平面長円形で、上面はふくらむ。中央部に2ヶ所円孔あり。	長さ2.7・幅0.7・高さ0.5。	2区土壙328第1層。	
606		平面円形で、上下両面は平坦である。中央に円孔があり、周囲に円孔を穿ち施紋する。	径2.7・厚さ0.9。牛骨製。	同上。	
607	材料	骨切断片	平面不定形で、上下両面は平坦である。中央に孔がある。未製品。	径2.6・厚さ1.0。牛骨製。	1区土壙667。
608			平面槽円形で、上下両面は平坦である。中央に孔がある。	縦5.7・横3.3。鹿骨。	1区土壙328第1層。
609			平面不定形で、片端は平坦である。	縦10.2・横5.3・厚さ2.5。牛骨。	2区土壙2435。
610			同上。	縦6.0・横5.7・厚さ2.0。牛骨。	2区攪乱。
611			同上。	縦5.0・横5.6・厚さ2.2。牛骨。	1区土壙397。
612			同上。	縦6.8・横4.1・厚さ2.7。牛骨。	2区土壙2434。
613		鹿角切断片	平面不定形で、両端は平坦である。	縦6.1・横4.8・厚さ2.8。鹿角。	1区井戸141。
614	同上。		縦7.6・横4.1・厚さ2.8。鹿角。	1区土壙328第3層。	

付表7 出土ガラス製品観察表 (図版62・102)

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構
615	装身具	簪	棒状で表面がねじれる。	長さ2.3・径0.5。	2区石垣2093。
616			同上。端部はすばまる。	長さ2.9・径0.5。	同上。
617			同上。端部は尖る。	長さ5.4・径0.4。	1区井戸9。
618			棒状で、端部がふくらむ。	長さ2.0・径0.4。	1区土壌541。
619		珠	断面楕円形で、中央に円孔あり。	径0.8・厚さ0.4。	1区土壌1777。
620			断面球形で、中央に円孔あり。	径1.4・厚さ0.9。	1区建物63。
621			同上。	径1.5・厚さ1.2。	2区第3層。
622			同上。	径1.5の球形。	1区土壌761。
623	容器	輪花杯	体部は内弯気味に開き、口縁部は外反する。体部・口縁部外面に輪花あり。	長辺3.0・短辺2.2・厚さ0.2。	1区井戸183。
624		皿	体部は屈曲して開き、口縁部は外上方に開く。	縦9.6・横4.1・厚さ0.3。	同上。

付表8 出土石製品観察表 (図版63・64・104)

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構
625	文房具	硯	隅丸方形で、底面は平坦。側面は傾斜する。陸部はややふくらむ。全面を削る。上面は研磨する。	縦5.0・横4.6・高さ1.1。	1区土壌743。
626			長方形で、底面は平坦。擦り部は長円形。海部は凹む。全面を削る。上面は研磨する。	縦7.0・横3.5・高さ1.2。	1区重機掘削中。
627			長方形で、底面は平坦。側面は直立する。海部は凹む。全面を削る。上面は研磨する。	縦9.4・横3.8・高さ0.9。	2区土壌2191。
628			隅丸長方形で、底面は凹む。側面は直立する。海部は凹む。全面を削る。上面は研磨する。	縦10.8・横4.7・高さ1.6。	2区攪乱。
629			隅丸長方形で、底面は平坦。側面は直立する。海部は凹む。全面を削る。上面は研磨する。	縦12.0・横6.7・高さ1.2。	2区土壌2172。
630			長方形で、底面は平坦。側面は直立する。側面・裏面に模様あり。全面を削る。上面は研磨する。	縦9.4・横4.0・高さ1.1。	1区土壌225。
631			隅丸長方形で、底面は長方形に凹む。側面は直立する。全面を削る。上面は研磨する。	縦10.8・横6.2・高さ1.5。	1区井戸228。
632			長方形で、底面は平坦。側面は直立する。裏面に針描き模様あり。全面を削る。上面は研磨する。	縦14.3・横8.3・高さ2.3。	1区工房第4床面。
633			隅丸長方形で、底面は平坦。側面は直立する。陸部2ヶ所凹む。裏面に針描き「硯屋 弥三兵衛」銘あり。全面を削る。上面は研磨する。	縦12.5・横6.9・高さ1.5。	2区土壌2169。
634			長方形で、底面は平坦。側面は直立する。裏面に針描き「正□二□・月□」銘あり。全面を削る。上面は研磨する。	縦14.6・横7.4・高さ1.5。	1区土壌328第1層。
635			長円形で、底面は平坦。側面は傾斜する。裏面に針描き「□上上吉硯・祖珍」銘あり。全面を削る。上面は研磨する。	縦12.4・横7.5・高さ1.9。	1区井戸181。

No.	器種	器形	形態と手法の特徴	備考	出土遺構
636	工具	紡錘車	平面円形で、上下両面はふくらみ、段を付ける。中央に円孔あり。全面を削る。上面は研磨する。	径3.4・厚さ1.0・円孔の径0.8。	1区土壙1258。
637	玩具	碁石	平面円形で、上下両面はふくらむ。全面を削る。上面は研磨する。	径2.1・厚さ0.5。黒石。	2区井戸2143。
638			同上。	径2.2・厚さ0.5。黒石。	1区第3層。
639	工具	温石	平面台形で、湾曲する。側面は平坦である。中央に円孔あり。	長辺9.1・短辺7.4・厚さ1.8。	1区溝1309。
640	容器	蓋?	体部上端は尖り、内弯気味に垂下する。下端部に段あり。全面ケズリ調整。	径17.2(推定)・高さ6.0。	1区土壙599。
641		石鍋	体部は内弯して立ち上がり、口縁端部は面をなす。口縁部外面に台形の鏝がある。全面ケズリ調整	径21.0(推定)・高さ7.1(残存)。	1区土壙684。
642			同上。	径25.2(推定)・高さ5.8(残存)。	1区土壙606。
643	不明	不明	棒状で、端部は平坦である。全面ケズリ調整。	長さ4.4・径0.5。	1区井戸228。
644			同上。	長さ3.5・径0.7。	同上。
645	工具	砥石	不定形で、中央部がふくらむ。上下面共に条線がある。	長辺8.7・短辺6.9・厚さ1.9。	1区第3層。
646			同上。	長辺10.6・短辺7.9・厚さ2.1。	1区第4層。
647	容器	鉢	平面方形。底部は平坦で、体部は屈曲して外上方に開く。口縁端部は面をなす。底部隅部に足がある。全面ケズリ調整。	一辺13.5の方形・高さ5.7(残存)。	2区溝2258。
648	工具	挽き臼	上臼。上面中央は凹み、中心に円孔あり。下面は平坦で、方向を違えて平行筋目がある。側面に把手用の方孔あり。下面は研磨。	径22.0・高さ11.6。	2区井戸2086。
649		茶臼	上面中央は凹み、中央部に円孔あり。下面は平坦である。	径31.0(推定)・高さ6.2。	1区第3層。
650		挽き臼	下臼。受部は内弯気味に開き、端部は平坦面となる。中央部上面は平坦で、方向を違えて平行筋目がある。中央に方孔あり。全面削りで、受部内面はなめらかに仕上げる。	径39.6(推定)・高さ10.0。	1区井戸248。
651		臼	平面不定形。外面は半球状。底部内面は凹み、円孔あり。体部内面は直に立ち上がり、口縁は平坦面となる。全面削りで、受部内面はなめらかに仕上げる。	長径・短径・高さ。	2区石垣336。
652	仏具	石塔	五輪塔の輪。方形である。4側面に梵字「阿*」「宝生」「阿弥陀」「不空成就」の種字あり。	一辺14.5の立方体。	2区土壙2435。

# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんぎょうさきょうさんじょうしぼうじゅっちょうあと							
書名	平安京左京三条四坊十町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-10							
編著者名	上村和直・小檜山一良							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんぎょうさきょうさんじょう 平安京左京三条 しぼうじゅっちょうあと・ 四坊十町跡・ からすまおいけいせき 烏丸御池遺跡	きょうとしなかなぎょうく 京都市中京区 おいけどおりとみのこうじ 御池通富小路 にしいるひがしはちまんちょう 西入東八幡町  579	26100	464	35度 00分 30秒	135度 46分 02秒	2003年8月 6日～2004 年9月24日	約2,700m <sup>2</sup>	校舎・ 複合施設 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
烏丸御池遺跡	集落跡	古墳時代	流路	弥生土器・土師器				
平安京左京三条 四坊十町跡	都城跡	平安時代	土壇・溝・井戸・ 柱穴	土師器・陶器・磁器・ 瓦				
		鎌倉時代 ～室町時代	土壇・溝・柵・柱 穴・井戸	土師器・陶器・磁器・ 瓦・砥石・石臼				
		桃山時代 ～江戸時代	土壇・柱穴・竪穴 ・井戸・石垣・金 属工房遺構	土師器・陶器・磁器・ 埴塼・金属製品・骨角 製品		江戸時代の真鍮工 房を初めて発見し、 真鍮の作業工程が 明らかとなった。 陶器生産に関する 遺物が多く出土し た。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-10  
平安京左京三条四坊十町跡

発行日 2004年12月28日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社  
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961